

千葉市平和公園遺跡群Ⅲ

—木戸作遺跡・内野遺跡・多部田貝塚他—

2024

千葉市教育委員会
千葉市埋蔵文化財調査センター

千葉市平和公園遺跡群Ⅲ

—^{きどさく}木戸作遺跡・^{うちの}内野遺跡・^{たべた}多部田貝塚他—

2024

千葉市教育委員会
千葉市埋蔵文化財調査センター



ムグリ遺跡 1号窯跡灰原 刻書土器（一部）「田部」



木戸作遺跡 S106 出土遺物 (No40・46・49・50)



ムグリ遺跡 A-001 風字硯



木戸作遺跡 SK033 内耳土鍋



多部田貝塚 土偶

例 言

- 1 本書は千葉市若葉区多部田町、緑区高田町に所在する「平和公園遺跡群」の発掘調査報告書である。発掘調査は千葉市平和公園整備事業に伴うもので、事業地内に所在する遺跡全体を平和公園遺跡群と呼称している。本事業ではこれまでに2冊の報告書を刊行しているため、シリーズ名をⅢとした。
- 2 本書では、既刊の2冊及び関連報告書に所収した以外の調査成果を扱った。該当する発掘調査は、千葉市教育委員会（昭和59年度まで）、財団法人千葉市文化財調査協会（昭和60年度～平成13年度）、千葉市埋蔵文化財調査センター（平成14年度～）が実施しており、詳細は第1章第1節に記載した。
- 3 公園整備事業はほぼ終息しており、本書が最終報告となるため、当地区に関わる発掘成果をとりまとめた。
- 4 遺跡の範囲や呼称は混乱が多く、今回整理を行ったが、既刊の報告書と異なる場合があり、本書の内容に従って今後包蔵地名・範囲を改める予定である。
- 5 整理作業は、千葉市公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の一貫として令和3・4年度に実施した。
- 6 本書の執筆は第2章木戸作遺跡の弥生時代遺構・遺物については小林嵩（公益財団法人千葉市教育振興財団）、第4章第3節多部田貝塚の動物遺体は服部智至（千葉市教育委員会）、第2章木戸作遺跡第6節（3）、第3章内野遺跡第4節（5）、第5章内野古墳群第3節5号墳出土の人骨については千葉南菜子（千葉市教育委員会）が行い、それ以外の執筆と編集は西野雅人と岸本高充が行った。
- 7 出土資料及び調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理する。
- 8 出土遺物の分類・執筆にあたっては、石材について有限会社考古石材研究所の柴田徹氏、中・近世の土器について茂原市史編さん委員会の小高春雄氏、内野古墳群5号墳出土の人骨については、千葉縄文研究会の渡辺新氏、ムグリ遺跡出土のへら書土器については、天野努氏よりご教示を得た。また、千葉市教育委員会の神野信・山下亮介・戸村正己・菅谷通保（当時）の協力を得た。
- 9 発掘調査から報告書刊行に至るまでに以下の諸機関・諸氏より御指導・御協力を賜った。
文化庁記念物課（現文化財第2課）、千葉県教育庁文化財課、千葉市保健福祉局斎園建設室、平和公園管理事務所、6・8に挙げた皆様

凡 例

- 1 平和公園遺跡群に含まれるのは第1表の中幹野南遺跡までの9遺跡である。多部田第2低地遺跡は事業地外ではあるが関連遺跡として本書に掲載した。各種遺物表に示した遺跡番号はこの表に示したものである。
- 2 本事業で検出した遺構は第2表のとおりである。本書に所収したのは報告欄に○をつけたものである。遺構番号は、調査時点や過去の報告書で使われたものを必要に応じて変更しており、第2表に新旧番号の対照関係を示した。
- 3 掲載遺物の基礎データは紙幅の都合で印刷できなかったため、付表2～8として付録DVDに収めた。付表1は掲載遺物全点の索引である。codeは将来のデータベース化に備えて重複のない番号を与えたものであり、先頭文字はJd:縄文土器、Js:縄文石器・石製品、Kd:古代土器、Ks:古代土・石製品、kt:古代鉄製品、Ktm:古代製鉄関連遺物、Md:中・近世土器、Ms:中・近世土・石製品である。
- 4 本文、表、挿図、写真図版、抄録のデータを併せてDVDに収録した。
- 5 引用・参考文献は第1章の末尾にまとめて掲載したが、一部は適宜記した。
- 6 遺構図の方位は座標北であり、標高は海拔高で表示した。基準点測量は行われておらず、座標は示していない。
- 7 遺構図の縮尺は、住居が1/60、カマドは1/30である。それ以外は各図に示した。遺物図の縮尺は復元実測が1/4、断面実測が1/3、銭は2/3である。それ以外の縮尺を適応するものは各図に示した。遺構、遺物写真の縮尺は任意である。
- 8 第1図で国土地理院発行の2万5千分の1地形図（千葉東部・蘇我）、第2図で第一軍管地方二万分の一迅速測図、図版1で国土地理院の地図・空中写真閲覧サービス (<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>) を使用し、事業範囲を示す線を付加した。
- 9 遺構・遺物実測図における網掛けは以下のとおりである。これ以外のものは図上に示した。



本文目次

巻頭図版

例言

凡例

目次

第1章 本書及び事業・遺跡群の概要	1
第1節 事業と発掘調査の概要	1
1 事業と遺跡群	1
2 発掘調査と整理作業の概要	3
3 整理作業と報告書作成の方針	7
第2節 遺跡群と各遺跡の概要	8
1 遺跡群の位置	8
2 周辺の開発と遺跡	8
第2章 木戸作遺跡	28
第1節 概要	28
1 地形と概要	28
2 発掘調査	28
第2節 縄文時代	30
第3節 弥生時代	36
第4節 古墳時代	44
第5節 奈良・平安時代	44
第6節 中世以降	63
第3章 内野遺跡	79
第1節 概要	79
1 地形と概要	79
2 発掘調査	79
第2節 縄文時代	81
第3節 弥生時代	82
第4節 古墳時代～平安時代	82
第5節 中・近世以降	91
第6節 時代不明	110
第4章 多部田貝塚	112
第1節 概要	112
第2節 昭和46年度調査報告	115
第3節 多部田貝塚出土の動物遺体	123
第5章 うなすず遺跡	130
第1節 概要	130
第2節 未報告資料補遺	130
第3節 縄文時代	135
第4節 古墳時代	137

第5節 奈良・平安時代	137
第6節 中世以降	137
第6章 内野古墳群	138
第1節 概要	138
第2節 遺構と遺物	138
第3節 5号墳出土の人骨について	150
第7章 その他の遺跡	162
1 中津野古遺跡	162
2 中津野南遺跡	162
3 貝殻塚遺跡	162
4 ムグリ遺跡	162
5 旧称「多部田塚群」	164
6 多部田低地第2遺跡	164
7 その他の遺跡	167
第8章 まとめ	168
1 遺跡群の変遷	168
2 縄文時代	170
3 弥生時代	170
4 古墳時代	171
5 奈良・平安時代	174
6 中世以降	177
7 遺跡群の価値と今後の活用	178

写真図版

報告書抄録 (巻末)

挿 図 目 次

<全体>	第16図 SI09・14	46
第1図 平和公園遺跡群	第17図 SI01	47
第2図 平和公園遺跡群周辺の遺跡	第18図 SI02	49
第3図 平和公園周辺の地形	第19図 SI05・10	50
<木戸作遺跡>	第20図 SI06	51
第4図 木戸作遺跡 遺構分布	第21図 SI11	52
第5図 SI13	第22図 SI12	53
第6図 陥し穴①	第23図 SI15・方形区画墓	54
第7図 陥し穴②	第24図 古代遺物①	55
第8図 陥し穴③・小壘穴	第25図 古代遺物②	56
第9図 SI03	第26図 古代遺物③	57
第10図 SI04	第27図 古代遺物④	58
第11図 SI07	第28図 古代遺物⑤	59
第12図 SI08	第29図 古代遺物⑥	60
第13図 弥生時代遺物①	第30図 古代遺物⑦	61
第14図 弥生時代遺物②	第31図 古代遺物⑧	62
第15図 弥生時代遺物③	第32図 土坑墓①	64

第33図	土坑墓②	65	第73図	昭和28年度調査区(一部)	114
第34図	SD01・02	67	第74図	馬蹄形の貝層と 平成10・11年度調査地点	116
第35図	SD03	68	第75図	昭和46年度調査概略図	116
第36図	SD04①	69	第76図	土製品12	120
第37図	SD04②・05	70	第77図	脊椎動物遺体の組成	125
第38図	01号塚	71	第78図	脊椎動物遺体(1)	128
第39図	02号塚	72	第79図	脊椎動物遺体(2)	129
第40図	中世出土遺物	73	＜うならす遺跡＞		
第41図	木戸作遺跡出土人骨(1)	76	第80図	うならす遺跡 遺構分布	131
第42図	木戸作遺跡出土人骨(2)	77	第81図	うならす遺跡 縄文遺構分布	132
第43図	銅銭	78	第82図	奈良・平安時代遺物 (昭和61年度調査)	133
＜内野遺跡＞			＜内野古墳群＞		
第44図	内野遺跡 遺構分布	80	第83図	内野古墳群	139
第45図	陥し穴	82	第84図	1号墳	141
第46図	SI06・07	84	第85図	5号墳①	142
第47図	SI08	85	第86図	5号墳②	143
第48図	SI09	86	第87図	4・6～8号墳測量図	144
第49図	SI10～12	87	第88図	10号墳	145
第50図	SI13	88	第89図	11号墳	146
第51図	SI14	90	第90図	12・13号墳	148
第52図	古代遺物①	92	第91図	14号墳	149
第53図	古代遺物②	93	第92図	出土遺物	149
第54図	古代遺物③	94	第93図	上腕骨の損傷	152
第55図	古代遺物④	95	第94図	5号墳出土人骨(1)	155
第56図	古代遺物⑤	96	第95図	5号墳出土人骨(2)	156
第57図	古代遺物⑥	97	第96図	5号墳出土人骨(3)	157
第58図	古代遺物⑦	98	第97図	5号墳出土人骨(4)	158
第59図	古代遺物⑧	99	第98図	5号墳出土人骨(5)	159
第60図	古代遺物⑨	100	第99図	5号墳出土人骨(6)	160
第61図	古代遺物⑩	101	第100図	5号墳出土人骨(7)	161
第62図	古代遺物⑪	102	＜その他の遺跡＞		
第63図	古代遺物⑫	103	第101図	貝殻塚遺跡 遺構分布	163
第64図	古代遺物⑬	104	第102図	ムグリ遺跡 遺構分布	165
第65図	古代遺物⑭	105	第103図	多部田低地第2遺跡 トレンチ配置図	166
第66図	古代遺物⑮	106	＜まとめ＞		
第67図	古代遺物⑯	107	第104図	縄文時代概念図	171
第68図	古代遺物⑰	108	第105図	古墳時代概念図	172
第69図	SD02・03・SK006	109	第106図	奈良・平安時代概念図	173
第70図	SD04	110	第107図	周辺の生産遺跡	174
第71図	SD05	111			
＜多部田貝塚＞					
第72図	多部田貝塚全体図	113			

目 次

第1表 関連調査一覧……………14	(昭和46年調査の現地採集資料) ……………126
第2表 遺構一覧……………15	第7表 脊椎動物遺体の同定結果
第3表 木戸作遺跡歯牙一覧……………75	(平成10・11年度調査の貝サンプル資料) ……127
第4表 多部田貝塚	第8表 貝種組成と標準貝類相 ……………135
S46 縄文土器分類別点数(口縁部のみ) ……122	第9表 石器・土製品集計……………136
第5表 脊椎動物遺体種名一覧……………125	第10表 平和公園遺跡群遺構・遺物集計……………169
第6表 脊椎動物遺体の同定結果	第11表 生産遺跡の消長……………175

写真図版目次

<全体>	図版20 出土遺物(7)	図版39 出土遺物(4)
図版1 空中写真(1)	図版21 出土遺物(8)	図版40 出土遺物(5)
図版2 空中写真(2)	図版22 出土遺物(9)	図版41 出土遺物(6)
<木戸作遺跡>	図版23 出土遺物(10)	図版42 出土遺物(7)
図版3 遺構(1)	<内野遺跡>	図版43 出土遺物(8)
図版4 遺構(2)	図版24 遺構(1)	図版44 出土遺物(9)
図版5 遺構(3)	図版25 遺構(2)	図版45 出土遺物(10)
図版6 遺構(4)	図版26 遺構(3)	図版46 出土遺物(11)
図版7 遺構(5)	図版27 遺構(4)	図版47 出土遺物(12)
図版8 遺構(6)	図版28 出土遺物(1)	図版48 出土遺物(13)
図版9 遺構(7)	図版29 出土遺物(2)	図版49 出土遺物(14)
図版10 遺構(8)	図版30 出土遺物(3)	<うならす遺跡>
図版11 遺構(9)	図版31 出土遺物(4)	図版50 出土遺物(1)
図版12 遺構(10)	図版32 出土遺物(5)	図版51 出土遺物(2)
図版13 遺構(11)	図版33 出土遺物(6)	<内野古城群>
図版14 出土遺物(1)	図版34 出土遺物(7)	図版52 遺構(1)
図版15 出土遺物(2)	<多部田貝塚>	図版53 遺構(2)
図版16 出土遺物(3)	図版35 調査風景	図版54 出土遺物
図版17 出土遺物(4)	図版36 出土遺物(1)	<他の遺跡>
図版18 出土遺物(5)	図版37 出土遺物(2)	図版55 ムグリ・多部田低地第2遺跡
図版19 出土遺物(6)	図版38 出土遺物(3)	図版56 平和公園遺跡群の現状

付 録 D V D

<付表>	付表6 古代土器	第1～11表
付表1 掲載資料索引	付表7 古代土・石製品	<写真>
付表2 縄文土器	付表8 古代金属製品	巻頭図版1・2、写真図版1～56(カ)
付表3 縄文時代土器以外	付表9 中・近世土器類	ラー写真
付表4 弥生土器	付表10 中・近世土器以外	<その他>
付表5 弥生石器	<表>	報告書抄録

第1章 本書及び事業・遺跡群の概要

第1節 事業と発掘調査の概要

1 事業と遺跡群

(1) 発掘調査事業の概要

千葉市平和公園は、千葉市若葉区多部田町から緑区高田町にかかる704,000㎡の大きな市営墓地である。昭和47年7月1日に開設し、現在までに3万区画余りの墓地を供給している。昭和43年に造成工事が始まった後、昭和47年に内野古墳群5号墳が削平されたため、加曾利貝塚博物館が同古墳と現在の内野遺跡の古墳時代住居跡1軒を発掘した。これを契機に、事業地の拡充計画に基づいて埋蔵文化財の保護に関する協議を行った。それ以前から周知されていたのは多部田貝塚、内野古墳群、旧多部田遺跡（現うならす遺跡）のみであったが、昭和48年・49年の市内全域の分布調査によって木戸作、内野、内野古墳群、中峠野、中峠野南、貝殻塚（位置誤り）が追加された。その後、造成対象範囲の試掘・確認調査を経て、工事計画に沿って発掘調査を実施した。拡張工事や追加整備に伴う調査も含めると、昭和47年度から令和元年度までの48年間、22次に渡って発掘調査を行い、整理・刊行まで半世紀を要した。試掘・確認調査は千葉市教育委員会が、本調査は千葉市教育委員会（～昭和59年度）、財団法人千葉市文化財調査協会（昭和60年度～平成13年度）、財団法人千葉市教育振興財団（平成14年度～）が実施した。

この間、内野古墳群の墳丘測量（昭和50年度）と多部田貝塚の保存目的の確認調査（平成10・11年度）を実施して現状保存を図った。

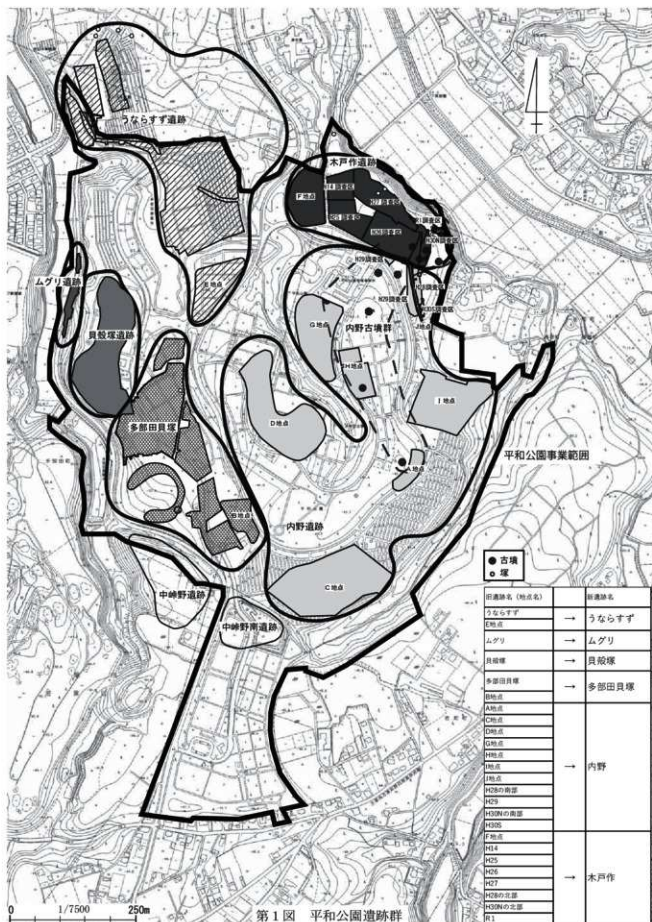
事業地周辺では民間事業による墓地造成も行われており、昭和62年度から断片的にうならす遺跡と木戸作遺跡で調査を行っている。

(2) 事業地内の遺跡（第1図）

一部の調査区は周知の遺跡の枠が定められずに平和公園A地点～H地点と仮名称が付けられ、未命名の調査区もあった。一部は既刊の報告書において範囲を示しているが、遺跡分布地図には反映できていない。そのため、改めて試掘・発掘調査の成果と地形を基に第1図のように遺跡範囲を整理した。第1図右下の一覧は仮調査区名及び未命名調査区の遺跡への帰属を示している。

これによって、事業範囲（第1図太線）に含まれる遺跡は、内野遺跡、内野古墳群、木戸作遺跡、うならす遺跡（一部）、貝殻塚遺跡、ムグリ遺跡、多部田貝塚、中峠野南遺跡、中峠野遺跡（ごく一部）の9遺跡となり、この全体を「平和公園遺跡群」と呼称する。このうち、協議なしのまま造成が終了した中峠野南遺跡と、斜面のごく一部が事業地にかかる中峠野遺跡については調査歴がない。なお、昭和50年度に踏査し一部測量調査を行った「多部田塚群」に関しては、うならす遺跡、木戸作遺跡、多部田貝塚に分散しているため、それぞれの遺跡に含めた。

当霊園は「陽光と緑に囲まれた安らぎの聖地」と謳うように地形や斜面林を活かした広大な緑地公園となっている。遺跡の一部は良好に保存されており、遊歩道沿いには内野古墳群と多部田貝塚の解説看板を設置している。市内でも数少ない見学可能な遺跡であり、市内外の多くの人々が集まる場所でもある。発掘成果を活かして、さらに周知と活用を図ってきたい。



● 古墳
○ 塚

旧遺跡名(地点名)	新遺跡名
うならす	→ うならす
E地点	
ムグリ	→ ムグリ
貝塚	→ 貝塚
多部田貝塚	→ 多部田貝塚
B地点	
A地点	
C地点	
D地点	
G地点	
H地点	
I地点	→ 内野
J地点	
H28の南端	
H29	
H30Hの南端	
H30S	
F地点	
H14	
H25	
H26	
H27	→ 木戸作
H28の北端	
H29の北端	
H1	

2 発掘調査と整理作業の概要

(1) 発掘調査等

◆A 平和公園整備事業以前の発掘調査・測量調査

昭和28年度

多部田貝塚 (S29. 3. 16-S29. 3. 25) 本調査65㎡

筑波大学と千葉高校の合同調査。面状貝層。縄文土器・耳飾・骨鏃・角製垂飾、琥珀(前田1964)

昭和45年度

内野古墳群測量

加曾利貝塚博物館が前方後円墳1基(1号墳)を測量(薬師寺・寺沢1976)

昭和46年度

多部田貝塚(平和公園B地点、S47. 1. 20-S47. 3. 31) 確認調査約2,300㎡

加曾利貝塚博物館が範囲確認調査(S57踏査カード)

内野古墳群(S47. 2. 5-S47. 3. 5) 本調査・測量

加曾利貝塚博物館調査。円墳1基(5号墳)。人骨、直刀・刀子・鉄鏃・耳環併せて1号墳の測量を実施(薬師寺・寺沢1976)

木戸作(S46. 7?) 本調査

加曾利貝塚博物館調査。平安住居跡。土師器・須恵器(遺物台帳・ラベルより)

内野遺跡(平和公園A地点、S47. 1. 20-S47. 3. 31) 本調査3,500㎡

加曾利貝塚博物館調査。古墳住居跡(調査記録)

昭和47年度

内野古墳群・測量

加曾利貝塚博物館調査。円墳1基(8号墳) 測量(武田1976)

◆B 平和公園整備造成及び拡張工事に伴う発掘調査

報告済みのものも含めて各年度の概要を示す。各遺跡全体の調査面積や遺構は第1表に示した。

昭和47年度

内野遺跡(C地点、S47. 6. 14-S47. 9. 25) 確認調査14,000または15,000㎡

縄文・平安土坑。縄文土器、短頸壺、甕、台付鉢、蓋(薬師寺・寺沢1976)

昭和48年度

内野遺跡(D地点、S48. 5. 10-S49. 3. 31) 確認調査29,000㎡

縄文土器・縄文石器・須恵器(薬師寺・寺沢1976)

昭和50年度

うなすず遺跡(E地点、S50. 6. 16-S50. 7. 8) 確認調査・測量

縄文土器、土師器。「多部田塚群」7号塚を測量(薬師寺・寺沢1976)

多部田貝塚(調査月日不明) 測量

「多部田塚群」8号塚を測量(薬師寺・寺沢1976)

木戸作遺跡(F地点、S50. 6. 16-S50. 7. 8) 確認調査

縄文土器、須恵器(田中・古谷2004)

内野古墳群(測量のみ)

円墳5基(2・3・5～7号墳) 測量(薬師寺・寺沢1976)

昭和57年度

内野遺跡 (G地点、S57.11.15-S57.12.22) 確認調査 5,000 m²
円墳・溝・土坑。縄文土器、中・近世土器 (田中・古谷 2004)

昭和59年度

内野遺跡 (H・I地点、S59.2.1-S59.3.16) 確認調査 1,633 m²/16,000 m²
縄文住居跡・溝。縄文土器。

内野遺跡 (J地点、S59.11.1-S59.12.7) 確認調査 557 m²
縄文土坑・円墳、奈良・平安住居跡。縄文土器・石器、鉄織、土師器、須恵器、陶器 (田中・古谷 2004)

平成元年度

うならすず遺跡 (H02.1.8-H02.3.27) 確認調査 395 m²/8,800 m²
縄文住居跡・土坑・貝層、中世溝 (田中・古谷 2004)
貝殻塚遺跡・多部田貝塚 (H01.10.23-H02.2.27) 確認調査 4,245 m²/63,600 m²
「多部田遺跡」として2遺跡に跨る調査。旧石器集中、縄文住居跡・土坑・貝層、古墳～平安住居跡・土坑 (田中・中山 2003)

平成2年度

うならすず遺跡 (H02.5.1-H03.3.30) 本調査 25,000 m²
旧石器集中、縄文住居跡・土坑、古墳・平安住居跡・掘立・土坑。縄文土器・石器・土製品 (田中・古谷 2004)

平成3年度

うならすず遺跡 (H03.11.8-H04.3.31) 本調査 4,550 m²
旧石器集中・縄文住居跡・土坑、古墳・平安住居跡・掘立・土坑・貝層 (田中・古谷 2004)
多部田貝塚 (調査月日不明) 測量
貝層と8号塚を含む範囲を測量 (倉田 2000)
多部田貝塚 (H04.3.2-H04.3.31) 本調査 1,000 m²
「多部田遺跡」として調査。縄文住・土坑、近世溝。石棒 (田中・中山 2003)

平成4年度

貝殻塚遺跡 (H04.4.1-H05.3.31) 本調査 10,000 m²
報告書で多部田貝塚から分離。縄文土坑。縄文土器 (田中・中山 2003)
多部田貝塚 (H04.4.1-H05.3.31) 本調査 4,900 m²
縄文土坑。縄文土器 (田中・中山 2003)

平成5年度

うならすず遺跡 (H05.4.1-H06.3.31) 本調査 600 m²
近世溝・土坑。縄文土器 (田中・古谷 2004)
多部田貝塚 (H05.4.1-H06.3.31) 確認調査 315 m²/8,800 m²、本調査 13,500 m²
縄文住居跡・土坑、古墳住居跡、溝 (田中・中山 2003)

平成6年度

うならすず遺跡 (H06.4.1-H07.3.31) 本調査 190 m²
縄文住居跡 (年報)
ムグリ遺跡 (H06.4.1-H07.3.31) 確認調査 470 m²/3,200 m²
奈良・平安住居跡・掘立柱建物跡・窯跡 (田中・中山 2003)

貝殻塚遺跡 (H06. 4. 1-H07. 3. 31) 本調査 11,000 m²
縄文住居跡・土坑、古墳住居跡・土坑、奈良・平安住居跡 (田中・中山 2003)
多部田貝塚 (H06. 4. 1-H07. 3. 31) 本調査 4,700 m²
縄文住居跡・土坑、古墳住居跡・溝。中・近世溝 (田中・中山 2003)

平成 7 年度

うならす遺跡 (H07. 4. 1-H08. 3. 29) 本調査 2,000 m²
縄文住居跡・土坑、古墳住居跡、古墳～平安方墳 (田中・古谷 2004)
ムグリ遺跡 (H07. 6. 1-H08. 3. 29) 本調査 1,460 m²
古墳・平安住居跡、奈良・平安竈跡・土坑。土師器・須恵器・鉄滓・羽口 (田中・中山 2003)
木戸作遺跡 (H07. 9. 1-H03. 3. 29) 確認調査 1,860 m²/18,563 m²
縄文土坑、古墳住居跡、中・近世溝・塚・土坑 (年報)

平成 8 年度

木戸作遺跡 (H08. 10. 1-H08. 12. 25) 確認調査 1,622 m²/18,000 m²
縄文住居跡・土坑、弥生住居跡、古墳住居跡・古墳、奈良・平安住居跡・掘立・土坑

平成 14 年度

木戸作遺跡 (H14. 9. 1-H14. 11. 29) 本調査 2,879 m²
縄文土坑、奈良住居跡、奈良・平安土坑、中・近世溝。縄文土器・石器、土師器・須恵器 (年報)

平成 24 年度

内野古墳群 (H24. 11. 29-H24. 12. 3) 確認調査 51.2 m²
古墳 (1号墳前方部、年報)

平成 25 年度

木戸作遺跡 (H25. 10. 1-H25. 12. 18) 本調査 4,100 m²
縄文土坑、奈良・平安土坑。縄文土器、土師器・須恵器 (文献なし)

平成 26 年度

内野古墳群 (H26. 3. 17-H26. 3. 20) 確認調査 20 m²/1,600 m²
縄文土坑、古墳。縄文土器、土師器 (田中 2015)
木戸作遺跡 (H26. 10. 1-H26. 12. 22) 本調査 6,400 m²
縄文土坑、弥生住居跡、古墳、奈良住居跡・方墳、中・近世土坑・溝。縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器 (文献なし)

平成 27 年度

木戸作遺跡 (H27. 10. 5-H27. 12. 24) 本調査 5,900 m²
縄文住居跡・陥し穴・貯蔵穴、弥生～平安住居跡、中・近世塚・墓。縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器、中・近世土器、古銭 (文献なし)

平成 28 年度

木戸作遺跡 (H28. 10. 24-H29. 1. 31) 本調査 2,200 m²
縄文土坑・陥し穴、古墳、奈良・平安住居跡、中・近世溝・土坑。縄文土器、土師器・須恵器 (文献なし)
木戸作遺跡 (H28. 11. 24-H29. 1. 25) 確認調査 254 m²/3,300 m²
縄文土坑、古墳、奈良住居跡・掘立、中世溝。縄文土器、土師器・須恵器 (文献なし)

平成 29 年度

木戸作遺跡 (H30. 2. 5-H30. 3. 27) 本調査 1,700 m²

調査時点では内野遺跡・内野古墳群、縄文土坑、平安住居跡、中・近世溝・土坑、土師器・須恵器（文献なし）

平成 30 年度

木戸作遺跡 (H30. 6. 25-H30. 8. 31) 本調査 1,550 m²

縄文陥し穴、弥生住居跡、古墳、平安住居跡・土坑、中・近世土坑。縄文土器、弥生土器・石器、土師器・須恵器・鉄器（文献なし）

令和元年度

木戸作遺跡 (R01. 5. 27-R01. 6. 28) 本調査 440 m²

中・近世溝。土師器・須恵器（文献なし）

◆C 史跡整備に伴う保存目的の確認調査

平成 10 年度

多部田貝塚 (H11. 3. 1-H11. 3. 26) 確認調査 25 m²

縄文土坑 1・ピット 3。縄文貝輪・貝刃・土器片（佐藤 2001）

平成 11 年度

多部田貝塚 (H12. 3. 1-H12. 3. 31) 確認調査 25 m²

H10 の続き。縄文住居跡・土坑。縄文土器・貝・骨（佐藤 2001）

◆D 民間事業に関わる発掘調査

昭和 62 年度

うならす遺跡 (S62. 1. 8-S62. 1. 21) 光明寺墓地造成に伴う確認調査 330 m²/3,300 m²

住居跡・土坑・溝。縄文土器、土師器、須恵器、瓦、土鍾、紡錘車

平成 12 年度

うならす遺跡 (H12. 8. 21-H12. 8. 31) 最福寺墓地造成に伴う確認調査 546 m²/6,692 m²

縄文住居跡・土坑、古墳、古墳住居跡・土坑、中・近世塚・溝。縄文土器、土師器（長原 2001）

うならす遺跡 (H12. 10. 2-H12. 10. 31) 最福寺墓地造成に伴う本調査 760 m²

縄文住居跡・土坑、古墳住居跡・土坑、古墳～平安方墳、中世土坑墓・土坑。縄文土器、土師器・須恵器（長原 2001）

平成 15 年度

うならす遺跡 (H15. 9. 3-H15. 9. 12) 最福寺墓地造成に伴う確認調査 8 m²/721 m²

塚（飛田・長原 2004）

平成 30 年度

うならす遺跡 (H31. 1. 21-H31. 1. 30) 最福寺墓地造成に伴う確認調査 80 m²/960 m²

縄文住居跡・土坑。縄文土器・石器、弥生土器、土師器、中・近世土器（西野 2020）

令和元年度

うならす遺跡 (H31. 4. 15-R01. 5. 11) 最福寺墓地造成に伴う本調査 200 m²

縄文住居跡・土坑、古代～中世溝・土坑。縄文土器・石器、土師器・貝（青木・小野 2020）

◆E 関連遺跡の発掘調査

昭和 62 年度

多部田第 2 低地遺跡 (S62. 9. 16-S62. 9. 22) 都川上流土地改良事業に伴う確認調査 200 m²/1,800 m²

水門遺跡として記載。遺構は検出されず。縄文土器片、土師器片、陶器片（年報 2）

平成 63 年度

多部田低地第 2 遺跡 (S63 年度) 確認調査 約 100 m²/約 1,400 m²

縄文土器、土師器、陶器、中世陶器・銭 (文献なし)

(2) 整理作業 (今回の刊行計画のみ)

令和 3 年度

水洗・注記、記録類整理～実測・トレース。編集の一部

令和 4 年度

編集作業

令和 5 年度

刊行

3 整理作業と報告書作成の方針

(1) 全体

上記のように、発掘調査は長期に渡って断続的に行われてきたが、拡張計画が一段落したため、本書は、当事業に伴う発掘調査の最終報告となる。そのため、未報告の調査成果や、整理・掲載対象から漏れていた遺物を洗い出し、残りのすべてを整理・報告対象とする方針を採り、必要に応じて既刊分の内容や図を引用・再録した。また、隣接地におけるうならず遺跡の調査についても取り上げる。遺構番号は既刊分も含めて遺跡ごとに通し番号を与えた。第 2 表は全体の遺構一覧であり、本書で扱う遺構に○をつけた。確認調査のみの場合は、原則として掲載遺物がある場合のみ番号を付けた。整理対象とした 7 遺跡の出土遺物は、遺跡ごとに、数量に応じて時代・種類ごとにまとめて収納した。なお、印刷費用の都合により、掲載遺物の属性表は DVD に付表として収録した。写真図版はモノクロ印刷としたが、DVD にはカラー写真を収録した。

(2) 縄文土器

4 遺跡出土の 297 点について、点数が少ない場合は遺跡や調査年次ごとに一括し、点数が多い場合は遺構やグリッドごとに分類・集計を行った (付表 2)。縄文のみ、沈線のみ、無文など分類できないものは「無文等」にまとめ、有文については以下の基準で集計して本文や表に示し、実物にもラベルを付けて収納した。図・写真を掲載したのは 297 点であり、属性は付表 2 に示した。ただし、点数の多い多部田貝塚昭和 46 年調査分については別に詳細な基準を設けた。

1 群：縄文早期 (1a 漆糸文土器、1b 沈線文土器、1c 条痕文土器)、2 群：羽状縄文系 (2a 関山式土器、2b 黒浜式土器、2c 諸磯式・浮島式)、3 群：阿玉台式、4 群：加曽利 E 式、5 群：称名寺式・堀之内式、6 群：加曽利 B 式、7 群：曾谷・安行式、8 群：後・晩期粗製土器 (8a 加曽利 B 式、8b 晩期安行式)

(3) 弥生時代から平安時代の土器

遺跡出土の 7118 点のうち、特徴的なものや遺構の時期推定に必要な 647 点を抽出し、図や写真を掲載した。掲載資料の属性は付表 4・6 に示した。

(4) 中・近世の土器

7 点を観察し 3 点を掲載した。小高春雄氏 (茂原市史編さん委員会) のご指導を得て、岸本が執筆した。

(5) 土器以外の遺物

基本的に全点を掲載資料として観察を行い、時代・種類ごとに付表に提示した。ただし、礫は点数と重量、近世以降の瓦は点数のみを集計して提示した。必要に応じて一部を図化・写真掲載した。

(6) 出土人骨

内野古墳群5号墳主体部出土の人骨については渡辺新氏(千葉縄文研究会)、千葉南菜子(千葉市教育委員会)による鑑定を行い、千葉が執筆した。また、木戸作遺跡中世土坑墓、内野遺跡出土火葬人骨についても千葉が鑑定、執筆を行った。

第2節 遺跡群と各遺跡の概要

1 遺跡群の位置

千葉市は北西から南東にかけて幅29.3kmに及ぶ広い市域をもつが、多部田町はその中央付近を流れる都川水系にある。都川は、JR菅田駅付近に水源をもち、千葉市の市街を流下して東京湾に注ぐ全長約16kmの河川である。事業地は、旧海岸線から都川本谷を7km遡った中流域に開く二つの支谷(多部田支谷・佐和支谷)に挟まれた多部田台地上に立地する。この台地は、北から南に徐々に標高を増しており、北端部は17~19mの低位段丘、積積台地の北端で24m、平和公園の北端部で29m、南端部で45mを測る。事業地の旧字名は大字多部田字馬場前、ウナラシズ、内野、木戸作、貝唐、ムグリ、大谷、聖人塚と、大字高田字濱山である。貝唐(かゝり)は、多部田貝塚の貝殻に因む名称であろう。

2 周辺の開発と遺跡

(1) 開発と発掘調査

都川中流域左岸では、当事業以前に京葉カントリークラブ(昭和34年開場)、大宮台(昭和38年入居開始)、多部田町(昭和45年ころ造成)の開発が行われているが、発掘調査体制の整備以前であったため、広域が遺跡の空白域になっている(第2図)。それ以降は開発が少なく、森林が多いため、平和公園遺跡群以外の遺跡については情報が乏しい。数少ない調査の成果を列挙する。瀧ノ谷遺跡:縄文後期住居跡1・奈良時代住居跡1(横田1989)。網田遺跡:縄文前期間山式期住居跡1(佐藤1999)。南光寺遺跡:古墳時代住居跡1、古代土坑1(未報告)。向海道遺跡:縄文時代陥し穴8(寺門1991)。縄文後晩期的大型貝塚である築地台貝塚と押元貝塚、古墳時代中期から後期の集落である東五郎遺跡については後述する。小規模な発掘調査ばかりであり、情報の乏しい広大な範囲にも多くの遺跡が存在することは間違いない。

なお、都川中流域右岸も調査は乏しいが、北谷津・上ノ台遺跡の確認調査では古墳時代の住居跡24軒を検出している。

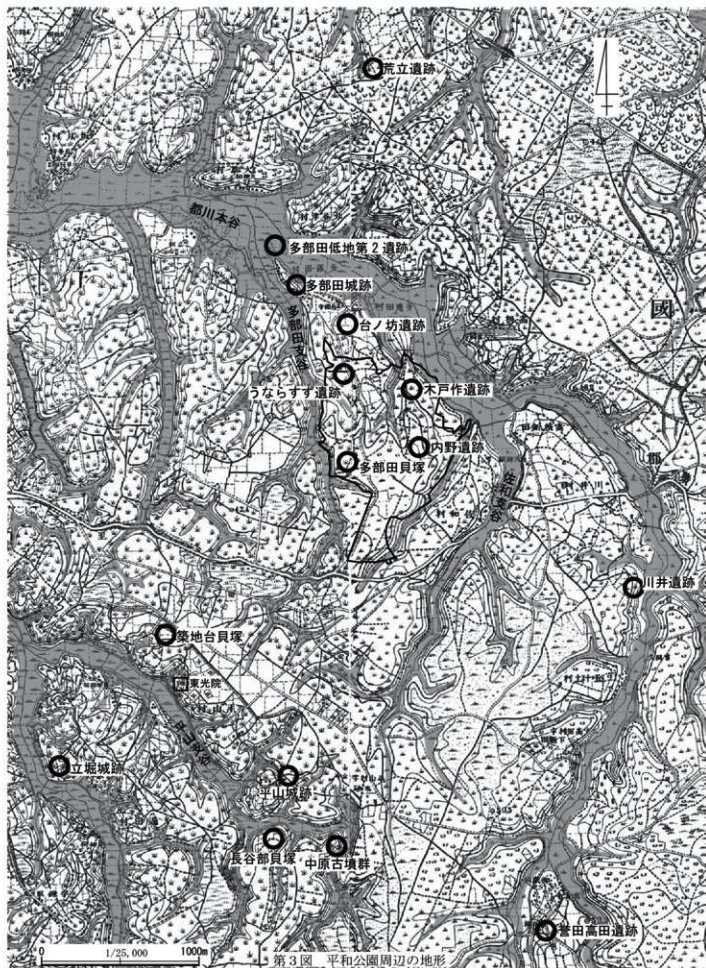
(2) 周辺の地形と遺跡概要

第3図は、第2図とほぼ同じ範囲の迅速測図であり、谷を塗りつぶしている。右下から左上にかけて都川本谷があり、多くの支谷によって台地が区切られている。支谷の奥は、左下の仁戸名川(支川都川)によって区切られている。右上にみえる北から入る細い谷は古鬼怒湾水系の鹿島川の支谷であり、都川本谷との間が分水嶺の道「下野一北総回廊」である。以下では第2図の範囲を中心に、各時代の主な遺跡を概観する。

(3) 縄文時代

海岸から遠く離れた都川中・上流は、中期大型貝塚の分布範囲外であるが、多部田貝塚とうならす遺跡は加曽利E式前半期から小規模な集落である。こうした小集落の分布は、内野・谷原前・借御堂など東に伸び、九十九里水系の南白亀川低地集落群に続いている。これらの集落の多くは加曽利E式後半にも継続する。加曽利E式末のEIV式から称名寺式期にはうならす遺跡に大規模な集落を形成する。仁戸名川谷の平山支谷には中期前葉・阿玉台式前半期の越川戸遺跡があり、図外西側には小規模な貝層を形成する環状集落の城之腰遺跡とやや規模の小さい点列環状貝塚の菱名貝塚がある。平山支谷奥部の千葉県指定史跡・長谷部貝塚も大型貝塚であるが、中期と後晩期の両方に形成されたことが確実なきわめて重要な貝塚である(ほかに山崎貝塚・姥山貝塚・加曽利





貝塚・砥園貝塚)。この地域では陸路を使うと村田川水系に近く、魚貝類は村田川河口からもたらされた可能性が高い。

後期前葉の大型貝塚形成期には、都川河口に矢作貝塚、葦川谷に廿五里・草刈場・台門、都川本谷北岸に花輪貝塚、坂月川流域に加曾利貝塚、都川本谷奥に誉田高田・川井・多部田、大宮川谷に押元貝塚、仁戸名川谷に築地台貝塚と、一つの水系に12か所もの大型貝塚が形成された。このうち、多部田貝塚や誉田高田貝塚は村田川水系で採取された貝が陸路で運ばれたと推定されている。押元貝塚は、都川河口で漁を行ったと推定される貝塚群のなかではかなり奥に位置しており、その内容が注目される。

仁戸名川谷には長谷部貝塚と築地台貝塚がある。築地台貝塚は、多部田貝塚と村田川河口の中間にあり、貝類の陸路運搬に関わっていたことが予想される。

なお、記録として残されたなかで千葉県貝塚がはじめて調査されたのは1881年の長谷部貝塚(主理台貝塚)であり、2番目はその2か月後の押元貝塚である。学史的にもとても重要な貝塚といえる。

(4) 弥生時代・古墳時代

市内には、弥生時代の遺跡が広域に分散して存在する。近隣では、いずれも第2図の範囲外となるが、西へ4kmほどのところの城之腰遺跡(豊田2003)と星久喜遺跡(古内2003)がある。城之腰遺跡は中期の住居が59軒、後期の住居が16軒検出されている。星久喜遺跡も大規模な集落であり、つくられたのは中期で、古墳時代前期まで存続した。一方で本遺跡群では、木戸作遺跡で中期後半の住居4軒の小規模な集落が検出されている。

古墳時代前期の遺跡は特に数が少なく、現状ではうならず遺跡から6軒検出されているのみである。その分布から未調査域に集落がさらに広がっていると思われる。

古墳時代中期の遺跡としては、東五郎遺跡(谷島他1977)があげられる。古墳時代中期の住居跡4軒、後期前半の住居跡6軒、中期の方墳1基、古墳時代の製鉄関連遺構1基を検出している。製鉄関連遺構は土坑から専用羽口が出土したもので、平地式鍛冶工房に伴うものと推定される。また、中期の住居跡から鉄滓が出土しており、八千代市沖塚遺跡に次ぐ古い時期の例として貴重である。本遺跡群では、うならず遺跡で1軒、木戸作遺跡で住居が2軒検出されている。いずれも、数は少なく、切り合いもないため短期間のみ使用されたと思われる。

古墳時代後期には、それまでとは一変し、千葉市内に多くの遺構がみられるようになる。千葉市では東京湾に面した台地の辺縁、都川水系、鹿島川流域の台地辺縁に古墳群が多く見られ、本遺跡群にも内野古墳群が存在する。内野古墳群は前方後円墳1基と13基の円墳で構成される。周辺にも中原古墳群(後藤1976)があり、内野古墳群と類似の構成をとる。記録が古く詳細不明であるが常総型古墳の可能性のある古墳も複数見つかっている。少なくとも3基(第2、3、5号墳)の常総型古墳があり、残りの2基も可能性がある。内野古墳群にも3基(5、9、10号墳)の常総型古墳と思われる古墳がある。当該時期の常陸と下総の関係を示唆している。

集落遺跡もこの時期から急激な増加を見せる。本遺跡群周辺では前述のとおり調査が進んでおらず、大規模な集落は報告されていないが、本遺跡群からは、貝殻塚遺跡より7軒、ムグリ遺跡1軒、多部田貝塚から7軒、内野遺跡から1軒、うならず遺跡から3軒、当該時期の住居が見ついている。しかし、同時期の集落遺跡と比較すると小規模である。

(5) 奈良・平安時代

越川戸遺跡では8世紀末から10世紀までの住居跡15軒、掘立柱建物跡20棟、瓦塔が出土している。うならず遺跡では同じく8～10世紀の住居が14軒、掘立柱建物跡が6軒検出されている。また、木戸作遺跡では8世紀の住居が6軒、内野遺跡では、9世紀の住居が12軒検出されている。

本遺跡群のムグリ遺跡からは、炉跡は見つかっていないが、多量の鉄滓や羽口の破片が見つかっており、鍛冶製鉄が行われていた可能性がある。さらにうならず遺跡や木戸作遺跡の住居に土器製作の痕跡(ロクロピット

や粘土堆積)が残されており、ムグリ遺跡の1号窯の周辺や内部より土器や瓦片が見つまっている。

未調査であるが広徳院遺跡の山林中には「旧東光院址」と呼ばれる土壇が存在し、古瓦が採集されたといわれ、本遺跡群を含めた土器・瓦生産遺跡との関連が示唆される。図外となるが、本遺跡群の北約3kmには8世紀から9世紀にかけて操業していた、中原(郷堀1998)、宇津志野(渡邊1998)、宇津志野南窯跡(長原1999)が、さらにその北東3kmほどに内田端山越遺跡(渋谷2002、松田2008)がある。いずれも窯跡としては数基と小規模なものであり、この時期の下総の土器生産の様相を示している。

(6) 中世

都川本谷と仁戸名川谷に挟まれた台地上には、事業地に近い多部田城跡のほか、城山城跡・立堀城跡・平山城跡などの中世城館跡がある。千葉常胤の四男・胤信が「多部田四郎」、千葉胤政の八男・胤忠が「多部田太郎」と称したとされ、『千葉実録』には千葉介胤富の記事に「白井入道下総千葉郡多部田村にも住居しけるか、入道を多部田殿ともいふ。其の旧蹟今にあり」との記載がある。確証は得られていないが、多部田城跡などに居住した可能性がある。平山城跡は、康正元年(1455)に千葉宗家が滅ぼされた後、それを継承した千葉氏が本拠とした土地とされている。東光院では11世紀前半の造立と推定される「伝七星七佛薬師像」を安置しており、千葉氏の妙見信仰の根本像とする意見もある(濱名2013)。

当遺跡群では、木戸作遺跡で中世のものと思われる土坑墓群が検出されており、少なくとも江戸時代初頭までは墓地として利用されたようである。また、多くの溝も見つかっており、古代までとは異なる利用をされていたようである。

参考文献

◆当事業の既刊調査報告書等

- 青木誠・小野麻人2020『千葉市うならす遺跡―墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
植月学2004『貝層サンプルの分析』『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ うならす遺跡』千葉市教育委員会
倉田義広2000「多部田貝塚」『千葉市文化財調査協会年報12』
佐藤順一2001『千葉市多部田貝塚』
武田宗久1976『内野古墳群』『千葉市史 史料編1 原始古代中世』千葉市
田中英世・中山貴正2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ 多部田貝塚・貝殻塚遺跡・ムグリ遺跡』
田中英世・古谷渉2004『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ―うならす遺跡―』
田中英世2015『埋蔵文化財調査(市内遺跡) 報告書―平成26年度―』
千葉市文化財調査協会『財団法人千葉市文化財調査協会年報』(各年度、「年報」と省略)
桶原岳二2003「動物遺体群の分析」『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ 多部田貝塚・貝殻塚遺跡・ムグリ遺跡』
長原亘2001『千葉市うならす遺跡―平成12年度調査―』
西野雅人2020『埋蔵文化財調査(市内遺跡) 報告書―令和元年度―』
飛田正美1991「うならす遺跡」『平成2年度発表会要旨』
飛田正美・長原亘2004『埋蔵文化財調査(市内遺跡) 報告書―平成15年度―』
前田潮1964「千葉市多田貝塚出土遺物」『大塚考古』5
薬師寺崇・寺沢薫1976「千葉市多部田町千葉市平和公園内遺跡確認予備調査報告」『千葉市文化財調査報告書第1集』
山下亮介1995「平和公園遺跡群」『平成6年度発表会要旨』
山下亮介1996「ムグリ遺跡(平和公園遺跡群)」『平成7年度発表会要旨』

◆その他

- 穴沢味光・馬目順一1977「頭椎大刀試論―福島県出土を中心として」『福島考古』18号 福島県考古学会
天野努2023「古代房総の出土文字ア・ラ・カルト 千葉市ムグリ遺跡出土の「田部」記載へら書土器」『広報はら台』253
天野努2015「下総国における平安時代前期の開発の様相―旧本柵村角田遺跡を中心にして―」『千葉文華』第43号

- 市毛勲 1963 「東国における墳丘裾に内部施設を有する古墳について」『古代』第41号 早稲田大学考古学会
- 糸川道行 1983 「所謂変則的古墳に関する基礎的考察」『千葉県文化財センター研究連絡誌』第4号
- 小倉淳一 1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』27
- 小沢洋 2008 『房総古墳文化の研究』六一書房
- 唐沢保之 1981 『中島遺跡発掘調査概報』前橋市教育委員会
- 越川敏夫 1987 「まとめ」『向原遺跡』
- 小高春雄 2015 「発掘調査で出土する銭貨―千葉県内の諸例から―」『千葉県文化財センター研究連絡誌』第76号
- 後藤和民 1976 「中原古墳群」『千葉市史 史料編1 原始古代中世』千葉市
- 佐藤順一 1999 『千葉市榎作遺跡・網田遺跡・宇津志野遺跡群・海老遺跡・荒屋敷貝塚』千葉市教育委員会
- 笹生衛 1993 「第三節 葬送」『房総考古学ライブラリー―歴史時代(1)』財団法人千葉県文化財センター
- 郷堀英司 1998 「中原窯跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3』
- 穴倉昭一郎 1976 「新田山遺跡」『千葉市史 原始古代中世』千葉市
- 渋谷健司 2002 『内田端山越窯跡』印旛都市文化財センター
- 白井久美子 1986 「東国後期古墳分析の一視点―鈿鏡から見た千葉市生実・権名崎古墳群―」『千葉県文化財センター研究紀要』10
- 末木啓介 2017 「カマドの支脚利用に見られる集落内のグループ―古墳時代後期の埼玉県の遺跡を中心に―」『埼玉県立史跡の博物館紀要』10
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 関口武司 1979 「考察」『八千代市村上古墳群』八千代市村上古墳群調査団
- 関根達人 2003 「鏡被り葬考―その系譜と葬法上の意味合い―」人文社会論叢 人文科学篇9
- 田中英世 2008 「花輪貝塚をめぐる諸問題(1)―都川南岸の遺跡群・押元貝塚を中心に―」『埋蔵文化財調査センター年報21 平成19年度』千葉市教育委員会
- 田中広明 2015 「3 上野国府城出土の陶硯について」『推定上野国府』前橋市教育委員会
- 千葉県教育委員会 1983 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
- 千葉県文化財センター 1992 「社会の発展と群衆墳」『房総考古学ライブラリー6 古墳時代(2)』
- 千葉市史編集委員会 2022 『千葉市歴史読本 史料で学ぶ 千葉市の今むかし』
- 鶴岡英一 2009 「押元貝塚採集の動物遺存体について」『埋蔵文化財調査センター年報21 平成19年度』千葉市教育委員会
- 寺門義範 1991 『向海道遺跡』『埋蔵文化財調査(市内遺跡) 報告書―平成2年度―』千葉市教育委員会
- 長原亘 1999 「宇津志野南第3遺跡」『千葉市文化財調査協会年報11』
- 豊田秀治 2003 「城之腰遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2』
- 永井久美男 2002 『新版中世出土銭の分類図版』高志書院
- 半井幹雄 1996 「古墳時代終末期から平安時代前葉の墓制」『市原市武士遺跡1』財団法人千葉県文化財センター
- 沼澤豊 2009 「中小古墳における形態と規模の企画性」『千葉県文化財センター研究連絡誌』第71号
- 濱名徳順 2013 「房総の薬師如来像とその信仰」『仏像半島―房総の美しき仏たち―』千葉市美術館
- 植泉岳二 2001 「V 動物遺体群の分析」『千葉市多部田貝塚』
- 平川南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 古内茂 2003 「星久喜遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2』
- 堀部昭夫 1991 『八千代市白幡前遺跡』千葉県文化財センター
- 松田富美子 2008 『千葉県佐倉市内田端山越窯跡』印旛都市文化財センター
- 谷島一馬・刈馬郁夫 1977 『東五郎遺跡発掘調査報告書』千葉市教育委員会
- 山本彰他 1986 『真福寺遺跡』大阪府教育委員会
- 横田正美 1989 『昭和63年度 千葉市内遺跡群発掘調査報告書』千葉市教育委員会
- 渡邊高弘 1998 「宇津志野窯跡」『千葉県の歴史 資料編 考古3』

第1表 関連調査一覧

No.	道跡	調査名	事業	調査期間	種別	調査面積	部品	報告書略称	備考
1 うなすず道跡									
a	S50	予備調査	S50.6.16-550.7.8	確認		約850/8600	山本勇 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
b	S50	予備調査	不明	測量	不明	-	未		
c	S61	民間事業	S62.1.8-S62.1.21	確認	300/3,300		山下亮介 未	詳細位置不明。跡1,文化庁国政2に記録	
d	H01	平和公園	H02.1.8-H02.3.27	確認	355/8,600		-年03,平和公園Ⅱ		
e	H02	平和公園	H02.5.1-H03.3.30	本	25,000		-年04,平和公園Ⅱ		
f	H03	平和公園	H03.11.8-H04.3.31	本	4,550		-年05,平和公園Ⅱ		
g	H05	平和公園	H05.4.1-H06.3.31	本	600		白根義久 年07,平和公園Ⅱ		
h	H06	平和公園	H06.4.1-H07.3.31	本	180		山下亮介 年08		
i	H07	平和公園	H07.4.1-H08.3.31	本	2,500		山下亮介 年09,平和公園Ⅱ		
j	H12-1	民間事業	H12.8.21-H12.8.21	確認	548/6,992		長原正 3/25(予)H12,年14		
k	H12-2	民間事業	H12.10.2-H12.10.31	本	760		長原正 うなすずH12,年14		
l	H15	平和公園	H15.9.3-H15.9.12	確認	8/72		飛田正典-長原正 市内H15		
m	H30	民間事業	H31.1.21-H31.1.30	確認	80/960		井出祥子 市内H01		
n	R1	民間事業	H31.4.15-H31.5.11	本	200		井出祥子 うなすずR2		
2 ムグリ道跡									
a	H06	平和公園	H06.4.1-H07.3.31	確認	470/3,200		山下亮介 年08,平和公園Ⅱ		
b	H07	平和公園	H07.6.1-H08.3.31	本	1,460		山下亮介 年09,平和公園Ⅱ		
3 員般塚道跡									
a	H01	平和公園	H01.10.23-H02.2.27	確認	(4,245/63,600)		-年03,平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲の一部として調査	
b	H04	平和公園	H04.4.1-H05.3.31	本	10,000		白根義久 年08,平和公園Ⅱ	本跡より多摩田分譲から分割	
c	H06	平和公園	H06.4.1-H07.3.31	本	11,000		山下亮介 年08,平和公園Ⅱ		
4 多摩田分譲									
a	S28	予備調査	S28.3.16-S28.3.25	本	65m		-未?	筑波大,千葉県建設,大塚考古に記録あり	
b	S46	予備調査	不明	確認	不明		-古!		
c	H01	平和公園	H01.10.23-H02.2.27	確認	4,245/63,600		-年03,平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲	
d	H03-1	平和公園	不明	測量	調査不明		-未?	調査の詳細は不明,実際の事業は年報12に記録	
e	H03-2	平和公園	H04.3.2-H04.3.31	本	1,000		飛田正典 年05,平和公園Ⅱ		
f	H04	平和公園	H04.4.1-H05.3.31	本	4,900		白根義久 年08,平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲	
g	H05-1	平和公園	H05.4.1-H06.3.31	確認	約315/8,600		白根義久,鶴岡史一 年07,平和公園Ⅱ		
h	H05-2	平和公園	H05.4.1-H06.3.31	本	13,500		白根義久,鶴岡史一 年07,平和公園Ⅱ		
i	H06	平和公園	H06.4.1-H07.3.31	本	4,700		山下亮介 年08,平和公園Ⅱ		
j	H10	重要遺跡	H11.3.1-H11.3.26	確認	25		倉田義弘 年12,『千葉市多摩田分譲』		
k	H11	重要遺跡	H12.3.1-H12.3.31	確認	25		塚原勇人 年13,『千葉市多摩田分譲』	H10調査の結果	
5 内野古墳群									
a	S45	予備調査	S45	測量	測量1基		-未	第1集,市史資料編に記録	
b	S46	予備調査	S46(第1集), S47.25-S47.35(市史資料編)	本			-未	第1集,市史資料編に記録,加賀利博による調査	
c	S47	予備調査	S47	測量	測量1基		-未	第1集,市史資料編に記録,加賀利博による調査	
d	S50	予備調査	S50	測量	測量6基		藤原寺南-寺沢遺跡	第1集に記録	
e	S57	平和公園	S57.11.15-S57.12.22	確認	約8,233/約10,000		山本勇 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
f	H24	平和公園	H24.11.29-H24.12.3	確認	51.2		年28	報告書には実業家のみ記載	
g	H25	平和公園	H26.3.17-H26.3.20	確認	20/1,600		市内H08		
6 木戸作道跡									
a	S46	予備調査	S46.7.?	本?	不明		-未	加賀利博による調査	
b	S50	予備調査	S50.6.16-550.7.8	確認	6,800		山本勇 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
c	H07	平和公園	H07.8.1-H03.2.29	確認	1,880/18,563		山下亮介 年09		
d	H14	平和公園	H14.9.1-H14.11.29	本	2,879		中山真正 年16		
e	H25	平和公園	H25.10.1-H25.12.16	本	4,100		藤原裕一 未		
f	H29	平和公園	H29.10.1-H29.12.22	本	6,400		山下亮介 未		
g	H27	平和公園	H27.10.5-H27.12.24	本	5,900		藤原正 未		
h	H28	平和公園	H28.10.24-H29.1.31	本	約900		長原正 未		
i	H30	平和公園	H30.8.25-H30.8.31	本	約1,100		井出祥子 未		
j	H01	平和公園	R01.5.27-R01.6.28	本	440		山下亮介 未		
7 内野遺跡									
a	S46	予備調査	S47.10-S47.3.31	確認	約3,500,約2,300		-平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲,加賀利博による調査?	
b	S47	予備調査	S47.6.14-S47.9.25	確認	約1,000/14,000		藤原寺南 平和公園Ⅱ	跡47-48,第1集に記録,旧跡多摩田分譲地	
c	S48	予備調査	S48.5.10-S48.3.31	確認	約2900/29000		青沼達久-寺沢遺跡 平和公園Ⅱ	跡47-48,第1集に記録,旧跡多摩田分譲地	
d	S57	平和公園	S57.11.15-S57.12.22	確認	約8,233/約10,000		山本勇 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
e	S58	平和公園	S58.2.1-S59.3.16	確認	1,632/16,000		田中実世 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
f	S59	平和公園	S59.11.1-S59.12.7	確認	557		田中実世 平和公園Ⅱ	旧跡多摩田分譲地	
g	H28-1	平和公園	H28.10.24-H29.1.31	本	約1,300		長原正 未		
h	H28-2	平和公園	H28.11.24-H29.1.25	確認	254/3,300		石橋一善-長原正 未		
i	H29	平和公園	H30.2.5-H30.3.27	本	1,700		長原正 未		
j	H30	平和公園	H30.8.25-H30.8.31	本	約450		井出祥子 未		
8/7 木戸作道跡/内野遺跡									
	H06	平和公園	H06.10.1-H08.12.25	確認	1,622/18,000		山下亮介 年10		
8 中野野道跡									
								調査歴古!	
9 中野野南道跡									
								調査歴古!	
10 多摩田分譲地第2種(平和公園事業地外)									
a	S62	土地改良	S62.9.16-S62.9.22	確認		200/1,800		-年02	跡62-63にも記録,いづれかとも門道跡として記録
b	S63	不明	不明	確認		約100/約1,400		-未	

第2表 遺構一覽

○は本書所収

No.	遺跡名	調査名	遺構種	発見地	期No.	時期1	時期2	報告備考
01	3025すす	H02	住居	A-001	A-001	平安	09C前半	清 粘土層?
01	3025すす	H02	住居	A-002	A-002	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-003	A-003	平安	09C	清 反軸陶器 O-53 式 (10C前半)
01	3025すす	H02	住居	A-004	A-004	平安	09C	清 遺物数多い、土器工層?
01	3025すす	H02	住居	A-005	A-005	奈良・平安	08C後半	清
01	3025すす	H02	住居	A-007	A-007	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-008	A-008	平安	09C前半	清
01	3025すす	H02	住居	A-009	A-009	平安	09C後半	清
01	3025すす	H02	住居	A-010	A-010	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-011	A-011	平安	09C後半	清
01	3025すす	H02	住居	A-012	A-012	平安	09C	清
01	3025すす	H02	住居	A-014	A-014	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-015	A-015	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-016	A-016	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-017	A-017	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-018	A-018	古墳	前期	清 伊が2基
01	3025すす	H02	住居	A-019	A-019	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-020	A-020	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-021	A-021	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-022	A-022	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-024	A-024	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-025	A-025	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-026	A-026	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-027	A-027	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-028	A-028	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-029	A-029	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-030	A-030	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-031	A-031	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-032	A-032	平安	09C前半	清
01	3025すす	H02	住居	A-033	A-033	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-034	A-034	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	清
01	3025すす	H02	住居	A-035	A-035	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-037	A-037	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-038	A-038	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-039	A-039	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-040	A-040	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-041	A-041	平安	09C	清 土器工層?
01	3025すす	H02	住居	A-042	A-042	平安	08C末-09C初頃	清
01	3025すす	H02	住居	A-043	A-043	縄文	加曾利E	清
01	3025すす	H02	住居	A-044	A-044	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-045	A-045	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H02	住居	A-046	A-046	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H02	住居	A-047	A-047	平安	09C	清
01	3025すす	H02	住居	A-048	A-048	平安	09C	清
01	3025すす	H03	住居	A-049	A-049	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H03	住居	A-050	A-050	弥生末-古墳初頃		清 火災住居、伊が1基
01	3025すす	H03	住居	A-051	A-051	平安	09C	清
01	3025すす	H03	住居	A-053	A-053	古墳	中期	清 伊が1基
01	3025すす	H03	住居	A-054	A-054	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03	住居	A-055	A-055	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H03	住居	A-057	A-057	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H03	住居	A-058	A-058	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03	住居	A-059	A-059	縄文	加曾利E III	清
01	3025すす	H03	住居	A-060	A-060	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03, O7	住居	A-061	A-061	古墳	06C前半	清
01	3025すす	H03	住居	A-062	A-062	縄文	称名寺2-堀之内1	清
01	3025すす	H03	住居	A-063	A-063	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03	住居	A-064	A-064	縄文	堀之内1-堀之内2	清
01	3025すす	H03	住居	A-065	A-065	縄文	堀之内1-堀之内2	清
01	3025すす	H03	住居	A-066	A-066	縄文	堀之内1	清
01	3025すす	H03	住居	A-067	A-067	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H03	住居	A-068	A-068	縄文	称名寺1-堀之内1	清
01	3025すす	H03	住居	A-069	A-069	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03	住居	A-070	A-070	縄文	称名寺1	清
01	3025すす	H03	住居	A-071	A-071	縄文	加曾利E IV	清
01	3025すす	H03	住居	A-072	A-072	縄文		清
01	3025すす	H03	住居	A-073	A-073	縄文		清
01	3025すす	H03	住居	A-074	A-074	縄文	加曾利E III	清

No.	遺跡名	調査名	遺構種	埋蔵物	形No.	時期 1	時期 2	報告 備考
01	うならすず	H06	住居	A-070	A-070	縄文	称名寺1	済
01	うならすず	H07	住居	A-070	A-070	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-077	A-077	古墳	04C前半	済
01	うならすず	H07	住居	A-070a	A-070a	縄文	加曾利EⅢ-堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-070b	A-070b	縄文	加曾利EⅢ-堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-079	A-079	縄文	加曾利EⅣ	済
01	うならすず	H07	住居	A-080a	A-080a	縄文	称名寺1	済
01	うならすず	H07	住居	A-080b	A-080b	縄文	称名寺1?	済
01	うならすず	H07	住居	A-081a	A-081a	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-081b	A-081b	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-081c	A-081c	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-081d	A-081d	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H07	住居	A-082	A-082	縄文	称名寺1	済
01	うならすず	H07	住居	A-083	A-083	縄文	加曾利EⅣ	済
01	うならすず	H07	住居	A-084	A-084	縄文	加曾利EⅣ	済
01	うならすず	H07	住居	A-085	A-085	縄文	称名寺2	済
01	うならすず	H07	住居	A-086	A-086	古墳	04C前半	済 伊を持つ。H-002と重複
01	うならすず	H12	住居	1住	01住	古墳	04C後半	済
01	うならすず	H12	住居	2住	02住	古墳	04C後半	済
01	うならすず	H12	住居	3住	03住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	4住	04住	古墳	04C末	済
01	うならすず	H12	住居	5住	05住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	6住	06住	縄文	加曾利EⅣ-称名寺1	済
01	うならすず	H12	住居	7住	07住	古墳	04C後半	済
01	うならすず	H12	住居	8住	08住	古墳	04C後半	済
01	うならすず	H12	住居	9住	09住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	10住	10住	縄文	加曾利EⅣ-称名寺1	済
01	うならすず	H12	住居	11住	11住	縄文	堀之内1	済
01	うならすず	H12	住居	12住	12住	縄文	加曾利EⅣ	済
01	うならすず	H12	住居	13住	13住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	14住	14住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	15住	15住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	16住	16住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	17住	17住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	18住	18住	縄文		済
01	うならすず	H12	住居	19住	19住	縄文		済
01	うならすず	R01	住居	住居1~4	-	縄文		- 確認調査のみ
01	うならすず	R01	住居	1号竪穴建物跡	1号竪穴建物跡	縄文	加曾利EⅢ-称名寺1	済
01	うならすず	H07	方形区画墓	H-001	H-001	奈良・平安		済 周溝出土遺物は6C
01	うならすず	H07	方形区画墓	H-002	H-002	奈良・平安		済 周溝出土遺物は6C、A-086と重複
01	うならすず	H12	塚	塚	塚	中世		済
01	うならすず	H15	塚	1号塚	1号塚	現代		済 多部田塚群と重複の可能性
01	うならすず	H15	塚	2号塚	2号塚	古墳?		済 多部田塚群と重複の可能性
01	うならすず	H02/03	道路	D-001	D-001	中・近世		済
01	うならすず	H03	道路	D-002	D-002	中・近世		済
01	うならすず	H03	道路	D-003	D-003	中・近世		済
01	うならすず	R01	土坑	27号遺構	27号遺構	不明		済
01	うならすず	H12	土坑墓	1号	1号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑墓	2号	2号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑墓	3号	3号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑墓	4号	4号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑墓	5号	5号	中世		済
01	うならすず	H12	方形区画墓	1号	1号	平安	09C?	済
01	うならすず	H12	方形区画墓	2号	2号	平安	09C?	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-001	B-001	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-002	B-002	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-003	B-003	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-004	B-004	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-005	B-005	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02	竪立柱	B-006	B-006	平安	08C後半-09C前半	済
01	うならすず	H02/03	溝	M-001	M-001	平安		済
01	うならすず	H02	溝	M-002	M-002	中・近世		済
01	うならすず	H02/03	溝	M-003	M-003	中・近世		済
01	うならすず	H03	溝	M-004	M-004	中・近世		済
01	うならすず	H03	溝	M-005	M-005	中・近世		済
01	うならすず	H12	溝	溝	M-006	不明		済
01	うならすず	H03	礎群	1号礎群	1号礎群	旧石器		済
01	うならすず	H02	礎群	2号礎群	2号礎群	旧石器		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	埋没No	形No	時期1	時期2	報告備考
01	うならすず	H02	礎群	3号礎群		旧石器		済
01	うならすず	H02	土坑	C-021	C-021	近世		済
01	うならすず	H05	土坑	C-410	C-410	近世		済
01	うならすず	H02	土坑	C-100	C-100	中・近世		済
01	うならすず	H03	土坑	C-234	C-234	中・近世		済
01	うならすず	H07	土坑	C-281	C-281	中・近世		済
01	うならすず	H02	土坑	C-015	C-015	奈良・平安		済
01	うならすず	H02	土坑	C-045	C-045	奈良・平安	09C2-4/4	済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-066	C-066	奈良・平安	09C2-3/4	済
01	うならすず	H02	土坑	C-142	C-142	奈良・平安		済
01	うならすず	H07	土坑	C-284	C-284	奈良・平安		済
01	うならすず	H07	土坑	C-292	C-292	奈良・平安		済
01	うならすず	H02	土坑	C-002	C-002	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-003	C-003	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-004	C-004	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-005	C-005	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-006	C-006	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-007	C-007	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-009	C-009	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-012	C-012	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-014	C-014	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-016	C-016	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-019	C-019	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-020	C-020	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-024	C-024	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-027	C-027	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-028	C-028	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-029	C-029	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-030	C-030	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-031	C-031	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-032	C-032	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-033	C-033	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-034	C-034	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-035	C-035	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-036	C-036	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-037	C-037	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-038	C-038	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-040	C-040	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-041	C-041	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-042	C-042	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-043	C-043	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-050	C-050	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-051	C-051	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-055	C-055	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-057	C-057	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-059	C-059	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-069	C-069	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-070	C-070	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-074	C-074	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-076	C-076	縄文		済 貝層・炭
01	うならすず	H02	土坑	C-079	C-079	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-080	C-080	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-081	C-081	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-082	C-082	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-083	C-083	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-084	C-084	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-085	C-085	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-087	C-087	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-088	C-088	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-089	C-089	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-091	C-091	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-093	C-093	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-096	C-096	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-098	C-098	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-101	C-101	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-103	C-103	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-104	C-104	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-105	C-105	縄文		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	座標No	形No	時期1	時期2	報告備考
01	うならすず	H02	土坑	C-107	C-107	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-108	C-108	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-109	C-109	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-113	C-113	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-114	C-114	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-115	C-115	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-118	C-118	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-119	C-119	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-124	C-124	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-125	C-125	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-126	C-126	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-129	C-129	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-130	C-130	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-132	C-132	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-133	C-133	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-134	C-134	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-135	C-135	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-164	C-164	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-175	C-175	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-179	C-179	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-189	C-189	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-209	C-209	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-211	C-211	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-212	C-212	縄文		済 貝層
01	うならすず	H03	土坑	C-213	C-213	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-214	C-214	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-215	C-215	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-216	C-216	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-217	C-217	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-218	C-218	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-221	C-221	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-224	C-224	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-225	C-225	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-231	C-231	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-235	C-235	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-238a	C-238a	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-240	C-240	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-242	C-242	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-243	C-243	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-245	C-245	縄文		済 貝層
01	うならすず	H03	土坑	C-252	C-252	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-253	C-253	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-254	C-254	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-255	C-255	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-256	C-256	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-258	C-258	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-259	C-259	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-260	C-260	縄文		済 貝層
01	うならすず	H03	土坑	C-261	C-261	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-262	C-262	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-263	C-263	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-264	C-264	縄文		済 貝層
01	うならすず	H03	土坑	C-265	C-265	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-266	C-266	縄文		済 貝層
01	うならすず	H03	土坑	C-268	C-268	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-269	C-269	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-270	C-270	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-280	C-280	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-283a	C-283a	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-285	C-285	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-288	C-288	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-289	C-289	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-291	C-291	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-296	C-296	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-297	C-297	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-299	C-299	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-300	C-300	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-301	C-301	縄文		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	原形No.	新No.	時期 1	時期 2	報告備考
01	うならすず	H07	土坑	C-302	C-302	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-303	C-303	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-304	C-304	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-305	C-305	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-306	C-306	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-308	C-308	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-309	C-309	縄文		済 貝層
01	うならすず	H07	土坑	C-311	C-311	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-312	C-312	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-313	C-313	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-314	C-314	縄文		済
01	うならすず	H07	土坑	C-315	C-315	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-401	C-401	縄文		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-402	C-402	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-403	C-403	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-404	C-404	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-406	C-406	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-407	C-407	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-408	C-408	縄文		済
01	うならすず	H03	土坑	C-409	C-409	縄文		済
01	うならすず	H02	土坑	C-008	C-008	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-010	C-010	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-011	C-011	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-013	C-013	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-017	C-017	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-018	C-018	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-022	C-022	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-023	C-023	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-026	C-026	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-046	C-046	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-047	C-047	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-048	C-048	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-049	C-049	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-053	C-053	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-054	C-054	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-056	C-056	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-059	C-059	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-060	C-060	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-061	C-061	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-062	C-062	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-063	C-063	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-064	C-064	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-065	C-065	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-067	C-067	不明		済 貝層
01	うならすず	H02	土坑	C-068	C-068	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-071	C-071	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-072	C-072	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-073	C-073	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-077	C-077	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-078	C-078	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-086	C-086	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-090	C-090	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-092	C-092	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-094	C-094	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-095	C-095	不明		済 遺跡に隣
01	うならすず	H02	土坑	C-097	C-097	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-099	C-099	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-102	C-102	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-106	C-106	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-110	C-110	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-111	C-111	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-112	C-112	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-116	C-116	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-117	C-117	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-120	C-120	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-121	C-121	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-122	C-122	不明		済
01	うならすず	H02	土坑	C-123	C-123	不明		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	座標No	形No	時期 1	時期 2	報告備考
01	306-3-1	H02	土坑	C-206	C-206	不明		済
01	306-3-2	H02	土坑	C-208	C-208	不明		済
01	306-3-3	H02	土坑	C-210	C-210	不明		済
01	306-3-4	H03	土坑	C-219	C-219	不明		済 粘土層
01	306-3-5	H03	土坑	C-220	C-220	不明		済
01	306-3-6	H03	土坑	C-223	C-223	不明		済
01	306-3-7	H03	土坑	C-226	C-226	不明		済
01	306-3-8	H03	土坑	C-227	C-227	不明		済
01	306-3-9	H03	土坑	C-228	C-228	不明		済
01	306-3-10	H03	土坑	C-229	C-229	不明		済
01	306-3-11	H03	土坑	C-230	C-230	不明		済
01	306-3-12	H03	土坑	C-232	C-232	不明		済
01	306-3-13	H03	土坑	C-233	C-233	不明		済
01	306-3-14	H03	土坑	C-236	C-236	不明		済
01	306-3-15	H03	土坑	C-237	C-237	不明		済
01	306-3-16	H03	土坑	C-238a	C-238a	不明		済
01	306-3-17	H03	土坑	C-239	C-239	不明		済
01	306-3-18	H03	土坑	C-241	C-241	不明		済
01	306-3-19	H03	土坑	C-244	C-244	不明		済
01	306-3-20	H03	土坑	C-246	C-246	不明		済
01	306-3-21	H03	土坑	C-247	C-247	不明		済
01	306-3-22	H03	土坑	C-248	C-248	不明		済
01	306-3-23	H03	土坑	C-249	C-249	不明		済
01	306-3-24	H03	土坑	C-251	C-251	不明		済
01	306-3-25	H03	土坑	C-257	C-257	不明		済
01	306-3-26	H07	土坑	C-282	C-282	不明		済
01	306-3-27	H07	土坑	C-282b	C-282b	不明		済
01	306-3-28	H07	土坑	C-286	C-286	不明		済
01	306-3-29	H07	土坑	C-287	C-287	不明		済
01	306-3-30	H07	土坑	C-290	C-290	不明		済
01	306-3-31	H07	土坑	C-293	C-293	不明		済
01	306-3-32	H07	土坑	C-294	C-294	不明		済
01	306-3-33	H07	土坑	C-295	C-295	不明		済
01	306-3-34	H07	土坑	C-307	C-307	不明		済
01	306-3-35	H07	土坑	C-310	C-310	不明		済 伊?粘土
01	306-3-36	H07	土坑	C-316	C-316	不明		済
01	306-3-37	H02	土坑	C-405	C-405	不明		済
01	306-3-38	H03	土坑	C-413	C-413	不明		済
01	306-3-39	H05	土坑	C-411	C-411	不明		済
01	306-3-40	H05	土坑	C-412	C-412	不明		済
01	306-3-41	H05	土坑	C-414	C-414	不明		済
01	306-3-42	H05	土坑	C-415	C-415	不明		済
01	306-3-43	H05	土坑	C-416	C-416	不明		済
01	306-3-44	H05	土坑	C-417	C-417	不明		済
01	306-3-45	H05	土坑	C-418	C-418	不明		済
01	306-3-46	H02	土坑	C-207	C-207	平安		済
01	306-3-47	H07	土坑	C-298	C-298	弥生		済
01	306-3-48	H12	土坑	1号	01号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-49	H12	土坑	2号	02号	縄文	堀之内	済
01	306-3-50	H12	土坑	3号	03号	縄文	堀之内	済
01	306-3-51	H12	土坑	4号	04号	古墳	660系平	済
01	306-3-52	H12	土坑	5号	05号	縄文	堀之内	済
01	306-3-53	H12	土坑	6号	06号	縄文		済
01	306-3-54	H12	土坑	7号	07号	縄文		済
01	306-3-55	H12	土坑	8号	08号	中世		済
01	306-3-56	H12	土坑	9号	09号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	306-3-57	H12	土坑	10号	10号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-58	H12	土坑	11号	11号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-59	H12	土坑	12号	12号	中世		済
01	306-3-60	H12	土坑	13号	13号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-61	H12	土坑	14号	14号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	306-3-62	H12	土坑	15号	15号	縄文	堀之内	済
01	306-3-63	H12	土坑	16号	16号	縄文	堀之内	済
01	306-3-64	H12	土坑	17号	17号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-65	H12	土坑	18号	18号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	306-3-66	H12	土坑	19号	19号	縄文	堀之内	済
01	306-3-67	H12	土坑	20号	20号	縄文	加曾利E IV	済
01	306-3-68	H12	土坑	21号	21号	縄文	加曾利E IV	済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	所在地	形No.	時期1	時期2	報告備考
01	うならすず	H12	土坑	22号	22号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	23号	23号	縄文	堀之内	済
01	うならすず	H12	土坑	24号	24号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	うならすず	H12	土坑	25号	25号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	26号	26号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	うならすず	H12	土坑	27号	27号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑	28号	28号	縄文	称名寺2	済
01	うならすず	H12	土坑	29号	29号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	30号	30号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	40号	40号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	41号	41号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑	42号	42号	古墳		済
01	うならすず	H12	土坑	43号	43号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	うならすず	H12	土坑	44号	44号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	45号	45号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	46号	46号	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	うならすず	H12	土坑	47号	47号	縄文	堀之内	済
01	うならすず	H12	土坑	48号	48号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	49号	49号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	50号	50号	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	H12	土坑	51号	51号	中世		済
01	うならすず	H12	土坑	52号	52号	縄文		済
01	うならすず	R01	土坑	土坑1~13	-	不明		- 確認調査のみ
01	うならすず	R01	土坑	3号遺構	03号遺構	縄文	後期前葉	済
01	うならすず	R01	土坑	6号遺構	06号遺構	縄文	称名寺1-2	済
01	うならすず	R01	土坑	24号遺構	24号遺構	縄文	中期末 - 後期初葉	済
01	うならすず	R01	竪	26号遺構	26号遺構	縄文	称名寺1	済
01	うならすず	R01	土坑	28号遺構	28号遺構	不明		済
01	うならすず	R01	土坑	29号遺構	29号遺構	縄文	加曾利E IV - 称名寺1	済
01	うならすず	R01	溝	30号遺構	30号遺構	不明		済
01	うならすず	R01	竪	33号遺構	33号遺構	縄文	称名寺1-2	済
01	うならすず	R01	土坑	35号遺構	35号遺構	縄文	称名寺1	済
01	うならすず	R01	土坑	36号遺構	36号遺構	縄文	中期末葉 - 後期後葉	済
01	うならすず	R01	土坑	37号遺構	37号遺構	縄文	中期末葉 - 後期初葉	済
01	うならすず	R01	土坑	38号遺構	38号遺構	縄文	加曾利E IV	済
01	うならすず	R01	土坑	43号遺構	43号遺構	縄文	称名寺1-2	済
01	うならすず	R01	土坑	47号遺構	47号遺構	縄文	堀之内1	済
02	ムグリ	H07	家跡	1号家跡	1号家跡	奈良・平安	08C 末 - 09C	済
02	ムグリ	H07	家跡	2号家跡	2号家跡	奈良・平安	08C 末 - 09C	済
02	ムグリ	H07	家跡	3号家跡	3号家跡	奈良・平安	08C 末 - 09C ?	済
02	ムグリ	H07	住居	A-001	A-001	平安	08C 末 - 09C	済 風字様
02	ムグリ	H07	住居	A-002	A-002	古墳	06C ?	済
02	ムグリ	H07	粘土採掘坑	粘土採掘坑	粘土採掘坑	奈良・平安 ?		済
02	ムグリ	H07	土坑	C-001A	C-001A	奈良・平安		済 1号家跡の排水溝
02	ムグリ	H07	土坑	C-002A	C-002A	奈良・平安		済 鉄滓
02	ムグリ	H07	土坑	C-003A	C-003A	奈良・平安		済 鉄滓
02	ムグリ	H07	土坑	C-005A	C-005A	不明		済
02	ムグリ	H07	土坑	C-006A	C-006A	不明		済
02	ムグリ	H07	土坑	C-001B	C-001B	不明		済
02	ムグリ	H07	土坑	C-002B	C-002B	奈良・平安		済 製鉄の産物 ?
02	ムグリ	H07	土坑	C-003B	C-003B	不明		済
02	ムグリ	H07	溝	D-001A	D-001A	奈良・平安		済 1号家跡の排水溝
02	ムグリ	H07	溝	D-002A	D-002A	奈良・平安		済 1号家跡の排水溝
02	ムグリ	H07	溝	D-001B	D-001B	奈良・平安		済 伊勢磁片
02	ムグリ	H07	ピット群	ピット群 A	ピット群 A	不明		済
02	ムグリ	H07	ピット群	ピット群 B	ピット群 B	不明		済
03	貝殻塚	H06	住居	A-001	A-001	古墳	05C 末 - 06C 初葉	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-002	A-002	縄文	加曾利E III	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-003	A-003	古墳	06C 前半	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-004	A-004	古墳	05C 末 - 06C 初葉	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-005	A-005	古墳	06C 前半	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-006	A-006	古墳	06C 前半	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-007	A-007	平安	09C2-3/4?	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-008	A-008	縄文	堀之内1	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-009	A-009	古墳	06C 後半	済
03	貝殻塚	H06	住居	A-010	A-010	古墳	06C 後半 ?	済
03	貝殻塚	H04	土坑	C-002	C-002	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-003	C-003	縄文		済 陥し穴

No.	遺跡名	調査名	遺構種	座標	形No.	時期1	時期2	報告備考
03	貝殻塚	H04	土坑	C-004	C-004	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-005	C-005	不明		済
03	貝殻塚	H04	土坑	C-006	C-006	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-007	C-007	縄文		済 野黒穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-008	C-008	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-009	C-009	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-010	C-010	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-011	C-011	不明		済
03	貝殻塚	H04	土坑	C-012	C-012	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-013	C-013	不明		済
03	貝殻塚	H04	土坑	C-014	C-014	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-015	C-015	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-016	C-016	不明		済
03	貝殻塚	H04	土坑	C-017	C-017	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-018	C-018	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-019	C-019	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H04	土坑	C-020	C-020	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-021	C-021	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-022	C-022	縄文		済 野黒穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-023	C-023	不明		済
03	貝殻塚	H06	土坑	C-024	C-024	縄文		済
03	貝殻塚	H06	土坑	C-025	C-025	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-026	C-026	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-027	C-027	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-028	C-028	縄文		済 陥し穴、06Cの土師器出土
03	貝殻塚	H06	土坑	C-029	C-029	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-030	C-030	縄文?		済
03	貝殻塚	H06	土坑	C-031	C-031	縄文		済 陥し穴、06Cの土師器出土
03	貝殻塚	H06	土坑	C-032	C-032	不明		済
03	貝殻塚	H06	土坑	C-033	C-033	不明		済
03	貝殻塚	H06	土坑	C-034	C-034	縄文		済 陥し穴
03	貝殻塚	H06	土坑	C-035	C-035	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H03	住居	A-001	A-001	縄文	称名寺	済
04	多郎田	H05	住居	A-002	A-002	古墳	06C前半	済
04	多郎田	H05	住居	A-003	A-003	縄文	加曾利E III	済
04	多郎田	H05	住居	A-004	A-004	縄文	加曾利E III - IV	済
04	多郎田	H05	住居	A-005	A-005	古墳	06C前半	済
04	多郎田	H05	住居	A-006	A-006	古墳	06C前半	済
04	多郎田	H05	住居	A-007	A-007	縄文	加曾利B?	済
04	多郎田	H05	住居	A-008	A-008	縄文	加曾利B?	済
04	多郎田	H05	住居	A-009	A-009	縄文		済
04	多郎田	H05	住居	A-010	A-010	縄文	加曾利E IV	済
04	多郎田	H05	住居	A-012	A-012	縄文	曹屋 - 安行 3a?	済
04	多郎田	H05	住居	A-013	A-013	縄文	曹屋 - 安行 1?	済
04	多郎田	H05	住居	A-014	A-014	縄文	曹屋 - 安行 1?	済
04	多郎田	H05	住居	A-015	A-015	縄文	瓶之内1	済
04	多郎田	H06	住居	A-016	A-016	古墳	05C末 - 06C前半	済
04	多郎田	H06	住居	A-017	A-017	古墳	05C末 - 06C前半	済
04	多郎田	H06	住居	A-018	A-018	古墳	06C前半	済
04	多郎田	H06	住居	A-020	A-020	古墳	06C前半	済
04	多郎田	H06	住居	A-021	A-021	縄文	加曾利E IV	済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	1号	1号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	2号	2号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	3号	3号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	4号	4号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	5号	5号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	6号	6号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	7号	7号	不明		済
04	多郎田	H05	竪穴状遺構	8号	8号	不明		済
04	多郎田	H13	ピット	ピット1	ピット1	縄文	加曾利E IV - 称名寺	済
04	多郎田	H13	ピット	ピット2	ピット2	縄文	加曾利E IV - 称名寺	済
04	多郎田	H03	溝	D-001	D-001	中・近世以降		済
04	多郎田	H03	溝	D-002	D-002	中・近世以降		済
04	多郎田	H03	溝	D-003	D-003	中・近世以降		済
04	多郎田	H03	溝	D-004	D-004	中・近世以降		済
04	多郎田	H04	溝	D-005	D-005	中・近世以降		済
04	多郎田	H05	溝	D-006	D-006	中・近世以降		済
04	多郎田	H05/06	溝	D-007	D-007	中・近世以降		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	原番号	新No.	時期1	時期2	報告備考
04	多郎田	H05	溝	D-008	D-008	中・近世以降		済
04	多郎田	H05	溝	D-009	D-009	中・近世以降		済
04	多郎田	H06	溝	D-010	D-010	中・近世以降		済
04	多郎田	H05	溝	D-011	D-011	中・近世以降		済
04	多郎田	H05	溝	D-012	D-012	中・近世以降		済
04	多郎田	H13	炉	8F	8F		加曾利EIV - 跡名寺	済
04	多郎田	H03	土坑	C-001	C-001	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H03	土坑	C-002	C-002	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H03	土坑	C-003	C-003	縄文		済 野籠穴、貝を含む
04	多郎田	H03	土坑	C-004	C-004	不明		済
04	多郎田	H03	土坑	C-005	C-005	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H03	土坑	C-006	C-006	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H04	土坑	C-007	C-007	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-008	C-008	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-009	C-009	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-010	C-010	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-011	C-011	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-012	C-012	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-013	C-013	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-014	C-014	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-015	C-015	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-016	C-016	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-017	C-017	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H04	土坑	C-018	C-018	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H04	土坑	C-019	C-019	縄文		済
04	多郎田	H04	土坑	C-020	C-020	不明		済
04	多郎田	H04	土坑	C-021	C-021	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H04	土坑	C-022	C-022	不明		済
04	多郎田	H04	土坑	C-023	C-023	不明		済
04	多郎田	H04	土坑	C-024	C-024	不明		済
04	多郎田	H04	土坑	C-025	C-025	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-026	C-026	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-027	C-027	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-028	C-028	縄文		済 野籠穴、貝ブロックを含む
04	多郎田	H05	土坑	C-029	C-029	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-030	C-030	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-031	C-031	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-032	C-032	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-033	C-033	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-034	C-034	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-035	C-035	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-036	C-036	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-037	C-037	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-039	C-039	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-040	C-040	不明		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-042	C-042	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-043	C-043	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-044	C-044	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-045	C-045	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-046	C-046	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-047	C-047	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-048	C-048	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-049	C-049	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-050	C-050	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-051	C-051	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-052	C-052	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-054	C-054	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-057	C-057	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-058	C-058	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-059	C-059	縄文		済 野籠穴、破砕貝を含む
04	多郎田	H05	土坑	C-060	C-060	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-061	C-061	縄文		済 野籠穴
04	多郎田	H05	土坑	C-062	C-062	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-063	C-063	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-064	C-064	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-065	C-065	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-066	C-066	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-067	C-067	不明		済

No.	遺跡名	調査名	遺構種	埋蔵物	形No.	時期1	時期2	報告備考
04	多郎田	H05	土坑	C-068	C-068	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-069	C-069	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-070	C-070	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-072	C-072	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-073	C-073	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-074	C-074	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-075	C-075	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-076	C-076	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-077	C-077	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-078	C-078	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-079	C-079	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-080	C-080	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-081	C-081	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-082	C-082	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H05	土坑	C-083	C-083	縄文		済
04	多郎田	H05	土坑	C-084	C-084	不明		済 積土を多く含む
04	多郎田	H05	土坑	C-085	C-085	不明		済
04	多郎田	H05	土坑	C-086	C-086	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-087	C-087	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-088	C-088	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-089	C-089	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-090	C-090	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-091	C-091	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-092	C-092	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-093	C-093	縄文		済 貯蔵穴
04	多郎田	H06	土坑	C-094	C-094	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-095	C-095	縄文		済 陥し穴
04	多郎田	H06	土坑	C-096	C-096	縄文		済
04	多郎田	H06	土坑	C-097	C-097	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-098	C-098	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-099	C-099	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-100	C-100	不明		済
04	多郎田	H06	土坑	C-101	C-101	古墳		済
04	多郎田	H13	土坑	土坑1	土坑1	縄文	05C末?	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑2	土坑2	縄文	加曾利B	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑3	土坑3	縄文	加曾利EⅣ-跡名寺	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑4	土坑4	縄文	加曾利EⅣ-跡名寺	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑5	土坑5	縄文	加曾利EⅣ-跡名寺	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑6	土坑6	縄文	加曾利EⅣ-跡名寺	済
04	多郎田	H13	土坑	土坑7	土坑7	縄文	加曾利EⅣ-跡名寺	済
05	内野古墳群	S46/50/H26	古墳	1号墳	01号墳	古墳	6C後半	○
05	内野古墳群	H30	古墳周溝	SMS	01号墳周溝	古墳	6C後半	○
05	内野古墳群	S46/50	古墳	2号墳	02号墳	古墳	後期?	○ 調査前に墳丘は消失
05	内野古墳群	S46/50/H26	古墳	3号墳	03号墳	古墳	後期	○ 測量のみ
05	内野古墳群	S46/50	古墳	4号墳	04号墳	古墳	後期	○ 測量のみ
05	内野古墳群	S46	古墳	5号墳	05号墳	古墳	7C前半	○ 組合式陶形石棺。消滅。
05	内野古墳群	S46	古墳主体部	5号-1	05号墳主体部	古墳	7C前半	○ 遺刀、鉄鍬、刀子。複製体の人骨
05	内野古墳群	S46/50	古墳	6号墳	06号墳	古墳	後期	○ 測量のみ
05	内野古墳群	S46/50	古墳	7号墳	07号墳	古墳	後期	○ 測量のみ
05	内野古墳群	S46/50	古墳	8号墳	08号墳	古墳	後期	○ 測量のみ
05	内野古墳群	S59/H26	古墳	9号古墳/9号墳	09号墳	古墳	7C前半	済
05	内野古墳群	S59	古墳主体部	9号-1	09号墳1号主体部	古墳	7C前半	済 鉄鍬、刀子
05	内野古墳群	S59	古墳主体部	9号-2	09号墳2号主体部	古墳	7C前半	済 鉄鍬、刀子
05	内野古墳群	H26/H26	古墳	10号墳-SM1	10号墳	古墳	7C前半	○
05	内野古墳群	H26/H30	古墳	SM-02-SM2	11号墳	古墳	7C	○
05	内野古墳群	H30	古墳	SM04	12号墳	古墳	後期	○
05	内野古墳群	H30	古墳	SM13	13号墳	古墳	後期	○
05	内野古墳群	S57	古墳	円形周溝	14号墳	古墳	後期	○
06	木戸作	H14	住居	S101	S101	奈良・平安	08C末-09C前半	○
06	木戸作	H14	住居	S102	S102	奈良	08C	○
06	木戸作	H26	住居	S103	S103	弥生	中期(山田橋-中台)	○
06	木戸作	H26	住居	S104	S104	弥生	中期(山田橋-中台)	○
06	木戸作	H26	住居	S105	S105	奈良	08C後半	○
06	木戸作	H26	住居	S106	S106	奈良	08C後半	○
06	木戸作	H26	住居	S107	S107	弥生	中期(山田橋-中台)	○
06	木戸作	H27	住居	S108	S108	弥生	中期(宮/台式)	○
06	木戸作	H27	住居	S109	S109	古墳	中期(05C前半)	○
06	木戸作	H27	住居	S110	S110	平安	09C後半	○

No.	遺跡名	調査名	遺構種	所在地No.	形No.	時期 1	時期 2	報告 備考
06	木戸作	H27	住居	SI1	SI11	奈良	08C 前半	○
06	木戸作	H27	住居	SI2	SI12	奈良	08C 中ごろ	○
06	木戸作	H27	住居	SI3	SI13	縄文	早期 (徳永文相?)	○
06	木戸作	H30	住居	SI18	SI14	古墳	中期	○
06	木戸作	S46	住居	多原田御林	SI15	平安	09C3/4	○
06	木戸作	H14	土坑	SK01	SK001	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK02	SK002	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK04	SK003	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK06	SK004	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK07	SK005	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK08	SK006	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK09	SK007	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK10	SK008	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H14	土坑	SK11	SK009	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK13	SK010	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK14	SK011	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK15	SK012	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK16	SK013	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK18	SK014	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H25	土坑	SK21	SK015	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H26	土坑	SK23	SK016	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H26	土坑	SK26	SK017	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H26	土坑	SK27	SK018	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H26	土坑	SK28	SK019	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK35	SK020	中・近世		○ 基坑 焼骨出土
06	木戸作	H27	土坑	SK37	SK021	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK38	SK022	中・近世		○ 基坑 遊離燧石出土
06	木戸作	H27	土坑	SK39	SK023	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK40	SK024	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK41	SK025	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK42	SK026	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK43	SK027	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK44	SK028	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK45	SK029	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK46	SK030	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK47	SK031	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK48	SK032	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK49	SK033	中・近世		○ 基坑 内耳土塊、骨出土
06	木戸作	H27	土坑	SK50	SK034	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK52	SK035	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK59	SK036	中・近世		○ 基坑 骨片出土
06	木戸作	H27	土坑	SK60	SK037	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK61	SK038	中・近世		○ 基坑 縄縄片出土
06	木戸作	H27	土坑	SK62	SK039	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK63	SK040	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK64	SK041	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK65	SK042	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK66	SK043	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK67	SK044	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK68	SK045	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK69	SK046	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK70	SK047	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK72	SK048	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK75	SK049	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK76	SK050	中・近世		○ 基坑
06	木戸作	H27	土坑	SK77	SK051	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK79	SK052	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK80	SK053	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK81	SK054	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK82	SK055	縄文		○ 陥穴
06	木戸作	H27	土坑	SK30	SK056	縄文		○ 小墜穴
06	木戸作	H14/H27	溝	SD01/SD04	SD01	近世以降		○
06	木戸作	H14	溝	SD02	SD02	中世		○
06	木戸作	H26	溝	SD03	SD03	中・近世		○
06	木戸作	H26/H1	溝	SD-4/土坑列1	SD04	中・近世		○
06	木戸作	H30	溝	SD07	SD05	中・近世		○
06	木戸作	H26	方形区画墓	SH01	方形区画墓	奈良・平安	08C 中葉以降	○
06	木戸作	H27	炉・カマド	SL01	SL01	不明		○ 焼土遺構

No.	遺跡名	調査名	遺構種	所在地	期No.	時期1	時期2	報告備考
06	木戸作	H27	伊・カマド	SL02	SL02	不明		○ 焼土遺構
06	木戸作	H27	伊・カマド	SL03	SL03	不明		○ 焼土遺構
06	木戸作	H25	鹿窟	鹿窟1	鹿窟1	近世		○
06	木戸作	H27	塚	1号塚	1号塚	中・近世以降		○ 多田田塚群と重複の可能性
06	木戸作	H27	塚	2号塚	2号塚	中・近世以降		○ 多田田塚群と重複の可能性
07	内野	S47	住居	-	SI01	古墳	後期? (黒黒)	○
07	内野	S58	住居	SI-A-001	SI02	縄文	加曾利E	○
07	内野	S59	住居	SI-A-001	SI03	奈良		○
07	内野	S59	住居	SI-A-002	SI04	平安	08C末-09C前半	○
07	内野	S59	住居	SI-A-003	SI05	平安	09C後半	○ 灰釉陶器
07	内野	H28	住居	SI14	SI06	平安	09C前半	○
07	内野	H28/H30	住居	SI15/SI08	SI07	平安	09C後半	○
07	内野	H28	住居	SI16	SI08	奈良・平安	09C半ば	○
07	内野	H28	住居	SI17	SI09	平安	09C4/4	○
07	内野	H29	住居	SI1	SI10	奈良・平安	08C後半	○
07	内野	H29	住居	SI2	SI11	平安	09C後半	○
07	内野	H29	住居	SI3	SI12	平安	09C2-3/4	○
07	内野	H30	住居	SI-04	SI13	平安	09C半ば	○
07	内野	H30	住居	SI05	SI14	平安	09C後半	○
07	内野	S59	土坑	SI-C-001	SK001	中世		○ 蔵骨器
07	内野	S59	土坑	SI-C-002	SK002	縄文	後期	○
07	内野	S59	土坑	SI-C-001	SK003	縄文		○
07	内野	S59	土坑	SI-C-002	SK004	縄文		○
07	内野	S59	土坑	SI-C-003	SK005	縄文		○
07	内野	H28	土坑	SK94	SK006	中・近世		○
07	内野	H28	土坑	SK104	SK007	縄文		○ 陥し穴
07	内野	H29	土坑	SK-1	SK008	縄文		○ 陥し穴
07	内野	H29	土坑	SK-2	SK009	縄文		○ 陥し穴
07	内野	H28	溝	SD-5	SD02	中・近世		○
07	内野	H28	溝	SD-6	SD03	中・近世		○
07	内野	H29	溝	SD-1	SD04	中・近世		○
07	内野	H29	溝	SD-2	SD05	中・近世		○
07	内野	S57	溝	溝1	SD06	近世		○ 溝土に宝永千フラの堆積
07	内野	S57	溝	溝2	SD07	近世		○ 溝土に宝永千フラの堆積
07	内野	S57	溝	溝3	SD08	近世		○ 溝土に宝永千フラの堆積
多田田塚群 S50			塚	1~8号塚	1~8号塚	中世以降?		- 測量のみ

第2章 木戸作遺跡

第1節 概要

1 地形と概要

本遺跡は平和公園遺跡群の北東端にある。都川の本谷と少し下流で多部田支谷に挟まれた台地上にあり、その台地がさらに小支谷によって東西に分けられた東側の最北端に位置する。対象面積は、約29,000㎡である。現在は平和公園の空き地として残されている。南側には同じ台地上に内野遺跡、東側には小支谷を隔ててうならず遺跡があり、東部には内野古墳群が本遺跡と重複して位置する。

当遺跡では縄文時代においては住居1軒と26基の陥し穴、小堅穴1基、石器集中地点1カ所が確認されている。狩猟の場として活用されていたようである。弥生時代においては中期後半の住居が確認された。小規模な集落が短期間営まれていたようである。古墳時代においては中期の住居が2軒のみである。古墳時代の活動の中心は本遺跡と重複する内野古墳群(後期)であり、墓域として認識されていたようである。奈良・平安時代には7軒の住居が確認されている。集落としては大きくはないが、製作過程における失敗品とみられる土器が出土する建物跡など工人のムラの存在が示唆される遺構、遺物がいくつか見られた。中・近世以降においては土坑墓の集中がみられ、少なくとも江戸時代初期までは墓地として利用されていたようである。

2 発掘調査

当遺跡は昭和46年から断続的に調査を行ったが、第1章に述べた通り内野遺跡との境界を明確にしないままであった。今回の報告で範囲を決め、遺構・遺物の帰属を確定させたため(第1図)、過去の報告から帰属を変更したことがある。

<平和公園整備事業以前>

昭和46年度

平和公園の造成に向けた道路建設作業中に円墳(内野古墳群5号墳)が一部破壊されたことを契機に加曾利貝塚博物館が緊急確認調査を実施した。本書では、平和公園整備事業以前の発掘調査(予備調査)と位置付けている。この年度に調査したのは、調査時点で「多部田A・B遺跡」とされ、後に平和公園A地点・B地点とされた部分と(第1図)、当遺跡に含まれるとみられる地点の計3地点である。

調査地点の正確な位置は不明である。調査されたのはSI15住居跡であり、調査範囲を示すものは手書きの略地図のみであった。また、住居の図面に「御林遺跡」、遺物ラベルに「多部田御林」という表記があった。古地図では確認できないが、『千葉市文化財調査報告書第1集』で当遺跡の字名を「おはやし」としていることから、当遺跡に帰属するものと判断した。

<平和公園整備事業のうち既報告>

昭和50年度

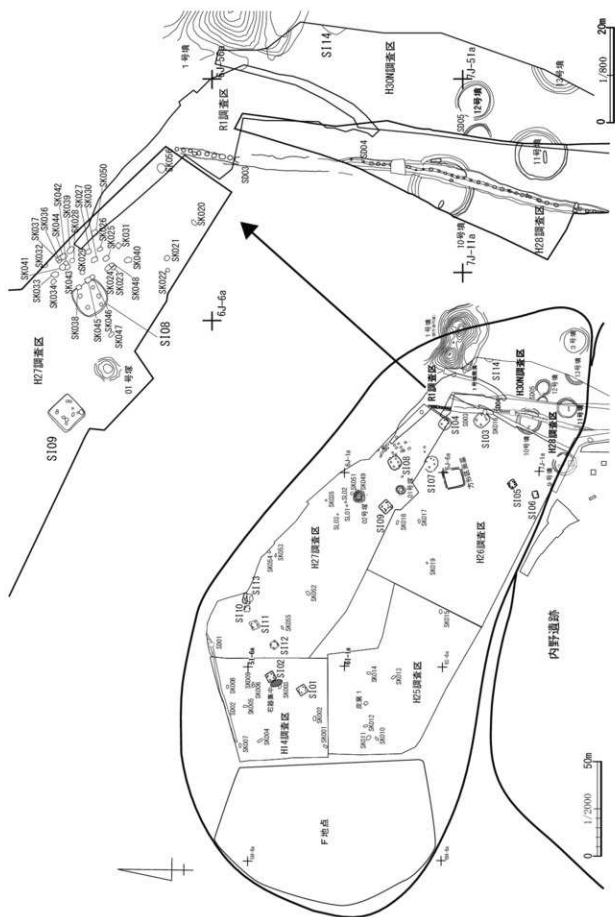
平和公園F地点として木戸作遺跡の西部の確認調査を行った。対象地域は約6,800㎡である。遺構は検出されず、縄文土器や須恵器が出土した。(『平和公園II』)

平成7年度

本遺跡のうち1,860㎡/18,563㎡を対象に確認調査を行った。この時点で縄文時代土坑、古墳時代住居・古墳主体部、中・近世の溝や塚などが確認された。遺物は残されていない。(『千葉市年報9』)

平成8年度

木戸作遺跡から内野遺跡にかきわたる1,622㎡/18,000㎡を対象に確認調査を行った。この調査では縄文時代住居、弥生時代住居、古墳時代住居・周溝、古代住居・土坑、中・近世の溝などが検出された。遺物は残されていない



第4図 木戸作遺跡 遺構分布

ない。(『千葉市年報10』)

<平和公園整備事業のうち未報告>

平成14年度

平成7・8年の確認調査を受けて本調査が開始され、まずは北西側の2,879㎡が調査された。奈良・平安時代の住居(SI01・02)と溝(SD01・02)の調査について『千葉市年報16』で略報している。

平成25年度

平成14年度調査区の南側4,100㎡を調査した。遺構は縄文時代の陥し穴(SK010など)と、時期不明の土坑のみであった。

平成26年度

平成25年度調査区の西側6,400㎡を調査した。遺構は縄文時代土坑、弥生時代住居(SI03・04・07)、古墳(内野古墳群10号墳)、奈良・平安時代の住居(SI05・06)、方形区画墓、中・近世の溝(SD03)などであった。なお古墳については後述する内野古墳群に属するものであるため、後述のものも含め第6章で詳細を報告する。

平成27年度

平成25、26年度調査区の北東側5,900㎡を調査した。遺構は縄文時代住居(SI13)・陥穴(SK035など)、弥生時代住居(SI08)、古墳時代住居(SI09)、奈良・平安時代住居(SI10～12)、中・近世塚(01号塚・02号塚)、土坑墓(SK033など)であった。

平成28年度

平成26年度調査区の東側、木戸作遺跡から内野遺跡にわたる2,200㎡を調査した。木戸作遺跡に属するのはそのうちの約900㎡である。中・近世の溝(SD04)と時期不明の土坑が検出された。

平成30年度

平成28年-1の調査区の東側と南側の2地点に1,550㎡の調査区を設定した。うち当遺跡に帰属するのは北側の調査区(H30N)約1,100㎡である。ここからは古墳(内野古墳群11～13号墳)や前方後円墳(内野古墳群1号墳)の周溝、古墳時代住居(SI14)、中・近世の溝(SD05)、時期不明の土坑が検出された。

令和元年度

木戸作遺跡北東部、これまでの調査域に囲まれた440㎡が調査された。中・近世の溝(SD04の一部)が検出されている。

第2節 縄文時代

1 概要

これまでの調査で、遺跡北端のF地点で加曽利EⅡ～Ⅲ式、加曽利B3式、晩期安行式土器が出土しており(田中・古谷2004)、縄文時代の各時期に土地利用があったことが伺える。また、遺跡群の各所で陥し穴を検出している。全体として生産活動が狩猟に偏る時期の遺構・遺物が多い。木戸作遺跡は、おもに狩猟の場として利用されたと推定される。

2 陥し穴(第6～8図、図版3～5・15)

溝型陥し穴1基(SK053)と楕円型陥し穴25基がある。楕円型は①長方形で底面にピットをもつもの15基(SK001・006～010・012～015・017・018・035・049・054)、②長方形でピットをもたないもの3基(SK002・005・011)、③長楕円形のもの4基(SK003・004・052・055)、④楕円形でピットをもつもの1基(SK016)、⑤楕円形でピットをもたないもの2基(SK019・051)がある。分布は台地上平坦面に分散しており、けもの道に連続して設置したような様子は伺えない。わな罟が一時折行われる場であったのだろう。なお、谷を挟んだ南側の内野遺跡

でも同様の分布状態がみられる。SK049 から加曾利B式土器（図版 15-31）、晩期の土器（同 42）が出土している。遺構の時期を示すかどうかは不明である。

3 住居跡と石器集中

SI13（第5図、図版3・14）

5.4m×4.2mの竪穴状の掘り込みから早期前葉・燃糸文式土器がややまとまって出土した。調査者は深く掘りこまれた部分を倒木痕とみており、断面の観察はその部分しかないが、写真を見ると掘り込みの下面は比較的平坦のようである。やや明確な柱穴は見当たらない。不明確ではあるが、燃糸文期の竪穴住居跡の可能性もあるものとしておきたい。出土遺物は燃糸文土器の小片8点と黒浜式とみられる土器2点である。

5H-97 石器集中（図版 15）

5.6m×2.7mの範囲で土器・石器が点上げされており、層位はソフトロームの上面付近から、その上の暗褐色土層の下部である。このうち、1.2m×0.8mの範囲に遺物が集中していた。

5H区で取り上げられた石器類は36点あるが、このうち34点は5H-97から出土している。やや離れたところで出土した1・3は異質であり、このまとまりには属さないものであろう。これを除くと、石材はすべて黒曜石で、器種は石鏃1、石核2、剥片30である。石材鑑定は行っていないが、質感から神津島産主体とみてよいであろう。不整形の厚みのある剥片と小片が目立ち、二次加工は認められない。石核から剥片剥離作業が行われているが、薄い剥片を連続的に作出する技術をもっていなかったと考えられる。形状による大まかな区分をしてそれぞれの点数とサイズをみると以下のようになった。

A1：厚みのある大きな剥片・破砕石核	7点、長さ平均32.2mm
A2：厚みのある小さな剥片	10点、長さ平均19.0mm
B1：薄い大きな剥片	7点、長さ平均28.0mm
B2：薄い小さな剥片・碎片	8点、長さ平均16.9mm

同グリッド出土の縄文土器16点のうち11点は阿玉台式であり、阿玉台1b式がまとまっている。石鏃の形状もこの時期に多いものである。したがって、石鏃を製作する目的で剥片剥離を行ったものとみられる。

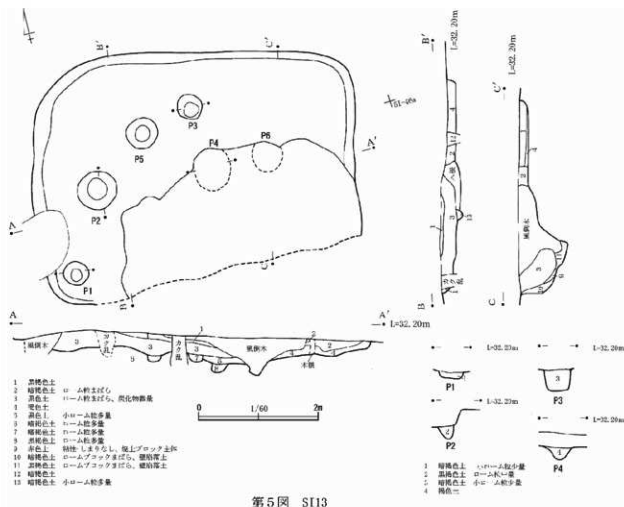
4 小竪穴

SK056（第8図、図版5・14）

径1.5m、深さ0.5mの円筒形の土坑であり、径0.8m、深さ0.5mのピットを敷設する。土器口縁部破片が1点出土しており（図版14-17）、中期中葉の加曾利EⅠ式の新しい段階とみられる。遺構の形態はこの時期の小竪穴の典型的な形態といえる。台地北端部に単独で発見されており、隣接する内野遺跡も含めてこの時期の集落の存在を伺わせる情報は他にない。

5 縄文土器（図版 14・15）

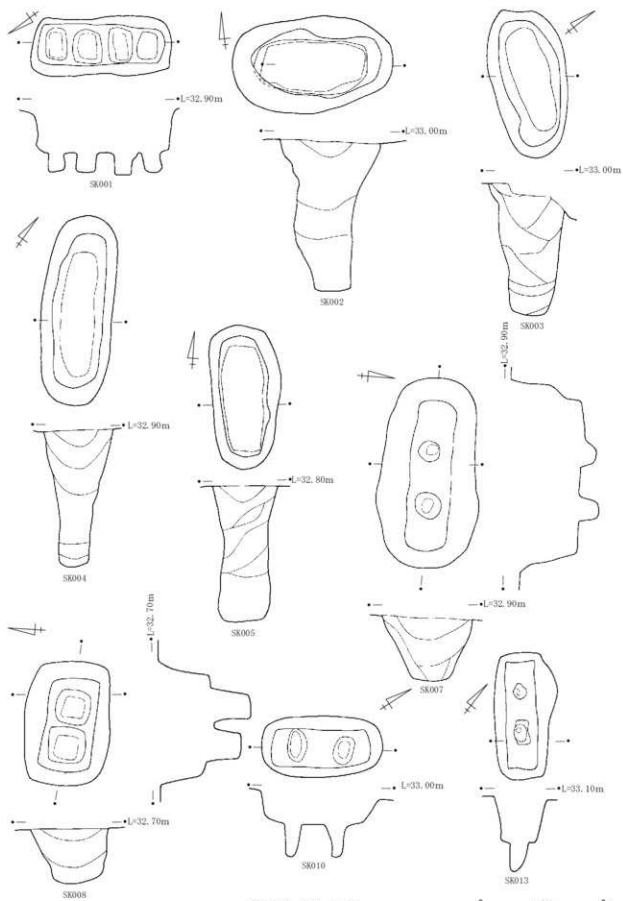
早期前葉から晩期までの土器が出土している。SI13、SK056に伴うものも含めて全体で370点が出土しており、内訳は付表2-2のとおりである。比較的まとまっているのは早期前葉、中期中葉～中葉、後期中葉～晩期前半であり、主な土器42点を図版14・15に掲出した。1～6は燃糸文土器である。6は小形土器の尖底部である。7は早期後葉の鶴ヶ島台式である。8は前期前葉の関山式である。9は前期中葉の黒浜式（植房式）である。10は前期後葉の浮島式である。11～15は中期中葉・阿玉台式前半でおおむね1b式であろう。12～15の4点は5H-97から出土しており、5H-97石器集中の年代を示す資料である。16～18は中期中葉の加曾利EⅡ式、19は中期後葉の加曾利EⅢ式であろう。20は後期初頭の称名寺式、21は後期前葉の堀之内式、22～35は後期中葉の加曾利B式である。B3式がまとまっており、5H-96b・cから6点がまとまっていた（25～30）。37～39もこの時期の粗製土器である。36は安行3b式の深鉢、40～42は晩期安行式の粗製土器である。掲出土器の出土位置をみる



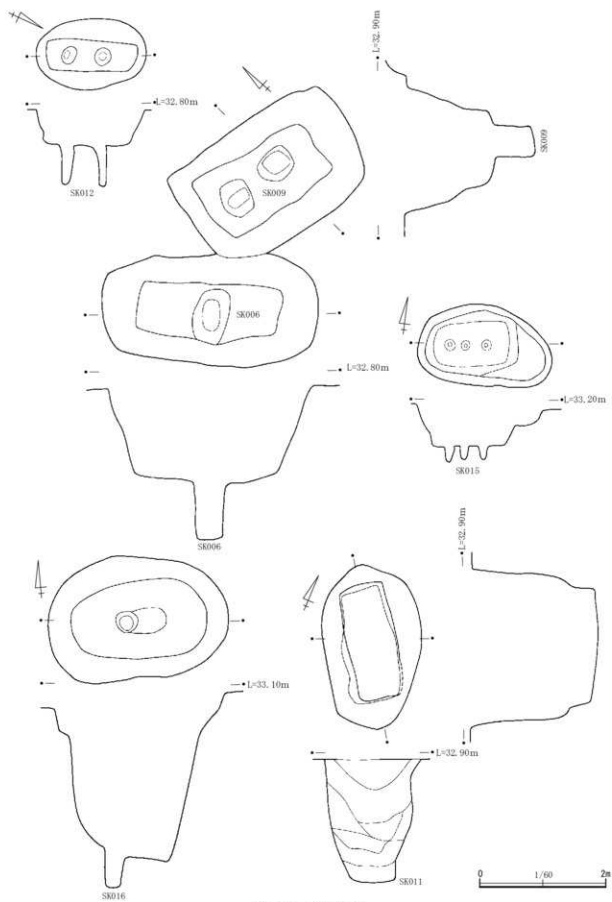
と、早期〜中期は5Hに多い。燃糸文土器は5H-69・95・98でそれぞれ1点ずつ、阿玉台式は5点中4点が5H-96出土。加曾利B式は分散的だが5Hに多く、後世の遺構流入や一括取り上げが主体である。

6 石器 (図版15・16)

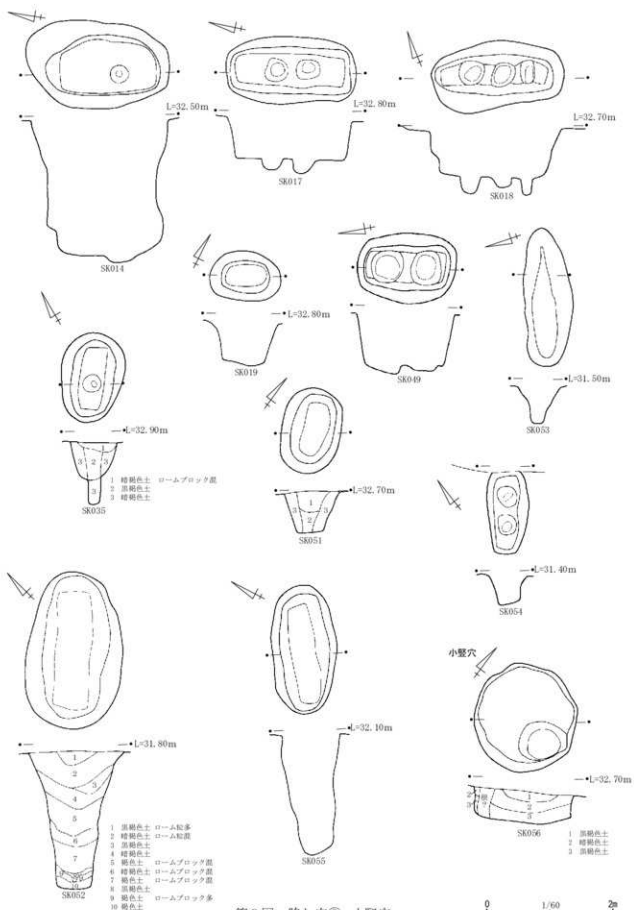
磨製石斧2点(定角式刃部、小型石斧)、打製石斧1点、台石2点、磨石類9点、剥片類7点、礫67点・8.75kgがある。図版16掲載の剥片類のうち17の5点は黒曜石、18の2点はチャートである。



第6図 陥し穴①



第7図 陥し穴②



第8図 陥し穴③・小壁穴

第3節 弥生時代

1 概要

弥生時代の遺構としては堅穴住居跡が4軒検出された。いずれの住居跡も出土土器から宮ノ台式半ばのものである。ごく短期間に営まれた小規模集落と考えられる。

2 遺構

住居跡

SI03 (第9・13図、図版6・22)

6J-38に位置する。8.0m×6.8mのやや胴張の隅丸方形、深さ0.2~0.3mの住居跡である。主軸方位はN-46°-W。南東部がSD03、SK016の順に切られている。4つの主柱穴のほか、南東壁際に出入口施設のもののみ見られるピットがみられる。主柱穴は抜き取り痕がみられる。炬は中央よりやや柱穴寄りにある。壁溝は北半分のみ見られる。出土遺物の総数は54点で、4点を図示した。出土分布は南東隅に集中がみられた。壺形土器に施される縄文が斜縄文である点、壺形土器の器面調整にハケ目が残る点などから小倉淳一による編年のET II a期(弥生時代中期後半、小倉1996)と考えられる。

SI04 (第10・13・14図、図版6・16・17・22)

6J-26に位置する。6.7m×5.8mのやや胴張の隅丸方形、深さ0.3~0.4mの住居跡である。主軸方位はN-47°-W。4つの主柱穴のほか、南東壁際にピットが5つみられる。炬は中央よりやや北西寄りにある。壁溝は全周している。床面から焼土や炭化材が出土しているが、焼土の一部は遺構検出面でも確認できた(図版6)。住居廃絶後ある程度時間が経過してから、あるいは埋め戻したのちに、上屋が焼却/焼失し、東側から土器を投棄したとみられる。

土器は670点出土しており、19点を図化した。底部の数から壺の個体数が非常に多く、破片点数の比較でも壺の2倍以上見られた。壺の作りがどれもよく似ている。土器以外には砥石と考えられる石製品(図版16-3~5)が出土。また被熱しているものもある。

壺形土器に施される縄文が斜縄文である点、壺形土器の器面調整にハケ目が残る点などからET II a期(弥生時代中期後半)と考えられる。櫛描文施文の壺もわずかがある。

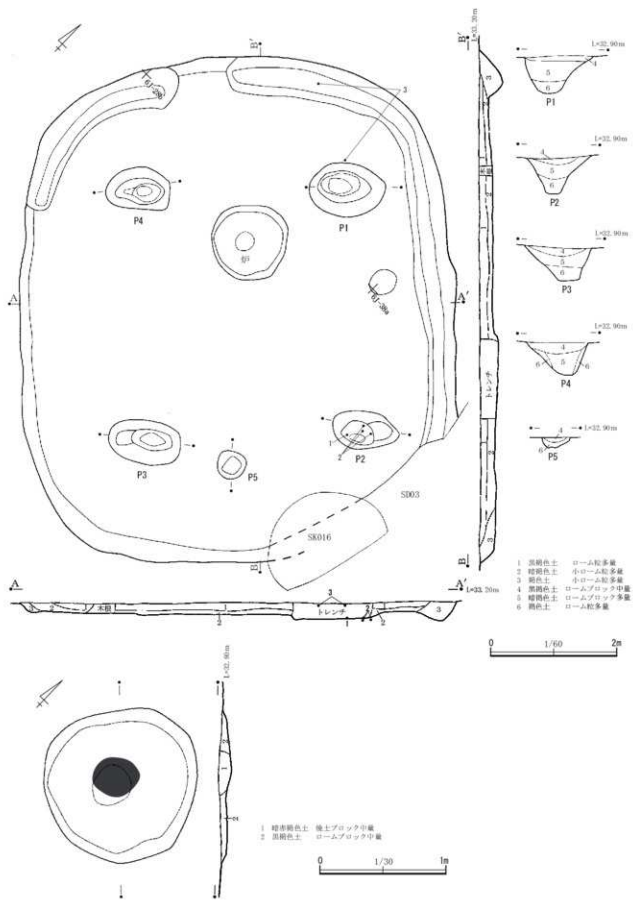
SI07 (第11・14・15図、図版7・17・22)

6I-5に位置する。8.0m×7.2mの歪な楕円形、残存している深さ0.2~0.3mの住居跡である。北隅を確認調査時のトレンチに削平されている。主軸方位はN-37°-W。壁溝はない。4つの主柱穴はやや東側に偏っている。主柱穴のほか、南東壁際に小柱穴がみられる。炬は中央よりやや北西よりに位置する。炭化材がわずかに検出されている。出土遺物は439点で、やや南半に集中している。特に西側の径3mほどに遺物が集中しているが、その多くが廃絶直後の堆積ではない2層中である。一方で29~31の遺物は床面より検出されている。出土遺物のうち22点を実測した。壺の個体数が多く、甕は少ない。破片と比較しても壺が415点、甕が20点と10分の1以下であった。

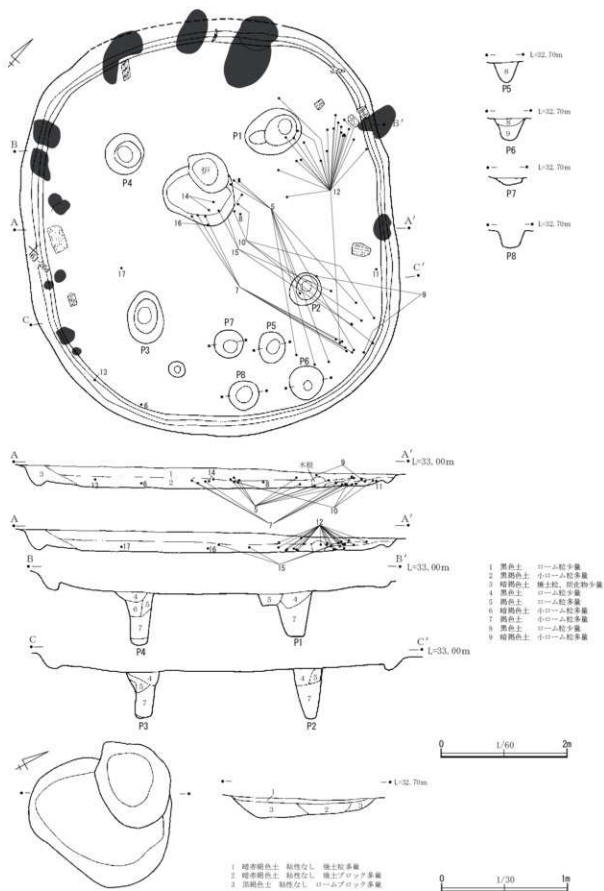
壺形土器に施される縄文が斜縄文である点、壺形土器の器面調整にハケ目が残る点などからET II a期(弥生時代中期後半)と考えられる。結紐文、櫛描文も少量ある。

SI08 (第12・15図、図版7・17・22)

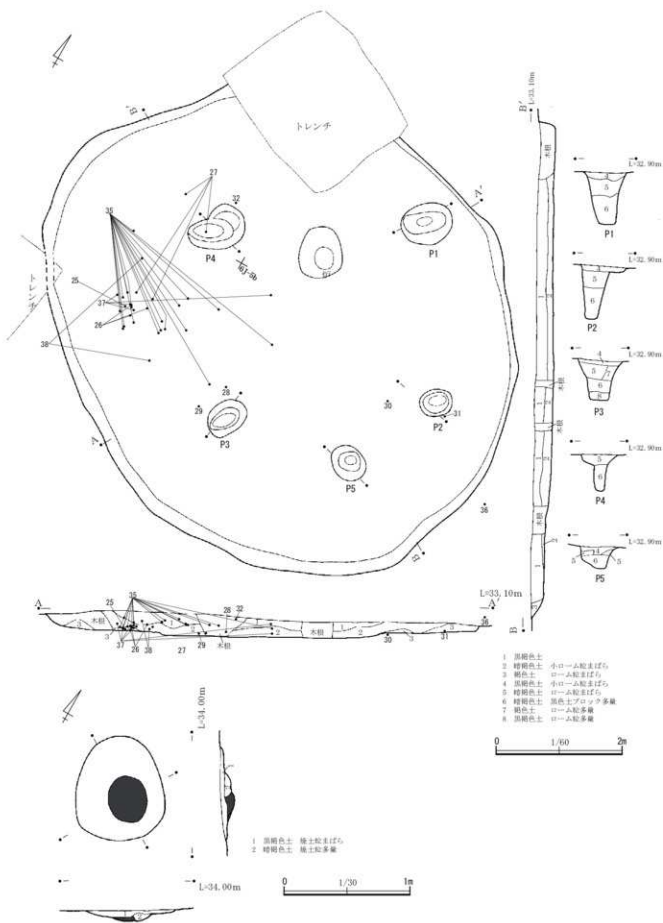
6J-3に位置する。6.7m×6.6mのやや胴張隅丸方形、深さ0.6mの住居跡である。主軸方位はN-55°-E。SK038、SK046と重複し、本遺構が古い。炬は検出されなかったが、攪乱によって破壊されたものと考えられる。壁溝はない。主柱穴には抜き取り痕が見られた。また、南西壁際に出入口施設のもののみ見られるピットがみられる。炬は見られなかったが、床面の攪乱により、炬は破壊されていると思われる。



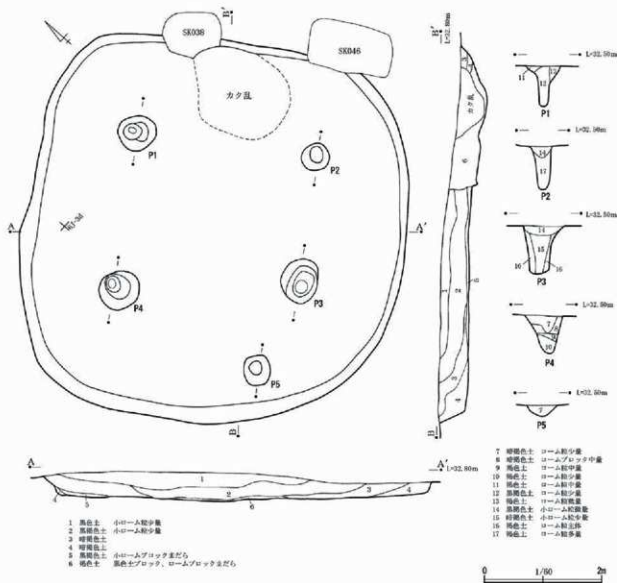
第9図 S103



第10図 SI04



第11図 SI07



第12図 S108

土器の出土は破片点数で160点とわずかである。そのうちの13点を掲載した。

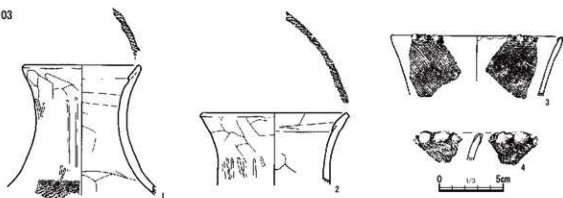
壺形土器に施される縄文が斜縄文である点、壺形土器の器面調整にハケ目が残る点などからET II a 期(弥生時代中期後半)と考えられる。

擬似流水文が施された壺の破片(51)がある。また、1点だが東関東系(58)と考えられる甕の破片がある。

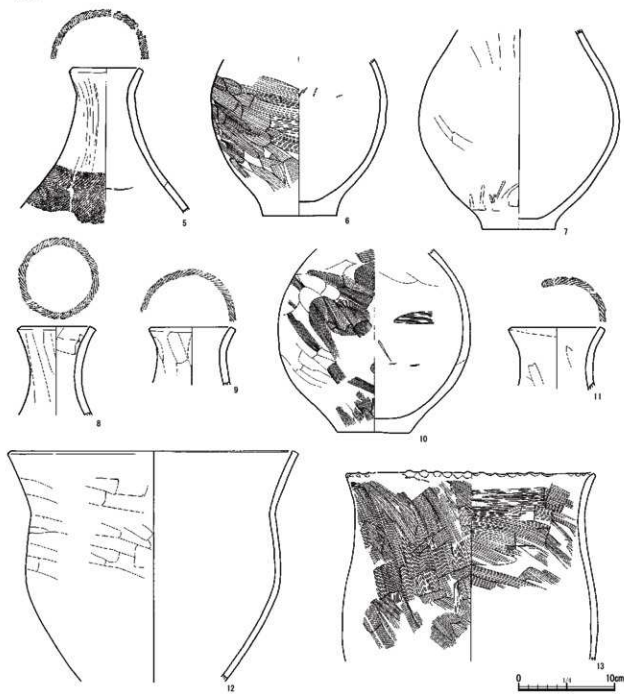
3 遺構外出土遺物(第15図、図版16)

宮ノ台式とみられる土器片が見ついている。大半は小片であるが、1点(59)を図化した。また、石斧も1点(図版16)見ついている。

S103

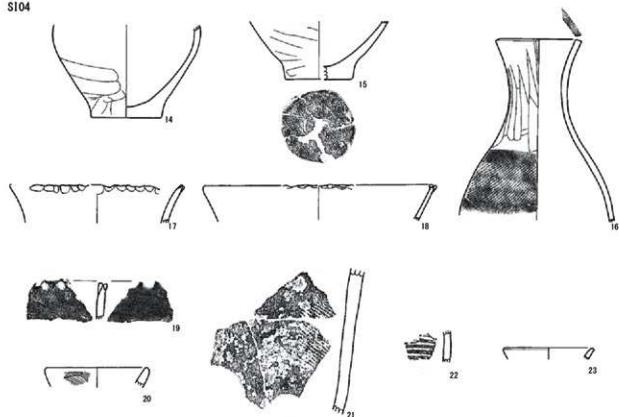


S104

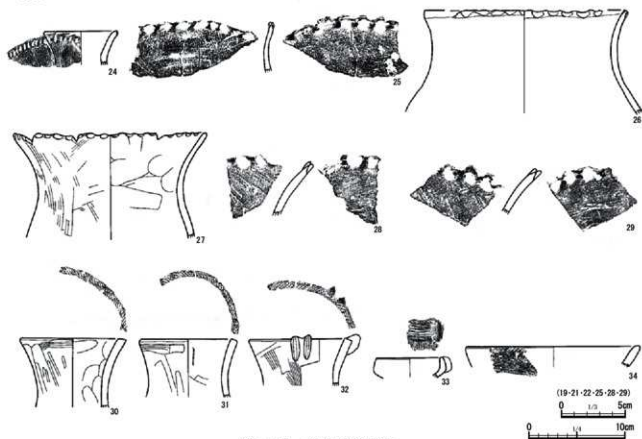


第13图 弥生时代遺物①

S104

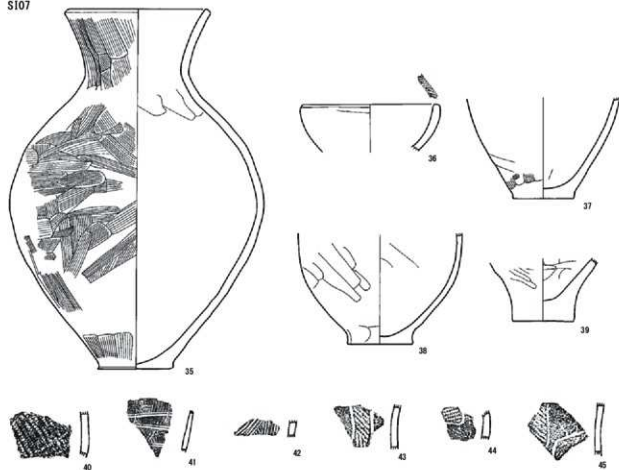


S107

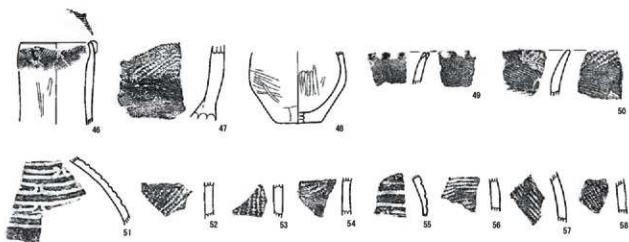


第14図 弥生時代遺物②

S107



S108



遺構外



第 15 図 弥生時代遺物③



第4節 古墳時代

1 概要

発見された遺構は住居跡2軒である。それぞれ木戸作遺跡の北と東にあり、集落を形成しているようには見えない。遺構に伴うものではないが前期～中期の土器片も見られることから、古墳時代を通じての利用はあったが、居住域としての積極的な利用は伺えない。本遺跡の東部は古墳時代後期の内野古墳群の範囲でもあり、墓域として認識されていたと考えられる。

2 遺構

住居跡

SI09 (第16・26図、図版7・17・18・22)

6I-83に位置する。5.7m×5.6mの正方形、深さ0.4mの住居跡である。主軸方位はN-42°-W。4つの主柱穴のほかにも7つピットがみられる。そのうち貯蔵穴は南側に1つある。炉は中央やや北西寄りにある。壁溝は見られない。また、炉と対称の位置にピット(P11)がみられる。出土遺物は7点で、南側に偏る。内3点を図示した。遺構の時期は5Iの甕底部形状、53の鉢の形状、住居の構造などから古墳時代中期、5世紀前半としたい。

SI14 (第16図、図版7)

6J-68に位置する。3/4ほどが調査区外にあるが、丸みを帯びた方形の住居跡と推測される。西側に長さ約2.5mの溝があるが、壁に沿っておらず、また掘り込みが浅いため、住居に伴わないものである可能性がある。カマド、柱穴は検出されておらず明らかでない。遺物は3点出土しており、それぞれ土師器片、弥生土器片、石器であるが、図化できるものはなかった。その為、時期については、住居の平面形状より古墳中期前半以前としたい。

3 遺構外遺物

細片ではあり図化はしていないが、古墳時代前期のものと思われる甕口縁の破片や、前期から中期のものと思われる甕の破片がわずかに見つかった。前期の遺構は検出されていないが、その時期においても何らかの活動が示唆されるものであるが、その数量を考慮すると積極的な活動ではなかったであろう。

第5節 奈良・平安時代

1 概要

発見された遺構は住居跡、方形区画墓(終末期方墳)である。住居跡は8軒あり、8世紀後半から9世紀前半にかけてのものである。遺跡南東部に2軒、北西部に5軒分布するが、いずれも遺構の重複はなく、長期間連続した集落ではないようである。なお、残りの1軒(SI15)は詳細位置不明である。一方で、堅穴に大量の土器を投棄し、その中に底部を継いだ甕(SI06)、あるいは底部切り離しをやり直した痕跡のある小型甕(SI10)が混入する(SI06・10)、土器工人の住居、あるいは活動の場であったと思われる。また、SI12からはあるいは転用硯が出土している。

2 遺構

住居跡

SI01 (第17・24・30図、図版7・8・17・22)

5H-99に位置する。4.8m×4.7mの正方形、深さ0.6mの住居跡である。主軸方位はN-33°-W。カマドは北西壁中央にある。4つの主柱穴のほかにも南東壁際にピット(P5)がみられ、出入口施設の可能性がある。またカマド両脇にも小柱穴がみられ、カマドの一部である可能性がある。壁溝は北隅を欠く。遺物は240点出土したが、細片が多く図化できたのは5点であった。分布はカマド周辺と南半に偏る。床直で出土した1や2の台付甕は8世紀後半であり、遺構の時期を示すとみられる。また床面から手づくねで成形された棒状の土製品(土製品1)の

破片が出土している。土鏝と推測されるが劣化が激しく判然としない。

S102 (第18・24・30図、図版8・18・22)

5H-97に位置する。4.7m×4.8mの正方形、深さ0.6mの住居跡である。主軸方位はN-29°W。カマドは北西壁中央にあったと思われるが、覆土によって大部分が破壊されており、ソデの一部が残存するのみである。また、南東壁際にピットがあり、出入口施設の可能性がある。壁溝はほぼ全周する。遺物は279点出土し、南東隅にやや集中がみられる。11点を図化した。8世紀前半とみられる非ロクロ成形で底部径の小さい坏が出土しているが、須恵器様の坏や、台付甕などは8世紀後半を示している。遺構の時期としては8世紀とした。

S105 (第19・24・25図、図版8・18・22)

6I-99に位置する。4.0m×4.4mの正方形、深さ0.4~0.5mの住居跡である。主軸方位はN-37°W。北西壁中央にカマドを有する。4つの主柱穴のほかに、南東壁際にピット(P5)がみられる。主柱穴の形状から、廃絶時には柱の抜き取りが行われている。壁溝はカマド下を除き、全周している。遺物は262点で、内22点を図化した。出土分布はややカマド周りに多いが、全体としてはまばらである。住居覆土の状況や、同一の遺物が覆土上層と床直からみられることから、この住居は自然に埋没したのではなく、人為的に埋め、その際に土器も廃棄したものであると思われる。19の薄手の甕、比較的体部の立った坏(29、31)、盤(32)などから遺構の時期は8世紀後半とする。また、細片のため図化はできなかったが、胎土に大型の白砂粒を多く含む常総型甕の特徴を持つ破片も複数見られた。

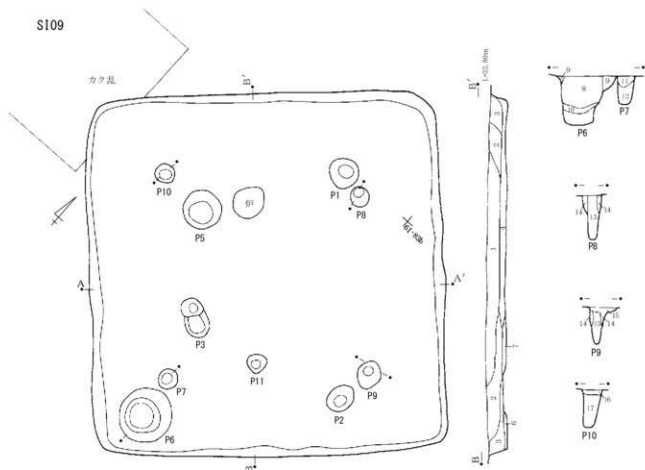
S106 (第20・25図、図版8・18・19・22)

7H-91に位置する。3.1m×3.8mの長方形、深さ0.5mの住居跡である。主軸方位はN-10°W。カマドは北壁中央。主柱穴はなく、南壁際に出入口施設とみられるピットがある。壁溝は北東隅を欠く。埋土堆積状況からS105と同じく人為的に埋没させたものと思われる。床面下には2.1m×2.5mの方形のくぼみがあり、拡大する形で改築されたようである。改築前の住居は2.4m×2.2mの略正方形。東壁側にカマドの掘り込みのような痕跡があり、改築後と比較し主軸がほぼ90度東に回転している。検出された遺物は98点で、内12点を図示した。出土分布はややカマド周りに多いが他はまばらである。上層の住居の時期土坏(39、40)の形状や台付甕(48)などから8世紀後半としたい。下層の住居はそれに伴う遺物が特定できないため、詳細な時期は不明である。カマド内から横倒しになった甕(46)、さらにはその内部から坏(40)が見つまっている。また、西壁近くからも正立の甕(49)の中から、坏(50)が見つまっている。一方49、50についてはカマド脇にあり、49の甕は焼成の良さから水甕であり、上層の住居で使用されていたと考えられる。また、46については底部より6cmほどのところに明らかな接合痕(図版18)があり、胴部に対して底部を被せ、接合が不良な状態で焼成したことがよくわかる。フォルムもそこからがゆがんでおり一体感を欠く。おそらく、甕成形の最終段階において何らかの原因で底部が修復不可能な破損に至ったため、切り取って、別に成形した底部を被せ、つなぎ合わせて焼成したと推定される。こうした土器の存在は当地において土器製作が行われたことを示唆する。また、同じく土器工房と考えられているうらなす遺跡の住居A-001は堅穴が横長であり、拡張しつつ改築を行っている。また同遺跡の住居A-004もやはり改築を行っており、本遺構と共通点がみられる。

S110 (第19・26図、図版9・19・22)

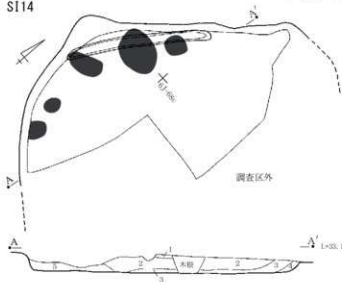
5J-36に位置する。3.4m×3.4mの略正方形、深さ0.2mの住居跡である。主軸方位はN-1°W。壁溝はカマドを除き全周し、カマドは北壁中央に位置する。主柱穴は検出されず、南壁寄りにピットがみられる。また、北東、南東の床面に白色粘土層がみられる。遺物は127点で24点を図化した。出土位置は北西隅に集中し、床面から出土している。ロクロ成形の小型甕や折り返し口縁の甕から9世紀後半としたい。被熱とみられる劣化や黒色物質の付着した、灯明具の可能性のある坏(54、58)が出土している。また69の小型甕は回転系切りによる底部

S109



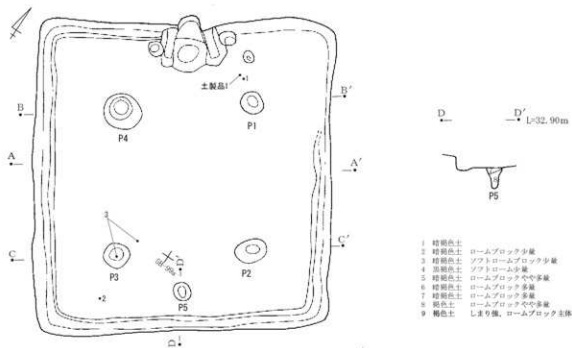
- | | | | |
|--------|-----------------|---------|---------------|
| 1 黒色土 | ローム粘土少量 | 8 暗褐色土 | ローム粘土少量 |
| 2 黒褐色土 | ローム粘土少量 | 9 赤褐色土 | ローム粘土少量、炭化物少量 |
| 3 赤褐色土 | ローム粘土少量 | 10 暗褐色土 | ローム少量 |
| 4 赤色土 | ローム粘土、ロームブロック少量 | 11 暗褐色土 | ローム粘土少量 |
| 5 暗褐色土 | グアノローム土壌 | 12 暗褐色土 | ローム粘土少量 |
| 6 暗褐色土 | ローム粘土少量 | 13 暗褐色土 | ローム粘土少量 |
| 7 暗褐色土 | 黒土粘土少量 | 14 暗褐色土 | ローム土壌 |
| | | 15 赤褐色土 | ローム粘土少量、炭化物少量 |
| | | 16 赤褐色土 | 小ローム粘土少量 |
| | | 17 暗褐色土 | 小ローム粘土少量 |

S114

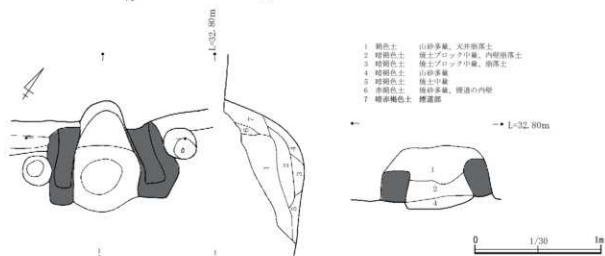
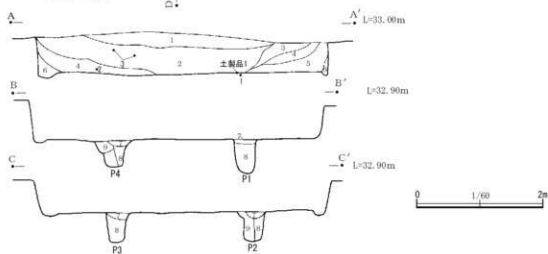


- | | |
|--------|----------------|
| 1 赤褐色土 | ロームブロック少量 |
| 2 赤褐色土 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色土 | しまりやな塊、ローム粘土少量 |
| 4 暗褐色土 | ローム粘土少量 |
| 5 暗褐色土 | ローム粘土少量 |

第16図 S109・14



- 1 緑褐色土
- 2 緑褐色土
- 3 緑褐色土
- 4 赤褐色土
- 5 緑褐色土
- 6 緑褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 赤褐色土
- 9 赤褐色土



- 1 褐色土
- 2 緑褐色土
- 3 緑褐色土
- 4 緑褐色土
- 5 緑褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 暗赤褐色土

第17図 S101

の切り離し痕が本来の底部とその直上の2カ所に残っている。おそらく上の切り離しが最初で、それが何らかの理由で中止され、その痕跡を修正することなく、再度切り離しを行ったものと考えられる。71の鉢は非常に薄手で、内面は黒色処理されている。

SI11 (第21・27・28図、図版9・10・19・23)

5I-26に位置する。4.8m×4.9mのややゆがんだ方形、深さ0.3mの住居跡である。主軸方位はN-27°-W。壁溝はカマドを除き全周する。カマドは北西壁中央にあり、モモの種子(核)が出土している。4つの支柱穴のほかにも南東壁寄りにピットがみられる。遺物は418点出土しており、分布は北西隅に集中し、その多くが1層と2層の境目と、1層の上部に見られる。41点を図化した。胎土が灰白色を呈する坏が多く出土している(78~91)。いずれもクロロ目を非常に強く残し、胎土に比較的大きな白砂粒を含むものもあることから、常総由来の土器と思われる。また、甕にも砂粒を含みヘラミガキを有するもの(106~108)があり、これも常総型甕であると考えられる。常総由来の土器の下総への流入の時期と非クロロの坏片(92, 93)が出ていることを併せて考えると、遺構の時期は8世紀前半と想定される。

SI12 (第22・29図、図版10・19・20・23)

5I-17に位置する。4.7m×4.2mのややゆがんだ方形、深さ0.4mの住居跡である。主軸方位はN-33°-W。カマドは北西壁中央に位置する。壁溝はカマドを除き全周する。4つの支柱穴のほかにも南壁寄りに小柱穴がみられる。遺物は232点で、北隅と東隅に集中し、底面付近に多く見られる。17点を図示した。甕の形状(125, 127)などより遺構の時期は8世紀中ごろとしたい。また、口縁部全てを折り取り、高台裏に黒色物質が付着し、中心部に平滑化がみられる高台坪(120)が出土しており、甕として転用されたと推測される。

SI15 (第23・29・30図、図版10・20・23)

道路造成により、東側1/3は失われていたが、残された1辺は4.3m。おそらく正方形の住居であると考えられる。深さは0.42m。カマドの袖や煙道は残されていないが、北壁の床中心あたりの床面に焼土痕があり、おそらくカマドの痕跡であると思われる。そこから測ると主軸方位は、N-8°-Wとなる。ピットが2つ検出されていておそらく支柱穴であると思われる。そのうちの1つ、P2は抜き出し痕を有すると思われる。遺物は261点あり、36点を図化した。出土位置の記録は残されていない。遺構の年代は、胴部のタタキ目のある小型甕(166~168)や、口縁部が最大径となり胴部が直線的な甕(169)などから、9世紀第3四半期としたい。

墳墓

方形区画墓 (第23図、図版10)

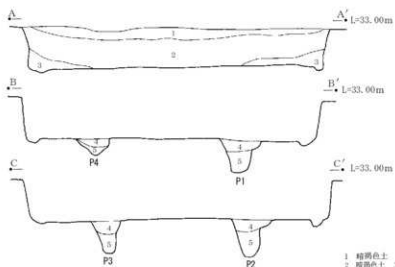
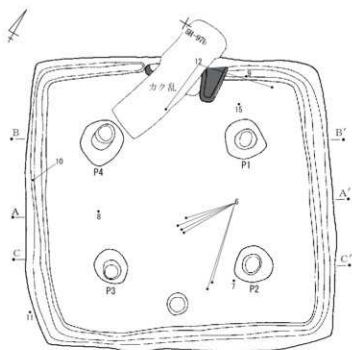
一辺約10m、略正方形の周溝を検出しており、形状から奈良・平安時代の方形区画墓とみられる。墳丘、主体部は確認できず、残存する周溝の深さは10cmほどであることから、かなりの削平を受けているものと思われる。遺物も混入したと思われる縄文土器片のみで、詳細な時期は不明である。

3 金属遺物 (付表8)

SI01・05・10・12より金属器が見つかった。 (刀子2点、鉄鏝1点、不明鉄製品1点) いずれも状態が悪く、図化はしていない。またSI05からは鉄滓が2点検出されている。

4 遺構外遺物 (第31図、図版20・21・23)

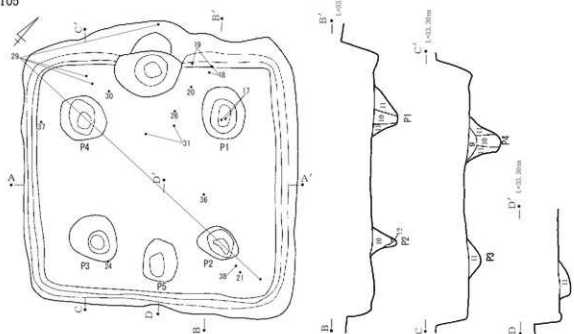
遺構外からも8世紀から9世紀にかけての土器片が多く見つかり、活発な活動が示唆される。また、細片で図化はできなかったが、常総型甕の特徴である、大きな白砂粒を含む胎土の甕片が見つかり、常総地域との交流を示している。



- 1 埴間色土
- 2 埴間色土 ソフトローム中層
- 3 埴間色土 ロームブロック中層
- 4 埴間色土 ロームブロック中層
- 5 埴間色土 ロームブロック多量

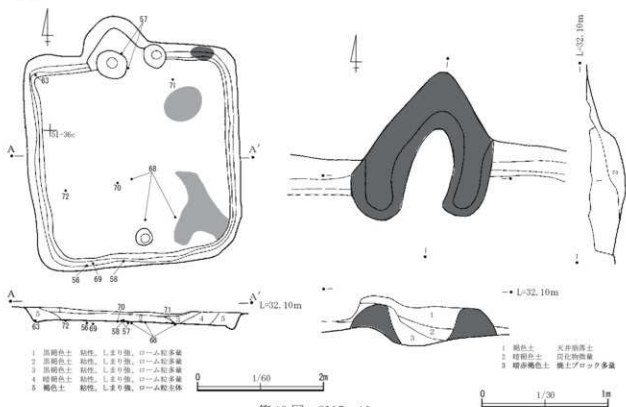
第18図 S102

S105



- 1 黒褐色土 ローム粒少量
- 2 暗褐色土 ローム粒多量
- 3 暗褐色土 ロームブロックまだら
- 4 黒褐色土 ローム粒多量
- 5 暗褐色土 小ローム粒多量
- 6 褐色土 ローム粒多量
- 7 暗褐色土 小ローム粒多量
- 8 褐色土 ローム粒多量
- 9 暗褐色土 ロームブロックまだら
- 10 黒褐色土 粗粒、ローム粒まだら
- 11 暗褐色土 しまりやや強、ロームブロック多量
- 12 褐色土

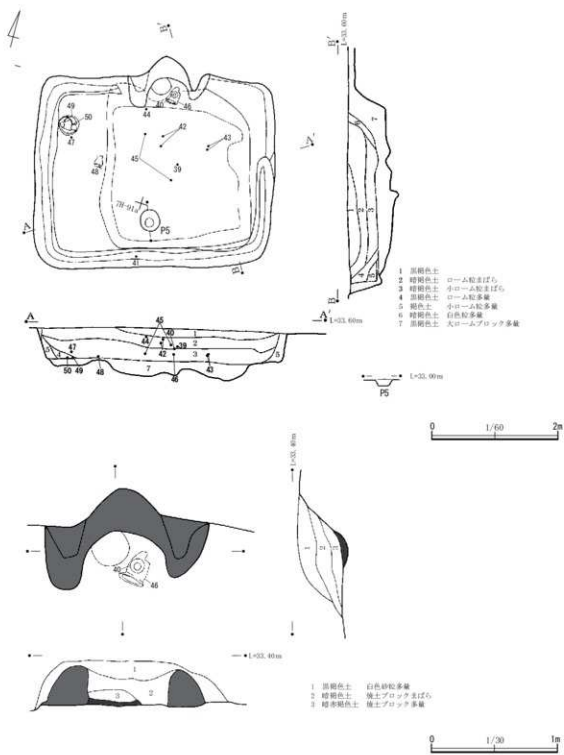
S110



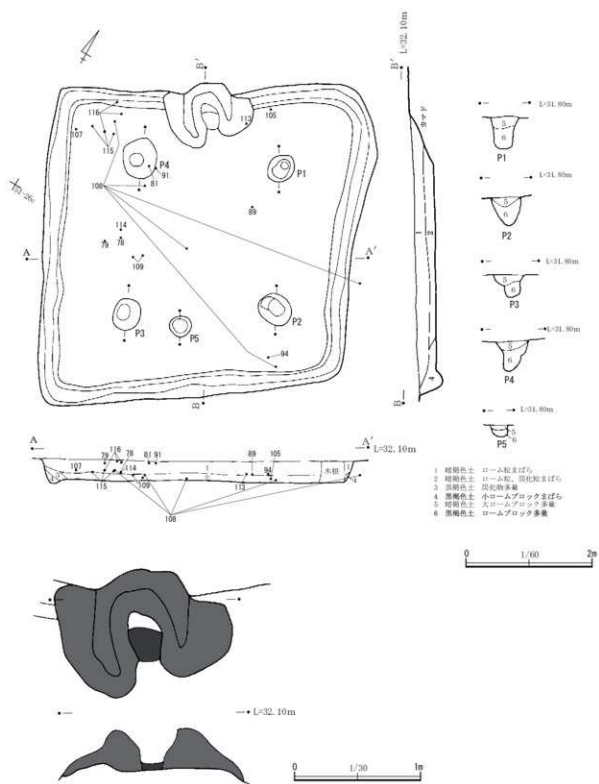
- 1 黒褐色土 粘性、しまり強、ローム粒多量
- 2 黒褐色土 粘性、しまり強、ローム粒多量
- 3 黒褐色土 粘性、しまり強、ローム粒多量
- 4 暗褐色土 粘性、しまり強、ローム粒多量
- 5 褐色土 粘性、しまり強、ローム粒主体

- 1 褐色土 天井崩落土
- 2 暗褐色土 炭化物多量
- 3 暗褐色土 焼土ブロック多量

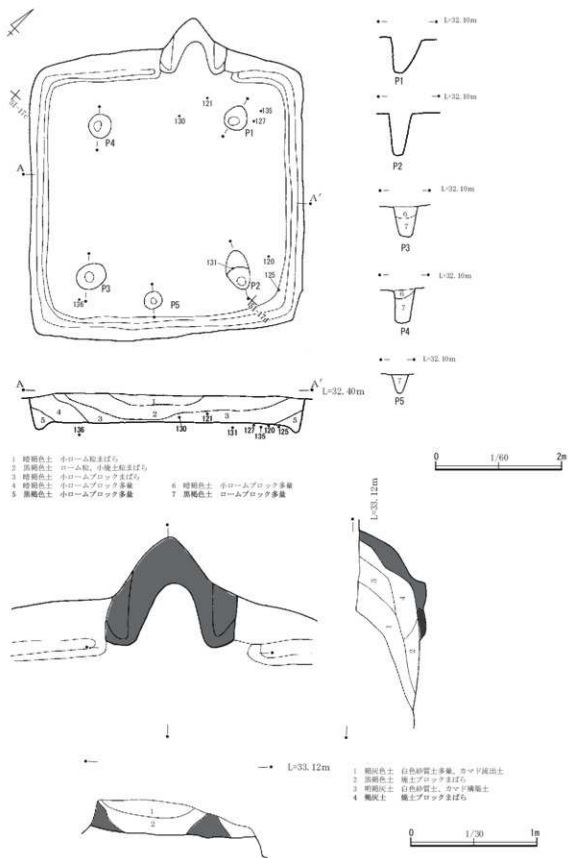
第19図 S105・10



第20図 S106

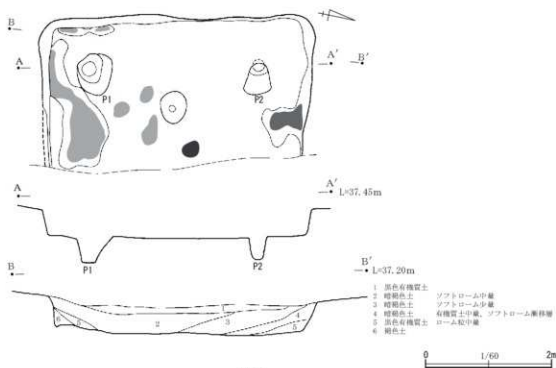


第21図 S111

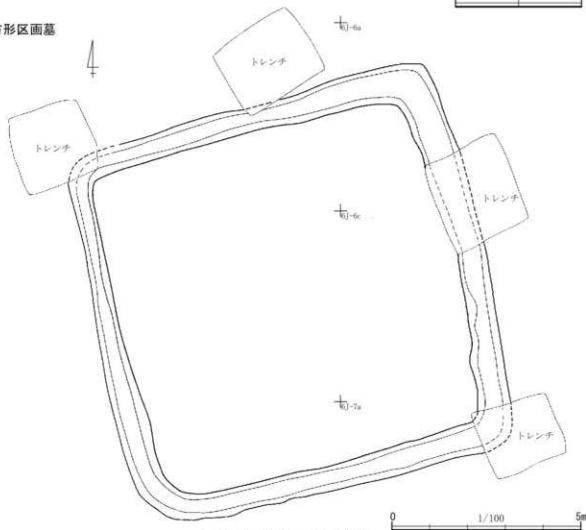


第22図 S112

SI15

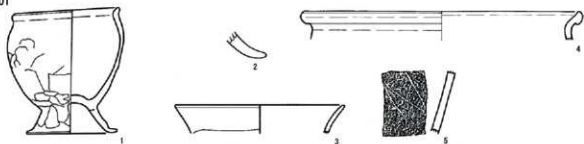


方形区画墓

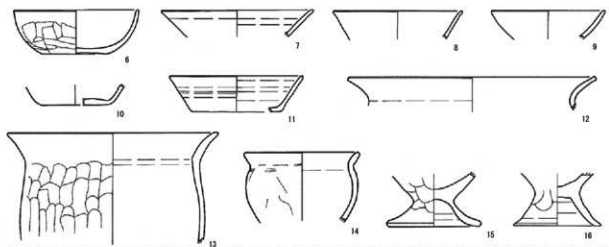


第23図 SI15・方形区画墓

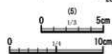
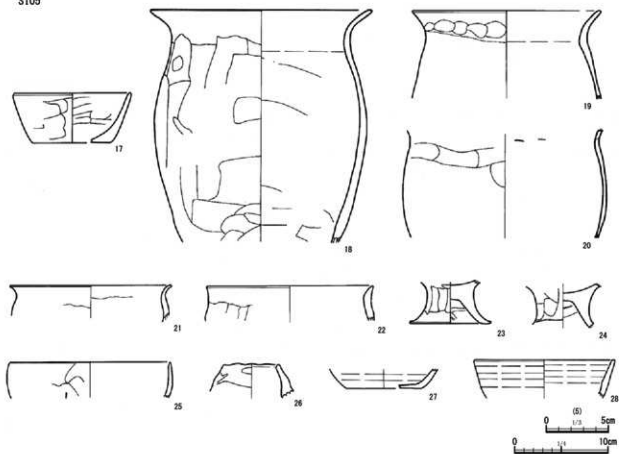
S101



S102

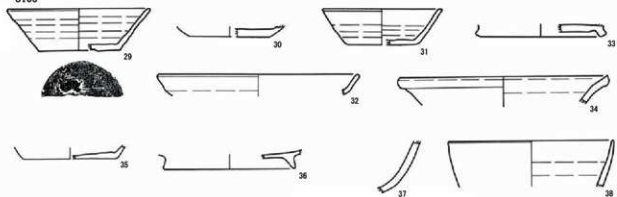


S105

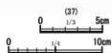
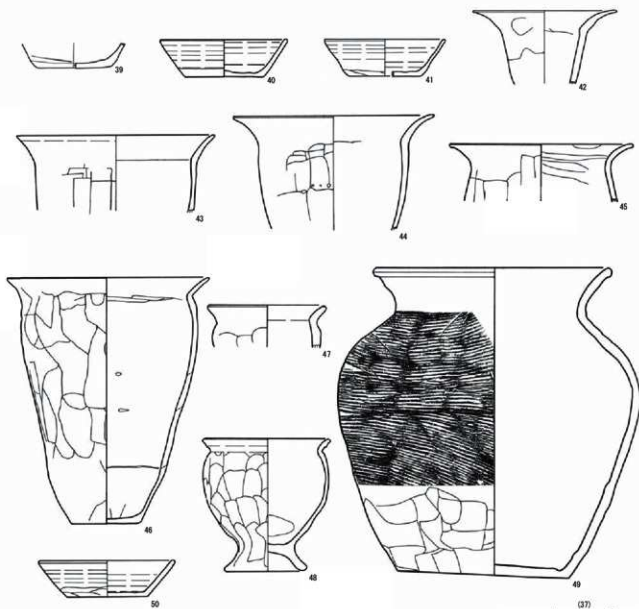


第 24 図 古代遺物①

S105

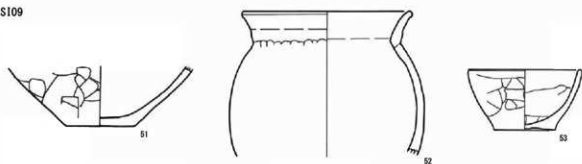


S106

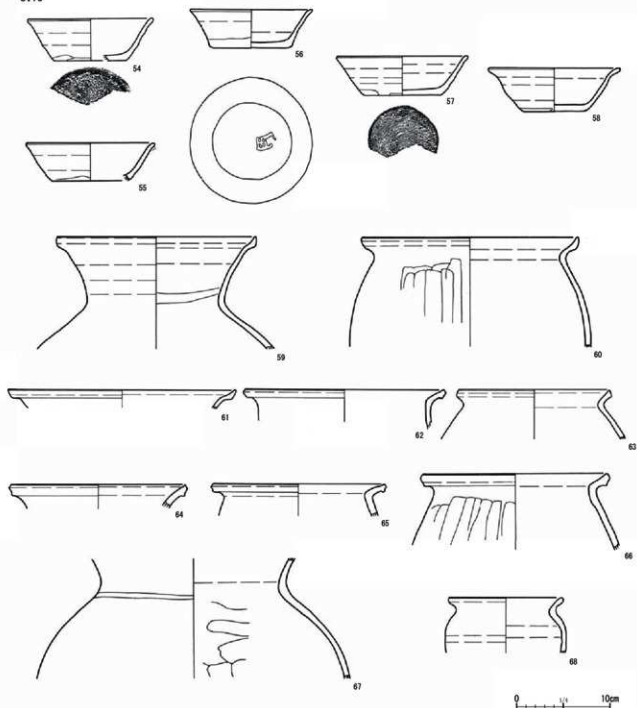


第25図 古代遺物②

S109

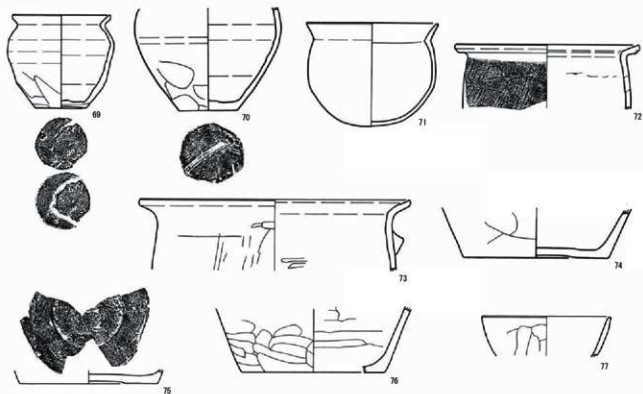


S110

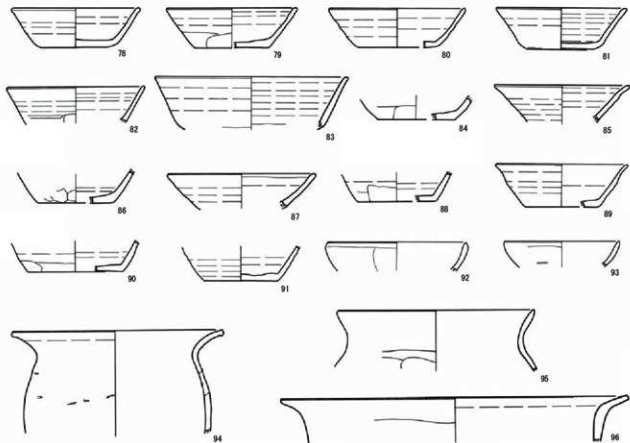


第 26 図 古代遺物③

S110

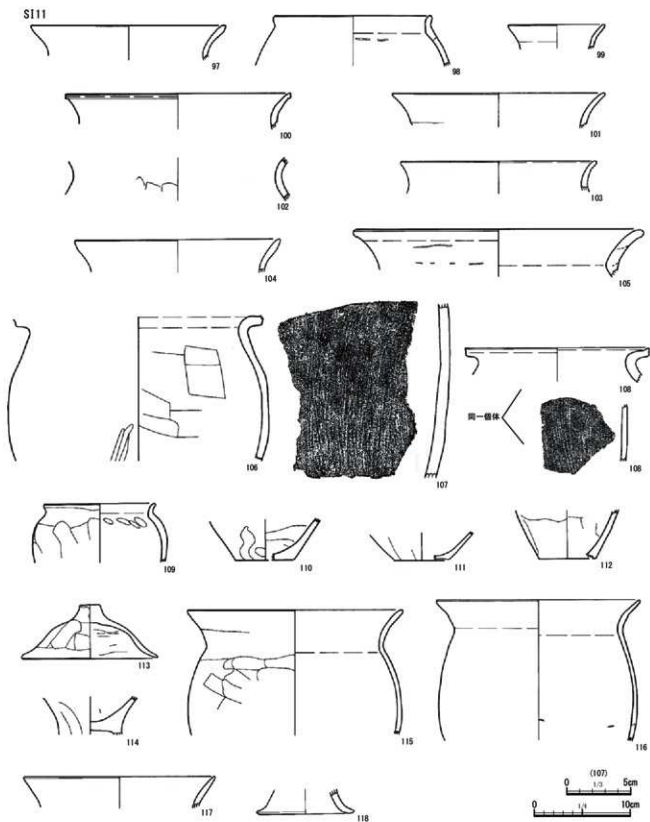


S111



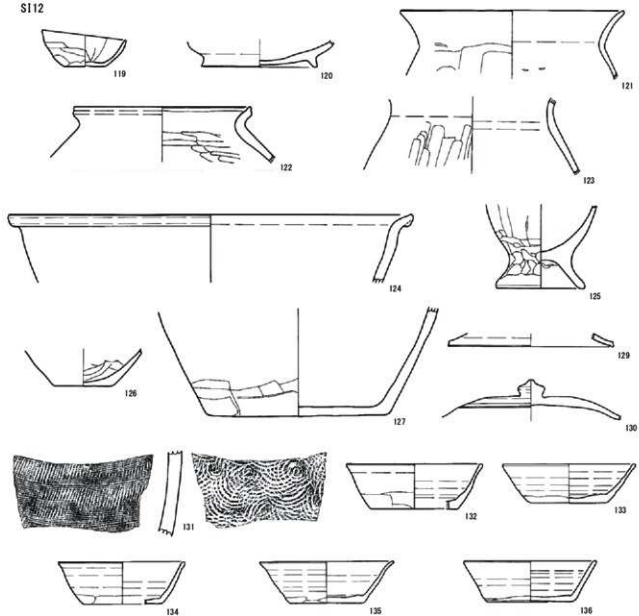
第 27 図 古代遺物④



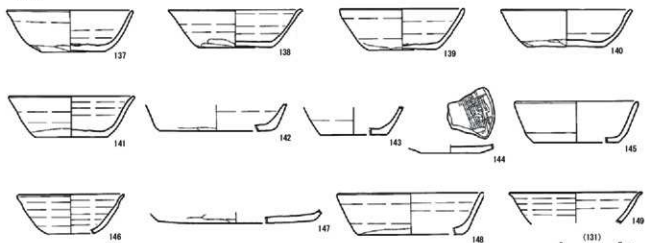


第 28 圖 古代遺物⑤

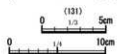
S112



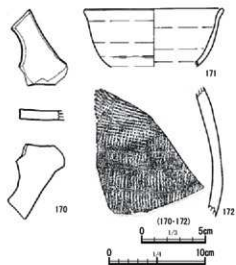
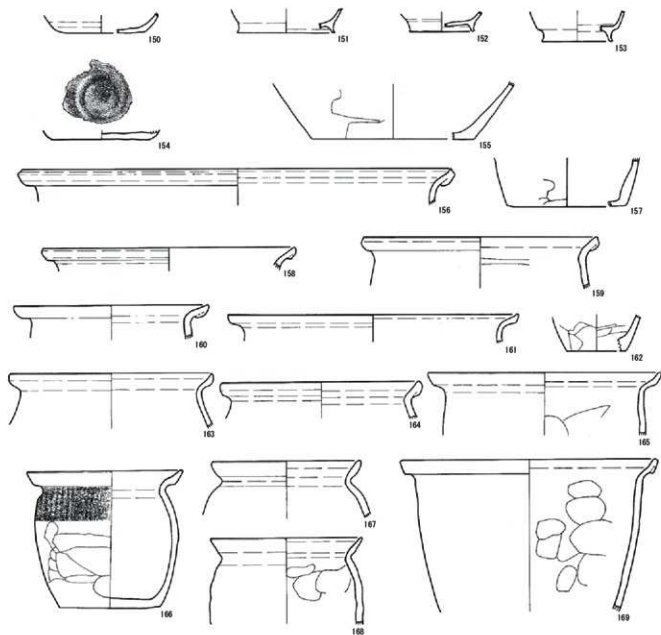
S115



第29圖 古代遺物⑥



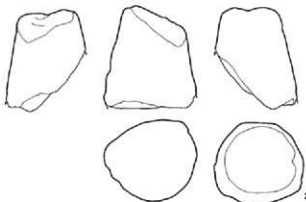
S115



土製品

S102

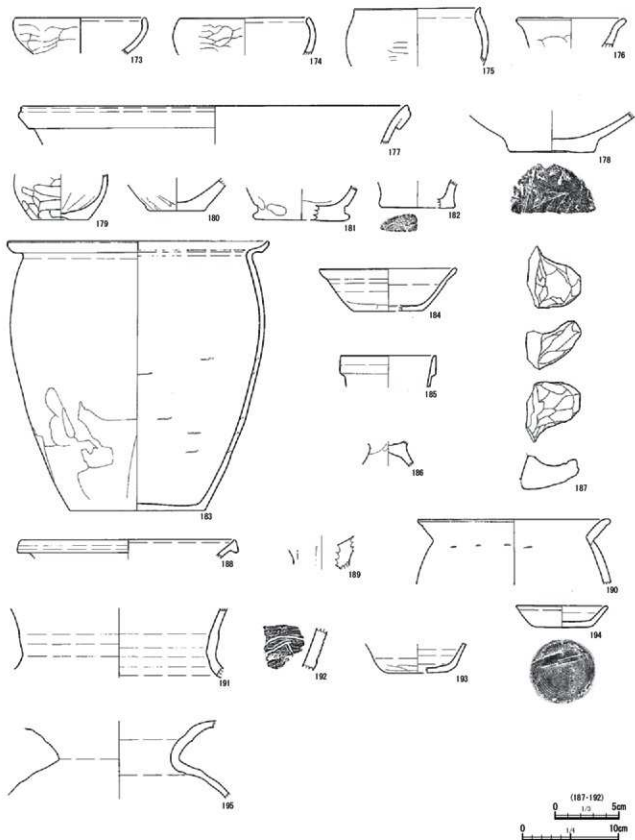
S101



0 1/4 5cm

第30圖 古代遺物⑦

遺構外



第 31 図 古代遺物⑧

第6節 中世以降

1 概要

土坑・溝・塚が確認されている。土坑は遺跡の北東部に密集しており、100m×80mの範囲に分布し、径50mの範囲に集中している。この土坑群からは、人骨や銭貨が出土し、墓地と考えられる。それぞれの土坑墓の時期については、SK021・023・031・036・047は永楽通寶が出土しており15世紀後半、SK020は寛永通寶の文銭が出土したことから17世紀後半とする。それ以外のものは北宋銭が主として出土しており、14世紀～15世紀前半と推定される。また、内耳土鍋の出土したSK033は遺物の時期である15世紀後半とする。また遺物の伴わない他の土坑も土壌墓である可能性が高い。これらの土坑墓群の時期としては、時期が判明している土坑から推測して、中世から江戸時代初期とする。

溝SD03・04は、溝中央部にピットが一列に並ぶ構造をしている。後述する内野遺跡のSD05も同様の構造をしており、その相対位置などからも、全て同一の遺構であると思われる。これらは、中世以降の道であると推定される。

塚は、時期を明らかにする遺物は出土していないが、その構築方法から中世以降のものと判断した。

2 遺構

土坑墓

土坑墓は01号・02号塚と内野古墳群1号墳（前方後円墳）の間に集中しており、そこを墓域としたものと考えられる。本項では特に銭、人骨が出土した土坑墓の遺構図面を掲載した。しかし、前述のとおり他にも多くの土坑が密集しており、図面を掲載しなかったSK024～027・029・030・032・034・036・039～046・048・050も遺物の出土はないが、中・近世以降の土壌墓である可能性が高い。これらを合わせると全部で、29基の土坑墓が確認されている。そのうちSK020・022・033・036では人骨が遺存し、SK031からは布片が付着した銅銭が出土した。

SK020（第32・43図、図版10）

6J-25cに存在する。1.17m×0.52mの歪んだ隅丸方形の土坑墓。深さは0.2m。非常に浅く、断面形状もなだらかである。寛永通寶（文銭）が2枚出土（1・2）しており、遺構の時期は17世紀後半と推測される。また、焼骨片が出土している。

SK021（第32・43図、図版11）

6J-15bに存在する。1.15m×1.02mのやや歪んだ楕円形の土坑墓。深さは0.4mで底面の角がはっきりと出ている。永楽通寶が1枚（3）出土している。

SK022（第32・43図、図版11）

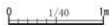
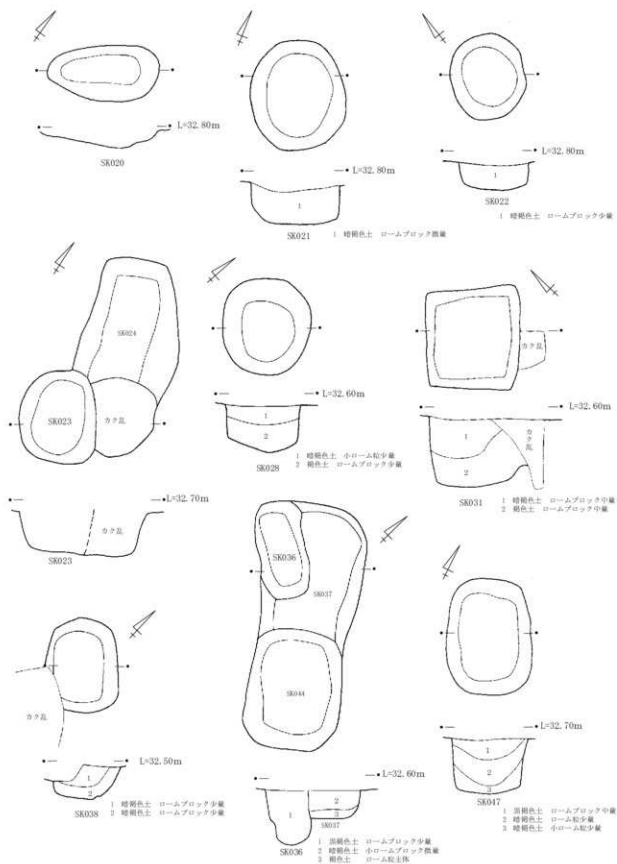
6J-15aに存在する。径0.92mの歪んだ円形の土坑墓。深さは0.3mで、底面の角が明確である。皇宋通寶（4）、嘉祐元寶（5）、元祐通寶（8）、至元通寶（9）が各1枚、元豊通寶が2枚（6・7）出土している。至元通寶は初鋳年が1285年と1335年の2種類存在するが、本土坑群で出土した2枚（もう1枚はSK031）はその径と字体からいづれも1335年のものであると判断した。また、ヒトの遊離歯3本も出土している。

SK023（第32・43図、図版11）

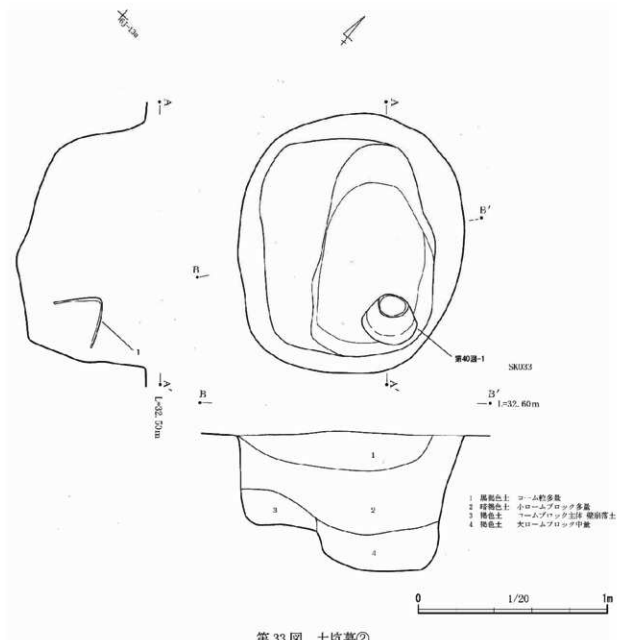
6J-14aに存在する。1.00×0.82mの歪んだ楕円形の土坑墓。深さは0.42m。SK024を切っている。元豊通寶1枚（10）と、永楽通寶が6枚（11～16）出土している。

SK028（第32・43図、図版11・21）

6J-13aに存在する。径1.03mのやや歪んだ円形の土坑墓。深さは0.52m。中心が最も深く、周囲がわずかに浅い。皇宋通寶（17）、正隆元寶（18）、治平元寶（19）、元祐通寶（20）、開元通寶（21）が各1枚ずつ出土してい



第32図 土坑墓①



第33図 土坑墓②

る。治平元寶には穿孔(図版21)がある。

SK031 (第32・43図、図版11)

6J-14cに存在する。一辺0.95mの方形の土坑墓。深さは0.75m。皇宋通寶が2枚(23・24)、元祐通寶(25)、至元通寶(26)、永樂通寶(27)、至道元寶(31)が各1枚、まとまって出土している。至道元寶とともに薄い木片が出土しており、副葬品の一部、あるいは棺の一部であると思われるが、詳細は不明である。

SK033 (第33・40図、図版11・12・21)

6J-13に存在する。1.4×1.2mの楕円形の土坑墓。深さは0.75m。内耳土鍋(巻頭図版2・第40図-1)がほぼ完形で1点出土している。伏せた状態で土坑の隅から出土しており(図版11)、内部の土ごと取り上げたところ、その下から歯牙を含む頭骨の一部が出土した(図版21)。また、取り上げた土器の内部には頭蓋骨の一部が入っていた。遺存状態はきわめて悪い。土坑内における頭部の位置からすれば、遺体の全身が埋葬され、土器の下の部分のみが辛うじて残った可能性が高い。土鍋の形状については、口縁と体部の区別は明確ではなく、側面は直線的である。一方で底部と体部は明確な稜で境界されている。体部中間には帯状にすずが付着しており(図

版 21)、煮炊き等に使用したものと思われる。一方で、耳に鈎紐等による擦痕は認められなかった。土葬遺体の頭部に鍋を被せる「鍋被り葬」は、中世末から近世にかけて類例が知られており、とくに青森県から福島県の太平洋側に多い(関根 2003)。本例は、使用痕跡が生々しい鍋を使っていることから、内耳土鍋が示す 15 世紀後半の葬例である。鍋被りの風習が流行する以前の貴重な事例といえよう。

SK036 (第 32・43 図、図版 12)

6J-13 に存在する。1.02×0.48m の長方形の土坑墓。SK037 を切っている。深さは 0.57m。天禧通寶 2 枚 (28・29)、元豊通寶 2 枚 (30・33)、永楽通寶 1 枚 (31)、宣徳通寶 1 枚 (32) が検出された。また、骨片が出土しており、1 点は人の寛骨とみられる。

SK038 (第 32・43 図、図版 12・21)

弥生時代住居 S108 の縁を切っている。0.50×0.41m の隅丸方形の土坑墓。深さは 0.2m。皇宋通寶が 5 枚 (34～38) と、元祐通寶が 1 枚 (39) 出土している。皇宋通寶の 1 枚 (34) に布片が付着 (図版 21) しており、銭貨が袋に入れられていた、あるいは衣服の上へのせられていたものと推測される。

SK047 (第 32・43 図、図版 12)

6I-94C に存在する。1.28×0.82m の隅丸方形の土坑墓。深さは 0.26m。永楽通寶が 3 枚 (40・42・43) と、至元通寶 (41)、太平通寶 (44) が各 1 枚、まとめて出土している。

SK024～027・029・030・032・034・039～046・048・050

6J-4、5 付近に存在する土坑。遺物の出土はなく、詳細は不明であるが、これまでに挙げてきた土坑墓と一群を形成しており、同じ時期幅に収まる土坑墓である可能性が高い。

溝

SD01・02 (第 34・43 図、図版 12)

本遺跡の調査区北辺、5H-74～5I-14 に存在する。ほぼ東西に並行して伸びる 2 本の溝である。残存長が約 51m、幅が約 1.4m である。最初に SD02 が掘られ、その一部を切って SD01 が掘られている。SD02 の東側と、SD01 の大半は調査区外になっている。遺物は SD01 から 11 点、SD02 から 32 点出土したが、土器はいずれも細片であり図化はできなかった。また、SD02 より治平元寶 (46)、皇宋通寶 (47)、咸平元寶 (48) の 3 枚の銭貨が出土した。他の出土遺物はないが、中・近世以降と考えられる。

SD03 (第 35 図、図版 13)

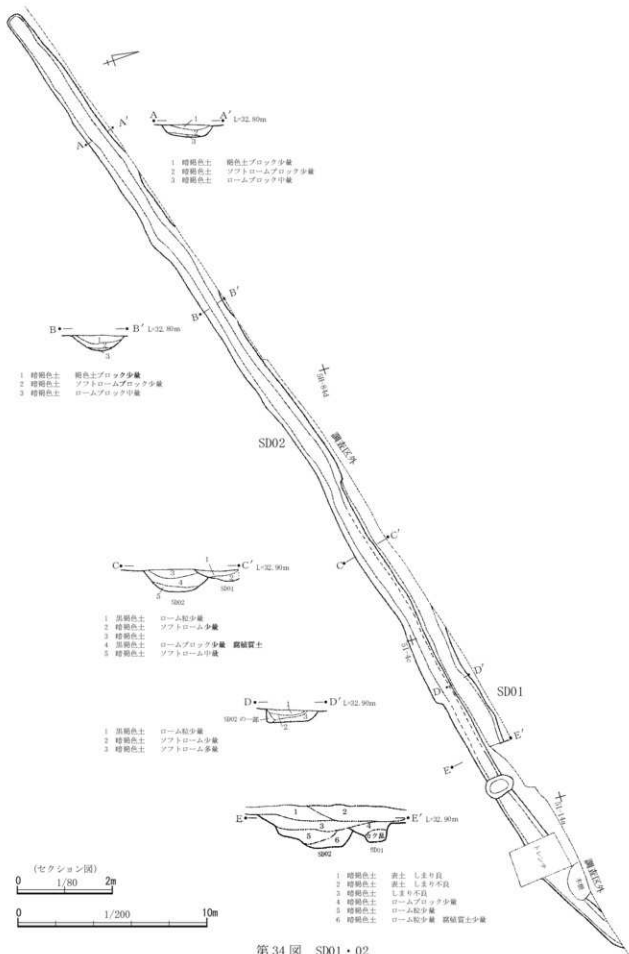
6J-36～38 に存在する。南北に延びる、長さ約 28m、幅約 2.8m の溝である。溝中心部にビットが 1 列に並ぶ構造をしている。中世以降の道路であると推定される。遺構の方向、位置などから SD04 とつながる一本の道路であると考えられる。弥生土器の細片が出土したが、混入とみられる。

SD04 (第 36・37 図、図版 13)

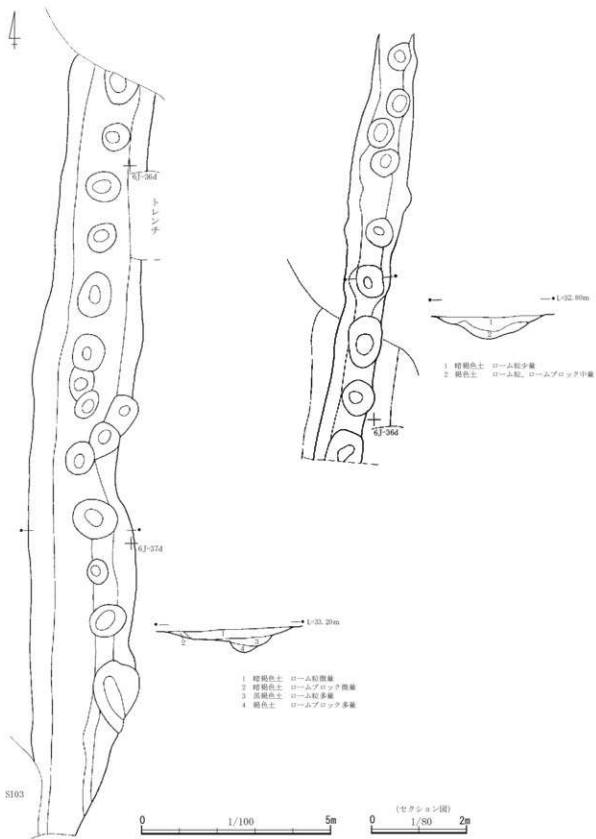
6J-38～7J-23 に存在する。南北に伸びる、長さ約 56m、幅約 2.7～3.8m の溝である。SD03 と同じく溝中心部にビットが 1 列に並ぶ構造をしており、またその位置からも SD03 と同一の遺構である。中世以降の道路であると考えられる。また、少し距離があるが内野遺跡の SD05 も同様の構造であり、同一遺構の可能性もある。

SD05 (第 37 図、図版 13)

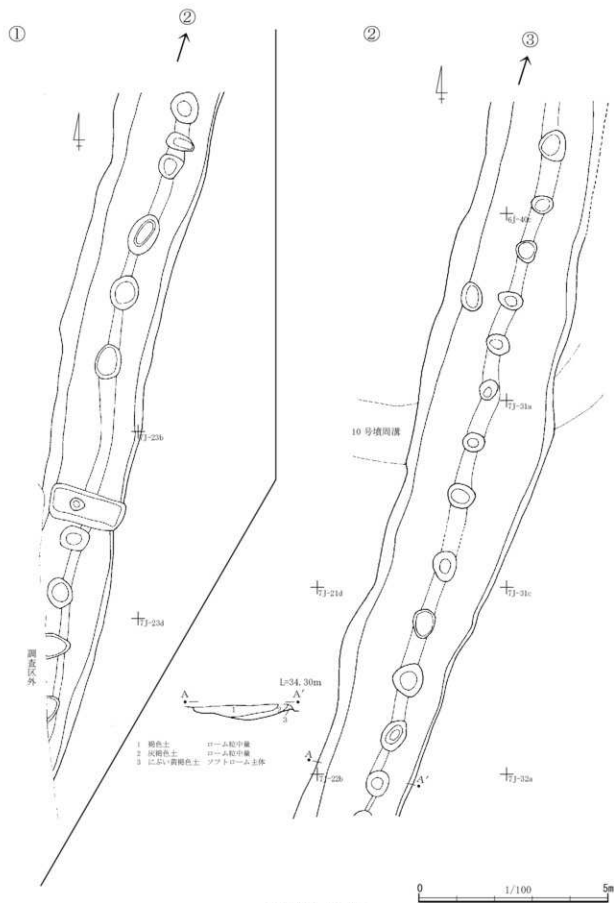
7J-31～41 に存在する半円状の溝である。長さ約 9.6m、幅約 0.6m を図る。付随するものがほかにないため、溝としたが、周辺より円形の周溝を持つ内野古墳群の古墳が検出されているため、大半が削平された古墳の周溝の可能性もある。縄文土器片が 1 点出土したのみで、時期を示す遺物は検出されていない。



第34図 SD01・02

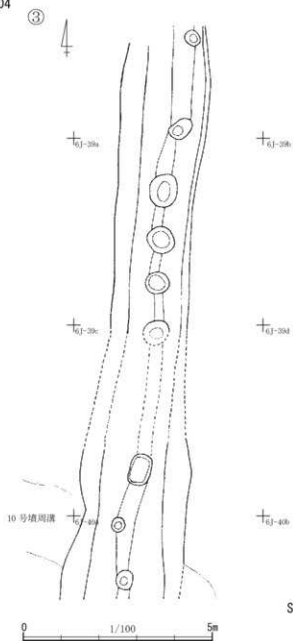


第35図 SD03

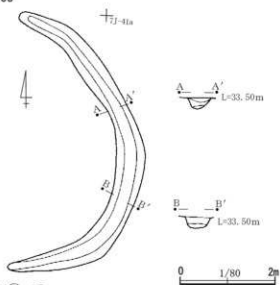


第36図 SD04①

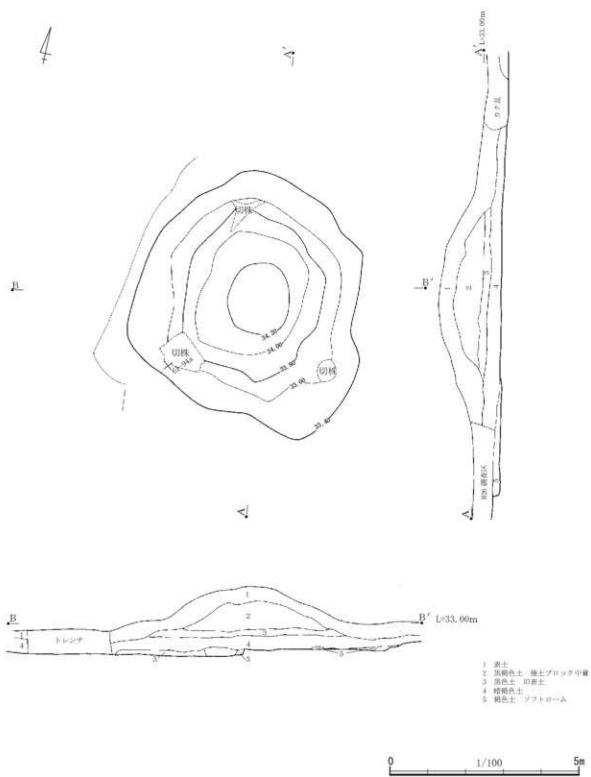
SD04



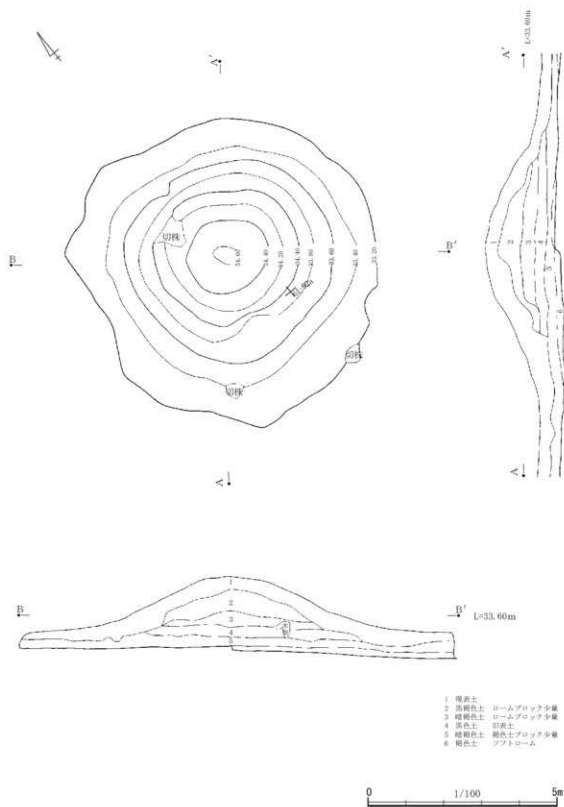
SD05

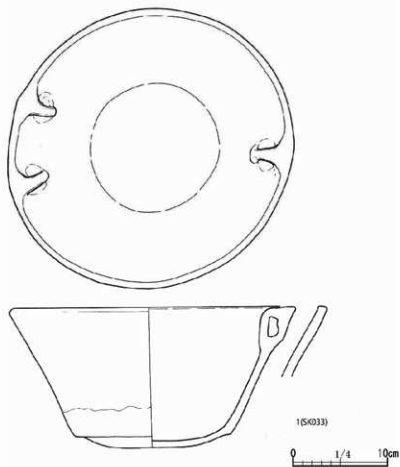


第37图 SD04②・05



第38図 01号塚





第40図 中世出土遺物

だ円形の塚である。高さは1.5m。土層断面図より、01号塚と同様の構築法であり、やはり古墳ではなく中世以降のものであると判断した。遺物は13点出土しているが、細片であり図化はできず、時期を示すものもなかった。

3 人骨 (第41・42図、第3表)

観察所見

人骨が土坑墓SK020、SK022、SK033、SK036から出土したと記録されている。しかし、保存されていた人骨は遺構別に分別されておらず、詳細は不明である。ただ、出土状況の記録やメモなどにより、SK020からは焼骨片、SK022からヒトの遊離歯3本、SK036からは骨片が出土したとみられ、1点はヒトの寛骨(大坐骨切痕部分)と思われる。また、SK033からは前述のとおり内耳土鍋の下から頭蓋、上顎、歯が出土している。

SK033 出土人骨

ある程度大きな破片で保存されていたのは頭頂骨、後頭骨、錐体LR、上顎骨R、頬骨Lである。保存状態から同一個体と考えられ、SK033から出土した鍋被り葬人骨であろうと推察される。頭頂骨で観察できた冠状縫合、矢状縫合、人字縫合は内板ですべて閉鎖・消失、外板では解放しているが部分的に消失している。乳様突起は小さい。後頭骨の十字隆起は顕著である。頭蓋骨片と同じテンバコ内には鍋被り葬人骨の頭蓋骨と部位が重複する頭蓋骨片も保存される。これらの頭蓋骨片が同一個体であるかは判然としないが、最低でも2個体分の人骨が含まれている。

SK036 出土人骨

塚

塚は2基検出した。時期を判別できる遺物は出土していないが、いずれも塚の形状や盛り土の様子、周溝を持たない点から古墳ではなく、中世以降構築されたものと判断した。

01号塚 (第38図、図版13)

6I-93aに存在する。6.0×6.4mのやや歪んだ方形の塚である。高さは1.2m。土層断面図より、旧表土上に大きく盛り土をした後、周囲を成形して塚を構築していることがわかる。こうした構築方法や塚の形状などから、古墳ではなく、中世以降の塚であると判断した。遺物は123点出土しているが、いずれも細片であり図化はしていない。中には古墳時代以降のものと思われる甕の口縁もあつたが、本遺構に伴うものではないと考えられる。

02号塚 (第39図、図版13)

6I-92aに存在する。径8.2mの歪ん

寛骨の恥骨が1点保存されていた。

その他の人骨

そのほか椎弓破片、上腕骨遠位骨端の一部、尺骨遠位骨端の一部、肋骨の一部が保存されているが、保存状態は不良で観察に堪えられない。

観察に堪えるのは歯牙のみであり、保存されていた歯牙は22点を数える。観察結果は一覧に示すとおりである。表記の凡例は以下の凡例のとおりである。

歯種

上/下の表記は上顎歯/下顎歯の別を示す。R/Lの表記は右顎側/左顎側の別を示す。歯種の別は歯牙記号を用い、中切歯=I1、側切歯=I2、大歯=C、第1小臼歯=P1、第2小臼歯=P2、第1大臼歯=M1、第2大臼歯=M2、と記す。

保存

保存状態は歯冠/歯根の順で、○=完存、△=一部欠損、×=全部欠損、を示す。

咬耗

咬耗の度合いは橋原分類（橋原 1957）に準拠する。その分類は、咬耗がエナメル質にとどまる状態を1°とし、それが点状または線状であるものをa、面状または帯状であるものをb、全面に互るものをcに細分する。咬耗が象牙質に及ぶ状態を2°とし、その露出が点状または線状であるものをa、面状または帯状であるものをbに細分する。咬耗が象牙質に及びその露出が全面に互る状態を3°、歯頸部に及ぶ状態を4°とする。

齶蝕

齶蝕がある場合は+で示し、() 内には発生箇所を記載する。

参考文献

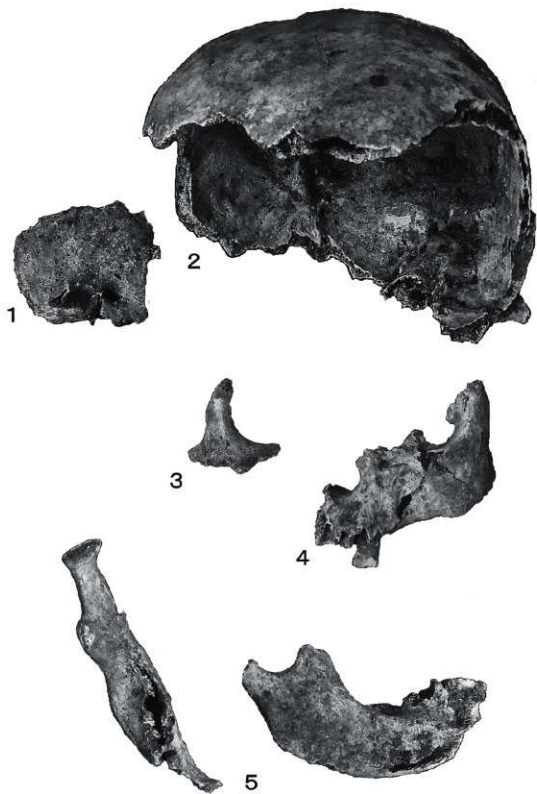
金子丑之助 1982『日本人体解剖学 第一巻』第18版 南山堂

橋原 博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究 第1編～第4編」『熊本医学会雑誌』第31巻 補冊第4 p.1-50 熊本医学会雑誌

藤田恒太郎・桐野忠大・山下靖雄 1995『歯の解剖学』第22版 金原出版

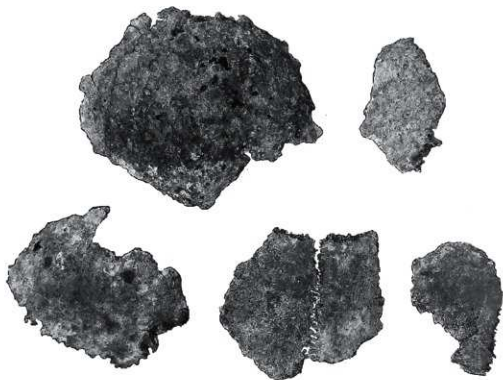
第3表 木戸作遺跡歯牙一覽

齒種	保存	咬耗	齧蝕
	冠/根		
上I1R	○/△	2° a	
上I1L	○/△	2° b	
上I2L	○/×	1° a	
上CR	○/△	2° b	
上P1R	○/△	2° a	
上P1L	○/×	2° b	
上P2R	○/○	1° b	
上P2L	○/×	2° b	
上M1R	○/×	2° a	+(頰側咬合面)
上M1L	○/×	2° b	+(頰側咬合面)
上M2R	○/×	2° a	+(頰側咬合面)
下I1R	○/△	2° b	
下I2R	○/△	2° b	
下I2L	○/△	2° b	
下CL	○/○	2° a	
下P1R	○/△	2° a	
下P1L	○/△	2° b	+(近心面齒頸部)
下P2R	○/○	1° b	
下M1R	○/×	2° b	+(頰側咬合面)
下M1L	△/○	2° a	+(頰側咬合面)
下M2R	○/×	2° b	+(頰側咬合面)
下M2L	△/○	2° a	+(頰側咬合面)



第41図 木戸作遺跡出土人骨(1)

1 錐体L 2 頭蓋骨(前面視) 3 上顎骨R 4 頬骨L 5 下顎骨R

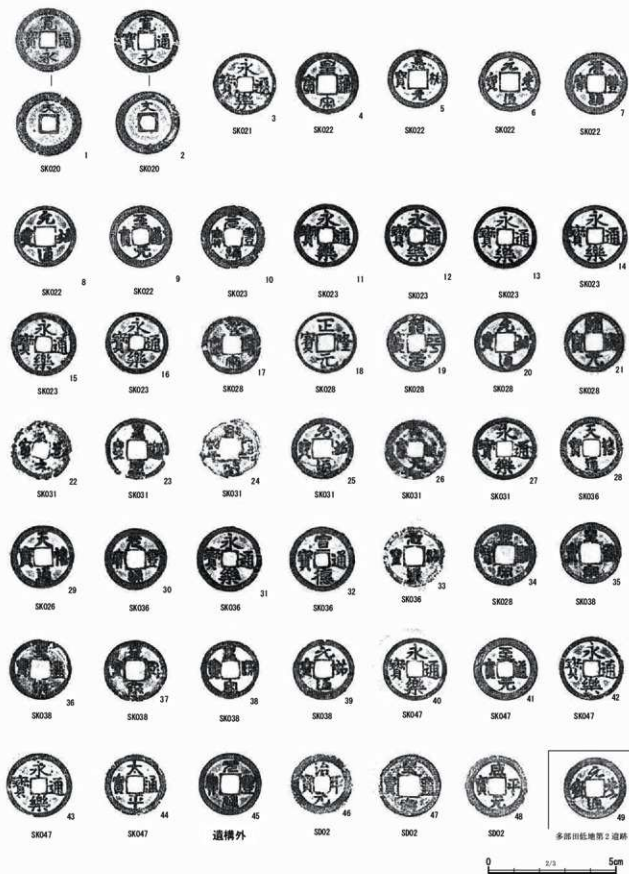


第42図 木戸作遺跡出土土人骨(2)

4 銅銭 (第43図・付表10)

44枚の銅銭が土坑墓SK020～023・028・031・036・038・047・053より出土している。いずれも六道銭であると思われる。内訳は、唐銭(開元通寶)1枚、北宋銭8種(太平通寶、至道元寶、天禧通寶、皇宋通寶、治平元寶、嘉祐元寶、元豐通寶、元祐通寶)25枚、金銭(正隆元寶)1枚、元銭(至元通寶)1枚、明銭2種(永樂通寶、宣德通寶)13枚、日本銭(寛永通寶文銭)2枚となっている。詳細は付表10にも示したが、SK021・023・031・036・047から永樂通寶が、SK020から寛永通寶2枚のみが出土している。それ以外は北宋銭が中心である。また、各土坑墓からの出土枚数は、SK020・021・053以外は5～7枚で、優占的な銭種は北宋銭、あるいは永樂通寶である。

また、土坑墓以外に、縄文時代の土坑(SK053)と中・近世の溝(SK02)から4枚北宋銭が出土しているが、混入であると思われる。



第43図 銅銭

第3章 内野遺跡

第1節 概要

1 地形と概要

当遺跡は平和公園遺跡群の中央部にあり、都川が開削した谷に面した台地の奥、平坦面上にある。現在は大部分が平和公園の墓地として利用されている。北には同じ台地上に木戸作遺跡、東側には多部田貝塚、貝殻塚遺跡、ムグリ遺跡などがある。当遺跡と木戸作遺跡にまたがる古墳の分布範囲は内野古墳群として登録されており、第6章に記載した。

当遺跡では縄文時代と奈良時代～平安時代中期ごろの住居跡、中・近世の溝、土坑が見つかっている。奈良・平安時代には、未調査域も多く残ることから範囲は不明確だが、東部に集落を形成していたとみられる。

2 発掘調査（第44図）

当遺跡は昭和46年から主に平和公園整備に伴う調査が行われた。しかし、正式な遺跡名称や範囲を特定せず、木戸作遺跡、多部田貝塚との境界を定めないうまま、A地点・B地点…と仮の名称を付して事業が進められ、既存の報告書においても整理を行っていないため、遺構や遺物の帰属が明らかでないものがあった。本報告書において範囲を検討し、第1図のように整理した。今回帰属が変更になった遺構・遺物も生じている。

（1）報告済みの調査

昭和46年度

平和公園の造成に伴う道路建設作業中に円墳（内野古墳群5号墳）が一部破壊されたことを契機に加曾利貝塚博物館が緊急確認調査を実施した。本書では、平和公園整備事業以前の発掘調査（予備調査）と位置付けている。この年度に調査したのは、調査時点で「多部田A・B遺跡」とされ、後に平和公園A地点・B地点とされた部分と（第1図）、木戸作遺跡に含まれるとみられる地点の計3地点である。このうち、A地点の約3,500㎡の調査が内野遺跡に属する。ここでは古墳時代の住居跡が1軒(S101)検出されたという文字記録があるが、図面や遺物等は残されていないため詳細は不明である。なお、B地点については地形的にみると当遺跡に含めることも検討したが、北東部から入る谷頭と、縄文後期の遺物集中の存在により、多部田貝塚に含めることにした。

昭和47年度

平和公園C地点として約14,000㎡/85,000㎡の確認調査を行った。縄文時代と平安時代の土坑（SK001）が検出され、縄文土器や古代の甕、台付鉢などが出土している（『平和公園Ⅱ』）。

昭和48年度

平和公園D地点として約2,900㎡/29,000㎡の確認調査を行った。遺構は検出されず、縄文土器、須恵器、石斧などが表採された（『平和公園Ⅱ』）。

昭和57年度

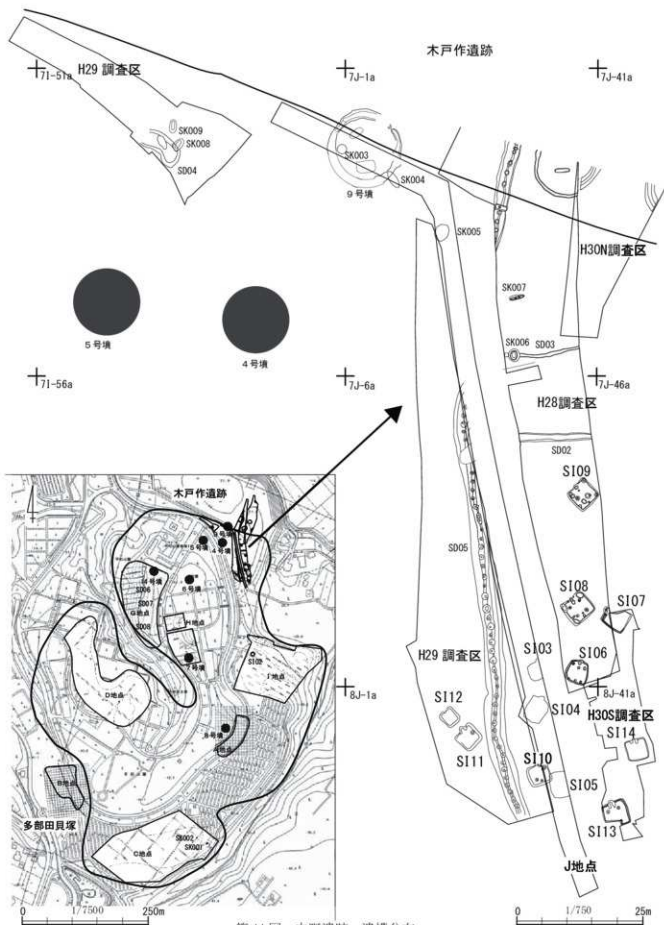
内野遺跡G地点として約6,233㎡/10,000㎡を調査した。円墳（内野古墳群14号墳）と溝（SD06～08）、土坑が検出された（『平和公園Ⅱ』）。

昭和58年度

内野遺跡H・I地点として1,633㎡/16000㎡の確認調査を行った。I地点で縄文時代住居（S102）が検出されている（『平和公園Ⅱ』）。

昭和59年度

市道建設に伴う調査で内野遺跡J地点として557㎡を調査した。縄文土坑と古墳（内野古墳群9号墳）、古代住居（S103～05）が検出されている（『平和公園Ⅱ』）。



第44図 内野遺跡 遺構分布

平成8年度

木戸作遺跡から本遺跡にかけての1,622 m²/18,000 m²を対象に確認調査を行った(『千葉市年報10』)。

(2) 未報告の調査

これ以降の調査は報告書未掲載であるため、詳細を本書で報告する。

平成28年度-1

昭和59年度調査区の東側、木戸作遺跡から内野遺跡にかかる2,200 m²を調査した。内野遺跡に属するのはそのうちの約1,300 m²である。縄文時代土坑、古代住居(SI06~09)などが検出された。

平成28年度-2

J地点の南側を対象として、254 m²/3,300 m²の確認調査を実施した。縄文時代土坑、古墳の周溝、奈良時代住居、中・近世の溝が検出された。

平成29年度

昭和59年調査区の西側、南北2カ所、合計1,700 m²を調査した。縄文時代土坑、平安時代住居(SI10~12)、中・近世の溝(SD04・05)が検出された。

平成30年度

平成28年調査区の東側と南側に合計1,550 m²の調査区を設定しており、当遺跡に帰属する範囲は南側の調査区(B30S)の約450 m²である。奈良・平安時代の住居跡(SI07・13・14)が検出された。

第2節 縄文時代

住居跡 I地点で中期中葉・加曾利EⅡ式期の住居跡を検出しており(SI02、『平和公園Ⅱ』第226図、旧A-001)。本書では遺構写真を掲載した(図版24)。竪穴の形状や炉の位置から2軒が重複している可能性が高い。加曾利EⅡ式のかなり新しい段階の連弧文系とキャリバー系の大破片が覆土下層から出土している。遺跡群全体で加曾利E式前半の遺構はきわめて少なく、木戸作遺跡のEⅠ式期小竪穴1基と、この住居跡のみである。なお、SI02では晩期安行式も取り上げられているが流入であろう。

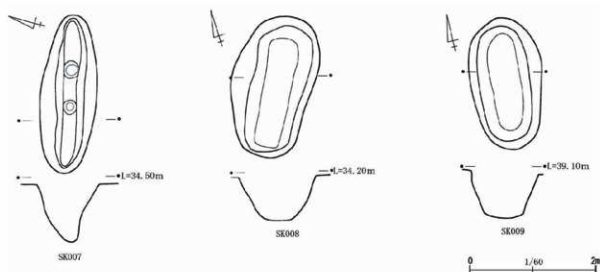
土坑 遺跡南端のC地点で径1.0mの丸底の掘り込みを検出しており(『平和公園Ⅱ』所収SK002、第221図、旧C-002、2号土坑)、加曾利B2式の深鉢2点が出土している。

陥し穴 遺跡北端で6基検出している(SK003~005、007~009)。SK003~005はいずれも楕円型である(『平和公園Ⅱ』第233図)。SK007~009は007が小さな溝型、008・009は楕円型である(第45図)。

土器 A地点からD地点及び、遺跡一括の縄文土器が183点ある。内訳は付表2-2の通りであり、C地点D11区で阿玉台Ⅱ式と加曾利B式の粗製土器がまとまっている。D地点では加曾利EⅡ~EⅢ式と加曾利B2~B3式がややまとまっている。19点を掲載した。(図版28)

1は早期中葉・田戸下層式土器である。フネガイ科貝殻の腹縁押玉による意匠をもつ。2~5は中期の阿玉台式で、阿玉台Ⅲ式が中心である。6~8は加曾利E式で、6はEⅡ~EⅢ式のキャリバー系、7はEⅡ式の連弧文系、8はEⅣ~後期・EV式であろう。9~19は後晩期の土器。9・10は加曾利B1~B2式の横帯文系、11はB3式、12は安行1式の深鉢、13・14は加曾利B式の粗製土器である。15~19は晩期の土器で、15~17は安行3a、18・19は安行3c・前浦式であろう。

石器 4点あり、剥片2点、磨製石斧を磨石類に転用したもの1点、礫石斧?1点である(図版28)。このほかに加曾利貝塚博物館が採集した石棒2点がある(『平和公園Ⅱ』所収、第234図2・3。2は頁岩製の有頭、3は石剣形の破片である)。



第45図 陥し穴

第3節 弥生時代

当該時期の遺構は見つかっていないが、遺構外で弥生土器片が出土しており、写真を掲載した(図版29)。ほかに宮ノ台式と思われる小片があり、木戸作遺跡の弥生時代遺構と同時期の土地利用を示唆している。

第4節 古墳時代～平安時代

1 概要

当該時期の住居跡であるSI03～05は『平和公園Ⅱ』で報告済みのため、概要のみ記した。また調査時にグリッドが設定されていなかったため、図面よりその位置を決定した。

古墳時代の遺構は詳細不明のSI01のみである。この時期の主体は内野古墳群に属する古墳である。未調査域が広く断定はできないが、住居域としての利用は低調であり、墓域として認識されていた可能性が高い。

奈良・平安時代の遺構は、遺跡の北東部に集中しており、8世紀後半から9世紀末まで集落を形成している。最盛期は9世紀後半である。未調査域への広がりを考慮すると比較的大規模な集落であった可能性がある。

また、SI07には粘土の堆積と土器の薄片が、SI09にはロクロビットと思われる土坑があることから、これらの住居跡は土器工房であると思われる。さらに、遺構内からは数百点の遺物が出土しているが、覆土の堆積状況から人為的に埋め戻しが行われ、連続して土器の廃棄が行われたようである。遺構外より瓦片が出土している。

2 遺構

住居跡

SI01

昭和46年度の調査で古墳時代後期(鬼高期)の住居が検出されたとの記録があり、SI01とした。その際の調査範囲より内野遺跡に属するものとしたが、図面や遺物は残されておらず、詳細は不明である。

SI03 (図版24)

『平和公園Ⅱ』では「84-A-001」として報告されている(『平和公園Ⅱ』所収、第230図)。7J-70に位置する。調査されたのは西側半分で東側は調査区外である。そのため推測となるが、2.6m×1.6mの方形の住居跡と思われる。深さは約0.1m。カマドの構造物は残存していないが、黒褐色土の堆積がみられた。そこがカマドであったとすると主軸方位はおおよそN-11°-Wとなる。出土した遺物の高台坪には、重ねて焼成した痕跡がある。遺物の形状より奈良時代のもと思われる。

S104 (図版 24)

『平和公園Ⅱ』では「84-A-002」として報告されている(『平和公園Ⅱ』所収、第231図)。8J-61に位置する。調査されたのは西側半分であるが、2.9m×1.3mの方形の住居跡と推測される。カマド部分は調査されていない。ピットが3つ検出されており、うち2つは柱穴、もう1つは入り口施設であると推測される。出土遺物は坏、皿、甕、甔などである。これら遺物より遺構の時期は8世紀末から9世紀初頭であると思われる。

S105

『平和公園Ⅱ』では「84-A-003」として報告されている(『平和公園Ⅱ』所収、第232図)。8J-72に位置する。調査されたのは西側1/3ほどであり、検出された一辺は3.6mである。カマド部分は調査されていない。出土遺物は坏、甕、支脚などである。これら遺物より遺構の時期は9世紀後半としたい。

S106 (第46・52～54図、図版24・29・32)

7J-40に位置する。3.8m×3.9mのややゆがんだ方形、深さ0.3mの住居跡である。主軸方位はN-20°-E。壁溝はカマドを除き全周する。カマドは崩壊し、構造物は残っていないが、その掘り込みが北壁中央に見られる。ピットは6つ検出されているが、P1が隅丸方形を呈するなど、いずれも浅く、その形状から柱穴ではないと思われる。遺物は404点出土し、やや南に偏る。47点を図示した。多くが床面から浮いてはいるが、ややゆがんだ立方体に切り出された把手を持つ甔(38・39)や口縁に比して径の小さい底を有する小さい坏(7)などから9世紀前半の住居跡であると考ええる。やや甕が多く、坏はわずか、皿は見られない。

S107 (第46・54～57図、図版24・25・29・30・32)

7J-50に位置する。西の一部は平成28年度に調査し、平成30年度に、その部分も含め、南部も調査している。北辺が木根による破壊と調査区外のため未調査となっているが3.8m×3.8mの略正方形の住居跡と推測される。深さは調査区域では0.6mを測る。主軸方位はN-61°-W。カマドは北西壁中央に位置するとおもわれる。壁溝は南西のみ確認できる。埋土堆積状況から人為的に埋められたものと考えられる。中央から南東側床面にかけて焼土と粘土の堆積が確認された。遺物の多くはその焼土周辺から出土しており、床面付近のものが多い。柱穴等は見られない。ロクロピットも見られないが、粘土の堆積と、103のような焼成粘土の薄片の存在から土器工房とみられる。遺物全842点のうち、61点を図示した。非常に多くの遺物も、住居を埋めた際に廃棄したものであると考えられる。図化していないが、布目のある土器小片が出土している。瓦のようにも見えるが、古代瓦にしてはあまりにも薄い。古代瓦の表面が焼成後に剥離したものであろうか。遺構の年代は坏の形状より9世紀後半としたい。

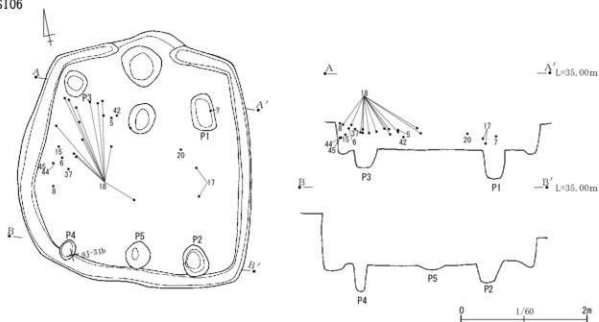
S108 (第47・57・58図、図版25・30・32・33)

7J-39に位置する。4.3m×4.8mのややゆがんだ方形、深さ0.5mの住居跡である。主軸方位はN-36°-W。壁溝はカマド～北隅を除き全周する。カマドは北西壁中央に位置する。P3を除く主柱穴は上部が広がっており柱の抜き取り跡であると思われる。カマドの両脇と南壁寄りにもピットがみられる。南壁寄りのもの(P5,8)は出入口施設の可能性がある。南隅には短い仕切り溝、また、東を除く隅には浅く扁平な土坑が掘られている。遺物は349点出土し、やや南東に偏る。床面より浮いているものが多いが、35点を図化した。遺構の時期としては、坏の体部の角度が比較的立っていることと、切り出された角柱の甔の把手(134)がみられることから9世紀半ばとする。

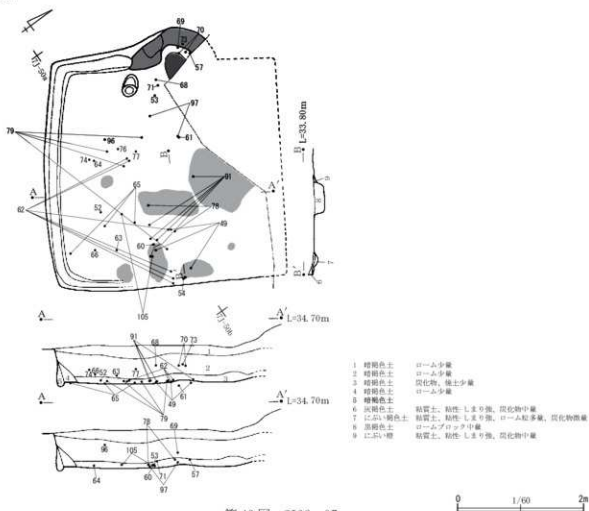
S109 (第48・58～61図、図版25・30・33)

7J-38に位置する。4.1m×4.2mのややゆがんだ方形、深さ0.4mの住居跡である。主軸方位はN-46°-W。壁溝はカマドを除き全周する。床面には多くのピットが開けられているが、いずれも浅く扁平で、柱穴は明らかではない。南東壁際のP6は出入口施設に伴うものか、P3は中心のみが深く陥入しており、その周囲は浅く扁平であ

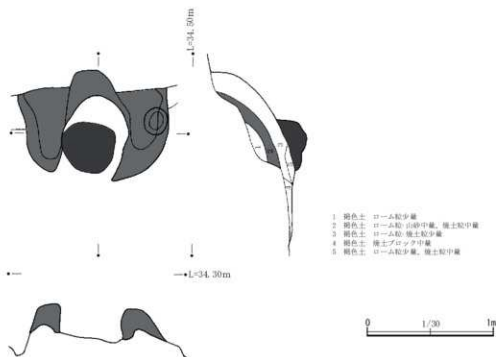
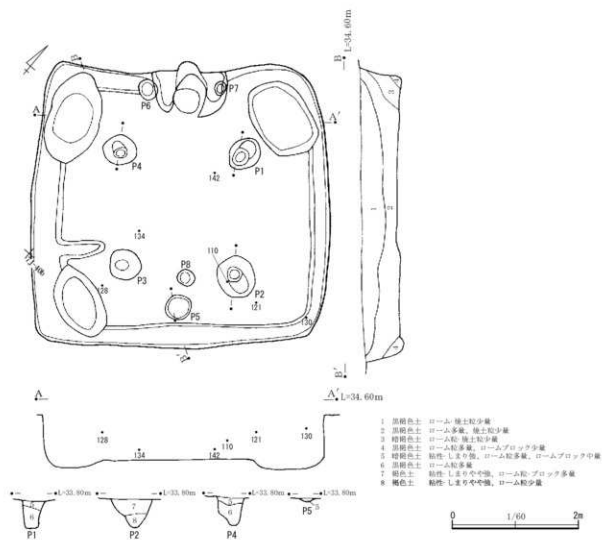
S106



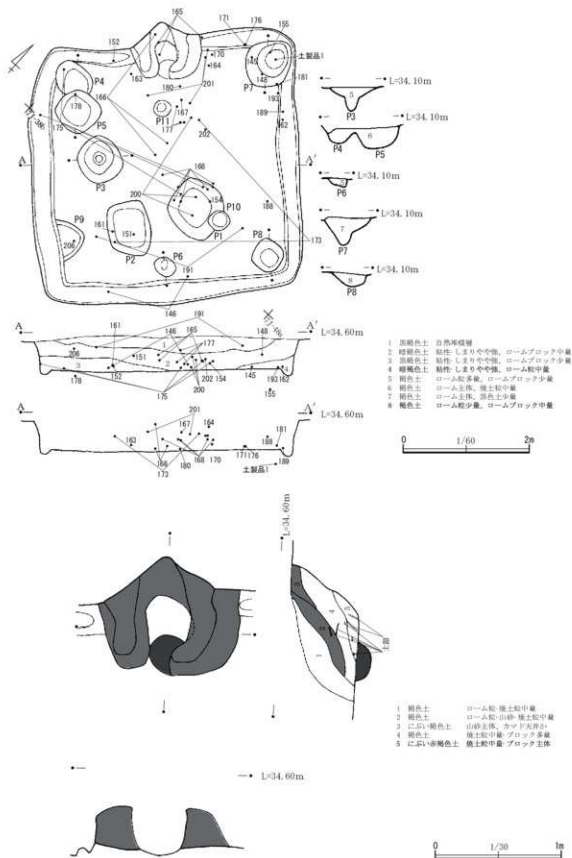
S107



第46図 S106・07

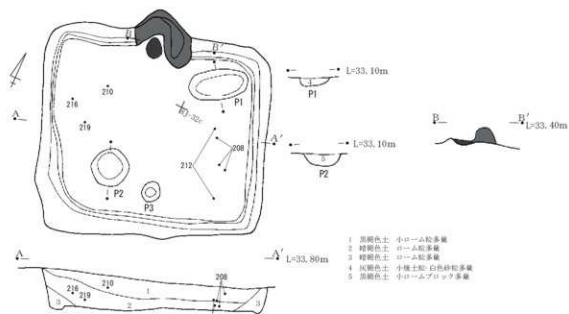


第47図 SI08

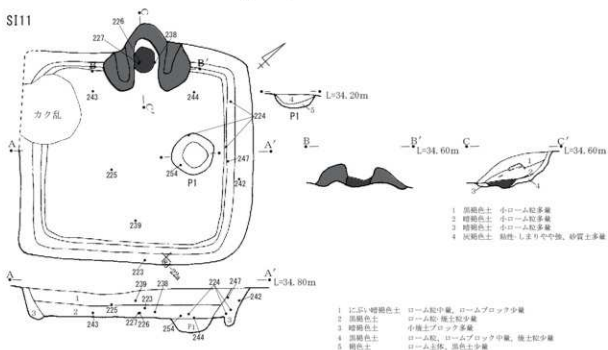


第48図 S109

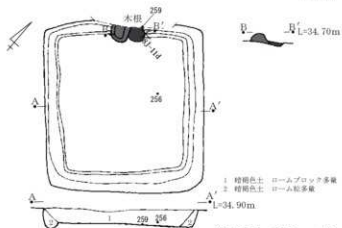
S110



S111

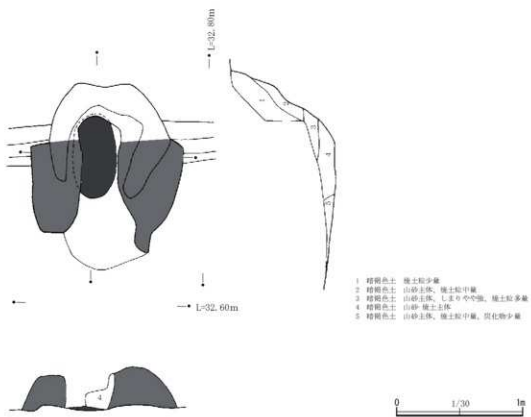
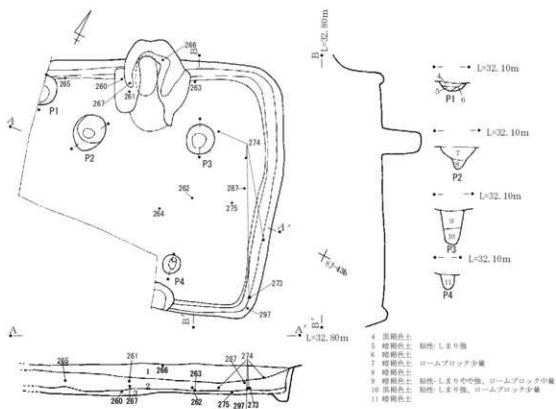


S112



第49図 S110～12

0 1/60 2m



第50図 SI13

る。ロクロビットであり、この住居が土器工房の可能性もある。遺物は593点出土し、内63点を図示した。出土分布は北と南に偏りがある。2層中のものが多い。坯の口縁径と底径の比を見る限り10世紀までにはくだらな。千葉市域における皿の出現を考慮し、当遺構の年代は9世紀第4四半期とする。上記の通り遺物の数が多く、その器種も、甕が全体の3/4と大きく偏っている。また、破片ではあるが、表面にタタキ目のある甕・甔もいくつかみられた。いずれの遺物も手擦れ感はなく、通常の生活に使用していたものではないであろう。158は墨書土器である。2文字目の下半分以降が欠失しており、判然とはしないが、「万加」ではないかと思われる。204は、焼成前の切筋痕のある土器の破片である。表面には縦位のタタキ目を有しており、当初は甕として成形したものの、何らかの理由で胴部を切断して焼成したようである。内面に墨とみられる黒色物質が付着しており、硯に転用したと考えられる。内田端山越遺跡の住居のカマドから、204と同様に焼成前の甕胴部を切り出し、形状を再調整した円面硯が出土している。204は、小片であり、硯としての形状は不明であるが、同様のものであると考ええる。

S110 (第49・62図、図版25・31・33)

8J-31に位置する。3.2m×3.6mの長方形、深さ0.4~0.5mの住居跡である。主軸方位はN-19°W。壁溝はカマドを除き全周する。カマドは北壁中央にある。床面に3つビットは見られるが、いずれも浅く扁平で、柱穴ではないと思われる。南壁よりのP3は出入口施設の可能性がある。遺物は132点出土しているが、東と西に偏りがあり、2層から出土したものが大半である。15点を図示した。甕口縁の形状(209~212)と非ロクロ坯(218・219・221)より8世紀後半の遺構としたい。

S111 (第49・62~64図、図版26・31・33・34)

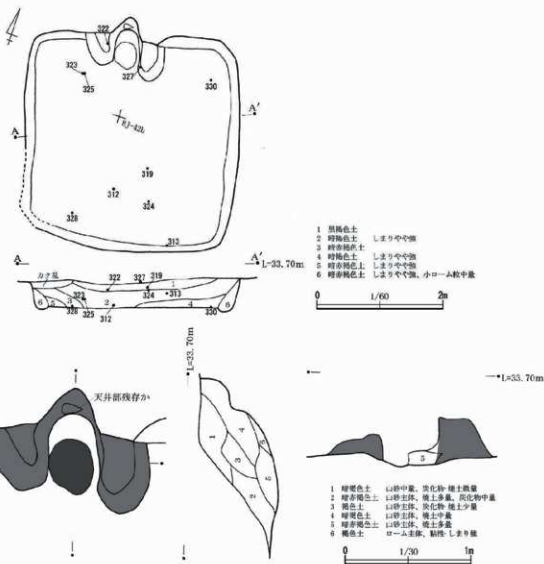
8J-11に位置する。3.5m×3.7mの略正方形、深さ0.4mの住居跡である。主軸方位はN-46°W。カマドは北西壁中央に位置する。壁溝はカマドを除き全周する。北東壁寄りの床面にビットを検出したが扁平で浅く、柱穴かどうかは不明である。遺物は357点出土し、偏りは見られない。32点を図示した。254は床面から出土しており、器種は不明であるが上端がへらのようなもので切られた後、焼成されている。その点は、S109の204と同じであるが、破片の形状として254は湾曲がきつく、また炭の付着も見られないことから、硯とは考えにくい。別の用途であると思われるが詳細は不明である。遺構の時期については甕胴部下端のタタキ目と底部近辺のヨコヘラケズリの組み合わせ(238)、口縁の上方へのつまみ出し(239)、甔(240)の把手形状、坯(246)体部の角度などから9世紀後半としたい。

S112 (第49・64図、図版26・31・34)

8J-11に位置する。2.7m×2.5mの方形、深さ0.4mの住居跡である。主軸方位はN-40°W。壁溝はカマドを除き全周するが北東壁側の溝は浅い。カマドの煙道部は木根で破壊されている。床面に柱穴、ビットは見られない。遺物は69点出土している。5点を図化した。ほかにかマド近くに多数の被熱破片が散らばっていた。何らかの祭祀の跡とも考えられるが詳細は不明である。遺構の時期としては、256の甔の把手は古い形状ではあるが、甕の折り返し口縁(255)やロクロ成形の坯(259)などから9世紀第2~3四半期としたい。

S113 (第50・64・65図、図版26・31・34)

8J-32に位置する。南西部1/3ほどが調査区外にあるが、4.0m×4.0mの略正方形の住居跡と推測される。深さは0.3mを測る。主軸方位はN-24°W。カマドは北壁中央に位置する。壁溝は、調査部分はすべて廻る。主柱穴も2つ残存する。そのうち1つは上部が広がっており、柱を抜き取ったものと思われる。遺物は438点出土しており、まんべんなく分布し、2層に多く含まれる。46点を図化した。覆土の堆積が住居の壁付近まで水平を呈していることから、人為的に埋没した可能性がある。時期に関しては、甔(262)の頭部の多段継ぎ目、甕の胴部のタタキ目(268)、継ぎ目のある緩やかなカーブを持つ頭部(273~275)、坯(286)底部周縁の形状、蓋(298、



第51図 S114

304)の頂部形状などから9世紀後半のものであるが、床面少し上の260の口縁形状、275の開いた口縁の形などから9世紀半ばとしたい。

S114 (第51・66・67図、図版26・31・34)

8J-41に位置する。3.4m×3.4m、深さ0.4mの略正方形の住居跡である。柱穴は見られない。壁溝は、主軸方位はN-16°-E。カマドは北壁中央に見られる。遺物は172点出土しており、特に偏りは見られない。26点を図化した。遺構の時期は、襖口縁の上方へのつまみ出し(320)や折り返し口縁(312)や、襖の胴部に施された縦位タタキ目と横位区画線(323)などから、9世紀後半としたい。

土坑

SK001

『平和公園Ⅱ』で1号土坑、72-C-001として報告されている。『平和公園Ⅱ』所収、第221図)昭和47年、C地点の調査で検出された土坑である。短頸壺が出土し、その中から火葬骨が見つかった(後述)。時期については出土した短頸壺の縦位タタキ目と横位区画線から9世紀後半と考えられる。

3 金属遺物 (付表8)

SI09から鉄滓、SI13・14から刀子が見つかった。いずれも状態が悪く図化はしていない。

4 遺構外遺物 (第67・68図、図版32・34)

折り返し口縁のある甕(352・358・359)や高台坪(皿?、354・357)、線刻のある坏底部(360)など29点と、

土製品 2 点が見つかっている。土製品 2 (第 68 図) は、中心に残存部を上下に貫くように穴があけられており、羽口の可能性もあると考えたが、その穴は、本体の径に対して径が小さく、形状より支脚であるとした(末木 2017)。また、図化はしていないが、裏面に縄目が残る瓦小片が出土している。

5 人骨 (図版 34)

図版 34 は「C 地点火葬墓内出土? 火葬人骨・S47、7~8 月」という注記のある火葬人骨である。報告書刊行済みであり、「1 号土壙から短頸甕が出土し、火葬骨と思われるものが出土している」という記載(『平和公園 II』、p. 265)に当たるが、骨自体は未掲載であったため今回取り上げた。

焼骨の総量は 49.1g を測る。骨には被熱を受けた特徴的な変化が顕著に現れており、硬化が著しく割れ口が鋭い。焼骨は灰白色を基調とし、部分的に炭化物が吸着したような黒色を呈する箇所も見られる。重量感があり、骨同士がぶつかると金属的な音がする。千葉県我孫子下ヶ戸宮前遺跡では、中~近世の土坑墓群から焼骨が出土しており、次のように報告される。「(中略) 長管骨では亀裂面が髓腔に巻き込まれるような変形を見せ、(中略) このような劇しい変様は、軟組織が十分に付着した状態にある亡骸を、およそ 900℃ 以上の高温で長時間焼いたことを裏付ける現象(馬場ほか 1986)であり、端然と茶毘に付されたものと理解できる。」(我孫子市教育委員会 2019) 下ヶ戸宮前遺跡で出土した焼骨に比べると変形の程度が弱いが、高温で長時間焼かれたことが推察される。

焼骨は長管骨の破片が多く含まれており、部位の判別に至ったものは 2 点のみである。1 は大腿骨の骨体であり、ピラステルの柱状隆起が観察される。2 はおそらく脛骨の骨体と思われ、破片は黒色を呈する。

参考文献

- 松村博文 2004 「人骨について」『千葉市平和公園遺跡群 II うならず遺跡』千葉市教育委員会
我孫子市教育委員会 2019 『下ヶ戸貝塚VI 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書VI』我孫子市教育委員会
馬場悠雄他 1986 「根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『壺山根古屋遺跡の研究』pp. 93-113. 壺山根古屋遺跡調査団

第 5 節 中・近世以降

1 遺構

溝

SD02 (第 69 図、図版 27)

7J-36 に存在する溝で、東西に延びる。検出された長さ約 11.8m、幅 1.4m を図る。土器類が 13 点出土しているが細片のみである。中・近世の遺構と推測される。

SD03 (第 69 図、図版 27)

7J-25~35 に存在する溝で、東西に延びる。検出された長さ約 13.6m、幅 0.8m を図る。SK006 に切られている。遺物は土器片 3 点見つかっているが、いずれも細片で図化はできなかった。中・近世の遺構と推測される。

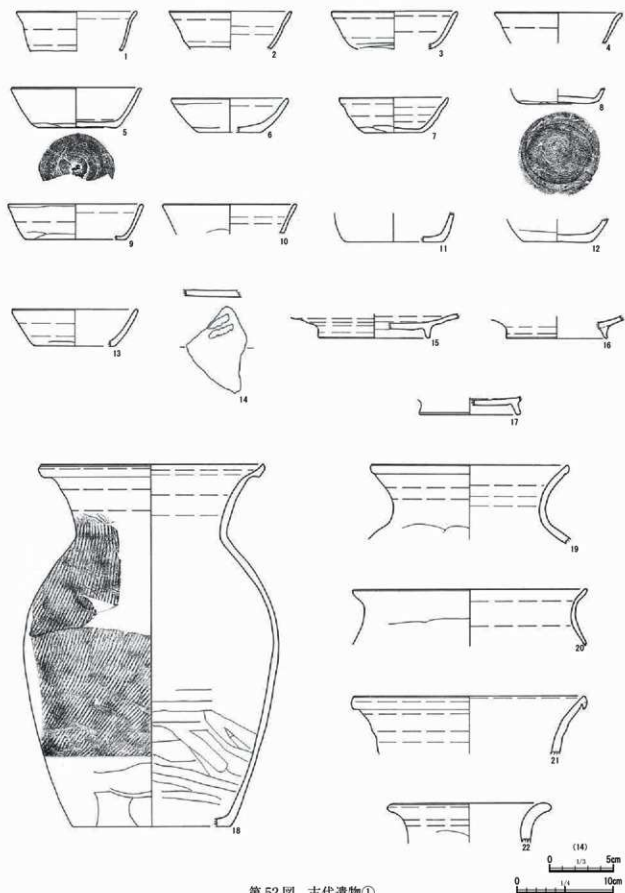
SD04 (第 70 図、図版 27)

7I-72 に存在する溝で、検出された長さ約 7.2m、幅 3.8m を図るが西側は明確でない。SK008 と重複する。溝としたがその形状から土坑の可能性もある。遺物は土器片 17 点のみで、いずれも細片であり図化はできず、また、人骨等も出土していないため詳細は不明である。

SD05 (第 67・71 図、図版 27・34)

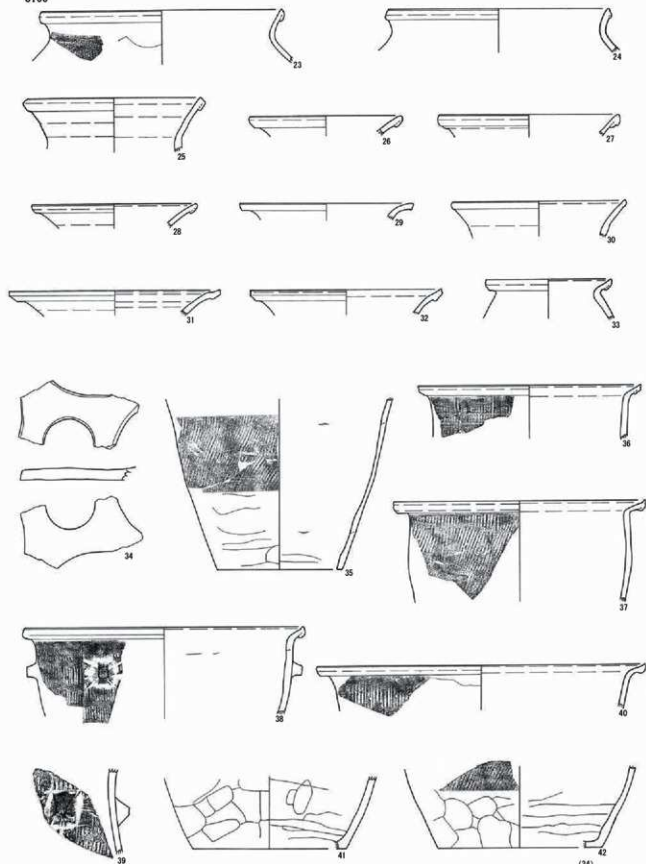
7J-26~8J-22 に存在する。南北に延び、溝の中心にピットが並ぶという構造をしている。検出された長さ約 29.6m、幅 1.28m を図る。その位置と方向、構造から木戸作遺跡の SD03・05 と同一の遺構であると考えられる。

S106



第 52 図 古代遺物①

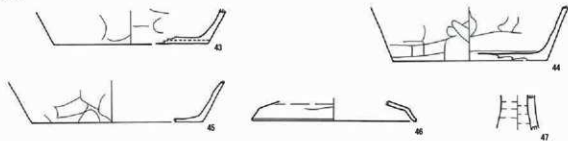
S106



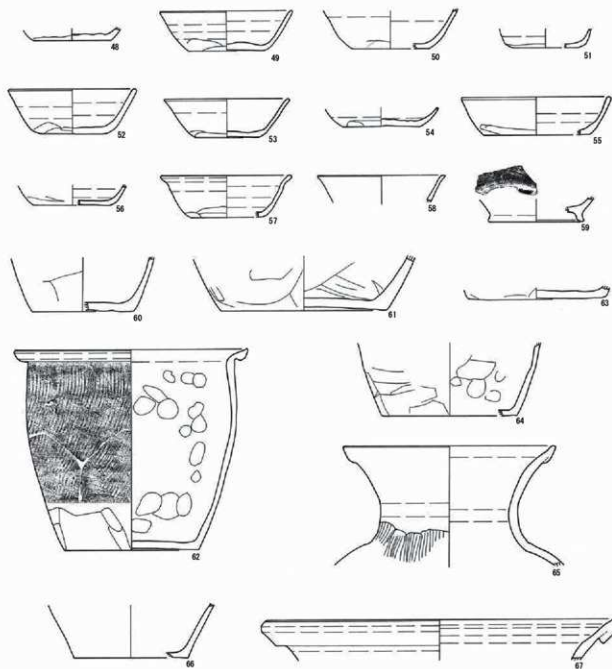
第 53 图 古代遺物②



S106



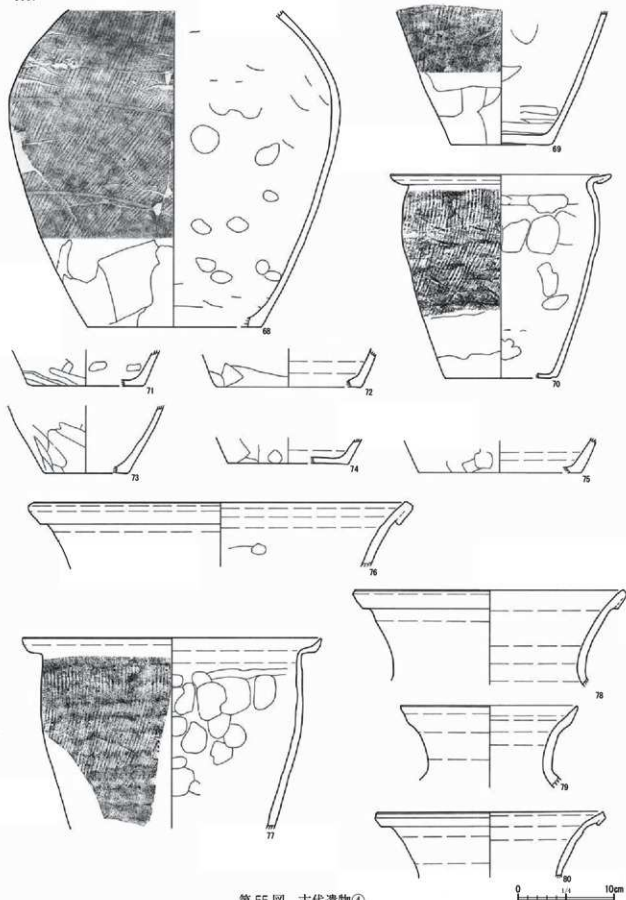
S107



第54図 古代遺物③

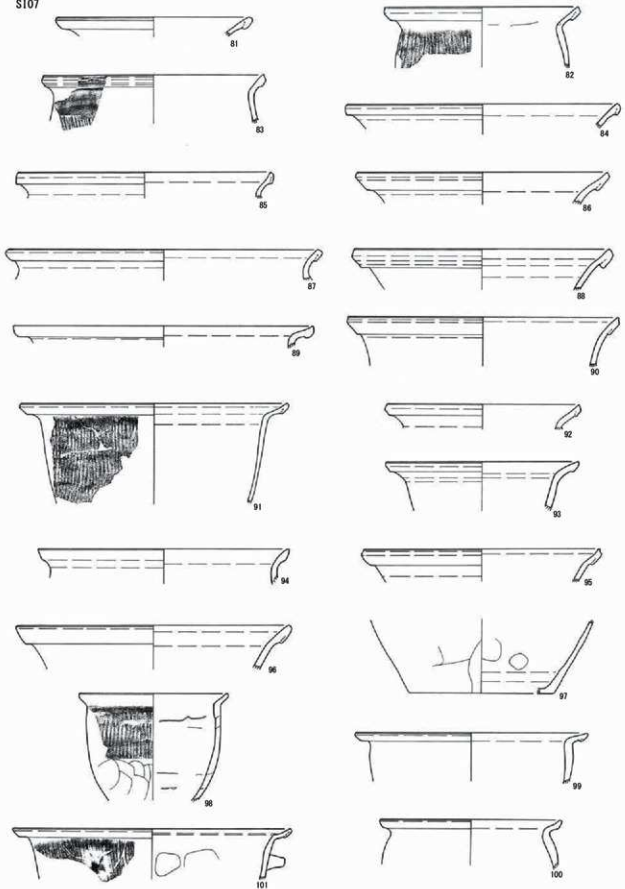


S107



第 55 图 古代遺物④

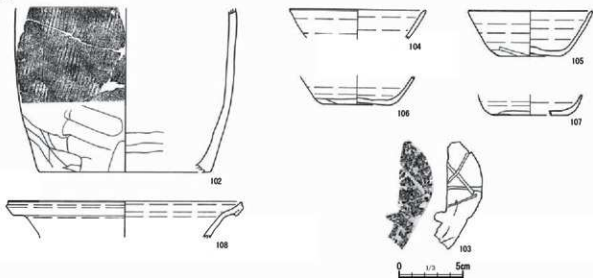
S107



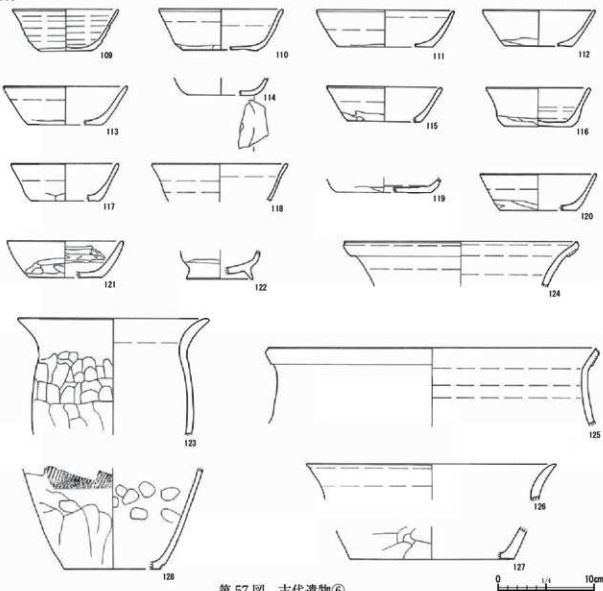
第 56 図 古代遺物⑤

0 1/4 10cm

S107

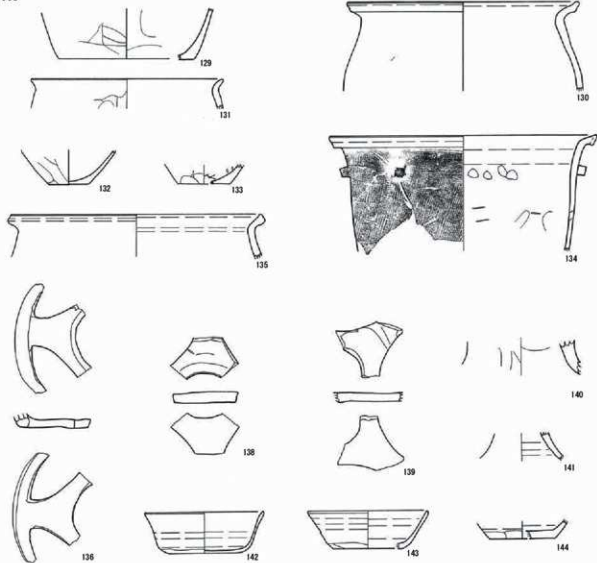


S108

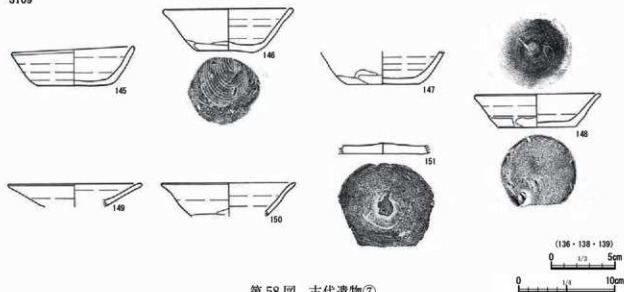


第 57 図 古代遺物⑥

S108

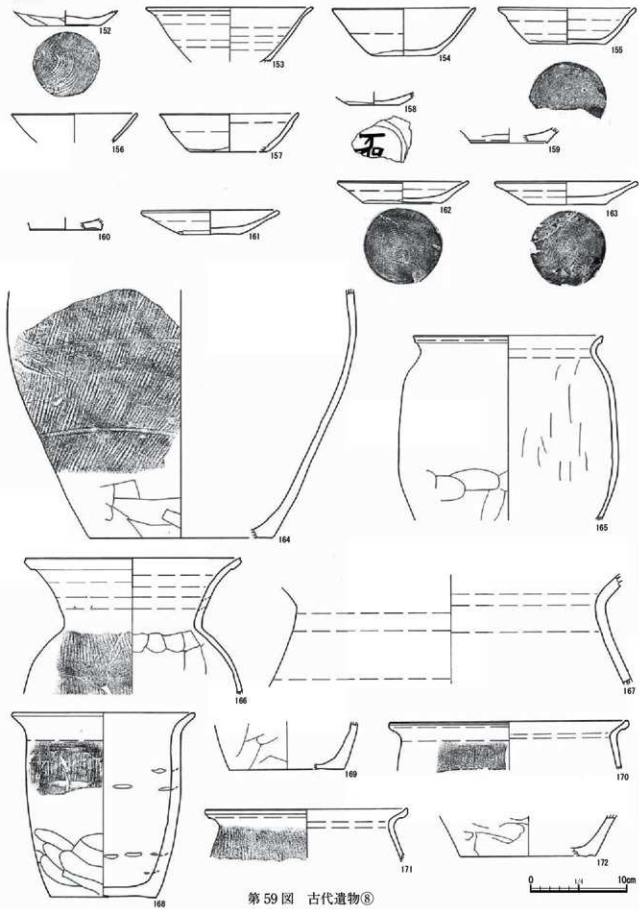


S109

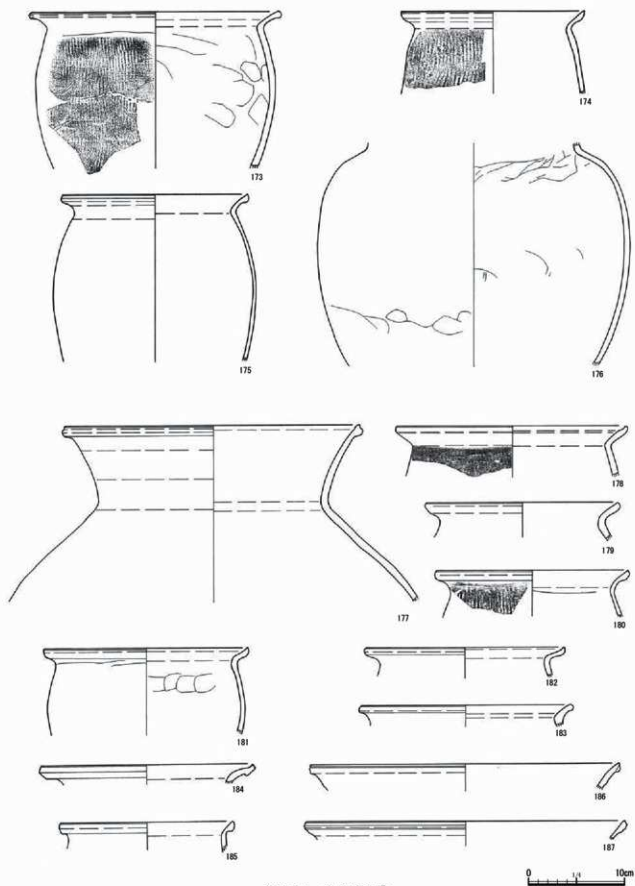


第 58 図 古代遺物⑦

S109

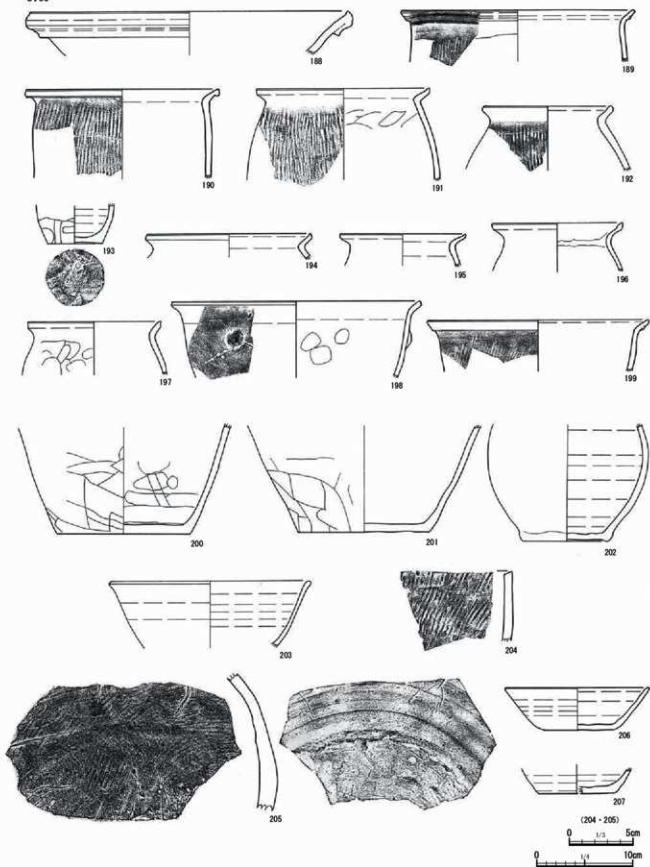


第 59 图 古代遺物⑧



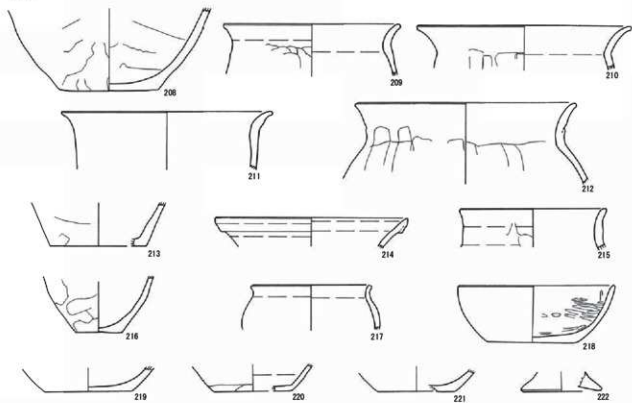
第 60 図 古代遺物⑨

S109

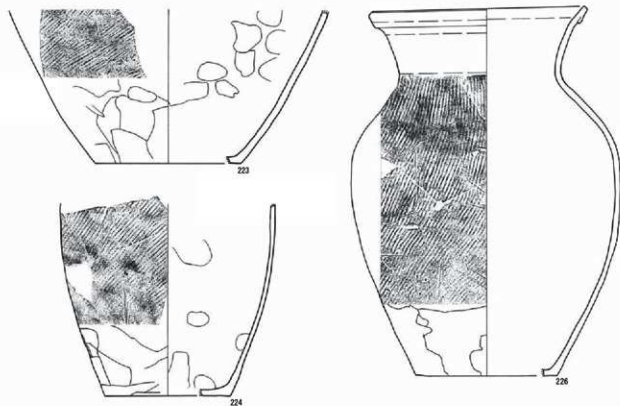


第 61 图 古代遺物⑩

S110

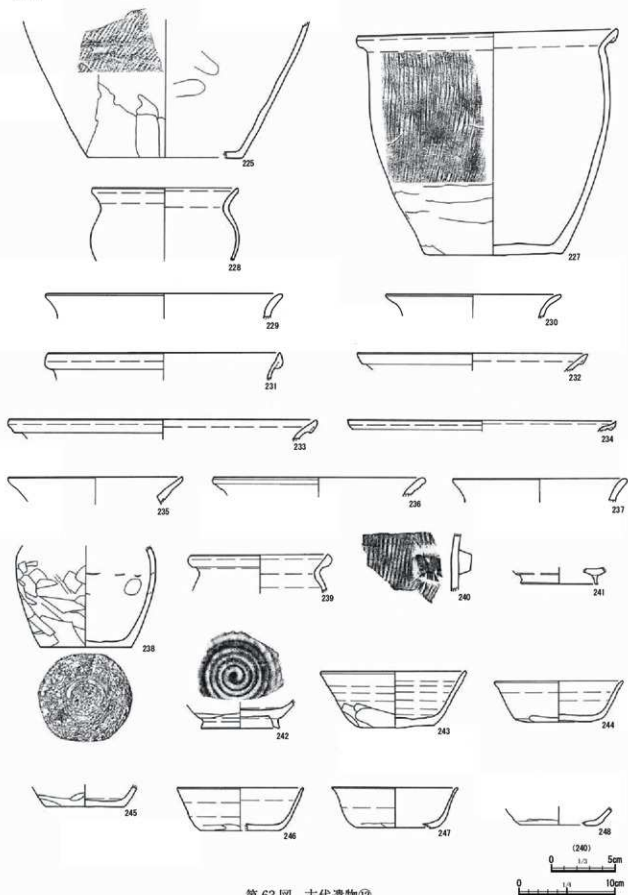


S111



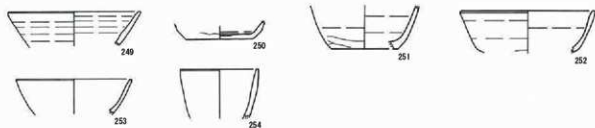
第 62 図 古代遺物①

S111

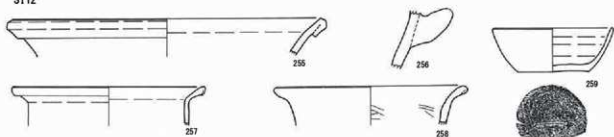


第 63 図 古代遺物⑫

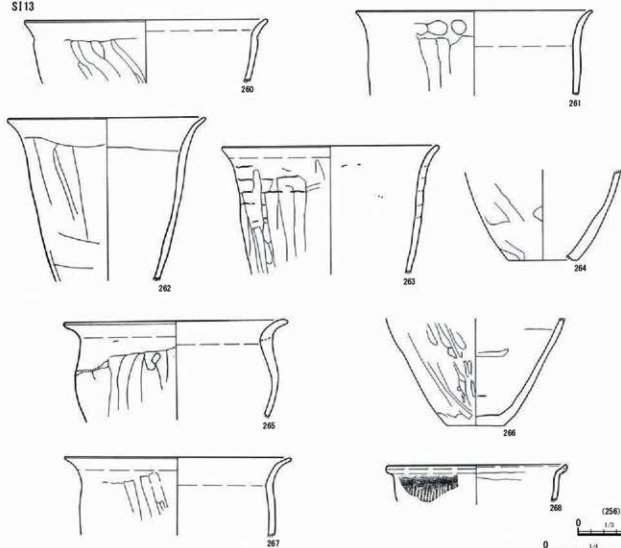
S111



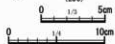
S112



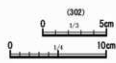
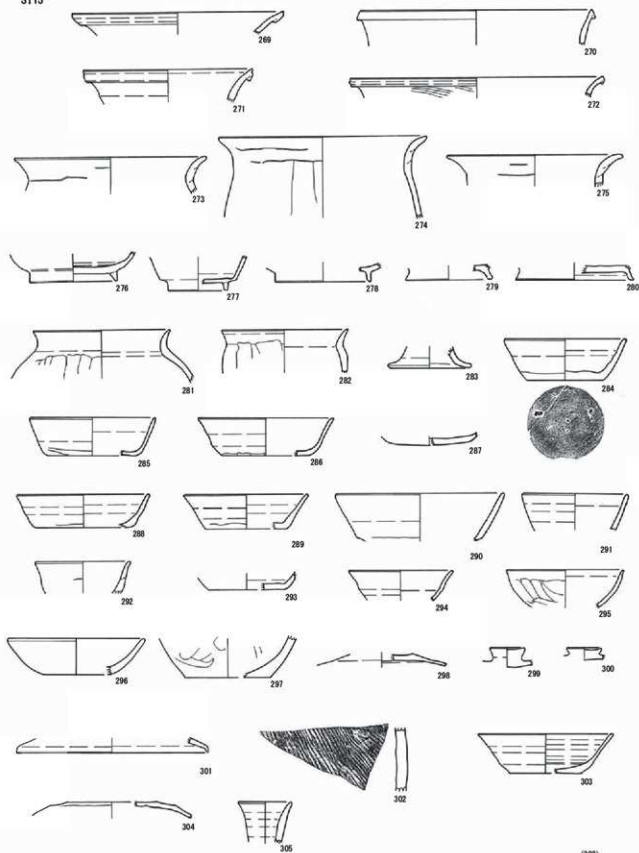
S113



第 64 図 古代遺物⑬

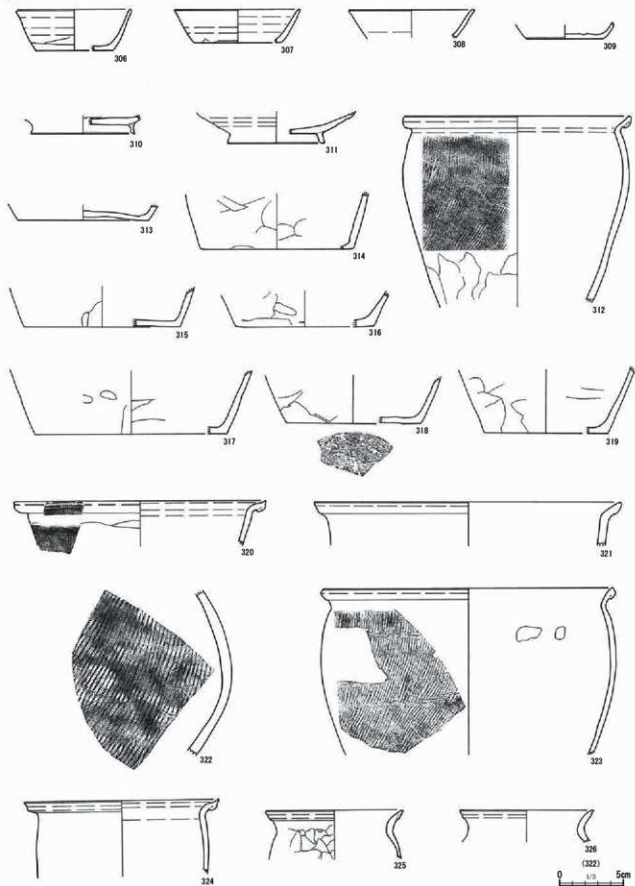


S113



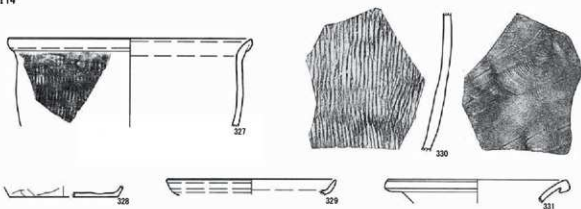
第 65 图 古代遺物⑩

S114

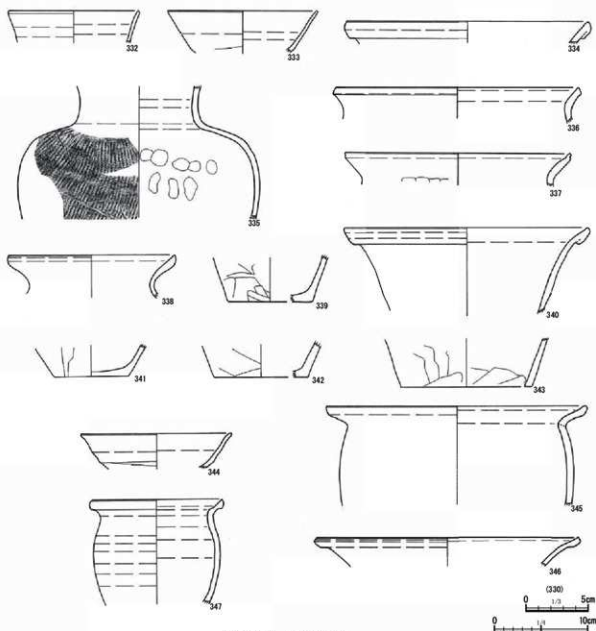


第 66 図 古代遺物⑮

SI14

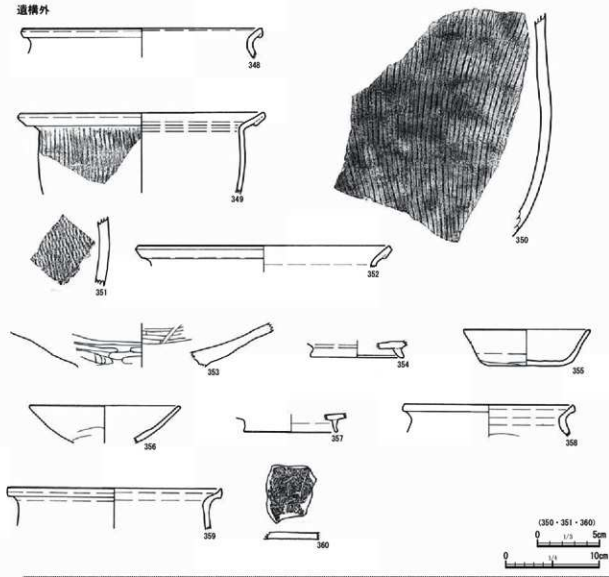


遺構外

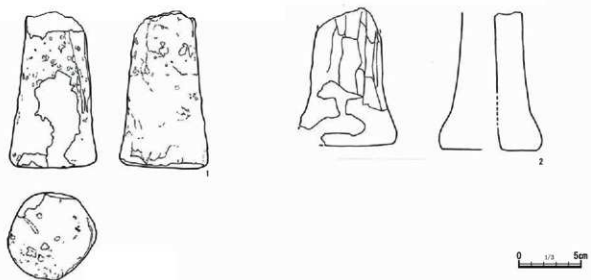


第 67 図 古代遺物⑩

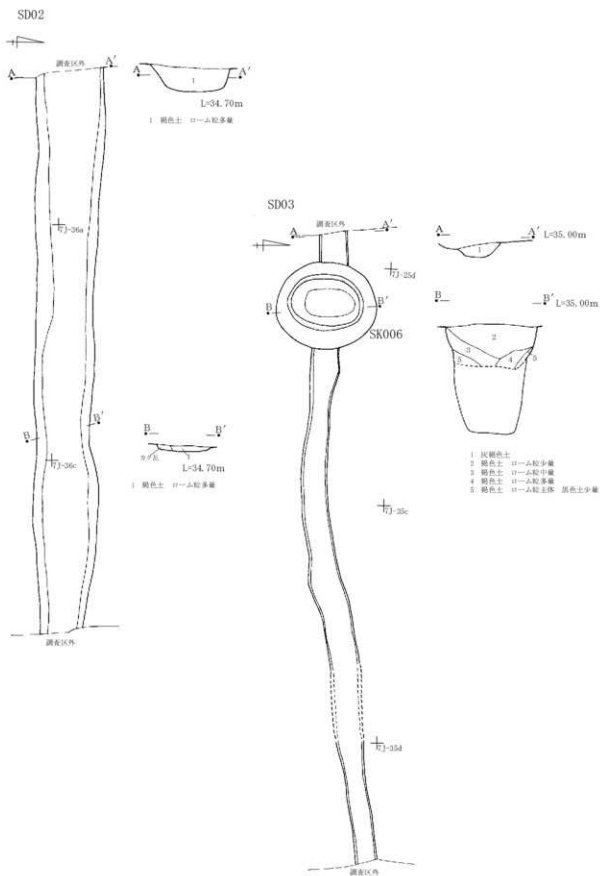
遺構外



土製品

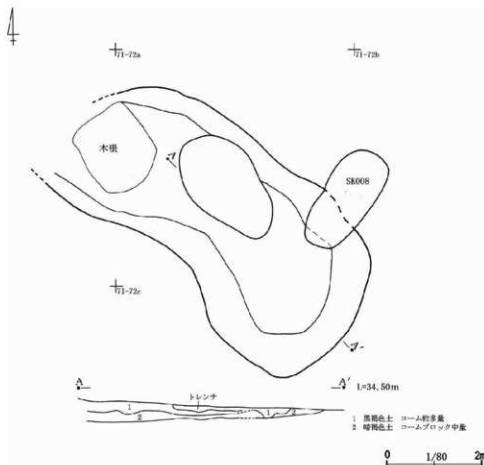


第 68 図 古代遺物⑰



第 69 图 SD02 · 03 · SK006

0 1/80 2m



第70図 SD04

から室町時代末～安土桃山時代のものと思われる五輪塔の一部が出土している。作られた時期は不明であるが、江戸時代中期までは存続していたものと思われる。

土坑

SK006 (第69図)

7J-25dに位置する直径約2mのゆがんだ円形の土坑である。深さは約2.3m。SD03を切っている。出土遺物がなく詳細は不明であるが、SD03との関係より中・近世以降のものと推定される。

2 遺構外遺物

遺物はいずれも細片で図化しなかったが、堺播鉢や、瀬戸皿、志戸呂の燈明皿と思われる破片などが出土した。木戸作遺跡同様、本遺跡の領域で何らかの活動が行われていたことを示唆するものである。

第6節 時代不明

遺構

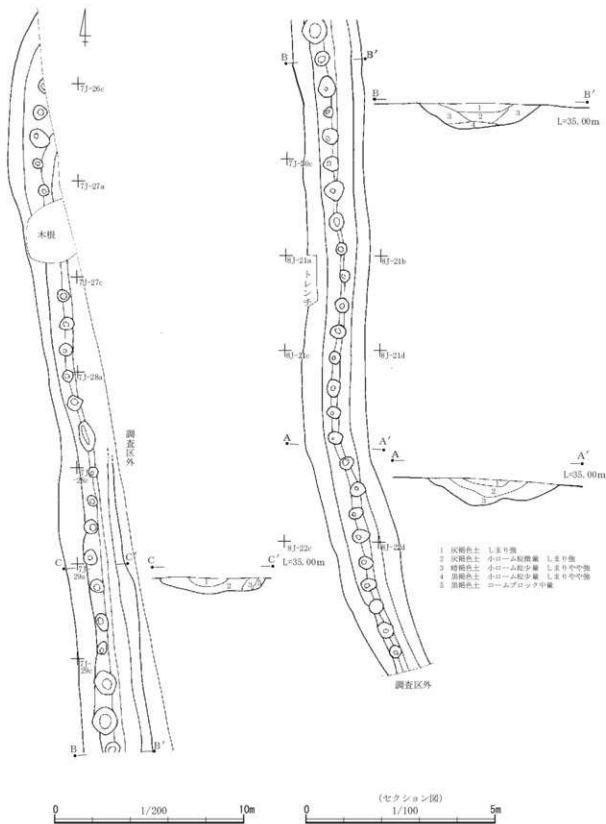
SD01

昭和58年の調査でH地点に溝があったとの記録があり、SD01とした。しかし図面、遺物が残されておらず、時期など詳細は不明である。(『平和公園Ⅱ』所収)

遺物は242点出土しており、甕の口唇部形状(336～338)、折り返し口縁を持つ甕(334、340)、環(333)の厚みや体部の角度、下端のへら削りの様子などから9世紀のものと判断した。遺構の時期は、中・近世のものと推定され、古代の遺物は流入したものとおもわれる。

SD06～08

『平和公園Ⅱ』において報告されている。昭和57年調査範囲で検出された。埋土中より宝永テフラが検出された。またSD06の北端



第71図 SD05

第4章 多部田貝塚

第1節 概要

1 地形

当遺跡は平和公園遺跡群の南西部にあり、北西部で貝殻遺跡、東側で内野遺跡に接する。標高 42～43mの台地上から緩斜面を広く括っているが、その主体は旧字名貝唐・貝殻作に所在する縄文後・晩期の馬蹄形貝塚である。南北 150m×東西 120mの環状に盛り上がる貝層をもち、その内側はすり鉢状に窪んでいる。現状は平和公園の敷地内で保全された杉林であり、常時その姿を確認することは難しいが、下草を刈ったときには環状の盛り上がりや中央窪地の形態を視認できる。千葉市内の貝塚のなかで、見学可能な数少ない貝塚の一つであり、未指定の貝塚のなかでとくに重要といえる。

2 過去の調査 (第72図)

これまでに以下の調査が行われている。平成3年度～6年度、平成10・11年度の調査については報告済みである(佐藤・樋泉 2001、田中・中山 2003)。昭和46年度の調査については、出土遺物や記録類が保管されているが未報告であるため、今回整理・報告対象とした。

昭和28年度 (第73図・図版35)

筑波大学と千葉高校の合同で65㎡の本調査を実施している。面状貝層から縄文土器・耳飾・骨鏃・角製垂飾・コハクなどが出土している。前田潮氏による短報が知られているが(前田 1964)、千葉市に寄贈された「武田宗久資料」にも実測図や調査写真が保管されていた。

調査区は2カ所あり、そのうちAトレンチの図が残されている(第73図)。平面図には1.1m×0.7mの「焼土貝灰」、土器、ピットが見える。断面図は北側・A断面と南壁のB断面がある。A断面は幅12mの実測図であり、幅10.4m、厚さ0.7mのレンズ状に堆積した貝層が記録されている。幅0.4m×厚さ0.2mの「灰」も見える。B断面は略測図であり、ハマグリ・アサリ主体の貝層とイボキサゴ主体の貝層が間層を挟んで堆積している。6×6の写真フィルムも同梱されており、図版35に11カットを示した。また、A地点貝層中「琥珀」とした略測図がある。長さ6.0、幅2.7、厚さ0.9cmほどのかなり大きく扁平なコハクの礫が出土したことを示している。

また、調査位置を示す記録が残されていないが、後述する平成10年度調査の際に、当調査のものと思われる攪乱が検出されたことから、本調査は遺跡南東部で行われたと推測される。

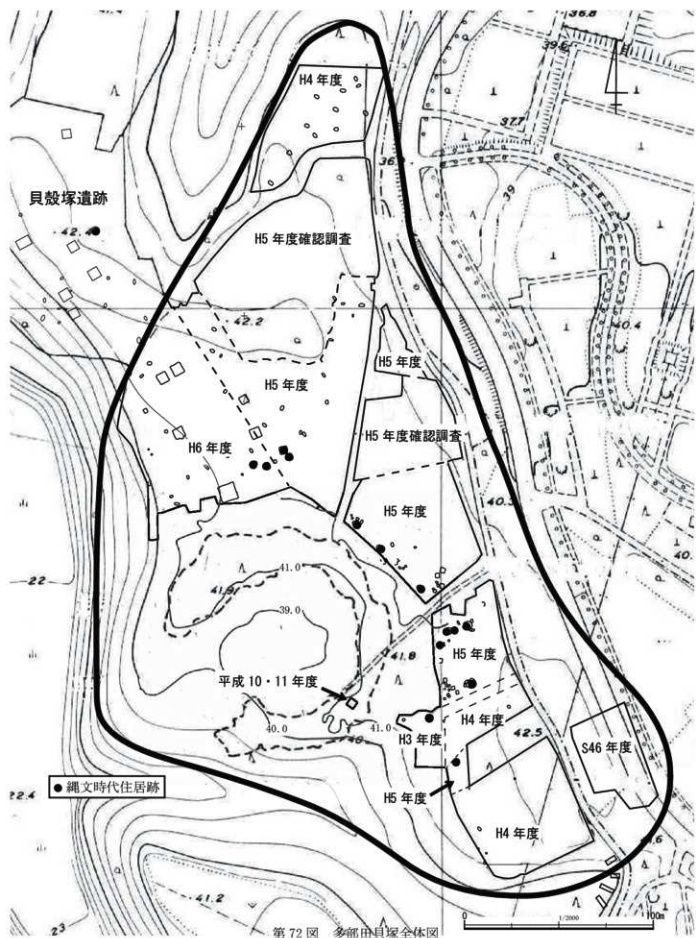
昭和46年度 (第75図)

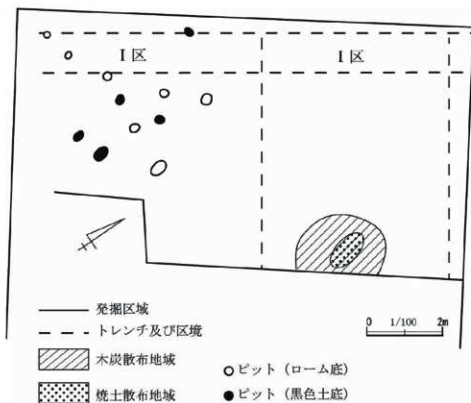
加曽利貝塚博物館が範囲確認調査を実施した地点である。この年度に調査したのは、調査時点で「多部田A・B遺跡」とされ、後に平和公園A地点・B地点とされた部分である(第1図)。このうちB地点は多部田貝塚と内野遺跡の境付近であるが、既存の報告では遺跡名を付けないままとなっている。今回の検討で、北東部から入る谷頭と縄文後期の遺物集中の存在から、多部田貝塚に含めることにした。報告書未掲載のため次項で事実記載を行う。

この調査に関する図面や写真は残されておらず、出土遺物だけが未洗いの状態で保管されていた。唯一残されたコピーをもとに調査区の略測図を作成した(第75図)。これを見ると、道路工事計画の事前調査として実施された可能性が高いが、実際にはもっと東側に平和公園の周回道路が建設されている。計画が変更されたものとみられる。本書では、平和公園整備事業以前の発掘調査(予備調査)と位置付ける。

昭和57年(踏査)

千葉県教育委員会による県内貝塚詳細分布調査の記録が千葉県文化財課に保管されている。踏査カードには「旧地形とも残存状態よいが地表面盗掘による攪乱が著しい」と記載されている。長く山林のままで変更が行わ





第73図 昭和28年度調査区(一部)

れなかったため、貝層部分の盗掘穴が保存されやすかったものとみられる。

平成元年度

貝塚遺跡の調査として、4,245㎡/63,600㎡の確認調査を行っているが、その南端部は多部田貝塚の範囲に跨っている。

平成3～6年度

平和公園の造成にあたり、馬蹄形貝塚とその周囲は現状保存し、それ以外の台地部分全体を造成範囲＝記録保存することとなった。確認調査対象範囲が8,800㎡、本調査範囲は24,100㎡であり、縄文時代中・後期の住居跡12軒・土坑6基、古墳時代の住居跡7軒などを検出している(田中・中山2003)。また平成3年度には貝層と8号塚を含む範囲の測量を実施した(倉田2000)。

調査の結果、馬蹄形貝塚の縁辺部から、中期後葉・加曽利EIII・EIV式1軒、後期初頭・称名寺式期1軒、後期前葉堀之内式期1軒、後・晩期1軒、その他5軒の住居跡が見つかっている。広域の調査によって、馬蹄形貝塚形成期以前から形成期の居住域は、貝層縁辺にのみ点在し、広がりをもたないことが判明している。特筆すべきは住居A-001から石棒3点が出土し、うち1点の頭部がピットに先端を突き刺した状態で、残りの部分が床面に直立して出土したものである。なお、出土遺物は広域に分布しており、多部田貝塚から貝塚遺跡にわたるの分布図を時代別に提示している(田中・中山2003、103-106p.)。

平成10・11年度(第74図)

平成11年3月と平成12年3月、市内重要遺跡発掘調査事業として、史跡整備に向けた保存目的の確認調査を実施した。5m四方の調査区、1mの小グリッドを設定し、最終的にこの範囲を全掘した。底面からはおびただしい数のピットを検出しており、貝層部分に著しく遺構が重複している様子がうかがわれた。調査区の4分の1程度に攪乱が及んでいたが、貝層の厚さは全体で50cm～70cm、もっとも厚い部分で76cmであった。貝と土が

混じり合った混土貝層が主体である。縄文土器は後期初頭・称名寺式から後期中葉・加曾利 B2 式が主体であった。また、動物遺体の分析が行われ、都川流域の貝塚群における動物資源利用の比較研究に重要な資料を加えた(極泉 2003)。

その他

「平成 5 年(1993) 試掘・多部田貝塚?」のラベルが付いた遺物が存在した。試掘の記録を確認できなかったが、内容的にも多部田貝塚のものともみてよいので、遺跡一括の扱いとして分類ごとの点数にのみ反映した。

第 2 節 昭和 46 年度調査報告

今回実施した遺跡範囲の明確化により当遺跡に含めることとなった旧称「平和公園 B 地点」の調査について簡単な報告を行う。調査区の略測図(第 75 図)によって概ね調査地点を把握することができ、馬蹄形貝塚の東側外縁部に濃密な遺物包含地点が存在したことを示す重要な資料である。土器は復元個体を含み、点数的にも、当遺跡の過去の調査のなかでもっとも多い。

(1) 縄文土器(図版 36~44)

整理対象から除外した小片を除く点数は口縁部 1,455 点、胴部 8,839 点の計 10,294 点である。省力化を図るため、口縁部のみ以下の基準で分類を行って(表 4)一部を写真掲載した。胴部については大まかに分類して点数を集計し、付表 2-2 に掲げた。分類は林田 1999 に準拠したため、分類番号には抜け・飛びがある。ただし、○-1・2 という細別は今回付したものである。

A 分類基準

1 群 前期後葉・浮島式の胴部が 1 点ある。

5 群 加曾利 E 式土器

05-1 加曾利 E 式前半

無文浅鉢 2 点のみ

05-2 加曾利 E 式後半

ほとんどが EIV 式である。

6 群 称名寺式土器

小片のみ。古い段階のもの。

8 群 堀之内式土器

08-1 堀之内 1 式

08-2 堀之内 2 式

9 群 加曾利 B 式土器

09-a3 横区画沈線・縄文帯+区切文。内文あり(加曾利 B1)

09-a4 横区画沈線・縄文帯+区切文。内文なし(加曾利 B1)

09-b1 横位沈線・縄文帯+蛇行沈線・対弧文(加曾利 B2)

09-b3 細条線意匠文(加曾利 B2)

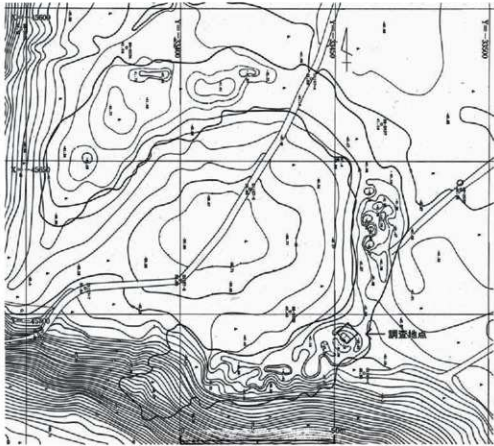
09-c1 頸部沈線区画・無文→縄文帯。波状口縁(加曾利 B3)

09-c2 頸部沈線区画・無文。口縁縄文帯、胴部条線帯。波状口縁(加曾利 B3)

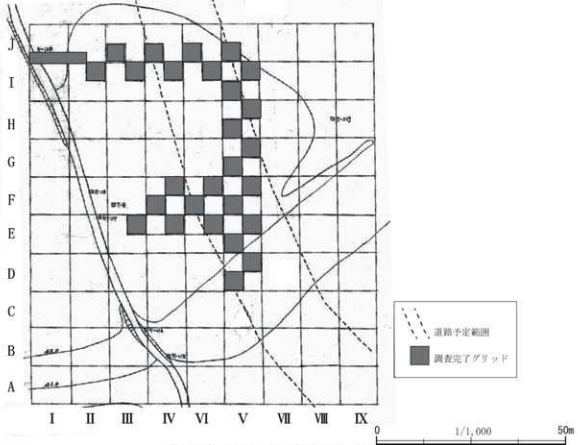
09-c3 頸部沈線区画・無文。上下に条線帯。波状口縁(加曾利 B3)

09-c4 口縁～頸部無文の深鉢(加曾利 B3)

09-d1 浅鉢。内文のみ。口唇伸び屈曲部に刺突列(加曾利 B1)



第74図 馬蹄形の貝層と平成10・11年度調査地点



第75図 昭和46年度調査概略図

- 09-d2 浅鉢。d1より口唇伸び内面簡素化。口縁外面隆線文(加曾利B2)
- 09-d3a 浅鉢。口唇刻み、外面稜形成。内文なし(加曾利B2)
- 09-d3b 浅鉢。口唇刻みなし、外面稜形成。内文なし(加曾利B2)
- 09-d3c 浅鉢。波状口縁、外面稜形成。内文なし(加曾利B2)
- 09-d4a 浅鉢。平縁。細条線鋸歯文・綾杉文(加曾利B2)
- 09-d4c 浅鉢。波状縁。細条線鋸歯文・綾杉文(加曾利B2)
- 09-e3 小形鉢。沈線区画+縄文の縄文帯(加曾利B2~3)
- 09-e4 小形鉢。細条線意匠文(加曾利B2~3)
- 09-e5a 小形鉢。e3の口縁の沈線(加曾利B3)
- 09-e5b 小形鉢。e5aの口縁に刻み(加曾利B3~曾谷)
- 09-e5c 小形鉢。e5aまたは9e5bに粘土瘤(加曾利B3~曾谷)
- 09-f1 鉢。頸部屈曲、口縁外反。縄文施文(加曾利B)
- 09-g 鉢。断面くの字の鉢(加曾利B)
- 09-h 短頸鉢(加曾利B)
- 09-j 壺形(加曾利B)
- 09-k1 台付鉢。無文帯形成→条線(加曾利B3)
- 09-k2 台付鉢。条線→頸部沈線区画・無文帯(曾谷~安行1)
- 09-k3 台付鉢。口縁条線帯広く条線縦(安行1)
- 09-l 鉢。算盤玉形類似(加曾利B2~3)
- 09-m 釣手土器(加曾利B)
- 09-o 注口土器
- 10群 曾谷式土器
 - 10-a1 口縁直下に横沈線もつ縄文帯、頸部無文帯
 - 10-a2 口縁直下に幅狭の無文帯、以下に縄文帯
 - 10-a3 口縁に複数条の縄文帯
 - 10-c1 小形鉢。口縁に数条の沈線、以下無文
 - 10-c2 小形鉢。口縁に縄文+数条の沈線
 - 10-c3 小形鉢。口縁に隆起しない帯縄文
 - 10-f 瓢形
- 11群 後期安行式土器
 - 11-a1 波状口縁(安行1)
 - 11-a2 平縁+突起。帯縄文(安行1)
 - 11-a3 平縁。帯縄文+胴条線 or 入組弧線文 or 縄文(安行1)
 - 11-a5 平縁。帯縄文が棒状化(安行1)
 - 11-c2 口縁に区画ない縄文帯(安行1)
 - 11-e 瓢形。後期安行の瓢形(安行1)
 - 11-f 台付鉢。後期安行の台付鉢(安行1~2)
- 12群 晩期の土器
 - 12-1 晩期安行式深鉢

- 12-2 晩期女行式鉢・浅鉢
- 12-3 大洞式
- 17群 後晩期無文または素文土器
 - 17-1 貼付装飾、段等あり
 - 17-2 口唇刻み
 - 17-3 無文
- <18～27群 粗製土器>
- 18群 縄文施文。紐線なし
 - 18-b1 口唇舌状、朝顔形（堀之内）
 - 18-b2 口唇角状、バケツ状（加曾利B1）
 - 18-b3 口唇角状、胴部上半内反（加曾利B1）
 - 18-b4 口唇角状、頸くびれる（加曾利B1）
- 19群 地文縄文+条線。紐線なし
 - 短沈線または2条組条線（堀之内）
- 20群 縄文+微隆起線状の紐線
 - 20-a1 口縁直下微隆起線+以下縄文（加曾利B1）
 - 20-a2 口縁直下微隆起線+微隆起線上～胴縄文（加曾利B）
- 21群 縄文+紐線
 - 21-a 口唇よりやや下と頸部に鎖状紐線（堀之内）
 - 21-b1 口唇部に紐線。朝顔形（堀之内）
 - 21-b2 口唇部に紐線。口縁やや内反（加曾利B1）
 - 21-b3 口唇部に紐線。胴上半つよく内反（加曾利B1）
 - 21-b4 口唇部に紐線。頸部くびれる（加曾利B1）
 - 21-d 口縁部に2条の紐線（加曾利B1）
 - 21・22 21群または22群（加曾利B）
- 22群 縄文+紐線+条線
 - 22-1 口唇よりやや下に鎖状の紐線。細条線（加曾利B1）
 - 22-2 口唇に微隆起線状の紐線。2条組沈線（加曾利B1）
 - 22-3 細沈線または櫛描沈線（加曾利B1）
 - 22-4 太沈線2本引き（加曾利B2）
 - 22-5 太沈線1本引き（加曾利B2）
 - 22-6 太条線柱状（加曾利B2）
 - 22-7 壺形深鉢（加曾利B2）
 - 22-8 小片（加曾利B）
- 23群 地文縄文+条線文+無文帯
 - 23-b1 頸部に無文帯→口縁・胴に斜位 or 斜格子条線（加曾利B2）
 - 23-b2 口縁・胴に斜位 or 斜格子条線→頸部に無文帯。平口縁（加曾利B3）
 - 23-b3 口縁・胴に斜位 or 斜格子条線→頸部に無文帯。波状口縁（加曾利B3）
- 24群 条線文+無文帯

24 口縁・胴に斜位 or 斜格子条線→頸部無文帯 (加曾利 B3)

25 群 条線主体

25-a1 沈線区画+条線。やや外反～内反 (曾谷)

25-a2 無文帯+条線。やや外反～内反 (曾谷)

25-a3 条線のみ。やや外反～内反 (曾谷)

25b 附点紐線文 (曾谷)

25e 条線のみ。砲弾型 (晩期安行)

26 群 疑似紐線文

26 地文縄文+条線 or 条線のみ (曾谷)

27 群 紐線+条線

27-a 口縁やや外反または内反 (安行 1～2)

27-b 頸部くびれる (安行 1～2)

27-c 砲弾型、口唇肥厚 (安行 1～2)

27-d 砲弾型、口唇肥厚。意匠文もつ (安行 1～2)

B 写真掲載遺物

図版 36 上は復元個体等を集めた。1 は堀之内式、2 は加曾利 B1 式の粗製土器である。図版 37 の 3 は加曾利 B2 式、4 は無文鉢、128 は堀之内式の鉢である。図版 38～44 上は破片資料である。5・6 は 5 群・加曾利 E 式後半、7・8 は 6 群・称名寺式、9～14 は 8 群で、9～11 は堀之内 1 式、12～14 は堀之内 2 式である。

15～85 は 9 群でおおむね加曾利 B 式。15～45 は深鉢で 15～17 は B1 式、18～26 は B2 式、27～45 は B3 式である。46～57 は加曾利 B 式の浅鉢である。58～68 は加曾利 B 式・曾谷式の小形鉢である。69～71 は頸部が屈曲し、口縁が外反する鉢、72 は断面くの字の鉢、73 は短頸鉢、74～76 は壺形、77～80 は台付鉢、81・82 は算盤玉形類似の鉢、83～85 は釣手土器である。

86～100・112 は 10 群・曾谷式。86～93 は深鉢、94～98・112 は小形鉢、99・100 は瓢形である。101～115 は 11 群・後期安行式。101～111 は帯縄文系の深鉢、112 は口縁を区画しない深鉢、113 は瓢形、114・115 は台付鉢である。116～127 は 12 群・晩期の土器。116～118 は深鉢、119～122 は鉢・浅鉢、123～127 は大洞式またはその系統の土器である。128～132 は 17 群・後晩期の無文または素文土器で粗製土器以外のものである。

133～218 は粗製土器である。133～136 は 18 群・縄文施文で紐線なしのもの。133 は堀之内式、134～136 は加曾利 B 式である。137 は 19 群・地文縄文+条線で紐線なしのもので堀之内式。138～140 は 20 群・縄文+微隆起線状で紐線もつもの。141～154 は 21 群・縄文+紐線のもので 141～144 は堀之内式、145～154 は加曾利 B1 式。155～157 は 21 群または 22 群。158～183 は 22 群・縄文+紐線+条線のもの。158～164 は加曾利 B1 式、165～183 は B2 式。184～188 は 23 群・地文縄文+条線+無文帯のもので、184・185 は加曾利 B2 式、186～188 は B3 式。189～191 は 24 群・条線+無文帯の加曾利 B3 式である。

192～203 は 25 群・条線主体のもので、192～201 は曾谷式、202・203 は晩期安行式である。204～206 は 26 群・疑似紐線文の土器で曾谷式。207～218 は 27 群・紐線+条線のもので安行 1 式～2 式である。

C 出土点数

口縁部の集計結果を大まかに区分にまとめると以下のようになる。

加曾利 E	32
称名寺	6
堀之内	103

加曾利B・曾谷	1010
後期安行	99
晩期	32

多数出土しているのは後期前葉から後期後葉までであり、後期初頭以前や晩期はごく少ない。とくに多いのは加曾利B1式から安行1式であり、そのなかでは、加曾利B1式161点、B2式257点、B3式289点、曾谷式187点、安行1式119点となる。加曾利B2式からB3式が中心といえる。この傾向は必ずしも遺跡全体を代表するものではないが、少なくとも加曾利B式期に集落が盛行したことを示している。

(2) 土器以外の遺物

A 土製品 (第76図、図版44, 45)

土偶6点、耳飾3点、土器片円板1点、手捏ね土器1点がある。1～4は山形土偶である。5は厚い板状で左の肩・乳房・正中線の一部が残る。6は部位不明だが土偶であろう。7～9は滑車形の土製耳飾である。7は小突起、8・9は沈線意匠をもつ。10は土器片の周囲の一部を入念に研磨している。11は歪な碗形である。第76図12(図版45-12)はミニチュア土器である。加曾利B式の条線帯をもつ土器を模したものであろう。



第76図 土製品 12

B 石器・石製品 (図版46～48)

打製石斧3点、磨製石斧4点、石皿・台石5点、磨石類10点、砥石1点、石棒2点、軽石製品1点、碇石1点、玉類1点、石核15点、剥片・砕片14点、礫49点の合計106点がある。

打製石斧は礫片を素材とした分銅形1点、きわめて粗い作りの楕形、短冊形各1点がある。磨製石斧は4点とも定角形磨製石斧であり、いずれも砥石・磨石類に転用されている。石皿・台石類では、9・11は大きな石皿の小片、8・10・12は大きな台石の小片である。磨石類では、13～16が楕円形の平面に平滑な磨面、側面にざらつく磨面または敲打面をもつものも多いためタイプのものである。17・18は晩期に多い円筒形のタイプである。22は棒状の、18は不整形の敲石である。23は鈍子砂岩製とみられる棒状または板状砥石の小片である。24・25は石棒である。24は断面円形の石棒小片であり、砥石・磨石類に転用されている。25は大型石棒の小片で全面被熱赤変する。石材は群馬県大江山麓産であろう。26は斧形の軽石製垂飾、27は厚い楕円形の長軸中央に2条の筋を作出する。碇石とみられるが時代は不明である。28は彫刻をもつ玉の小片であり勾玉か、被熱により透明感を失っている。29は大型石棒の幹部破片で、側縁遺存部に凹み2カ所を、対向する破面に石皿のような窪みをもつ。石材は大江山麓産に似るが硬く、橙色の片理が入る。

石核・剥片類は29点、442gある。チャートが大半を占め、黒曜石がわずかに混じる。チャートは石核15点、剥片9点で、石核はサイコロ状4点、円錐状3点、多角形7点である。黒曜石は剥片・砕片5点である。後期後半以降に通例のサイコロ状チャート主体ではなく、大き目の石核・剥片類が目立つ。剥片類の長さの平均はチャートが23.0mm、黒曜石が14.4mmである。比較的良質のチャートを持ち込み、石製品製作が比較的積極的に進んでいた可能性が高い。

C 貝製品 (図版49)

貝輪5点、貝刃2点、ヘラ状貝製品7点、加工のある貝3点の計17点がある。貝輪の素材はベンケイガイとわかるもの1点(1)、タマキガイ科(ベンケイガイまたはタマキガイ)3点(2～4)、フネガイ科1点(5)である。成品の小片が4点、仕上げ研ぎ前の工程で破損したとみられる未成品1点と、成品のほうが多い。4と5は幅5mmほどまで研磨加工しており、組合せ式であろう。組合せ式としてもここまで細いものは稀であろう。

6・7はハマグリ製の貝刃である。6は内面側に剥離がつく当地では少ないタイプである。7は後背縁～腹縁～前背面まで全体の端部に線状痕が観察され、ヘラ状貝製品としても使われている。8～14はヘラ状貝製品である。100点余りの大き目のハマグリを観察したところ、腹縁の観察が可能な34点のうち7点に使用痕を認めた。きわめて高確率といえる。9はヘラ状貝製品A型（アリソガイ型）である（西野2002）。中期中葉・阿玉台式後半～加曾利E式前半期に外洋産のアリソガイを素材として盛んに使用されたものが、後期前葉・堀之内式期に素材を置き換えて現れるものである。加工のある貝としたものは3点で、15は左右合弁のオキシジミで、外面に赤褐色の付着物が付いている。これが赤彩であるか否かは長年の課題である。オキシジミのほかオオノガイにも多いので、河口部で鉄分が付着したと考えるが、まとまって出土した事例もあるため、意識的に持ち込まれた可能性も考えられる。16はハマグリ、17はシオフキの中央に穴があいたものである。穴あきの貝の大半は新しくついたもので、劣化したハイガイなどでは容易に穿孔することが可能である。この2点は殻の保存状態が良好であり、何度も細かく打ち欠いてあげたように見える。

D 骨角製品（図版49）

鹿角、獣骨を加工したものが2点ある。1は細い管状骨の両端を折断後研磨したものであり、成品の可能性がある。2は横位の擦り切り折断痕をもつ鹿角小片である。3は擦り切り折断痕をもつ鹿角小片（長さ24mm）。全体が被熱により灰色に変色している。4・5は小型哺乳類または鳥類の管状部を擦り切り折断したもの。4（長さ11mm）・5（長さ9mm）とも両端を擦り切り折断後、研磨しており玉状の製品の可能性がある。

E 動植物遺体（図版49）

図版49はクジラ類の椎骨である。東京湾東岸の大型貝塚群の多くで、大きなクジラの椎骨が発見されている。本例は突起部分もついている。チョーク化して白色を呈する。そのほかの資料に関しては、植物遺体がクルミ果皮数点が保管されていた。動物遺体に関しては第3節で記述する。また、少量の貝類が残されていたが、その中にダンベイキサゴが1点混じっていたことのみ付記しておく。

参考文献

- 西野雅人2002「縄文時代中・後期のヘラ状貝製品（2）」『往還する考古学』近江貝塚研究会
林田利之1999『吉見台遺跡A地点』印旛都市文化財センター

第4表 多部田貝塚 S46 縄文土器分類別点数 (口縁部のみ)

分類	大別	大別名	細別	口縁 点数	写真 点数	分類	大別	大別名	細別	口縁 点数	写真 点数
05-1	05群	加曾利E	加曾利E前半	5	1	11-a5	11群	後期安行	安行1	28	3
05-2	05群	加曾利E	加曾利E後半	56	1	11-c2	11群	後期安行	安行1	6	1
06	06群	称名寺	称名寺	6	2	11-e	11群	後期安行	安行1	15	1
08-1	08群	堀之内	堀之内1	52	3	11-f	11群	後期安行	安行1~2	9	2
08-2	08群	堀之内	堀之内2	15	2	12-1	12群	晩期	晩期安行	13	3
09-a3	09群	加曾利B	加曾利B1	9	2	12-2	12群	晩期	晩期安行	8	3
09-a4	09群	加曾利B	加曾利B1	6	1	12-3	12群	晩期	大洞系	5	5
09-b1	09群	加曾利B	加曾利B2	23	3	17-1	17群	後晩期無文	後晩期	7	2
09-b3	09群	加曾利B	加曾利B2	18	5	17-2	17群	後晩期無文	後晩期	17	1
09-c1	09群	加曾利B	加曾利B3	36	7	17-3	17群	後晩期無文	後晩期	13	2
09-c2	09群	加曾利B	加曾利B3	65	2	18-b1	18群	粗製	堀之内	2	1
09-c3	09群	加曾利B	加曾利B3	50	8	18-b2	18群	粗製	加曾利B1	14	2
09-c4	09群	加曾利B	加曾利B3	35	3	18-b3	18群	粗製	加曾利B1	4	1
09-d1	09群	加曾利B	加曾利B1	4	2	19	19群	粗製	堀之内	2	1
09-d2	09群	加曾利B	加曾利B2	4	1	20-a1	20群	粗製	加曾利B1	14	0
09-d3a	09群	加曾利B	加曾利B2	7	2	20-a2	20群	粗製	加曾利B	7	3
09-d3b	09群	加曾利B	加曾利B2	24	0	21-a	21群	粗製	堀之内	10	2
09-d3c	09群	加曾利B	加曾利B2	27	4	21-b1	21群	粗製	堀之内	22	2
09-d4a	09群	加曾利B	加曾利B2	8	2	21-b2	21群	粗製	加曾利B1	17	2
09-d4c	09群	加曾利B	加曾利B2	2	1	21-b3	21群	粗製	加曾利B1	14	3
09-e3	09群	加曾利B	加曾利B2~B3	17	2	21-b4	21群	粗製	加曾利B1	16	3
09-e4	09群	加曾利B	加曾利B2~B3	5	2	21-d	21群	粗製	加曾利B1	9	2
09-e5a	09群	加曾利B	加曾利B3	60	4	21-22	21群	粗製	加曾利B	10	3
09-e5b	09群	加曾利B	加曾利B3~曾谷	14	1	22-1	22群	粗製	加曾利B1	11	3
09-e5c	09群	加曾利B	加曾利B3~曾谷	5	2	22-2	22群	粗製	加曾利B1	5	1
09-f1	09群	加曾利B	加曾利B	15	3	22-3	22群	粗製	加曾利B1	39	3
09-g	09群	加曾利B	加曾利B	1	1	22-4	22群	粗製	加曾利B2	20	2
09-h	09群	加曾利B	加曾利B	1	1	22-5	22群	粗製	加曾利B2	53	4
09-j	09群	加曾利B	加曾利B	10	3	22-6	22群	粗製	加曾利B2	63	7
09-k1	09群	加曾利B	加曾利B3	3	1	22-7	22群	粗製	加曾利B2	10	4
09-k2	09群	曾谷・安行	曾谷~安行1	14	2	22-8	22群	粗製	加曾利B	16	0
09-k3	09群	後期安行	安行1	12	1	23-b1	23群	粗製	加曾利B2	6	2
09-l	09群	加曾利B	加曾利B2~B3	8	2	23-b2	23群	粗製	加曾利B3	10	2
09-m	09群	加曾利B	加曾利B	7	3	23-b3	23群	粗製	加曾利B3	2	1
10-o	09群	後期	後期	3	0	24	24群	粗製	加曾利B3	29	3
10-a1	10群	曾谷	曾谷	16	2	25-a1	25群	粗製	曾谷	2	2
10-a2	10群	曾谷	曾谷	23	3	25-a2	25群	粗製	曾谷	1	1
10-a3	10群	曾谷	曾谷	37	3	25-a3	25群	粗製	曾谷	37	4
10-c1	10群	曾谷	曾谷	8	3	25-b	25群	粗製	曾谷	20	3
10-c2	10群	曾谷	曾谷	2	1	25-e	25群	粗製	晩期安行	6	2
10-c3	10群	曾谷	曾谷	8	1	26	26群	粗製	曾谷	25	3
10-f	10群	曾谷	曾谷	8	2	27-a	27群	粗製	安行1~2	26	3
11-a1	11群	後期安行	安行1	22	2	27-b	27群	粗製	安行1~2	17	3
11-a2	11群	後期安行	安行1	5	2	27-c	27群	粗製	安行1~2	34	4
11-a3	11群	後期安行	安行1	31	4	27-d	27群	粗製	安行1~2	13	4
合計										1494	212

第3節 多部田貝塚出土の動物遺体

1 資料の概要

今回報告する脊椎動物遺体資料は、昭和46年度調査で出土した資料と、平成10・11年度調査の既報告（樋泉2001）で分析対象外となっていた未水洗の貝サンプルから新たに抽出された資料である。前者は、発掘調査の際に現地目視確認して採集した「現地採集（ピックアップ）資料」、後者は、貝サンプルの水洗選別によって採集した「貝サンプル資料」の2種類である。

（1）現地採集資料

今回対象とする資料は、昭和46年度調査で出土した資料である。いずれも出土位置・層位・時期が不明であるが、同調査で出土した土器の型式から、概ね堀之内式期から加曾利B式期と想定される。今回の報告では、すべて一括資料として扱った。

（2）貝サンプル資料

平成10・11年度調査で採集された貝サンプルのうち、既報告（樋泉2001）で分析対象外とした未水洗の貝サンプルから、今回新たに水洗選別・抽出した資料である。水洗選別後にも一部の資料には、サンプル番号やカット番号などの層位情報が付与されていたが、未水洗の貝サンプルをほぼ一括して4mmメッシュのフルイで水洗選別したため、今回の報告では、層位などの情報が付与されていたものも含めてすべて一括資料として扱った。

なお、既報告では、型式の明らかな土器片の垂直分布との対比をもとに、貝サンプル中に含まれていた土器の型式も考慮して、貝サンプルの帰属時期を判定している。その結果によれば、貝サンプルの帰属時期は、貝層下部から称名寺式期、堀之内式期、加曾利B式期（一部、曾谷式期まで下る可能性がある）と指摘されている。本報告でもこれに準拠して、称名寺式期から加曾利B式期の一括資料として扱うこととした。

2 分析方法

同定対象とした部位は、魚類では、前上顎骨、主上顎骨、歯骨、角骨、方骨、舌顎骨、主鰓蓋骨、基後頭骨、椎骨を必須部位とし、分類群の骨格的特徴に応じてその他の部位も適宜対象に加えた。その他の脊椎動物遺体では、同定可能な資料のすべてを対象としたが、鳥類のみは、比較標本が不十分であるため部位同定のみ留めた。なお、同定は原則として現生標本との比較によって行った。比較に用いた標本は分析者所蔵の現生標本である。

3 分析結果

（1）同定結果

合計163点（現地採集資料84点、貝サンプル資料77点）、軟骨魚綱2分類群、硬骨魚綱4分類群、爬虫綱1分類群、鳥綱1分類群、哺乳綱8分類群（ただし、ヒトを除く）が同定された。

検出された分類群の種名一覧を第5表に、同定結果の詳細を第6表（現地採集資料）と第7表（貝サンプル資料）に示した。

魚類 現地採集資料ではスズキ/スズキ属3点が得られたのみで、貝サンプル資料でも同定できた標本数は多くはなく、カサザメ属、トビエイ科、クロダイ属、サバ属、コチ科がわずかに得られたのみである。

爬虫類・鳥類 同定された標本数はごく少なく、貝サンプル資料で3点のみである。ヘビ亜目2点が確認されたほか、鳥類で未同定標本1点がある。

哺乳類 現地採集資料と貝サンプル資料のいずれもイノシシ・シカが圧倒的多数を占め、ほかにノウサギ、タヌキ、ムササビ、ニホンザルが得られた。なお、ニホンザルは、同時期の周辺貝塚のすべてで出土例があったが、本貝塚からは今回初めて確認された。

（2）組成

脊椎動物遺体全体の組成を第75図に、既報告（樋泉2001）の組成も併せて提示した。なお、既報告資料につ

いては、帰属時期に関わらずすべての資料を一括して集計した。

合計値の組成 現地採集資料と貝サンプル資料（4mm資料）の合計値では、イノシシとシカが全体の8割弱を占め、魚類と小型哺乳類がこれに次ぎ、鳥類がわずかに加わる。既報告資料の組成と比較すると、小型哺乳類がやや多い点とイノシシ・シカの比率が逆転する点で異なるが、脊椎動物遺体全体の組成としては概ね一致した傾向が看守される。

現地採集資料（昭和46年度調査） 資料別にみると、現地採集資料では、イノシシ・シカが卓越し、これに若干の魚類・小型哺乳類が加わる。この傾向は既報告資料とも一致しているが、両者でイノシシ・シカの比率が逆転することに大きな特徴がある。すなわち、今回の資料ではイノシシ<シカ、既報告資料ではイノシシ>シカ、というように両者の違いはきわめて明瞭である。本貝塚のイノシシ・シカの比率については、既報告（樋泉2001）で指摘されているとおり、称名寺式期ではイノシシが圧倒的に多いが、加曾利B式期にはシカがイノシシを上回り、イノシシとシカの比率が逆転する。このことから、今回と既報告のイノシシ・シカの比率が逆転する現象についても、時期差に起因すると考えるのが妥当であろう。ただし、出土位置・層位・時期のいずれも詳細不明であるため、今回の現地採集資料におけるイノシシ・シカの比率は、加曾利B式期の傾向と一致する、と述べるに留めたい。

貝サンプル資料（平成10・11年度調査） イノシシ・シカが卓越する点で共通するが、魚類・小型哺乳類も普通に見られる点では、既述の現地採集資料の傾向と若干異なる。これは、水洗選別に際して4mmメッシュのフルイを使用したことで、微小な資料が多く回収されたためとも考えられる。一方、既報告資料では、4mm資料のみの組成でも魚類が全体の7割強を占めており、前者と傾向が大きく異なる。ただし、後者は標本数が22点と少なく、本来の組成を正しく反映していない可能性も考えられる。

4 まとめ

本貝塚における動物資源利用の様相は、既報告（樋泉2001）により詳細に報告されている。今回は昭和46年度調査の新規資料と平成10・11年度調査の未報告資料の提示により、既報告の内容を補強するとともに、昭和46年度調査地点での動物資源利用の一端が明らかとなった。昭和46年度調査の現地採集資料については、帰属時期の詳細が不明ではあるものの、称名寺式期から加曾利B式期にかけてシカの増加傾向がみられるという既知の情報から、加曾利B式期の傾向と一致する、ということまでは言及できそうである。

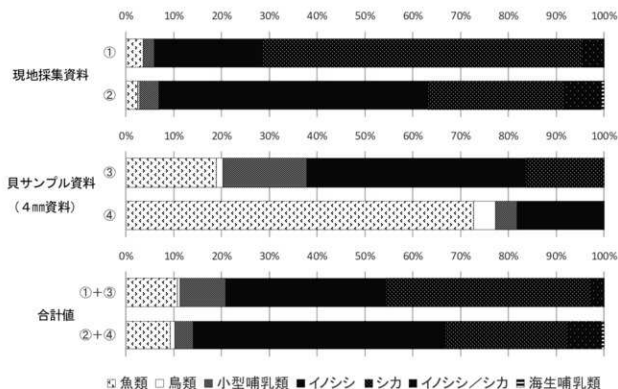
脊椎動物遺体全体の組成では、今回の資料でも、イノシシ・シカが組成の大半を占める点、これに小型哺乳類と若干の大型魚類などが加わる点で、この地域の一般的特徴と調和的な結果が改めて得られた。また、これまで確認されていなかったニホンザルなどの分類群が、本貝塚の種名表に今回新たに追加されたことも成果の一つといえよう。

参考文献

樋泉 2001 「V. 動物遺体群の分析」『千葉市多田貝塚』千葉市教育委員会・財団法人千葉市文化財調査協会

第5表 脊椎動物遺体種名一覧

和名		学名
軟骨魚綱(板鰓亜綱)		Chondrichthyes (Elasmobranchii)
カスザメ科	カスザメ属	<i>Squatina</i> sp.
トビエイ科	属・種不明	Myliobatidae gen. et sp. indet.
硬骨魚綱		Osteichthyes
スズキ科	スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>
タイ科	クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i> sp.
サバ科	サバ属	<i>Scomber</i> sp.
コチ科	属・種不明	Platycephalus gen. et sp. indet.
爬虫綱		REPTILIA
ヘビ亜目	科・属不明	Serpentes fam. et gen. indet.
鳥綱		AVES
鳥類	目・科不明	Aves order et fam. indet.
哺乳綱		MAMMALIA
オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i>
モグラ科	属・種不明	Talpidae
ウサギ科	ノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i>
リス科	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i>
イヌ科	タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i>
	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
イノシシ科	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>



① S46年度 (n=84)、② H11年度 (n=204)、③ H11年度追加 (n=74)、④ H11年度 (n=22)

第77図 脊椎動物遺体の組成

第6表 脊椎動物遺体の同定結果 (昭和46年度調査の現地採集資料)

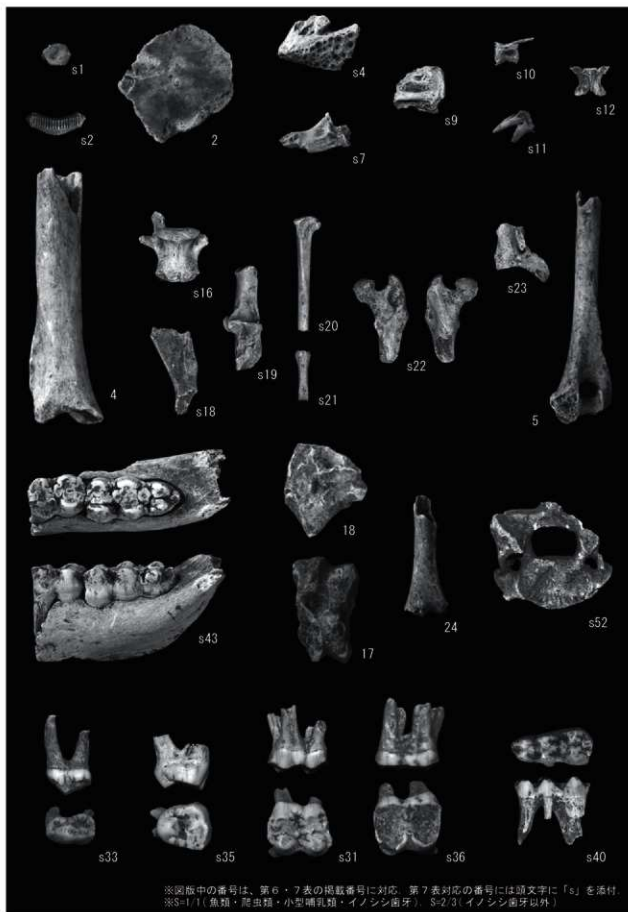
*残存位置(魚類): w 完存, ant 前端, m 中間部, post 後端, fr 破片
 *残存位置(鳥獣類): w 完存, p 近位端, m 骨幹(踵骨は距骨関節面をmとした), d 遠位端, fr 破片
 (p)-(d)は未癒合の骨端のみ, (p)-(d)は骨端未癒合脱落, <p>-<d>は端部癒合線以端で欠損する骨端
 <p>-<d>は骨端のみ欠損

掲載番号	種名	部位	左右	点数	残存位置1	残存位置2	備考
1	スズキ	主総蓋骨	L	1			
2	スズキ	主総蓋骨	R	1			
3	スズキ属	歯骨	R	1	m		
4	ニホンザル	上腕骨	R	1	<d>		
5	タヌキ	上腕骨	R	1	d		
6	イノシシ	下顎歯	L	1	M3		咬耗なし, 歯根なし
7	イノシシ	下顎歯	L	1	M3		下顎体一部遺存, 咬耗顯著
8	イノシシ	下顎歯	R	1	M2		
9	イノシシ	下顎骨	L	1	筋突起		
10	イノシシ	下顎骨	L?	1	下顎角		
11	イノシシ	下顎骨	LR	1	癒合部		
12	イノシシ	下顎骨	R	1	筋突起		
13	イノシシ	下顎骨	R	1	下顎角		
14	イノシシ	肩甲骨	R	1	d		
15	イノシシ	肩甲骨	R	1	<d>		
16	イノシシ	脛骨	L	1	<d>		
17	イノシシ	距骨	L	1	w		咬痕?あり
18	イノシシ	踵骨	L	1	d		
19	イノシシ	第2中手骨	L	1	p		
20	イノシシ	第4中手骨	R	1	w		
21	イノシシ	第3中足骨	L	1	p		
22	イノシシ	第4中足骨	R	1	w		
23	イノシシ	中部骨	保留	1	w		
24	イノシシ(幼)	上腕骨	R	1	<p>-<d>		
25	シカ	角	不明	<16>	fr		2点焼け黒
26	シカ	角(落角)	不明	<3>	fr		
27	シカ	角座骨	L	1			
28	シカ	角座骨	R	1			焼け黒
29	シカ	上顎歯	L	1	M2		
30	シカ	上顎歯	R	1	M3		咬耗なし, 歯根なし
31	シカ	下顎歯	L	1	M2		下顎体一部遺存
32	シカ	下顎骨	L	1	筋突起		
33	シカ	頸椎	-	1			
34	シカ	肩甲骨	L	2	d		
35	シカ	肩甲骨	R	1	d		
36	シカ	肩甲骨	R	2	<d>		
37	シカ	上腕骨	L	1	d		癒合中
38	シカ	上腕骨	R	2	d		癒合済み, 1点被熱黒灰色化
39	シカ	橈骨	L	1	<d> fr+		
40	シカ	橈骨	R	2	p		
41	シカ	橈骨	R	1	(d)		癒合中の骨端が外れたものか
42	シカ	尺骨	L	1	(p-)		
43	シカ	尺骨	L	1	<p>		
44	シカ	中手骨	L	1	p	前面2	
45	シカ	中手骨	L	2	d		
46	シカ	中手骨	R	2	d		
47	シカ	中手骨/中足骨	不明	<8>	m fr		
48	シカ	大腿骨	L	1	<p>	小転子, 転子窩	
49	シカ	大腿骨	L	1	(p)	骨頭	
50	シカ	大腿骨	L	1	(d)	滑車	
51	シカ	大腿骨	R	1	(p-)	小転子, 転子窩	
52	シカ	膝蓋骨	L	2			
53	シカ	膝蓋骨	R	1			
54	シカ	脛骨	R	2	d		1点端部側面に長形マスタの凹みあり
55	シカ	脛骨	R	1	<d>		
56	シカ	距骨	R	1	w		
57	シカ	踵骨	L	1	w		
58	シカ	踵骨	L	2	p-m		2点とも解体痕?あり
59	シカ	踵骨	L	1	<p>-m		
60	シカ	踵骨	R	1	p-m		
61	シカ	踵骨	R	1	(p)-m		
62	シカ	踵骨	R	1	<p>-m		<p>端部に咬痕
63	シカ	踵骨	R	1	d		
64	シカ	中心第4足根骨	R	4			
65	シカ	中足骨	L	1	p		<p>に近い
66	シカ	中足骨	R	1	p	w	接合
67	シカ	基部骨	保留	2	w		
68	シカ	中部骨	保留	2	w		
69	シカ	末部骨	保留	1	w		
70	シカ/イノシシ	胸椎	-	1			
71	シカ/イノシシ	椎骨	-	3	椎体		

第7表 脊椎動物遺体の同定結果 (平成10・11年度調査の貝サンプル資料)

*残存位置(魚類): w 完存, ant 前部, m 中間部, post 後部, fr 破片
 *残存位置(鳥獣類): w 完存, p 近位端, m 骨幹, d 遠位端, fr 破片
 (p)・(d)は未癒合の骨端のみ, (p-)・(d-)は骨端未癒合脱落, <p>・<d>は端部癒合線以端で欠損する骨端,
 <p->・<d->は骨端のみ欠損

掲載 番号	種名	部位	左右	点数	残存位置1	残存位置2	層位詳細	備考
1	カササメ属	椎骨	-	1				
2	トビエイ科	歯板	-	2				
3	クロダイ属	前上顎骨	L	1	ant			
4	クロダイ属	前上顎骨	R	1	ant			
5	クロダイ属	前上顎骨	R	1	post			
6	クロダイ属	角骨	L	1				
7	クロダイ属	口蓋骨	L	2				
8	タイ科	腹椎	-	1				
9	タイ科	尾椎	-	2				
10	サハ属	尾椎	-	1				
11	コチ科	前鋳蓋骨	L	1				
12	ヘビ亜目	椎骨	-	2				
13	鳥類(未同定)	跗上根骨	保留	1	d			
14	ノウサギ	下顎歯	R	1	I			
15	ノウサギ	遊離歯	?	2	臼歯			
16	ノウサギ	椎骨	-	1				
17	ノウサギ	仙椎	-	1				
18	ノウサギ	肩甲骨	R	1	<d->			
19	ノウサギ	踵骨	R	1				
20	ノウサギ	中足骨	R	1	p			
21	ノウサギ	中節骨	R	1	w			
22	ムササビ	大腿骨	R	1	p			
23	タヌキ	肩甲骨	R	1	d			
24	イヌ	基節骨	?	1	w		h11-99-1-7-2-3層	
25	小型哺乳類	遊離歯	?	1	第3後臼歯?			
26	小型哺乳類	四肢骨	?	1	m			
27	イノシシ	上顎歯	L	1	I2			
28	イノシシ	上顎歯	L	1	(I2)			未萌出
29	イノシシ	上顎歯	L	1	I3			
30	イノシシ	上顎歯	L	1	P3		h11-99-1-7-2-3層	
31	イノシシ	上顎歯	L	1	M1			
32	イノシシ	上顎歯	R	1	C		h11-99-1-7-3-4層	
33	イノシシ	上顎歯	R	1	P2			
34	イノシシ	上顎歯	R	1	P3			
35	イノシシ	上顎歯	R	1	P4			
36	イノシシ	上顎歯	R	1	M1			
37	イノシシ	上顎骨	R	1	[P2x P3x]		h11-99-1-7-3-4層	P3歯根のみあり
38	イノシシ	上顎骨	R	1	[M2]		h11-99-1-7-3-4層	
39	イノシシ	下顎歯	L	1	dp2			
40	イノシシ	下顎歯	L	1	dp4			
41	イノシシ	下顎歯	R	1	dp4			
42	イノシシ	下顎歯	R	1	M1		h11-99-1-8-4-4層	
43	イノシシ	下顎骨	R	1	[M2 M3]			
44	イノシシ	腓骨	R	1	(d)			
45	イノシシ	中心足根骨	R	1				
46	イノシシ	第4足根骨	L	1				
47	イノシシ	中手骨/中足骨	?	4	<d>			
48	イノシシ	基節骨	保留	1	<p->-d			
49	イノシシ	基節骨	保留	1	<p->-(d-)			
50	イノシシ	中節骨	保留	5	w			1点焼骨(灰)
51	イノシシ	末節骨	保留	2	w			
52	イノシシ	頭椎	-	1	椎体		h11-99-1-7-3-4層	椎間板未癒合脱落 1点焼け黒灰色
53	シカ	角	?	<3>	fr			
54	シカ	下顎歯	R	1	P4			
55	シカ	肩甲骨	L	1	d			
56	シカ	橈骨	R	1	d			
57	シカ	尺骨	R	1	<p->-m			
58	シカ	中間手根骨	L	1				
59	シカ	果骨	L	1				
60	シカ	中手骨	?	1	(d)			
61	シカ	寛骨	R	1	恥骨			
62	シカ	大腿骨	R	1	<p->	小転子		
63	シカ	基節骨	保留	1	p			
64	シカ	中節骨	保留	1	w			
65	シカ	中節骨	保留	1	d			
66	ヒト	上顎歯	L	1	P2			
67	ヒト	豆状骨	R	1				



第78図 脊椎動物遺体(1)



第79図 脊椎動物遺体（2）

第5章 うならず遺跡

第1節 概要

うならず遺跡は平和公園遺跡群の北西部に位置する。南側には貝殻塚遺跡や多部田貝塚、東側には木戸作遺跡があり、いずれも浅い谷で隔てられている。発掘調査は、昭和50・62年度、平成元～3・5～7・12・15・30年度、令和元年度と、長期に渡り断続的に行われてきた。合計の調査面積は確認調査約2,209/26,624㎡、本調査33,300㎡である（詳細不明は除く。一部重複あり）。その結果、旧石器時代から中・近世に及ぶ各時代の土地利用が明らかになっている。調査した主な遺構は、旧石器時代の礫群3基、縄文時代の住居跡80軒、古墳時代～平安時代の建物跡30軒、中・近世の溝である（第80図）。遺跡の形状は北半が東西に、南半が南北に長い。遺構のほとんどは北半部で検出しており、多部田貝塚のとの間には土地利用の乏しい部分を挟んでいる。

旧石器時代の礫群が遺跡南部から3か所検出されている。地点間で接合が認められ同時期のものと考えられる。石器は移入と在地の石材で構成され、礫は在地の石材が多数を占めている。

縄文時代の遺構は住居跡86軒、土坑160基を検出している。遺構の大半は中期後葉から後期前葉のものであり、中期大型貝塚群が消滅したのち、後期大型貝塚群が形成する時期の集落といえる。出土遺物は豊富であり、餅ヶ崎遺跡や愛生遺跡とともに、この時期を代表しうる発掘成果といえる。集落は遺跡北半部の東西350m×南北130mの範囲に展開している。南側には後期の大型貝塚である多部田貝塚がある。称名寺1式期には二つの集落が併存し、堀之内1式期に拠点集落が形成された時期にも、小規模な集落が存在したことになる。どのような関係にあったのかが注目されることである。

古墳時代は、前期6軒、中期1軒、後期3軒の計10軒の住居跡が確認されている（第80図）。特に北西の住居は狭い領域から5軒密集して検出されており、調査区外への広がりを考慮すると、付近に集落が展開していることが想定される。前期の住居跡は周辺遺跡では検出例が少なく、貴重な資料といえる。また、その北側からは古墳の可能性のある塚が一基確認されている。

奈良・平安時代の遺構は住居跡14軒、掘立柱建物跡6棟を検出している。その分布は、東部の東西80m×南北150mに集中している。住居跡にはロクロビットや粘土溜を有するものがあり、土器工房の可能性もある。窯は未発見であるが、集落内で土器生産が行われたと推定される。掘立柱建物跡は、同時期の遺構の中でも特に南東部に偏在している。遺跡内で瓦片が確認されている一方で、寺院などは確認されていない。掘立柱建物の一部がお堂、あるいは小寺院である可能性はあるが、掘立柱建物そのものに伴う遺物は少ない。特筆すべきものもなく、詳細は不明である。竪穴建物は8世紀から9世紀にかけて、掘立柱建物については、おおよそ平安時代初頭のものであると思われる。さらに、当該時期の墳墓と思われる方形周溝状遺構も4基、北西部で確認されている。竪穴建物、掘立柱建物、墓域がそれぞれ領域を分けて分布しているようである。

中世以降においては、近世の道が2条確認されており、その他にも中・近世の道と思われる溝が5条出ている。

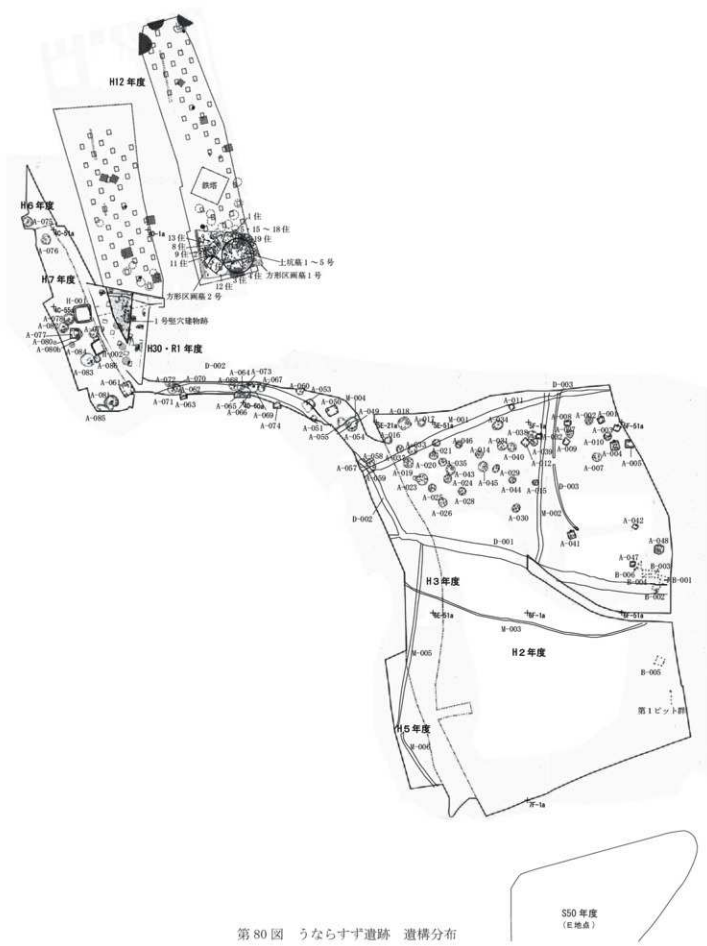
なお、昭和50年調査の平和公園E地点も今回当遺跡に加えたが『平和公園II』で報告済みである。

第2節 未報告資料補遺

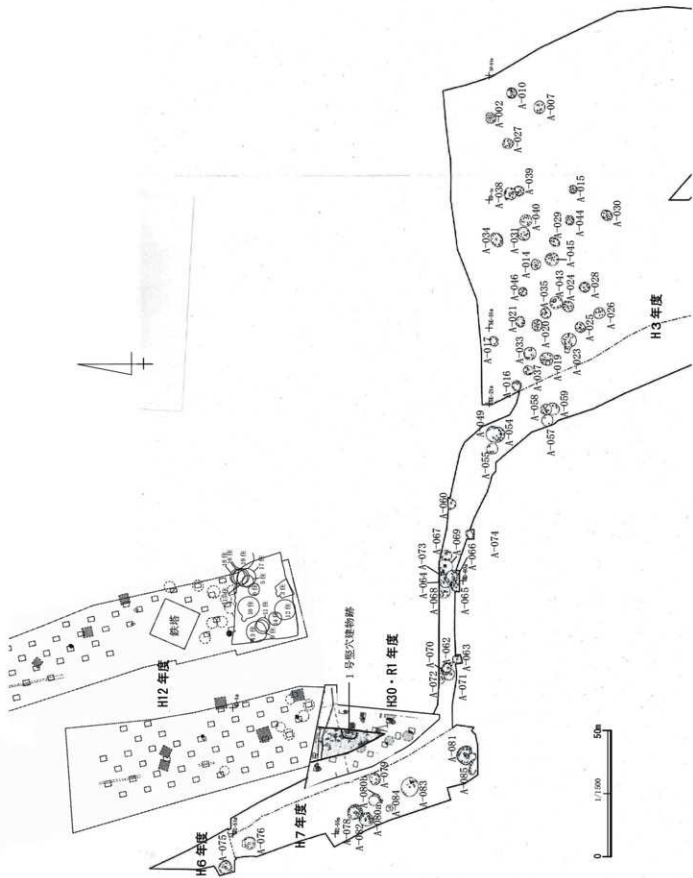
昭和61年度確認調査の出土遺物と、平成2～5年度調査の貝サンプルが未整理のまま保管されていたためここで報告する。なお、昭和61年度の調査地点は不明である。

1 縄文時代遺物（図版50）

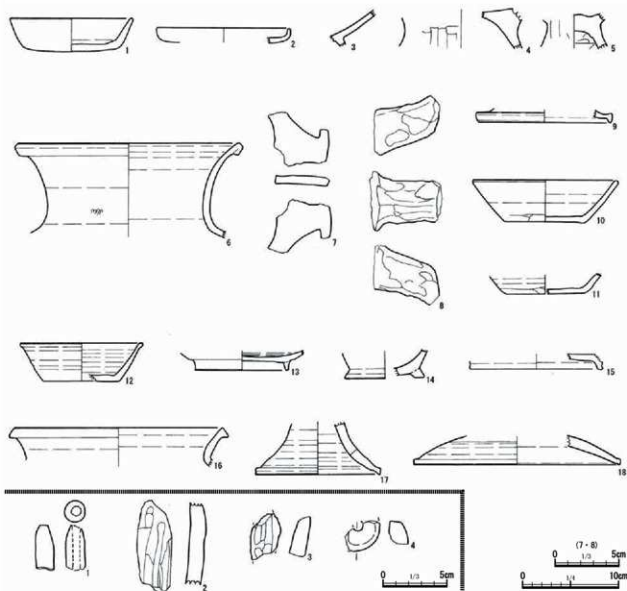
縄文土器が104点取り上げられている。阿玉台式3点、加曽利E式44点、後・晩期2点、その他55点（付表2-2）で、加曽利EⅢ式がまとまっている。8点を掲載した。1は阿玉台式で1a式か。2～6は加曽利E式で、



第80図 うならず遺跡 遺構分布



第81図 うならす遺跡 縄文遺構分布



第82図 奈良・平安時代遺物（昭和61年度調査）

2・3はEII～EIII式、4～6はEIII式であろう。7は壺形土器の口縁部片で、安行式平行か、8は安行3cまたは前浦式であろう。

縄文石器は、磨製石斧1点、磨石類5点、石皿3点、石棒1点がある。1は定角式磨製石斧の小片、2～6は研磨と敲打の痕跡をもつ磨石類、7～9は磨面と凹みをもつ石皿、10は断面の丸い大型石棒の小片である。

2 奈良・平安時代遺物

グリッドごとに分類されていたが、位置の記録を欠くため遺跡一括遺物とした。

(1) 土器（第82図、図版51）

須恵器、あるいは須恵器の形状をした土師器が大半であり、18点を掲載した。高台碗の底部（14）と思われるものなども検出されている。遺物の時期としては8世紀末から9世紀前半ごろのものとみられる。これは、他年度の調査結果と整合しており、この時期の集落に伴うものであろう。

(2) 土器以外（第82図、付表7）

古代瓦片が3点と管状土鍾車3点（1～3）、土製紡錘車1点（4）が出土した。瓦片に関しては細片であり図化はし

ていない。瓦片はいずれも平瓦で表に縄目、裏面に布目がみられる。本遺跡内で工房とみられる住居が検出されているが、窯跡を有するムグリ遺跡も含めて、当地区で瓦を生産した証左は得られていない。また、鉄屑が1点出土している。

3 動植物遺体

(1) 概要

動物遺体については、『平和公園Ⅱ』において縄文時代の住居跡9軒・土坑9基、平安時代の住居跡1軒・土坑2基の貝サンプルの分析結果を公表している。

平成2～5年度の調査区で採取された未洗いのサンプルが多量に保管されていたため、採取場所や過去の分析の有無等を考慮して対応を検討し、簡単な記載を行った。土サンプルについては12軒の住居跡から採取された土糞22袋分・52.6リットルがあり、10・5・2.5・1mmフルイとフロテーションを実施した。土器小片、砕片2点（黒曜石・チャート）、クルミ果皮の極小片の検出に留まったため実施したことのみに記しておく。

貝サンプルは溝から採取されたものが土糞18袋分・122リットルがあり、いずれも既報告（植月2004）では未分析であった。採取遺構が判明した3条の溝のサンプルの一部を分析対象とした。対象外のサンプルと遺構の位置等の手掛かりがない「旧7号溝」のサンプルについては4mmの乾燥フルイで人工遺物等を回収したのち廃棄した。分析対象のサンプルについてはすべて保管対象とする。

M-001 (H02・M-001) 総延長140m、最大深さ0.8mの古代の溝であり、平安時代・9世紀代の遺物が多量に出土している。性格は不明だが、台地の縁を通る現代の道と一致している。遺物が集中する地点のうち1カ所に2.7m×1.1m、厚さ0.2mの貝ブロックが形成されていた。サンプルは79リットルあり、貝層の全量が採取されたものとみられる。そのうち4リットルを分析対象とした。

D-002 (H03・M-011) 総延長90m、深さ0.6mの溝である。遺物は少ないが鉄鍋と砥石が出土しており、年代は近世（詳細不明）である。底面に波板状の凹凸があり、径0.3mほどの窪み部分に小規模なブロック状貝層を形成していた（報告書には図示なし）。採取量11リットルのうち4リットルを分析対象とした。

M-006 (H05・番号なし溝) 採取位置は不明だがこの溝から採取された可能性が高いと判断した。溝の年代は不明だが近世の蓋然性が高い。不明の番号で区分された9単位、合計土糞11袋分のうち、4単位の全29リットルのうち、15リットル分を分析対象とした。

(2) 貝種組成

表8のように、同定分類群は15、同定個体数は30,928である。古代と近世の3遺構ともイボキサゴが大半を占めており、全体では98.2%に及ぶ。それ以外の種は少ないが、M-006の一部でサルボオやシオフキ、アサリがややまとまっていた。これらの希少種も含めてすべて海産種であり、内湾砂泥底の干潟から浅瀬に生息するものがほとんどを占めている。近世の2遺構ではわずかに湾奥泥干潟に生息するマガキが含まれる。ナミマガシワはマガキとともに持ち込まれたものであろう。

(3) 計測値

計測可能個体が多い種について最大200個の計測を行った。以下に平均±標準偏差（試料数）のみを示す。

イボキサゴ殻径 M-001: 14.61±1.04 mm (200)、D-002: 16.04±0.93 mm (26)、M-006: 12.81±0.74 mm (200)

サルボオ殻長 M-006: 41.32±4.63 mm (83)

アサリ殻長 M-006: 41.09±3.12 mm (26)

(4) 標準貝類相

貝サンプル1リットル当たりまたは貝類200個あたりの標準的な組成、サイズを復元するものであり、ここでは後者を採用した。また、比較のための参考として『平和公園Ⅱ』所収の多部田貝塚のデータ（縄文時代後期）

を掲げた。イボキサゴの計測値は提示されていなかったため、今回の整理作業で実施した平成11年調査分の未水洗貝サンプルのなかから200個を計測したものを採用した。

第8表 貝種組成と標準貝類相

種名	№	全体	%	M-001	D-002	M-006全	M-006-1	M-006-2	M-006-3	M-006-4
イボキサゴ		30384	98.2%	4758	7083	18543	6458	415	6190	5480
サルボオ		112	0.4%			112	6	97	8	1
シオフキ		104	0.3%		2	102		5	6	91
アサリ		91	0.3%			91		45	45	1
アラムシロ		86	0.3%	24	22	40	1	3	16	20
ウミナナ科		54	0.2%	19	17	18	7	1	5	5
ツメタガイ		24	0.1%			24	5	9	9	1
ハマグリ		24	0.1%	4	4	16	10	2	3	1
オキシジミ		22	0.1%	1		21		19	2	
アカニシ		9	0.0%			9		1	5	3
スガイ		8	0.0%			8	3	2	2	1
マガキ		4	0.0%		1	3		2	1	
カガミガイ		4	0.0%		1	3			3	
ナミマガシワ		1	0.0%			1		1		
フジナミガイ		1	0.0%			1			1	
合計		30928	100.0%	4806	7130		6490	602	6296	5604
採取量(%)		117.0		79.0	11.0		3.0	13.0	7.0	4.0
分析量(%)		23.0		4.0	4.0		3.0	4.0	4.0	4.0

標準貝類相

種名	縄文後期			近世			イボキサゴのサイズ		
	多郡田	M-001	M-006	mm	多郡田	M-001	D-002		
イボキサゴ	94	199	195	-11.0					
ハマグリ	4			-12.0	7				
アラムシロ	1	1	1	-13.0	33	11			
サルボオ			1	-14.0	84	46			
シオフキ	1	1	1	-15.0	40	77	5		
アサリ		1	1	-16.0	11	50	10		
ウミナナ科				-17.0	18	13	5		
				-18.0	5	2	6		
				-19.0	2	1			
					200	200	26		

(5) 考察

3遺構の推定年代はM-001が平安時代、D-002とM-006が近世である。ただし、当遺跡では縄文中期に活発に貝層が形成されているので、縄文時代の貝層が流入した疑いを検討する必要がある。時代を推定するために有効な特徴を3点挙げる。

- ①3遺構とも、縄文時代のイボキサゴ漁で混獲されるアラムシロとウミナナ科がごく少ない。
- ②イボキサゴのサイズは、縄文中期に比べてM-001・006は大きめ、D-002は近似する。
- ③M-006はハマグリよりもシオフキがかなり多い。

イボキサゴが大半を占めるのは当地域における通時代的な特徴だが、①のように、縄文時代にはかご漁によって数パーセント混入するアラムシロとウミナナ科が少ない。②によりM-001・006は流入の疑いは低い。③は16世紀以降に通有の特徴であり、遺構の時期と整合する。D-002はやや疑いが残るが、①によりその可能性は低いと判断した。以上により、いずれも遺構に伴う貝層とみてよいであろう。

第3節 縄文時代

1 遺構数と分布の傾向

遺跡の北半部で住居跡86軒、土坑190基を検出している。時期別の内訳は以下のとおりである。

中期後葉・加曽利EⅢ 住居跡12・土坑0

加曾利 EIV	住居跡 23・土坑 18
後期初頭・称名寺	住居跡 20・土坑 14 (EIV～称名寺を含む)
後期前葉・堀之内	住居跡 10・土坑 9
詳細不明	住居跡 21・土坑 149

遺構外では早期前葉から晩期前半の土器が出土しており、集落形成期以外では燃糸文土器、諸磯・浮島式、加曾利 B3 式～安行 2 式がやや多いが、集落を形成した様子は伺えない。詳細不明とした住居跡も中期後葉から後期前葉のものが大半を占めると考えられ、遺構と土器の数量からみると、集落は加曾利 EIII 式の新しい段階 (EII 式から続くキャリパー形を伴わない) から始まり、EIV 式期から称名寺 1 式期にピークを迎え、称名寺 2 式期に一度途絶えた後、堀之内 1 式に再度集落を形成したとみられる。各時期の遺構分布をみると、加曾利 EIII 式期には東端 200m×60m の比較的狭い範囲、EIV 式期には西側に広がって 320m×80m、称名寺式期にはやや西側に移って南北に広がる 290m×130m の範囲に分布する。次第に分布を広げながらやや西にシフトする様子がかがえる。さらに堀之内式期には西端部の径 140m の狭い範囲にシフトしている。遺構群が南に広がらないことは確実であるが、北側については確認調査のみの範囲を隔てて隣接する台ノ坊遺跡でも同時期の土器が採集されている。浅い窪地上的地形を囲むように遺構が分布する可能性がある。

2 出土遺物の傾向

小規模な遺構内貝層が比較的多いこと、石棒祭祀に関わる事例が多く、遺構外の遺物集中で石器製作を行っていることなどを挙げることができる。遺構外の遺物集中は 3 か所あり、いずれも称名寺式期の遺物分布の東端付近に位置する。表 5 のように石器類の出土は、住居跡や土坑よりも明らかに多い。なお、東京湾東岸の中期大型貝塚形成期の石器組成は、石鏃・打製石斧・磨石類が約 1 : 1 : 1 となるのが特徴であるが、当遺跡では石鏃 136 : 打製石斧 53 : 磨石類 165 となり、打製石斧が少ないことが特徴である。

第 9 表 石器・土製品集計

	全体	住居跡	土坑	集中1	集中2	集中3	遺構外	備考
石鏃	136	11	7	66	31	10	11	
石鏃	20	3		3	1	2	11	
石匙	16	1		1	2	2	10	
石核・両極	50	—	—	25	3		22	
打製石斧	53	12	3	1	11	5	21	
磨製石斧	49	5			2	3	39	
石皿・台石	52	11	2	3	3	1	32	
磨石類	165	7	9	6	13	15	115	
石棒片	138	54	2	38	8	3	33	
土器片鏃	30	8	4	6	2	1	9	

石棒の大半は破砕しており、被熱を伴う祭祀に使われたものとみられる。比較的激しく被熱した部分は細かく剥離し、比較的被熱が弱い部分は輪切りに破損したようである。有頭と無頭があるが、無頭の大形石棒が多数持ち込まれており、台石・丸石・石皿と共存する例がみられる。無頭石棒の多くは群馬県大江山麓産の石英斑岩製と推定される。報告書未掲載のものが多く、全体の点数は未確認である。石棒片は遺物集中 1 の 5E-32 付近に集中し、1 点が A-033 のものと接合する。石棒の分布は 3 か所の遺物集中の範囲と一致しており、窪地の南端が石器製作や廃棄の場として意識されていた可能性がある。大江山麓産の石棒は、中期末から後期初頭にかけて県内で広く使われているが、出土点数は当遺跡が突出しており、流通の拠点であった可能性が高い。資料の全容と詳細な観察が望まれるが今回は実施できなかった。

なお、既存の報告書で蛍光 X 線分析による黒曜石の原産地推定が行われている (二宮他 2007)。108 点の試料のうち信州・星ヶ塔が 93 点 (86%) を占める。信州・小深沢 9、伊豆諸島・神津島 5、栃木・高原山 1 が混じ

る。水系は鹿島川上流域だが、距離的に近い下泉町遺跡群の6遺跡と芳賀輪遺跡の試料も分析している（ほぼ同時期の遺構出土が大半）、星ヶ塔が最も多く、遺構によって神津島や小深沢も多く、高原山が少数混じるという傾向は共通している。当地域のこの時期の特徴を表していると考えられる。

第4節 古墳時代

前期の住居跡が平成2・3年度と平成12年度調査区で見つかっている。特に平成12年度本調査においては東西20m×南北13mほどの調査区から前期の住居が5軒検出されている。また、未調査域を隔てた南側の平成3年度調査区でも前期の住居が1軒見つかっているため、集落の広がりが想定される。中期は住居が1軒検出されているのみである。後期になると前期とは場所を変え、遺跡の西端で住居が3軒見つかっている（『千葉市うならす遺跡—平成12年度調査—』）。切りあひもなく、長期間存続した集落ではないようである。また、同じ後期の遺構として、遺跡北端に古墳が一基見つかっている（『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書—平成15年度—』）。かなりの削平を受けており、遺物もなく、また主体部も確認できなかったため、詳細は不明である。しかし、その構築方法より、後期の古墳であると推測した。

第5節 奈良・平安時代

当該時期の遺構は竪穴建物と掘立柱建物、方形区画墓、溝である。竪穴建物と掘立柱建物は遺跡東部に集中しており、その中でも北に竪穴建物、南に掘立柱建物と、区域を分けて建てられている。竪穴建物は8世紀から9世紀にかけて、掘立柱建物は8世紀末から9世紀前半ごろのものである。住居A-001からは粘土溜の可能性のある扁平なビッドが、A-004、A-041、A-048からはロクロビッドや粘土溜が検出されており、いずれも土器製作にかかわるものであると思われる。多くの住居から刀子や紡錘車などの鉄製品が見つかっている。墨書土器も多数検出されており、そのほとんどが9世紀前半のものである（『平和公園Ⅱ』）。また、遺跡西部から方形区画墓が4基検出されており、住居域と区別されていると思われる。溝（M-001）は遺跡中央付近を東西に区切るかたちで伸びている。性格は不明であるが、多量の土器と貝層を伴っている。掲載資料に限っても長頸壺2・坏24・蓋3・皿4・高台付杯3・台付碗1・甕20・甔2・瓦7・支脚1などがあり、文字資料も10点出土しているなど、当遺跡のなかでもっとも遺物が集中している。

第6節 中世以降

当該時期の遺構としては溝、道路と土坑墓があげられる。土坑墓は3基検出されており、銭や人骨が発見されている。遺構として確認されているのはこの3基であるが、出土遺物がなく詳細不明とされている土坑が多数あること、遺構外遺物として出土した8枚の銭の内6枚は同一箇所から発見され、六道銭とみられることなどから、土坑墓は3基にとどまらないと想定できる。

溝の中には硬化面を有するものもあり道路として利用されていたものもあると思われる。（『平和公園Ⅱ』）

台地平坦面に溝と土坑墓があるのは、木戸作、内野両遺跡でも共通であり、この時期に共通した台地の利用であると思われる。

参考文献

二宮修治他 2007『千葉市下泉町遺跡群・芳賀輪遺跡・うならす遺跡出土黒曜石の原産地推定』『下泉町遺跡群』千葉市教育振興財団

第6章 内野古墳群

第1節 概要

内野古墳群は、木戸作、内野両遺跡と重複する古墳時代後期～飛鳥時代の古墳群である。北側に都川を望み、南北に延びる台地上の東辺縁部～平坦面に立地する。昭和45～47年度に測量と発掘調査が行われ、『千葉市史資料編1 原始古代中世』と『千葉市文化財調査報告書1集』に1号墳～8号墳が掲載された。2つの資料で番号に相違があり、その後も整理されないままであった。今回、第83図のように確定した。

昭和50年以降も平和公園遺跡群の調査に伴い1・9～14号墳が発掘された。本書で初めて報告するのは1号墳前方部の周溝と、5号墳、10～14号墳である。『市史資料編』と『千葉市文化財調査報告書1集』に記載の4・6～8号墳に関しては本書で測量図を一部改変し、掲載する。5号墳は上記2つの資料に掲載されていたが、未報告の墳丘断面図が発見され、さらに収蔵されていた出土人骨を鑑定し、鉄器を改めて観察し、今回報告する。同様に、14号墳は『平和公園Ⅱ』に「円形周溝状遺構」として掲載されていたが、調査区全体図に掲載されていたのみであったため、本報告書で、遺構平面図とセクション図を掲載した。なお1～9・14号墳の調査は公共座標を持たず、グリッドの設定もなされていなかったため、位置はおおよそである。

古墳の年代に関しては、5・9・10号墳に関しては常総型古墳が盛行した7世紀前半と考えられ、9号墳は出土した鉄鎌からも7世紀前半と考えられる。それ以外の古墳に関しては遺物がなく、別遺構との切り合いもないため、個々の築造時期は明らかではないが、前方後円墳と複数の円墳という古墳群の構成を合わせて考えると、古墳群全体の時期は6世紀後半から7世紀前半で、前方後円墳の1号墳が最も古いと推測される。

第2節 遺構と遺物

古墳

1号墳 (第84図、図版52)

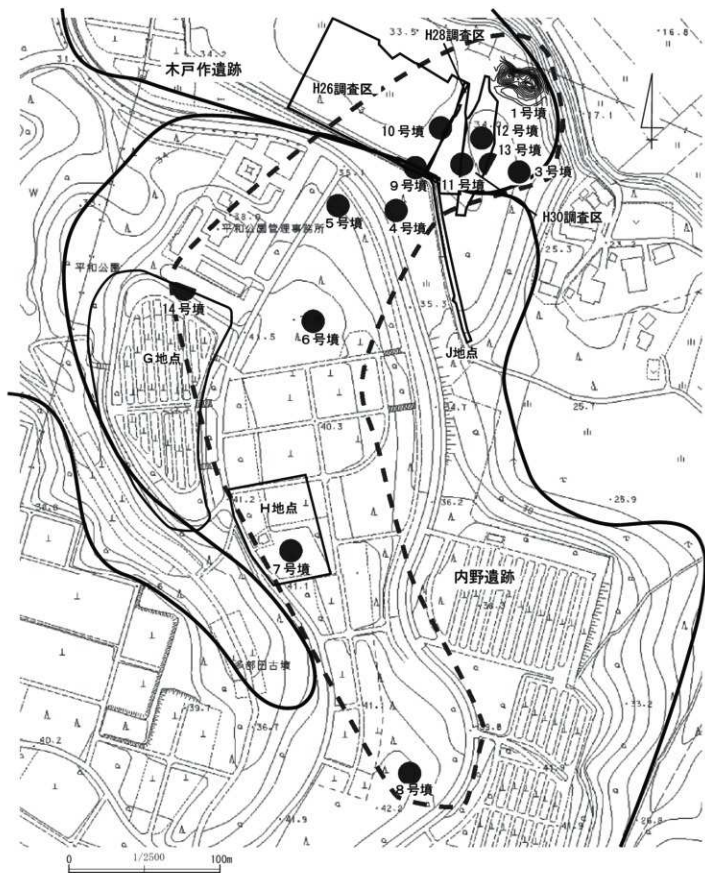
6J-76に位置する。古墳群中、確認されている唯一の前方後円墳で、台地辺縁部に築造され、都川の形成した谷に面し、内野古墳群の最北に位置する。規模は全長40m、最大高3.6mを測る。昭和45、46年度の測量調査の段階から後円部南側にはその地形より周溝の存在が示唆されていた。平成24、25年度の発掘調査で周溝の一部を検出し、平成28年度調査でも前方部西南角に周溝があることを確認した。第82図は平成28年度調査区を墳丘測量図と合成したものである。この調査により前方部周辺の周溝の存在が確定した。墳丘部の発掘調査は行われておらず、主体部の位置は不明である。『埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書一平成26年度一』に墳丘とその周辺の詳細な測量図を掲載している。墳丘、特に前方部の形状と周溝の形状から、時期は6世紀後半としておきたい。現在、公園内で保存されているが、立木や下草に覆われているため、墳丘の姿を確認することは難しい。

2号墳

存在は知られていたが、昭和50年調査の段階で墳丘が消滅しており、位置は不明である。当時の所有者によると鉄器が出土したとの話が伝わっている、とのことであるが、遺物が残されておらず、詳細は不明である。1号墳の南側平坦面上にあったとされていることから、後述の10～14号墳のいずれかである可能性がある。

3号墳

7J-62に位置する。1号墳の南に築造された円墳で、台地辺縁部に築造され、都川の形成した谷に面する。径11m、高さ1.2mを測る。地形より周溝の存在が示唆されるが不明。発掘調査は行われておらず、主体部の位置や年代は不明である。なお『市内遺跡報告書(平成26年度)』に詳細な墳丘測量図を掲載している。(報告書中では「2号墳」となっている)。平和公園内で保存されているが、1号墳同様、立木の残る区域にあるため、見学



第 83 図 内野古墳群

は困難である。

4号墳 (第87図)

71-94に位置する。台地平坦部に造成された円墳である。径17m、高さ1.5mを測る。道路造成により西裾部が破壊されている。発掘調査は行われておらず、周溝、主体部及び年代は不明である。現在も平和公園内で保存されており、園内周回道路から墳丘を見ることができる。

5号墳 (第85・86図、図版52・54、附表8)

71-73に位置する。昭和46年度に発掘調査が行われ、『市史資料編』に掲載されているが、未掲載の墳丘断面図を今回発見した。そのため、『市史資料編』掲載の図と合わせて、本書に掲載した。調査時の写真から、調査開始前の段階で墳丘の削平が進み、墳丘、周溝は半分以上失われていたようである。残存している墳丘は、直径8m、高さ1.5m、周溝の内側の直径は約30mを測る。断面図から、調査時には墳頂も破壊されていたように見え、実際の墳丘高はもう少し高いと推測される。主体部は、墳丘の中央ではなく、墳丘裾部に地山を掘りこんで構築されている。また、主体部は板石を用いた箱式石棺である。さらに、被葬人骨は最低でも6体であることがわかつていいる。さらに、古墳群を構成する古墳の一つであり、所在地が東関東の中央部という特徴をも合わせて考えると、5号墳はいわゆる常総型古墳であると思われる。

また、今回発見されたセクション図(第86図)より、墳丘の構築法の一部が明らかになった。それによると墳丘の中央部と周囲から盛って低い墳丘を構築し、その後中央部から再度盛っている様子がわかる。類似としては同じ常総型古墳とされている八千代市村上古墳群第3号墳があげられる。報告書によるとその墳丘は「旧表土(黒色土)を平面ほぼ不整形に整形し、それを基盤として、その上に周囲の土をかき集めて東西両端に盛土し、次に、中央部に盛土し、ここで一旦整地し、再び、大きく盛土し、墳丘を構築」(関口1979)という手順で構築されている。5号墳においては、村上古墳群第3号墳ほどの詳細は明らかできなかったが、2つの墳丘の構築手順は類似点が見られる。これが、常総型古墳の構築方法の一つである可能性がある。この時期の古墳は発掘調査以前に墳丘が失われ、確認不可能な場合が多いため、5号墳はそうした意味でも貴重な資料であると思われる。

また、人骨と同じ箱に、金属器が綿にくるまれて収納されていた。『市史資料編』にも主体部から「直刀2本、刀子数本、鉄鍔数本」が出土したと記載があった。これらの鉄器を確認したところ、14点と細片、木質片があり、大刀の一部が6点、刀子1点、鉄鍔7点を確認した。市史にも実測図、写真いづれも掲載されていなかったため、今回写真を掲載した(図版54)。

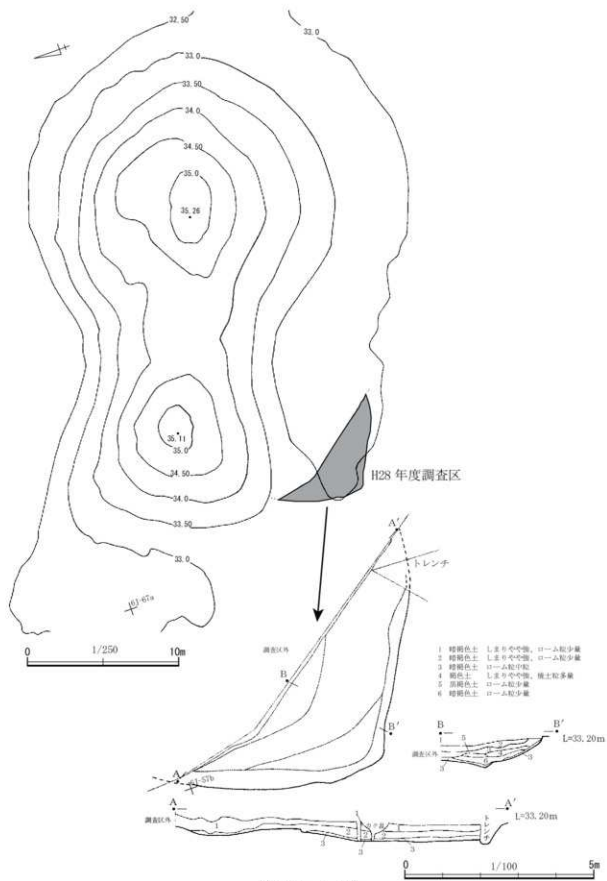
14~19は鞘、東の一部であったが、接合は確認できず、大刀そのものの点数は不明である。14は内部から木質が検出され、鞘の装具であると思われる。鞘口、鞘間、鞘尻にいづれのものであるかは判別できなかった。16は黄金物、あるいは足金物の一部であると思われる。17は茎の一部であると思われ、目釘が装着されていた、さらに、鞘の木質も接合した。18も同じく茎の一部であると思われ、金属板が木質に挟まれていた。

鉄鍔は、長頭鉄鍔の頸部が少なくとも11本確認できる。2~3本で錆着しているものがあり、まとめて置かれていたようである。20のみ関部~茎部が残り、微細破片にも関部と思われるものはあったが、鍔身部分はみられなかった。

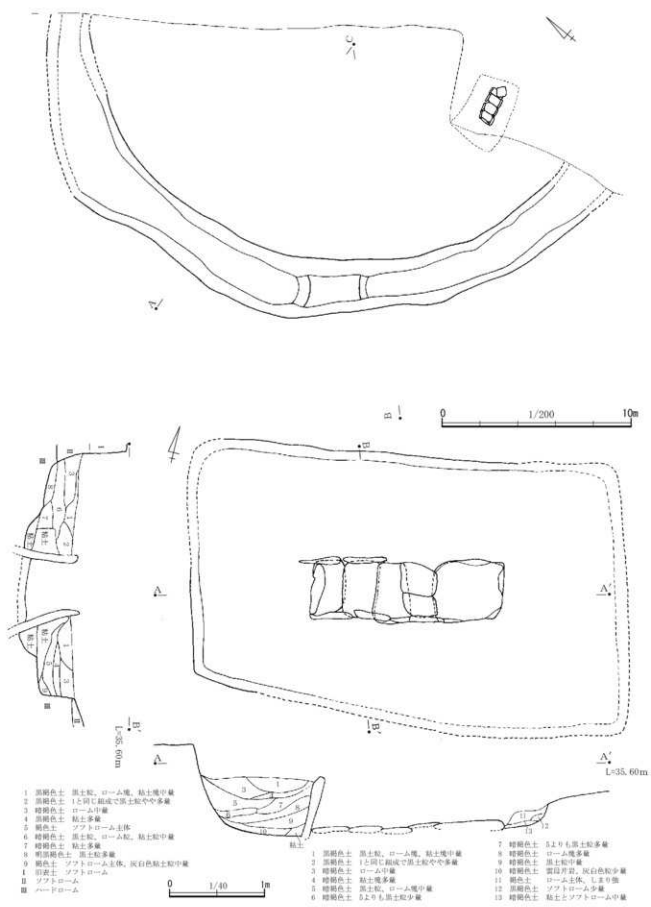
古墳の時期は、常総型古墳が盛行する時期と、長頭鉄鍔の存在を考慮し、6世紀末~7世紀初頭とした。

6号墳 (第87図)

81-14に位置する。台地の最高地に築造された円墳で、直径20mであるが、周溝を含めると30mを超える。高さは1.5mを測る。発掘調査は行われておらず、主体部及び年代は不明。現在も平和公園内で保存されており、墓地区画の脇にあり見学可能である。



第 84 図 1号墳

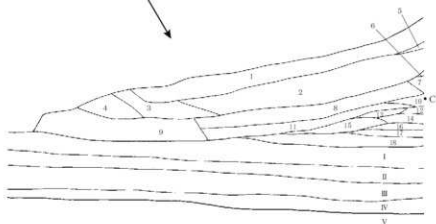


第85図 5号墳①

A-Cセクション



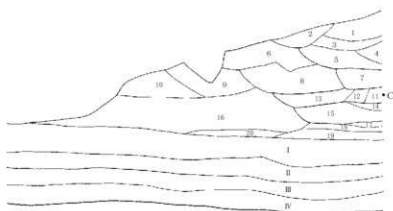
- 1 淡灰褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土 ソフトローム中層
- 7 暗褐色土
- 8 赤黄褐色土 ローム中層
- 9 赤褐色土
- 10 暗褐色土 ソフトローム中層
- 11 赤黄褐色土 ソフトローム中層
- 12 暗褐色土
- 13 暗褐色土
- 14 淡灰褐色土 ソフトローム中層
- 15 淡灰褐色土
- 16 淡灰褐色土
- 17 淡灰褐色土
- 18 淡灰褐色土
- 19 黒色土
- 20 暗褐色土
- 21 暗褐色土
- I 石灰土
- II 淡灰褐色土
- III 暗褐色土
- IV 暗褐色土 ソフトローム
- V 黄褐色土 ハードローム



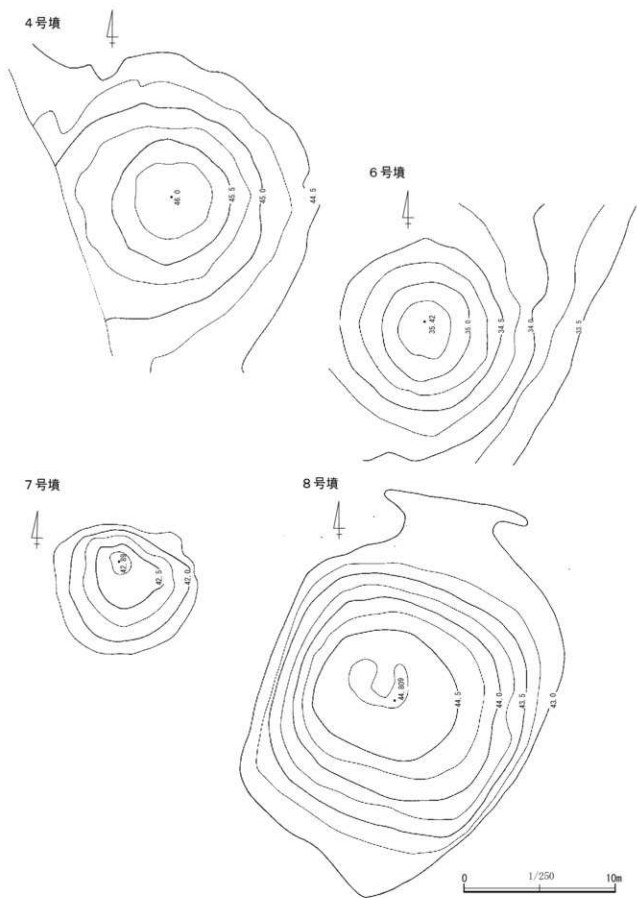
B-Cセクション



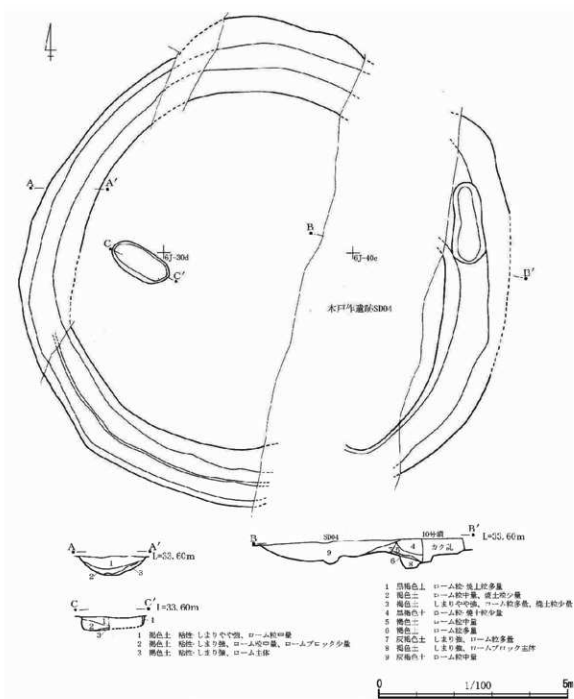
- 1 暗褐色土
- 2 赤褐色土
- 3 褐色土 ローム主体
- 4 淡灰褐色土
- 5 赤褐色土 ソフトローム中層
- 6 赤褐色土 ローム中層
- 7 赤褐色土
- 8 赤褐色土 ローム中層
- 9 淡褐色土 ソフトローム中層
- 10 暗褐色土
- 11 赤褐色土 ソフトローム少量
- 12 赤褐色土 ローム中層
- 13 淡褐色土 ローム主体
- 14 赤褐色土 ソフトローム中層
- 15 赤褐色土 ソフトローム中層
- 16 黒色土
- 17 暗褐色土 ソフトローム中層
- 18 淡灰褐色土
- 19 暗褐色土
- 20 黒色土 ローム粒中層
- 21 赤褐色土
- 22 暗褐色土 ローム中層
- I 石灰土
- II 淡灰褐色土
- III 暗褐色土
- IV 暗褐色土 ソフトローム
- V 黄褐色土 ハードローム



第86図 5号墳②



第87图 4・6～8号墳 測量図



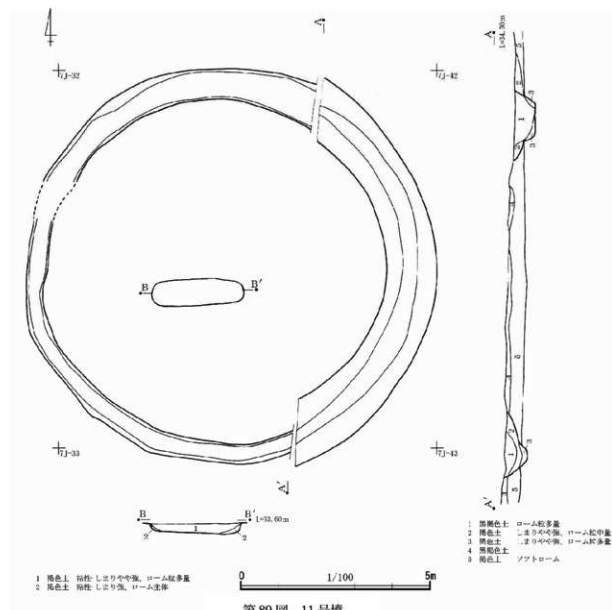
第88図 10号墳

7号墳 (第87図)

91-38 に位置する。6号墳よりも南に位置し、同じ台地の最高地に築造されている。北側1/3ほどが削平されているが、推定直径5m、残存部高さ1mを測る。発掘調査は行われておらず、主体部、年代は不明。現在も平和公園内に保存されており、墓地区画の脇にあり見学可能である。

8号墳 (第87図)

111-47 に位置する。7号墳よりもさらに南で、6・7号墳と同じ台地の最高地に築造された円墳である。古



墳群の南端となる。径20m、高さ1.8mを測る。発掘調査は行われておらず、主体部、年代は不明。現在、平和公園内に保存されており、墳丘を見ることができる。

9号墳 (図版52)

遺物、遺構の詳細は『平和公園Ⅱ』で報告されている。『平和公園Ⅱ』所収、第228～230図)7J-2に位置する。平坦面上に築造された円墳である。径10.5m、周溝を含めると13.6mを測る。墳丘は調査時には失われていた。主体部は2基存在し、地山を掘りこんで粘土椀としていた。2基とも鉄鍔と刀子が見つかった。1号主体部からは広根系の鉄鍔が出土しており、腸袂がほぼ直角のものと、鋭角のものとが混在している。一方、2号主体部からは剣身形長頸鍔が4本出土しており、腸袂や閤を持たない。こうした形状と構成から7世紀前半ごろと思われる。この9号墳も、主体部が墳丘裾にあるなど、常総型古墳としての特徴を備えている。人骨が出土しておらず、主体部に板石の箱式石棺が使用されていないなどの点もあるが、常総型古墳の可能性があるとす。

10号墳 (第88・92図、図版53・54)

6J-30に位置する。平坦面上に築造された円墳である。径10.8m、周溝を含めると12.4mを測る。木戸作遺跡SD04に切られている。調査時に墳丘は消失していた。1.7m×0.8mの主体部とみられる土坑が地山を掘りこんで

構築されていたが、かなり浅く、墳丘から掘削したものと想定される。遺物は主体部より土師器杯が1点(1)、刀子が1点(11、図化せず)出土している。杯は非ロクロ杯で赤彩を施されていることから7世紀のものであり、古墳築造の時期を表しているものと考えられる。また、一括遺物として、周溝から弥生時代後半であると推測される甕胴部片、底部片(4・5)が出土しているが、こちらは墳丘構築時の混入であろう。この10号墳も9号墳同様の特徴を持っており、同じく常総型古墳の可能性のある古墳とする。

11号墳(第89・92図、図版53・54)

7J-32に位置する。平坦面上に築造された円墳である。径9.5m、周溝を含めると10mを測る。調査時に墳丘は確認できなかった。2.4m×0.7mの木簡直葬と見られる主体部が1基確認されている。出土遺物は墳丘より一括遺物として甕(2)と杯(3)の破片が見つかった。甕はその口縁の形状より9世紀のもの、杯は非ロクロ杯で、赤彩を施されていることから7世紀のものと思われる。杯は築造の年代を示している可能性がある。

12号墳(第90図、図版53、附表8)

7J-41に位置する。平坦面上に築造された円墳である。径13m、周溝を含めると17mを測る。出土遺物は確認されていない。調査時に墳丘は消失しており、主体部は不明。一括遺物として杯が1点出土しているが細片のため詳細は不明である。また、「周辺から出土」との記録の残る刀子(12)が1点残されていたが、状態が悪く図化はしていない。

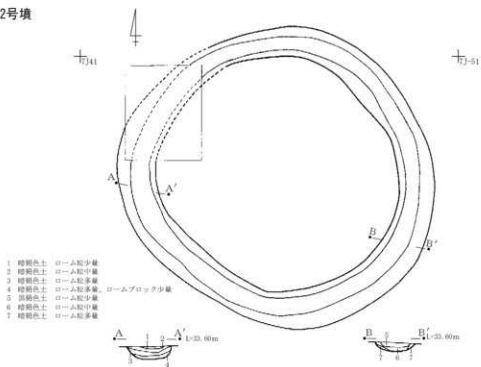
13号墳(第90図、図版53、附表8)

7J-42に位置する。平坦面上に築造された円墳である。南西3/4は調査区外にある。墳丘の径は9m、周溝を含めると13mと推測される。調査時に墳丘は確認できず、主体部も不明である。出土遺物は甕の破片が3点出土しているが、細片のため、築造年代は不明である。また一括遺物として刀子(13)が1点出土しているが、状態が悪く図化はしていない。

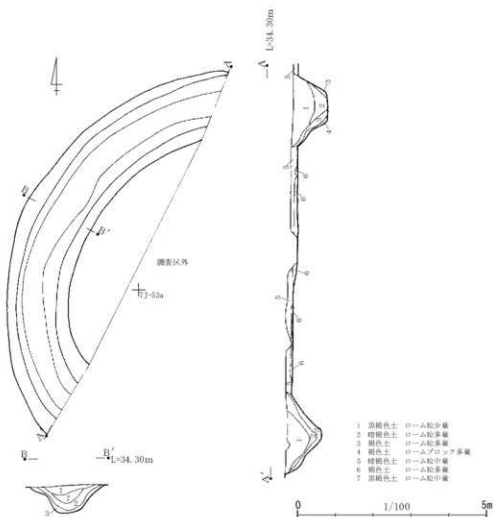
14号墳(第91図、図版53)

7H-60付近に位置する。6～8号墳と同じ台地の平坦面状に築造された円墳である。検出されたのは周溝で、全体の1/3ほどと推測される。調査時に墳丘盛土は失われており、主体部も検出されなかった。墳丘の径は9.0m、周溝を含めると12mと推測される。北半分は調査区外、東部を内野遺跡SD06に切られている。出土遺物は残されておらず年代は不明である。

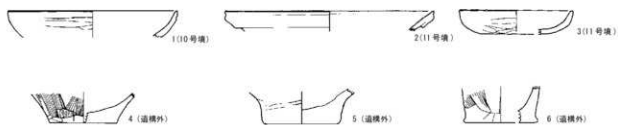
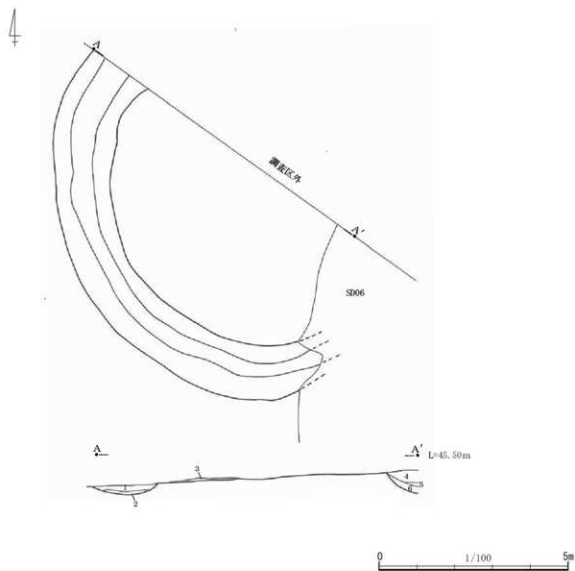
12号墳



13号墳



第90図 12・13号墳



第3節 5号墳出土の人骨について

人骨の観察所見

人骨の出土状態を記録した資料は保存されていないため、石棺内から出土したということしか明らかとなっていない。保存されていた人骨の大部分は破損しており、完形を保つものはないが各破片の保存状態は良好である。観察所見にあたって、骨の名称は『日本人解剖学』(金子1982)に準拠する。有対骨の左右はL/Rで記す。以下、部位ごとに報告する。

1 頭蓋骨

頭蓋骨は、前頭骨が保存されているものが2個体分(前頭骨A、前頭骨B)、錐体LR、頭蓋骨破片が保存される。頭蓋骨破片の部位は後頭骨と頭頂骨で、後頭骨では4個体分、頭頂骨では2個体分の部位重複が確認された。よって頭蓋骨の最小個体数は6体分となる。

(1) 頭蓋骨A

頭頂骨、前頭骨、錐体Lが保存される。前頭部はなだらかに後退し、眉間隆起は弱い。冠状、矢状縫合は内・外板ともに閉鎖・消失している。眼窩について、左に比べ右の眼窩幅が広く、眼窩内側幅は右3.2cm、左3.08cmを測る。眼窩の左右非対称が形質、病理のどちらに起因するのかが判然としない。乳様突起は破損し保存されていない。下顎窩(下顎骨との関節面)は非常に浅く、ほぼ平面をなしている。

(2) 頭蓋骨B

頭頂骨R、前頭骨Rの一部、錐体LRが保存される。前頭部はなだらかに後退している。眼窩上縁外方が庇状を呈しており、特異な顔貌を呈する。錐体RLの乳様突起は厚みがあるが小さい。下顎窩の形状は左右非対称で、右が浅く左が深い。頭蓋骨AおよびBの破片は、それぞれの頭頂骨破片に重ねた状態で保存されていたため、頭頂骨と同一個体に帰属すると判断した。しかし下顎窩の形状から錐体Rは頭蓋骨Aに帰属する可能性がある。

(3) 錐体

錐体はLRが保存される。錐体Rは外耳孔、乳様突起が非常に小さいため、子供のものと推察される。錐体Lは大人のもので、乳様突起は破損し保存されていない。

2 下顎骨および遊離歯

下顎骨は、下顎骨Rが1個体分、下顎骨L(下顎骨La、Lb)が2個体分、計3個体分が保存される。表記の仕方は以下凡例のとおり。

歯種

上/下の表記は上顎骨/下顎骨の別を示す。R/Lの表記は右顎側/左顎側の別を示す。歯種の別は歯牙記号を用い、中切歯=I1、側切歯=I2、大歯=C、第1小臼歯=P1、第2小臼歯=P2、第1大臼歯=M1、第2大臼歯=M2、と記す。

咬耗

咬耗の度合いは橋原分類(橋原1957)に準拠する。その分類は、咬耗がエナメル質にとどまる状態を1°とし、それが点状または線状であるものをa、面状または帯状であるものをb、全面に互るものをcに細分する。咬耗が象牙質に及ぶ状態を2°とし、その露出が点状または線状であるものをa、面状または帯状であるものを

bに細分する。咬耗が象牙質に及びその露出が全面に互る状態を3°、歯頸部に及ぶ状態を4°とする。

(1) 下顎骨R

I2、C、P1、P2、M1、M3が植立する。M2の歯槽は閉鎖しており、隣接する歯牙の状態から、齶蝕で歯牙が消失し歯槽閉鎖に至ったと推察される。歯牙の観察結果については表に示すとおりである。下顎体の厚みは薄く、咬筋粗面および翼突筋粗面の凹凸は弱い。P2、M1、M3に齶蝕がある。P2は歯冠近位面が齶蝕により消失している。M1は歯冠が齶蝕により消失している。M3は近位面が齶蝕により消失している。各歯牙の咬耗は、I2:2° b、C:2° b、P1:1° a、P2:1° aである。

(2) 下顎骨La

C、P1、P2、M1が植立する。P2、M2の歯槽は開放しており、M3は萌出していない。各歯牙の咬耗は、C:2° b、P1:2° b、P2:1° b、M1:2° aである。下顎体は厚みがある。

(3) 下顎骨Lb

I2、C、P1、P2が植立する。I1、M1、M2の歯槽は開放しており、M3は萌出していない。各歯牙の咬耗は、I2:1° a、C:1° b、P2:1° bである。咬筋粗面および翼突筋粗面の凹凸は弱い。

(4) 遊離歯

遊離歯は乳歯3本、永久歯7本が保存される。

乳歯 上cL、上mL、下i1 (LR不明)

永久歯 上CR (咬耗2° b)

上CL (咬耗3°)

上CL (咬耗1° a)

下IR (咬合面に齶蝕があり、象牙質が露出している) ※I1・I2のどちらか不明

下P2R (咬耗2° b)

下P2R (咬耗1° c、舌側咬合面に齶蝕あり)

下P2L (咬耗1° c、舌側咬合面に齶蝕あり)

3 上肢骨

上肢骨は、上腕骨Rが2個体分(上腕骨Ra、上腕骨Rb)、上腕骨Lが3個体分(上腕骨La、上腕骨Lb、上腕骨Le)が保存される。よって上腕骨の最小個体数は3体分となる。

(1) 上腕骨 Ra

遠位骨幹から遠位骨端を欠く。骨体中央周は7.2 cmを測る。骨幹外側面にタテ7.5 mm、ヨコ1.6 mmの穿孔骨折が確認される。深さは0.5 mmを測り髄腔には達していない。創口の周辺は骨増殖しており、生前の受傷かつ、受傷後も生存期間があったことは明らかである。創口の形状から成傷器は蕨と推察される。創口は骨体に対し垂直方向に開放しており、受傷時、被害者が直立していたと仮定するならば、被害者の真横から射込まれた角度である。



第93図 上腕骨損傷

(2) 上腕骨 Rb

近位骨端、遠位骨端の一部を欠く。骨体中央周は4.4 cmを測る。

(3) 上腕骨 La

遠位骨幹から遠位骨端を欠く。骨体中央周は6.6 cmを測る。

(4) 上腕骨 Lb

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は7.0 cmを測る。

(5) 上腕骨 Lc

近位骨端から骨幹を欠く。骨体中央周は5.6 cmを測る。

5 寛骨

寛骨はLRが1点ずつ保存される。同一個体であるかは判然としない。

(1) 寛骨 R

腸骨の一部のみ保存される。大坐骨切痕は保存されておらず湾入角度は不明である。

(2) 寛骨 L

腸骨および坐骨上枝が保存される。大坐骨切痕の湾入角度は鋭角をなし、男性的な特徴を有する。

4 大腿骨

大腿骨は、大腿骨 R が 5 個体分（大腿骨 Ra～大腿骨 Re）、大腿骨 L が 5 個体分（大腿骨 La～大腿骨 Le）が保存される。よって大腿骨の最小個体数は 5 体分となる。

(1) 大腿骨 Ra

遠位骨幹から遠位骨端を欠く。柱状隆起は強い。大腿骨最大長は 41.6 cm を測り、藤井の身長推定式（藤井 1960）で計算すると 157.653 cm となる。骨体中央周は 9.4 cm を測る。

(2) 大腿骨 Rb

近・遠位骨端を欠く。柱状に隆起するが程度は弱い。骨体中央周は 9 cm を測る。

(3) 大腿骨 Rc

近位骨端と遠位骨端の一部を欠く。柱状隆起は強い。骨体中央周は 8.4 cm を測る。

(4) 大腿骨 Rd

近・遠位骨端を欠く。柱状に隆起するが程度は弱い。骨体中央周は 8 cm を測る。

(5) 大腿骨 Re

近・遠位骨端を欠く。小転子—内転筋結節の距離は 20.1 cm を測る。骨体中央周は 8 cm を測る。

(6) 大腿骨 La

近・遠位骨端の一部を欠く。柱状隆起は強い。大腿骨最大長の計測点はわずかに足りず正確な計測は行えなかったが、推定で 45.1 cm を測る。藤井の身長推定式（藤井 1960）で計算すると 166.31 cm を測る。

(7) 大腿骨 Lb

近・遠位骨端の一部を欠く。柱状に隆起するが程度は弱い。骨体中央周は 9.3 cm を測る。

(8) 大腿骨 Lc

近位骨端の一部、遠位骨端を欠く。柱状に隆起するが程度は弱い。骨体中央周は 7.8 cm を測る。他の大腿骨に比べ骨体中央周が小さく子供であるかの印象をもったが、骨端線は癒合している。大腿骨の骨端線は 20 歳から 25 歳で癒合するため、成人の骨であることは間違いない。

(9) 大腿骨 Ld

骨体後面の緻密質のみ保存される。

(10) 大腿骨 Le

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は 4.7 cm を測る。

5 脛骨

脛骨は、脛骨Rが2個体分（脛骨 Ra、脛骨 Rb）、脛骨Lが2個体分（脛骨 La、脛骨 Lb）保存される。よって脛骨の最小個体数は2個体分となる。保存されている骨体中央周を計測したが、いずれも近・遠位骨端を欠くため推定数値となる。

(1) 脛骨 Ra

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は7.8 cmを測る。

(2) 脛骨 Rb

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は8.0 cmを測る。

(3) 脛骨 La

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は7.4 cmを測る。

(4) 脛骨 Lb

近・遠位骨端を欠く。骨体中央周は7.1 cmを測る。

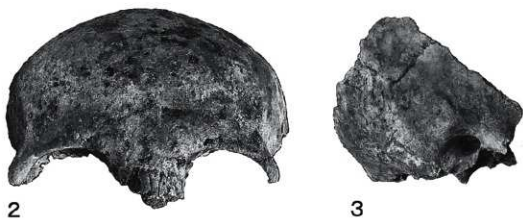
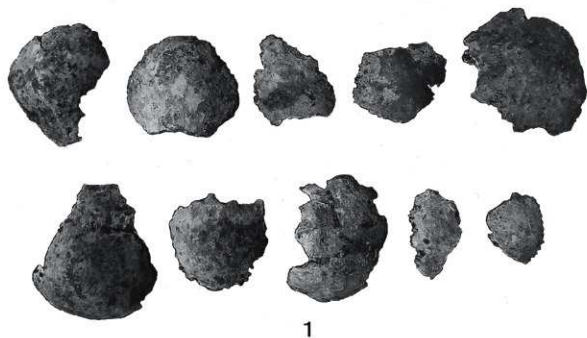
6 まとめ

石棺内より出土した人骨は、少なくとも6体の埋葬があったことを確認する。性別、年齢の比定には至れなかったが、大人だけではなく子供も含まれる点には注目すべきである。

取り上げ時に大きな破片のみを取捨選択した可能性も否めないが、保存されている人骨がすべて石棺内から出土したものであるとするならば、出土した人骨はいずれも1個体分に満たないため、別の場所で白骨化させ、部位を選択し石棺内に納めた、あるいは追葬を行った際に、主たるもの以外を片付けたと考えられる。

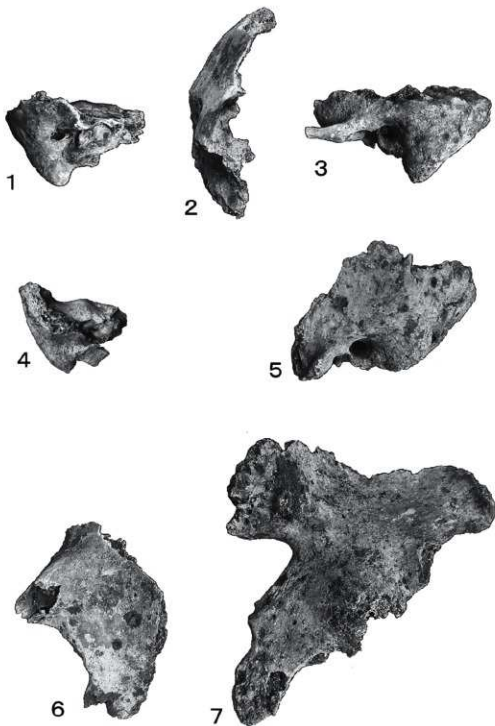
参考文献

- 我孫子市教育委員会 2019『我孫子市埋蔵文化財報告第60集 下ヶ戸貝塚VI 下ヶ戸宮前遺跡発掘調査報告書VI』
我孫子市教育委員会 2021『我孫子市埋蔵文化財報告第64集 下ヶ戸貝塚VII 下ヶ戸貝塚第5次・6次・7次・9次・11次発掘調査報告書』
金子丑之助 1982『日本人体解剖学 第一巻』第18版 南山堂
人類学講座編纂委員会編 2019『新装版 人類学講座 別巻1 人体計測法』雄山閣
津田征郎 1996『新法医学』日本學事新報社
柄原 博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究 第1編～第4編」『熊本医学会雑誌』第31巻 補冊第4 p. 1-50 熊本医学会雑誌
藤井 明 1960「四肢長骨の長さとし長との関係に就て」『順天堂大学体育学部紀要』3
藤田恒太郎・桐野忠大・山下清雄 1995『歯の解剖学』第22版 金原出版
古加種基 1957『簡明法医学』金原出版株式会社
渡辺 新 2019「縄文時代のテロリズム」『千葉縄文研究9』千葉縄文研究会
渡辺 新・千葉南葉子 2021「13号古墳出土人骨所見」『千葉県香取市 西和田古墳群II』三信建設株式会社・有限会社原史文化研究所



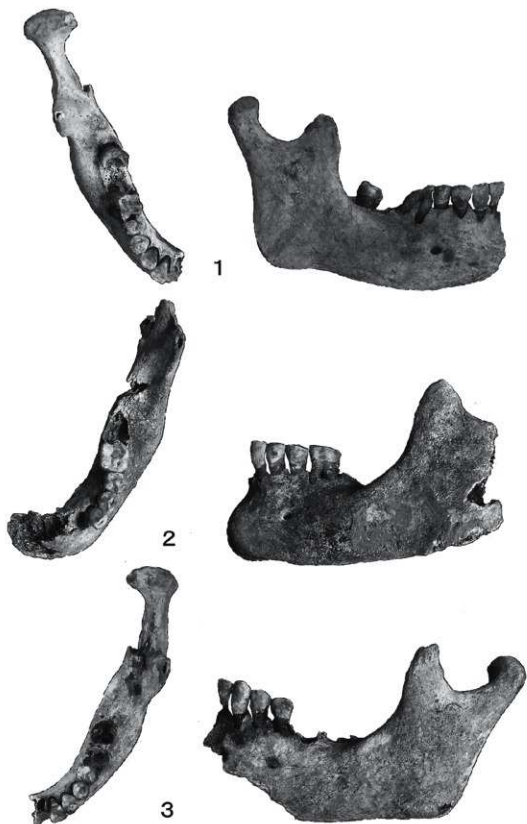
第94图 5号墳出土人骨(1)

1 頭頂骨・後頭骨 2 頭頂骨A 頭蓋骨(前而觀) 3 頭蓋骨A 錐體L



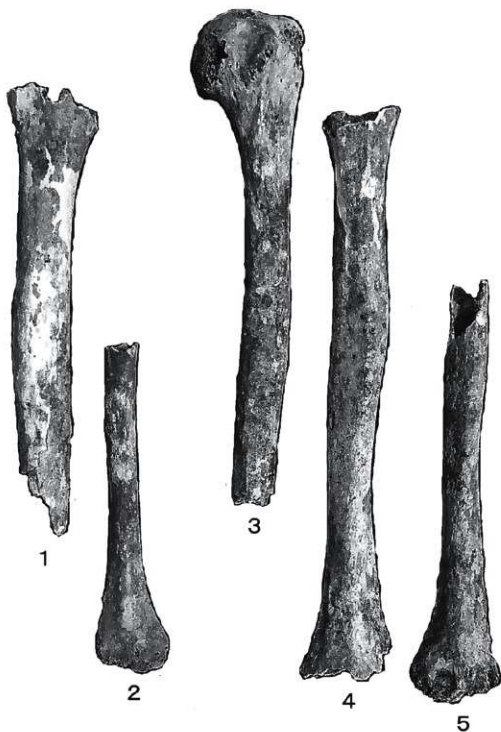
第95图5号填出土人骨(2)

- 1 頭蓋骨B 錐体R 2 頭蓋骨B 頭蓋骨(前面觀) 3 頭蓋骨B 錐体L
 4 錐体R 5 錐体L 6 寬骨R 7 寬骨L



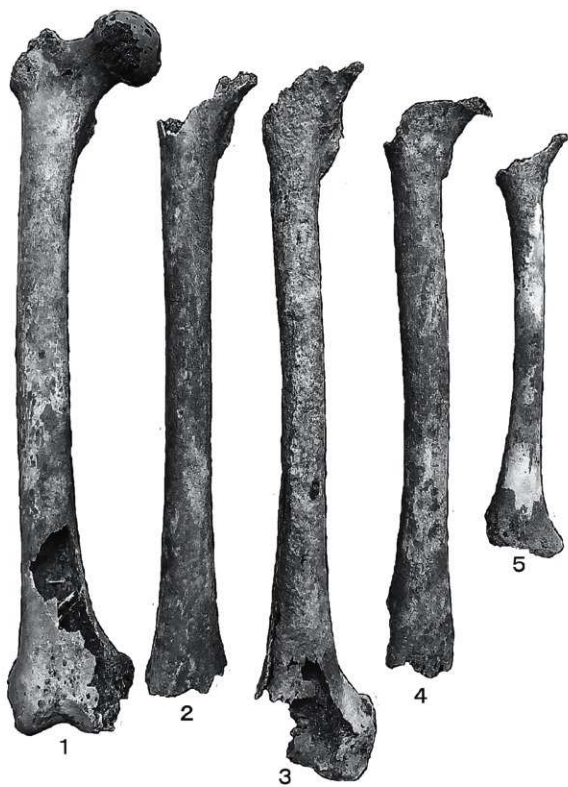
第96图 5号填出土人骨(3)

1 下颚骨R 2 下颚骨La 3 下颚骨Lb



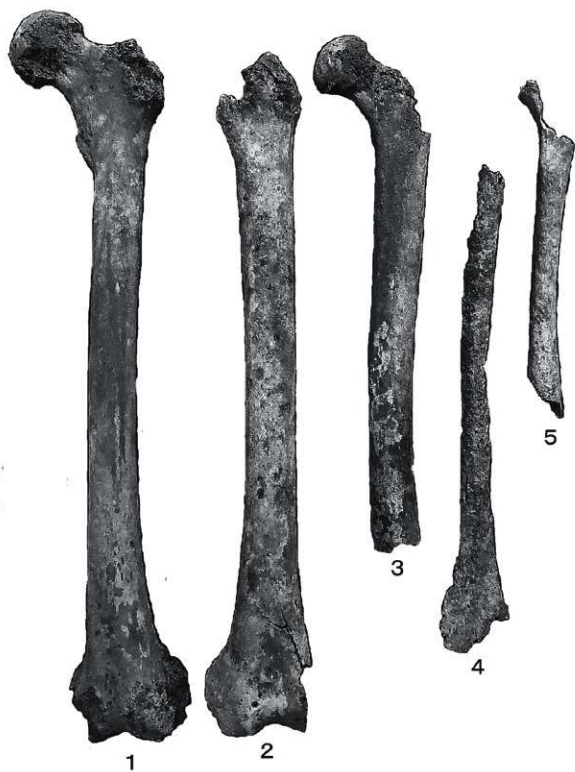
第97图 5号填出土人骨(4)

- 1 上腕骨Ra 2 上腕骨Rb 3 上腕骨La 4 上腕骨Lb 5 上腕骨Lc



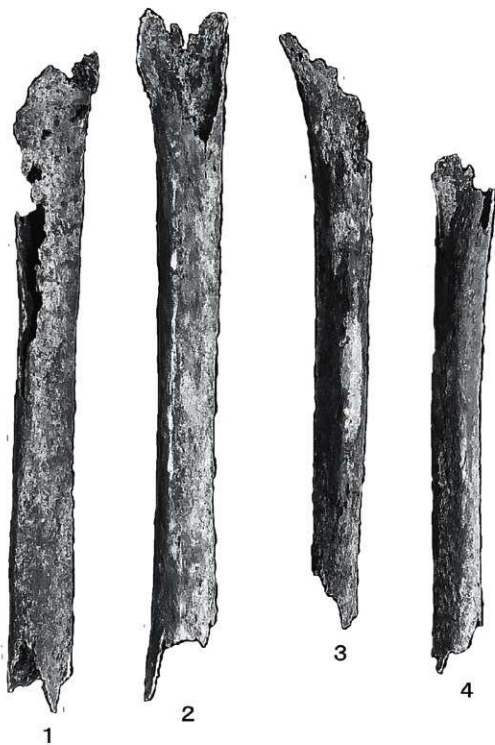
第98图 5号墳出土人骨(5)

1 大腿骨Ra 2 上腕骨Rb 3 大腿骨Rc 4 大腿骨Rd 5 大腿骨Re



第99圖 5号墳出土人骨(6)

1 大腿骨La 2 大腿骨Lb 3 大腿骨Lc 4 大腿骨Ld 5 大腿骨Ld



第100图 5号墳出土人骨(7)

1 脛骨Ra 2 脛骨Rb 3 脛骨La 4 脛骨Lb

第7章 その他の遺跡

1 中峠野遺跡 2 中峠野南遺跡

いずれも縄文時代の遺跡とされているが、調査歴はなく、詳細は不明である。

3 貝殻塚遺跡（第101図）

『平和公園Ⅰ』で報告されている。平和公園内の西部に位置する。平成元・4・6年度の3回調査が行われている。平成元年度調査は確認調査であり、多部田貝塚の一部として調査が行われている。平成4・6年度の本調査により、南北に細長い台地上の大半を本調査しており、北部より縄文時代の陥し穴、南部より縄文時代と古代の住居跡が見つかった（第101図）。縄文時代は、加曾利EⅢ式期と堀之内式期の住居跡各1軒、加曾利EⅢ～EⅣ式期を中心とした遺物集中が見つかった。石器は239点のうち189点が剥片・石核類であり、石鏃製作が行われたことがうかがわれる。その他では打製石斧1・磨製石斧2・磨石類13・石皿4と生活用具は少ない。うならず遺跡、多部田貝塚と同時期に一時的な居住・生活が行われた場所とみることができる。南部で見つかった古墳時代の集落は、多部田貝塚北部の集落と比較し、出土遺物、とくに坏の特徴（非ロクロ成形で、須恵器模倣）が共通して見られ、住居の主軸方向も近いことから、一続きの集落であると考えられる。

4 ムグリ遺跡（第102図、巻頭図版1・2・図版55）

『平和公園Ⅰ』で報告されている。平和公園の西端の斜面に位置する。平成6年と7年の2回調査が行われている。（確認調査470/3,200㎡、本調査1,460㎡）主な遺構は古墳時代と平安時代の住居がそれぞれ1軒ずつと、窯が3基、灰原、粘土探掘孔1基、複数の土坑である。

また、今回『平和公園Ⅰ』で未掲載となった遺物を再検討し、『平和公園Ⅰ』の遺物として収納した。

（1）縄文時代

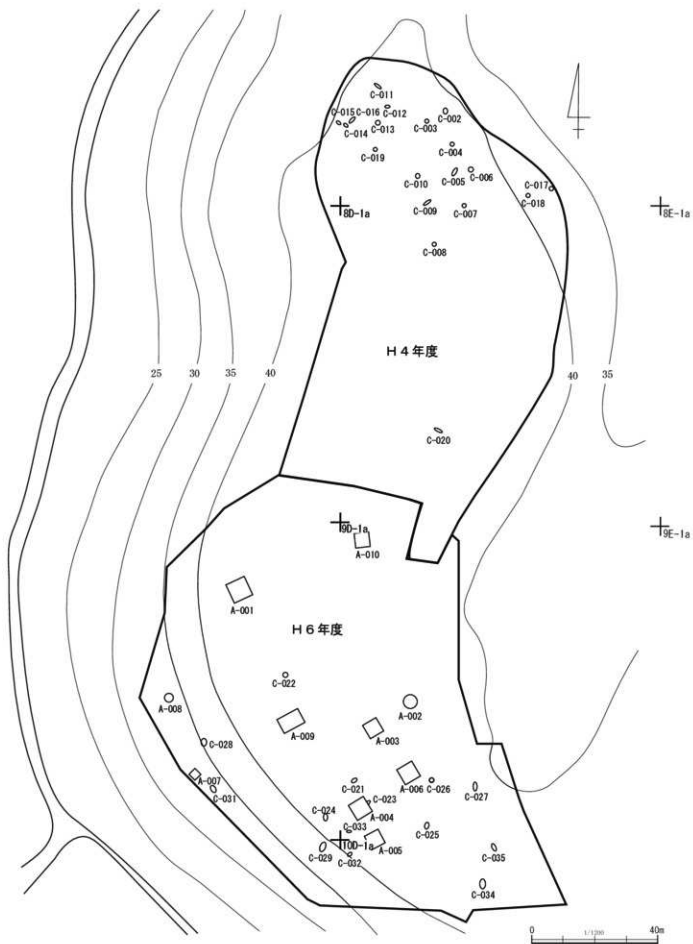
未掲載遺物に一括遺物として縄文土器が含まれていた。

A地区では燃糸土器と黒浜式が多い。阿玉台式と晩期安行式がみられ、分銅形打製石斧1点がある。B地区では加曾利EⅡ式の新段階からEⅢ式がままとまっている。

（2）平安時代

B地区で3基の窯が検出されている。1号窯は焚口の他に、短小な横口を複数有する。これは大阪府真福寺遺跡群などで見られる横口付木炭窯と同じ形状である。また、『平和公園Ⅰ』においては、1号窯付近の灰原から多量の土器片が出土していることから炭焼と土器焼成の兼用の可能性があるとした。しかし、平成7年度調査の遺物を再検討したところ、1号窯灰原の土器には、接合する資料が少なく、焼け歪みもほとんど見られず、その焼成は、窯壁内面の酸化具合と比較すると、還元焼成寄りであった（図版55）。また、窯内部より出土した木炭は形状がしっかり残っており、燃料ではないと判断できた（図版55）。これらのことから、1号窯は炭焼を主としていた可能性が高い。ただし、B地区南端から検出されている粘土探掘孔の存在より、土器の焼成が皆無であったとも断定できない。なお、灰原の土器は、壘体部の縦位タタキ目と横位区画線、下端の斜めヘラケズリ、口唇部の上方向への強いつまみ出しなどから、9世紀第2～3四半期ごろのものと思われる。

また、A地区から推定数トンにも及ぶ鉄滓が出土していることから、鍛冶製鉄が行われた可能性もあるが、製鉄炉は見つかっておらず、詳細は不明である。



第101図 貝殻塚遺跡 遺構分布

また、本遺跡で注目すべき遺物は灰原から出土し、底面に「田部」とヘラ書された須恵器甕（9世紀前半）である（巻頭図版1、『平和公園1』第75図）。遺跡地名「多部田」の由来が平安時代に存在したことを物語っている。

さらに、住居A-001のカマドから風字硯（巻頭図版2、図版55『平和公園1』にも所収）が出土している。硯部は縦14.6cm、横10.1cmの扁平な板状を呈し、平瓦に桶状のカーブをもつ。硯部は両面とも、ヘラミガキが施されている。硯面はほぼ全面横方向に強いヘラミガキを入れた後、その痕跡を消さない程度に縦方向に調整（ナデ）が施されている。側縁部はナデによる調整が行われている。背面は、縦方向にナデを入れたのち、脚の間に当たる部分のみ強く横方向にヘラミガキを施し、脚をつけ、さらに両側と手前の縁部にナデを施している。ヘラミガキの調整痕はいずれも平行で、重複も最小限であり、非常に丁寧な調整が施されていることがわかる。硯面の一部には墨痕がみられる。また、手前側の縁部は、ヘラケズリで調整され、面取りがなされている。硯部背面には2つのゆがんだ直方体の短脚を貼り付け、脚部の底面が硯面に対して角度を持つことで、硯部を傾斜させている。貼り付け前に硯面を削り、接着面を調整した痕跡がみられる。硯を置いた際の水平長は13.9cm、器高は奥で0.5cm、手前で3.5cmを測る。側縁と手前側縁辺はわずかに反り返るが、明確な外堤を作らない。奥側縁辺は欠損し、わずかに反り返りが認められるが、外堤の形状や内堤の有無は不明である。胎土に混入した赤褐色の夾雑物や土師器様の焼成から近隣で製作されたものと考えられる。

脚の間のヨコヘラケズリは一見装飾風であったが、一方でその脚の接合部は硯本体に対して対称ではなく、全体として丁寧ではあるが、精緻とはいえない。あくまで実用品としての硯であったと思われる。

なお、現在、ムグリ遺跡のある斜面は急である上、立木と下草が残されており、現状では上から視認することは難しく、さらに斜面下部に擁壁が設置されているため、下からも遺跡の場所を視認することはできない。

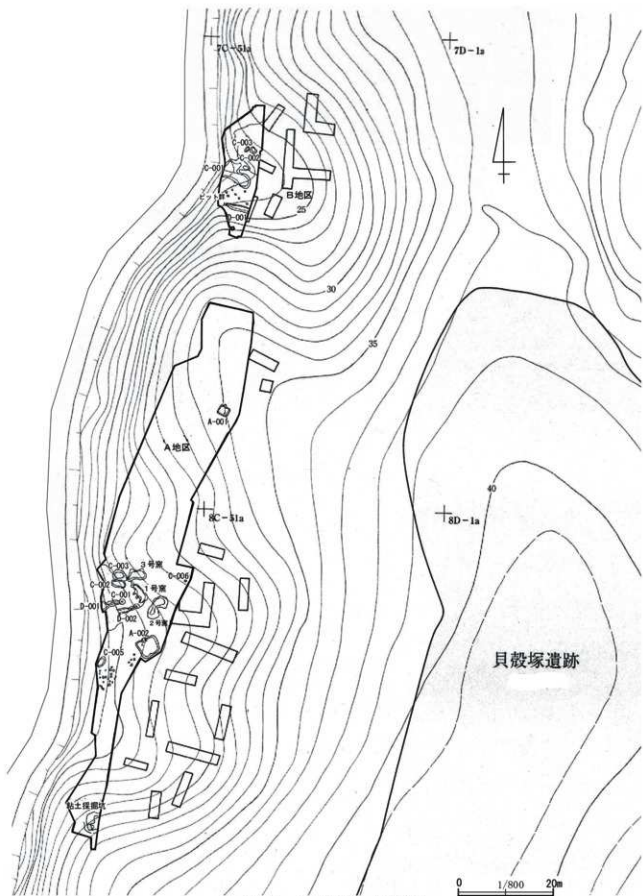
5 旧称「多部田塚群」

昭和50年のうならす遺跡と多部田貝塚の調査時にそれぞれ塚が1基ずつ測量されている。その後、本遺跡群内のその他の塚も測量調査され、その結果が『千葉市文化財調査報告書第1集』に掲載されており、「多部田塚群」としている。当初は内野古墳群の一部と考えられたようであるが、径に対する高さの比が大きく、墳形が尖頭傾向にあり、盛り土に締まりがないなどの特徴（『第1集』）から、古墳ではなく、中・近世以降のものであると考察し、「多部田塚群」と呼称している。本塚群には1～8号塚が属する。

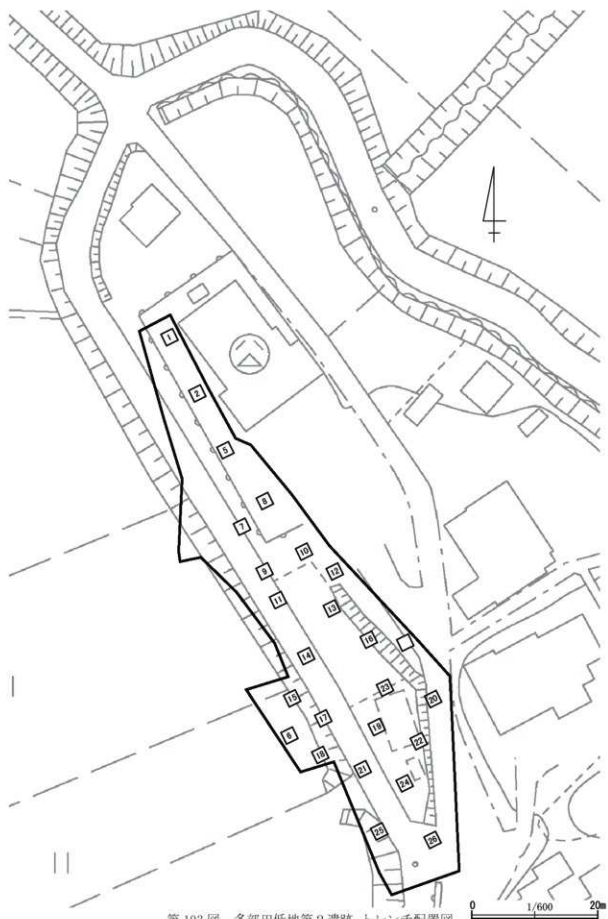
本書に掲載した木戸作遺跡の01号塚、02号塚、さらには、平成15年度にうならす遺跡で調査された1号塚、2号塚もその位置より本塚群のいずれかである可能性が高い。しかし、本遺跡群は、最初の測量調査以降ほとんど調査が行われず、塚の位置が不明確で、各調査の整合をとることができなかった。そのため、第1章で述べたように、本書においては木戸作遺跡、うならす遺跡の塚を「多部田塚群」としては扱わず、それぞれの遺跡に属する塚として報告している。

6 多部田低地第2遺跡（第43・103図、図版55）

事業地外であるが、平和公園遺跡群のものと共に図面や遺物が保存されていたため、本項に記載する。本遺跡はうならす遺跡より北西に約1km、谷津田に岬状に突き出した微高地に位置する。保存されていた図面や遺物のラベルには「水門遺跡」と記載されていた。平和公園遺跡群の東側台地上に「水門遺跡」が登録されており当初はそちらに帰属するものと考えたが、調査区の図面は多部田低地第2遺跡の南側を示していた。その付近の旧字名が「水門」であったため、別個命名されたものと思われる。本書においては資料を多部田低地第2遺跡のものとして記載し、それに基づき包蔵地分布を修正する予定である。また、昭和62年に調査され、『千葉市年報



第102図 ムグリ遺跡 遺構分布



第 103 図 多部田低地第 2 遺跡 トレンチ配置図

2』や『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』に記載されている「水門遺跡」の調査記録も、所在地（千葉市多部田町 893 他）や地形の記載より、本遺跡のものであると思われる。

今回記載するのは昭和 63 年度に行われた確認調査で、遺物が出土している。縄文土器、古墳～平安時代の土器、陶器、中世の陶器、銭 1 枚であった。遺物の明確な集中はなく、平安までの遺物はいずれも細片で詳細を明らかにすることはできなかった。遺構は確認されていない。中世の陶器 2 点（図版 55）と銭 1 点の拓本を掲載した。銭（第 43 図-49）は元豊通寶（初鑄年 1078）であった。陶器はいずれも瀬戸美濃で 16 世紀のものであった。なお、残されていたトレンチ配置図にはグリッドが示されていたが、調査区配置図にはグリッドがなく、また調査区の形状も両図面間で細部が異なっていたため、2つを合成した第 103 図中の調査区の位置はおおよそである。

7 その他の遺跡

馬場前遺跡

事業地外であるが「馬場前採集」という遺物があり、ラベルには多部田町 1485-3、平和公園・木戸作と接するというメモ書きがあり、住所から木戸作遺跡の北側隣接地である。遺物の内訳は保存状態の悪い土師器小片多数と縄文土器片 9 点であった。

台ノ坊遺跡

事業地外であるがうならすずに接しており、遺跡の範囲や性格について混乱があるため触れておく。当遺跡はうならす遺跡と多部田城跡との間の比較的狭い範囲に登録されている。うならす遺跡との間に地形の変化はなく、完全に地続きである。縄文時代中期・後期の地点貝塚として登録されているが、貝散布が確認された地点はうならす遺跡に含まれていた可能性が高い。例えば、千葉県教育委員会が行った「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査事業」（千葉県教育委員会 1983）に伴う昭和 57 年 3 月の踏査の成果（「千葉県貝塚調査票」千葉県教育委員会文化財課保管）では、うならす遺跡内の貝散布 1 か所が示されている。「山内には未調査だが周辺地表に貝散布あり。埋没貝層は可能性がある」という記載もあるが、現在の台ノ坊遺跡の範囲内の貝層や年代に関する明確な情報は存在しない。うならす遺跡の北端部は、平成 12 年に確認調査が行われているが、検出したのは古墳時代以降の遺構のみであった。したがって、台ノ坊遺跡は縄文時代の貝塚から一旦除外しておくのが妥当であろう。

遺跡不明（平成 4 年調査）遺物

縄文時代の土器・石器が比較的まとまっているが調査の由来や位置が不明であり、点数のみを記載して保管しておく。縄文土器は 184 点あり、内訳は早期・燃系文土器 12、中期・阿玉台式 42、加曾利 EII 22、EII～EIII3、後期・堀之内 8、加曾利 B11、後期安行 7、無文 35、沈線のみ 13、縄文のみ 31 である。阿玉台 I a 式と加曾利 EII 式の連弧文系がまとまっている。石器は 4 点で剥片類 2、鏃 1、鏃 1 である。

第8章 まとめ

1 遺跡群の変遷 (第10表)

本遺跡群の範囲は旧石器時代から江戸時代初期までと非常に長い期間利用されていたことがわかった。

旧石器時代は、うなすず遺跡の南部で礫群が3か所検出されており、石器は在地と移入の石材で、礫は大半が在地の石材で構成されていた。

縄文時代 (第104図) においては、多部田貝塚、木戸作遺跡、ムグリ遺跡、うなすず遺跡から早期の土器片が確認されているが、その数は多くない。遺構も木戸作遺跡 SI13 (第5図) が燃糸文土器期住居の可能性があるが、他には検出されていない。続く前期についても、土器片がうなすず遺跡、ムグリ遺跡、多部田貝塚より出土しているが、数も少なく、遺構はない。中期中葉 (加曾利EⅠ式期) に入ると木戸作遺跡で小竪穴、内野遺跡で住居跡1軒がみられるが、本格的に住居が作られ始めるのは中期末葉からで、台地西部 (うなすず遺跡と多部田貝塚の貝層周辺～貝殻塚遺跡南部) に集中している。うなすず遺跡では中期末葉 (加曾利EⅢ式) から後期前葉にかけて西へ移動しながら集落が営まれている。多部田貝塚～貝殻塚遺跡では、中期中葉から晩期前半まで集落が営まれていた。また、多部田貝塚の貝層形成は後期であった。一方東部では住居は前述の木戸作遺跡 SI13、そして内野遺跡 SI02 (加曾利EⅡ式期) のみで、その他に複数の陥し穴がみられた。狩猟の場として利用されていたようである。同様の陥し穴は多部田貝塚、貝殻塚遺跡北部、うなすず遺跡北部にも見られる。

弥生時代には、台地北東部、木戸作遺跡東側で中期の小集落が短い期間営まれる。うなすず遺跡や内野遺跡では遺構はないが、同じく中期の土器が出土している。この時期の活動は限定的であったようである。

古墳時代 (第105図) には、うなすず遺跡北西部に前期集落が形成される。調査域外まで広がりがみられ、内容は明らかになっていないが、比較的大規模な集落であったと推測される。中期には一転低調となり、うなすず遺跡で2軒、木戸作遺跡で2軒の住居が検出されているのみである。後期に入ると貝殻塚遺跡南部～多部田貝塚西部に集落が作られる。また東部に6世紀後半から7世紀前半にかけて、内野古墳群が形成される。また、うなすず遺跡の北部にも古墳が1基 (2号塚) 確認されている。北部と東部を墓域、西部を住居域としていたようである。北部の墓域については、うなすず遺跡の北側に古墳群を有する台ノ坊遺跡があり、同一群を構成していた可能性がある。また、西部が居住域となるのは縄文時代に共通する現象である。

奈良・平安時代 (第106図) には、8世紀末に西の斜面地にムグリ遺跡 (木炭窯や粘土採掘孔) が作られ、また木戸作遺跡、内野遺跡やうなすず遺跡で土器工房と思われる建物が出現するなど、生産遺跡としての性質が現れ始める。また集落はうなすず遺跡や木戸作遺跡、内野遺跡に見られる。うなすず遺跡には東部に竪穴建物と掘立柱建物があり、さらに、両建物が分かちて群をなしていることから、掘立柱建物群は何らかの施設のようにも思えるが、遺物がほとんど出土しておらず、詳細は不明である。木戸作遺跡は小規模で短期的な小集落ではあるが、土器工房の可能性のある住居が含まれている。また、内野遺跡からも、クロロピットや粘土堆積を有する土器工房を含む集落が検出されている。未調査域が広く断定はできないが、比較的規模の大きな集落であり、いずれも工人の活動、あるいは生活の場であり、工人のムラであったと推測される。また、木戸作遺跡とうなすず遺跡西部には方形区画墓がみられる。うなすず遺跡では、確認されているだけで4基が集まっており、周囲に住居はなく、墓域を形成しているようである。一方、木戸作遺跡のものは単独ではあるが、やはり周囲に住居は見られない。墓域に対する住居の規制は両遺跡間で同様であるとみられるが、単独の木戸作遺跡と、群を形成しているうなすず遺跡とでは方形区画墓の性格に相違があるかもしれないが、時期を示す出土遺物がなく詳細は不明である。また、内野遺跡からは平安時代の土坑墓が見つかった。

第10表 平和公園遺跡群遺構・遺物集計

遺構	旧石器		縄文				弥生		古墳				奈良・平安				中・近世										
	礫群	土坑	住居跡				土坑	隆穴	古墳	住居跡		方形周溝墓	竪穴建物	竪穴建物	竪穴建物	竪穴建物	竪穴建物	竪穴建物	土坑墓	土坑(墓)							
			早期	前中期	後中期	晩期				不明	早期										後中期	前期	中期	後期	8世紀	9世紀	竪穴建物
1 うならず遺跡		3		35	30	21	14	123			1	1	6	1	3	1	13	6	4						5	12	
2 ムグリ遺跡																											3
3 貝殻塚遺跡			1	1			23	3																			
4 多都田貝塚			4	7		1	32	35																			12
5 内野古墳群																											
6 木戸作遺跡			1				26	1																			29
7 内野遺跡				1			3	4																			1

遺物	旧石器		縄文				弥生		古墳		奈良・平安		中・近世		
	礫・石器	土器	土器				石製品	土器	石製品	土器	石製品	土器	石製品	土器	石製品
			早期	前中期	後中期	晩期									
1 うならず遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 ムグリ遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3 貝殻塚遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
4 多都田貝塚		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5 内野古墳群			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6 木戸作遺跡			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7 内野遺跡			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

平安時代後期以降(第106図)は、中・近世の溝が、木戸作遺跡、うならず遺跡、内野遺跡や多部田貝塚で検出されている。遺物が少なく性格は不明であるが、硬化面を持つものがあり、一部は道路であると思われる。また、中・近世の土坑墓もうならず遺跡、木戸作遺跡、内野遺跡で検出されている。特に、木戸作遺跡では東部に土坑墓の集中がみられ、室町時代から江戸時代初頭まで使用された墓地であったと思われる。

このように、平和公園遺跡群は、長期にわたって利用されてきたわけであるが、各時代において、濃淡があったことはもちろん、その性質にも変遷がみられた。その一方で、古墳時代に古墳が築かれて以降、近世初期までとくに北東部を中心に墓地として利用されていたこともわかった。

2 縄文時代(第104図)

都川中流域は海岸から遠く内陸的な性格がつよいため長く狩猟の場として利用されたようである。旧石器時代末の礫群、縄文時代の陥し穴、石鏃製作跡などがそのことを裏付けている。大型貝塚群形成期の中期中葉のうち、加曾利EⅠ式期の後半からEⅡ式期にかけて、内陸部に小規模な集落が点在するようになる。木戸作遺跡でEⅠ式期の小竅穴1基、内野遺跡で住居跡1軒が見れるのは、こうした動向によるものとみられる。いずれも遺跡群の東側にあるのは、内陸側・古鬼怒湾側を選んでいるのであろう。

第104図は時期ごとの遺構分布を示したものである。当地に生活の痕跡が増えるのは、大型貝塚の社会が崩壊した中期後葉以降である。うならず遺跡の集落はEⅢ式期に12軒、EⅣ式期に23軒、称名寺式期に20軒と規模が大きくなる。多部田貝塚の集落も称名寺1式期にはじまり、堀之内1式期に馬蹄形貝塚となる。うならず遺跡の集落はこの時期まで、多部田貝塚の集落は晩期前半まで継続する。これらの集落が遺跡群西岸に集まるのは、東京湾側に近い場所を選んでいるのであろう。

うならず遺跡の2軒、多部田貝塚の1軒の住居跡で石棒を用いた祭祀・儀礼が行われており、両遺跡では多数の大型石棒が出土している。とくに目立つのは群馬県安中市大山(おおよま)山麓産の石材とみられる石棒である。千葉県内の広域から出土しているが、点数が圧倒的に多いうならず遺跡は、その流通拠点の性格をもっていた可能性がある。以上のように、当遺跡群の発掘成果は、東京湾沿岸の中期大型貝塚群が崩壊してから、後期大型貝塚群が形成される過程や祭祀などを検討する上できわめて重要である。

3 弥生時代

本遺跡群での当該時期の遺構は、木戸作遺跡の4軒の弥生時代中期後半の住居(SI03・04・07・08、第9～12図)のみである。切りあひもなく、短期間の小規模な集落であったと思われる。一方で、第1章でも挙げた城之腰遺跡や星久喜遺跡は大規模な集落を形成している。千葉市は、市原市から続く大規模集落を形成するグループと、印旛沼を中心とした小規模な集落を形成するグループの接点となっており、木戸作遺跡の集落は後者に該当するとみられる。周辺のさらなる調査は必要であるが、2つのグループの関係を知る上で重要な遺跡といえる。



第104図 縄文時代概念図

4 古墳時代 (第105図)

本遺跡群での当該時期は前期の集落に始まる。うならすず遺跡で集落跡が検出されている。規模は不明であるが未調査域への広がりが推測され、比較的大きな集落のようである。中期になると一転低調となり、うならすず遺跡で1軒、内野遺跡で2軒検出されている住居のみとなる。後期になると、貝殻塚遺跡から多部田貝塚にかか

て集落が形成される。同時期に遺跡群東部に内野古墳群が築かれる。



第105図 古墳時代概念図

常総型古墳 5号墳は、その特徴より常総型古墳であると思われる。一方、9・10号墳は人骨が出土していないなど、不明な点もあるが、同じく常総型古墳の可能性のある古墳とみる。

周辺では中原古墳群でも常総型古墳と思われる古墳が3基検出されている。本古墳群周辺には当該時期の住居は、貝殻塚遺跡から多部田貝塚にかけて10軒、それ以外では疎らに数軒しか見られない。それらの住居が内野古墳群の造墓主体とは考えにくいだが、いずれにせよ、内野古墳群、中原古墳群の造墓主体が、常総型古墳を持つ地域との交流があったことを示すものと思われる。

5号墳埋葬人骨について 5号墳の主体部から検出された人骨は、鑑定の結果、少なくとも6体分あることがわかった。一部の部位の骨しか残っておらず、おそらく追葬を行い、その過程で失われたものと考えられる。また、6体の内1体は、当時としてはやや大柄な人物のようであり、被葬者に渡来人系の人物が含まれている可能性がある。また、鏝による損傷を有する骨が含まれていた。致命傷ではないことから、この地域の情

勢を示すものかどうかは不明であるが、5号墳からは人骨とともに大刀の一部と鉄鏝が出土している。これらのことから該当の被葬者、あるいは同じ石棺に埋葬されている被葬者も含め武人的な性格を持っていたと示唆される。さらに、5号墳は墳丘の推定直径が30mと内野古墳群の円墳では最大であることから、それなりの地位にあった人物たちであったのであろう。

古墳群全体について 内野古墳群全体の構成は、最北端に当たる前方後円墳1号墳の周囲に、比較的小さい直径10m以下の円墳が密集し、その南側に比較的大きい古墳が互に南北に離れて並んでいる。また、北部の5・9・10号墳が常総型古墳である。

また、古墳群付近の当該時期の可能性のある住居は、内野遺跡S101と貝殻塚遺跡～多部田貝塚の集落である。内野遺跡南部に未調査城が多く残されているものの、現状では集落の形成は見られない。造墓主体とみなすには規模が小さいように思われるが、近隣に当該時期の集落は検出されていない。今後の調査の進展を待ちたい。

被葬者に関しては、発掘調査が行われていない古墳も多く、古墳群全体として論ずることは難しい。唯一5号墳の弓矢による損傷のある人骨と大刀・鏝といった出土遺物より武人的性格を持つ被葬者であることが示唆さ



第106図 奈良・平安時代概念図

れたが、それ以外には10・12・13号墳から刀子が出土しているのみである。しかし、内野古墳群で2番目の規模を測る5号墳からこのような性格がうかがえたことから、古墳群の他の古墳の被葬者も同様の性格を持つ集団であった可能性はある。

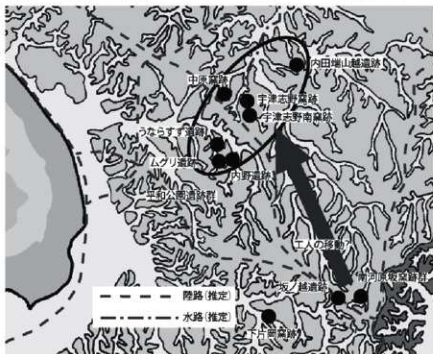
5 奈良・平安時代

生産遺構としての平和公園遺跡群 内野遺跡には粘土の堆積、ロクロピット、焼成粘土の薄片が検出された住居がある。遺構外遺物として瓦片も出土している。うならず遺跡でも、土器工房が4軒検出されており、こちらでも遺構外から瓦が出土している。さらに、ムグリ遺跡では粘土採掘孔が検出されている。こうしたことから平和公園遺跡群内で土器や瓦が生産されており、上記の遺構を有する集落は、工人のムラであったのではないかと考えられる。現状では平和公園遺跡群から明確な土器焼成窯は発見されていないが、未調査域の面積や地形を考慮すると、大規模な窯跡群があったとは考えにくく、生産量は決して多くなかったと思われる。同時期の下総に見られるような、数基の窯を有する窯跡が工房を持つそれぞれの遺跡（うならず遺跡、木戸作遺跡）にあり、こうした土器・瓦生産遺跡の供給先としては、せいぜい近隣の集落であると思われる。

また、ムグリ遺跡から多量の鉄滓が、また、少数ではあるが鍛冶滓もうならず遺跡、木戸作遺跡、内野遺跡の住居（付表8）から見つかっている。平和公園遺跡群では製鉄が行われていた可能性もある。また、ムグリ遺跡からは炭焼窯の可能性が高い遺構が見つかっている。

これらのことより、当該時期の平和公園遺跡群は土器のみならず、鉄器、炭と多岐にわたる生産遺跡としての性質を持っていたものと思われる。

周辺の生産遺跡 (第107図、第11表) 本遺跡群周辺でも窯跡が検出されている。本遺跡の北東、都川の対岸に中原、宇津志野、宇津志野南窯跡がある。(第107図)。中原窯跡からは2基検出され、灰原等の様子から5～8基と想定されている。宇津志野窯跡では重複した2基が検出され、ボーリング調査などからもう1基あると考えられている。宇津志野南窯跡には1基以上あるとされている。中原窯跡は比較的規模が大きいが、基本的には小規模な窯跡である。時期は、中原窯がムグリ遺跡やうならず遺跡の生産遺構の時期とほぼ同じ、8世紀末から9世紀前半、宇津志野、宇津志野南窯跡はその後、9世紀第2～3四半期後半となっている(第11表)。付



第107図 周辺の生産遺跡

随する遺構は、中原、宇津志野両窯跡では付近が調査されておらず不明であるが、宇津志野南窯跡では時期は不明ながら方形の竪穴住居跡が4軒見つかっている。

これら小規模窯跡群の北東3kmには内田端山越遺跡があり、遺跡内から窯跡が3基検出されている。8世紀前半から集落は見られるが、その時期は新治窯産の土器が主体であり、窯も存在していなかった。土器は移入に頼っていたものとみられる。また、この時期に円面硯などの官衙の存在を示す遺物が出土している。その後、土器焼成窯が稼働し始める8世紀末から新治産の土器の割合を消し、千葉市域の土器が主体となる。そして住居の数も増加し、9世紀前半が集落の最盛期であり、その後住居は作られなくなる。

第11表 生産遺跡の消長



一方で、平和公園遺跡群は、8世紀後半から住居がみられ始めるが、最盛期は9世紀後半である。内野遺跡の東部とうならず遺跡の東部に比較的大きな集落がみられ、うならず遺跡にはさらに掘立柱建物群がある。出土する土器は当初から常総型の土器はほんのわずかで、千葉市域で見られる土器が主体的であった。風字硯や転用硯は出土したが、官衙の存在を示すような遺物は見られない。また、集落の規模は内田端山越遺跡と比較すると、小さいものである。土器焼成窯に関しては詳細不明であるが、土器工房とみられる住居が、うならず遺跡では8世紀末~9世紀初頭、内野遺跡では9世紀後半に見られ、比較的長く、生産活動をしていたようである。ムグリ遺跡では鉄滓が出土し、鍛冶製鉄の実施が示唆されている。

上総、下総の国境沿いにある南河原坂窯跡群は国分寺の瓦や土器を生産した大規模土器生産遺跡であるが、9世紀前半にはほぼその活動を終えている。その終わりごろから生産が開始されるのが内田端山越遺跡、そして少し遅れて平和公園遺跡群である。特に内田端山越遺跡では、窯の開設とはほぼ同時に移入品の新治産から千葉市域土器へ急激な転換が起こっている。要因の一つとしては、南河原坂窯跡群などからの工人の流入があったとされている。平和公園遺跡群も、同じような状況であったのではないだろうか。ただし、ムグリ遺跡の鉄器生産の規模と、両遺跡の集落規模を鑑みると、平和公園遺跡群は内田端山越遺跡と比較し、土器、鉄器などの生産機能に重きが置かれていたと推測される。

出土硯 (第108図) ムグリ遺跡の住居A-001から使用痕のある風字硯が出土している。また、内野遺跡SI09からは猿面硯の可能性のある破片(第61図-204)が出土している。猿面硯は類似のものが内田端山越遺跡18HA5号住居址より出土(第108図-1)している。さらに、木戸作遺跡SI12からは高台坪の転用硯(第29図-120)が検出されている。いずれも、官都や官衙遺跡等で出土する精緻な装飾の施されるものではなく、実用的な印象の強いものである。生産の場で木簡や帳簿に記入するなど、生産管理や記録のためのものと推測される。

なお、風字硯は県内では数例発見されており、近隣では上記の内田端山越遺跡の猿面硯と同じ住居址から（第108図-2）、また、八千代市白幡前遺跡 172B 住居（第108図-3・4）から出土した風字硯などが挙げられる。2は小さな四角錐台の脚が付く、3は「精密なヘラ磨きが施されている」とあり、板状の脚がついている。関東圏で見ると、群馬県前橋市中島遺跡 56号住から、横方向に精緻なヘラミガキを施され、側面の縁が明確でなくわずかに湾曲した風字硯の破片（第108図-5）が出土している。いずれも、脚がある、横方向の細かなヘラ磨きを施されるなど、ムグリ遺跡のものと同様点も見いだせるが、一方で、脚の形状や、想定される全体の形状など細部には相違点も多い。風字硯は、一括供与されるものではなく、使用者が個々に注文、購入、管理していたと考えられており（田中 2015）、本遺跡出土のものも同様の状況で作られたものであると考えられる。



1 内田端山越遺跡 猿面硯 2 同風字硯
3 白幡前遺跡 風字硯 4 同風字硯
5 中島遺跡 風字硯

第108図 関連遺跡出土硯

墨書・ヘラ書土器 千葉市は、文字・記号史料の出土が多い場所として知られており、平和公園遺跡群からも出土している。しかし、その分布には偏りがみられ、その大半が、うならず遺跡より出土している。うならず遺跡からは墨書土器が2点、朱書土器1点、ヘラ書土器が35点検出（『平和公園Ⅱ』所収、第45表）されており、そのうちの22点が住居より検出されている。最も多い12点のヘラ書土器を出土した住居A-048は粘土溜やロクロピットを持つ土器工房とみられる住居であり、それ以外のヘラ書土器も多くが土器製作の痕跡が残る住居から見られる。土器製作の過程で、つけられたものと推測される。

うならず遺跡以外では、内野遺跡でSI09より「万加」の墨書土器（図版30-158）が出土している。ムグリ遺跡では2号窯から「道」（『平和公園Ⅰ』所収 第75図）、1号窯の灰原から「田部□大」のヘラ書土器（巻頭図版1、『平和公園Ⅰ』所収 第75図）が出土している。特に後者は遺跡地名「多部田」の由来を示すものとして注目される。同じ「田部」の土器としては印西市角田遺跡から「（前略）田部官万呂方代」の墨書土器が遺跡中央部の住居より出土している。同遺跡からは「逆巻郡物部黒万呂（後略）」と墨書された土器が出土しており、逆巻郡に田部郷があったことから、逆巻郡を本拠としていた人々が角田遺跡の開発にかかわったと考えられている（天野 2015）。また、「田部」は屯倉の耕作人を由来とするものであり、ムグリ遺跡をはじめとした本遺跡群の開拓をした人々の出自を示すものかもしれない。

6 中世以降 (第109図)

中世以降の遺構は、土坑、土坑墓、溝などである。溝はうならず遺跡、木戸作遺跡、内野遺跡で確認されている。内野遺跡 SD06~08 では埋土から宝永テフラ (江戸時代中期) が検出され、うならず遺跡 M-001 では平安時代、9世紀の遺物が多量に出土しており、それぞれその時期まで存続した遺構と思われるが、それ以外は出土遺物が少なく、詳細な時期を決定するには至っていない。また、遺構の性格についても、硬化面があるなど道の可能性があるものも含まれるが、詳細が不明なものも多い。仮にこれらの溝が道であったとしても、幅1~3mと決して広くはなく、交通量はさほどではなかったと思われる。



第109図 中・近世概念図

土坑墓はうならず遺跡と木戸作遺跡で見られ、墓域としての利用も見られる。特に木戸作遺跡東部では土坑墓集中域があり、集団墓地であったのだろう。出土した銭から室町時代から江戸時代初期まで使用されていたとわかった。ただ、遺物は決して多くはなく、木戸作遺跡の土坑墓から銭と鉢が出土したが、それ以外の遺物はわずかであった。墓に関するもので、土器、銭以外では戦国期の五輪塔の一部が内野遺跡から2点 (『平和公園Ⅱ』所収、第224図)、出土している程度である。

数少ない遺物の1つ、SK033出土の内耳土鍋(第40図-1)はほぼ完形を保っており、使用痕も見られるなど非常に貴重な資料である

7 遺跡群の価値と今後の活用

本章冒頭でも述べた通り、本遺跡群は旧石器時代から江戸時代初期まで使用され続けた遺跡であった。特に、墓に関しては、多部田貝塚の貝層から出土した縄文時代の人骨、古墳時代の内野古墳群、奈良・平安時代の方形区画墓と土壇墓、室町から江戸時代初期までの墓地と、市営霊園として整備された現代まで埋葬の地として使用され続けているということになる。特に遺跡群北東部(木戸作遺跡東部)は、内野古墳群1号墳(前方後円墳)、平安時代の方形区画墓、室町から江戸時代初期の土坑墓群と非常に密集して墓地として利用されている。また、詳細は不明ながら中・近世のものと思われる塚(01・02号塚)も土坑墓群の近辺にある。時代を通じて特別な場所であったと思われる。

なお、内野古墳群の1・3・4・6～8号墳と、多部田貝塚の馬蹄形貝塚は、平和公園内に保存されており、特に、内野古墳群4・6～8号墳は園内周回道路沿い、あるいは墓地区画脇にあり、墳丘を常時見ることができる(図版56)。

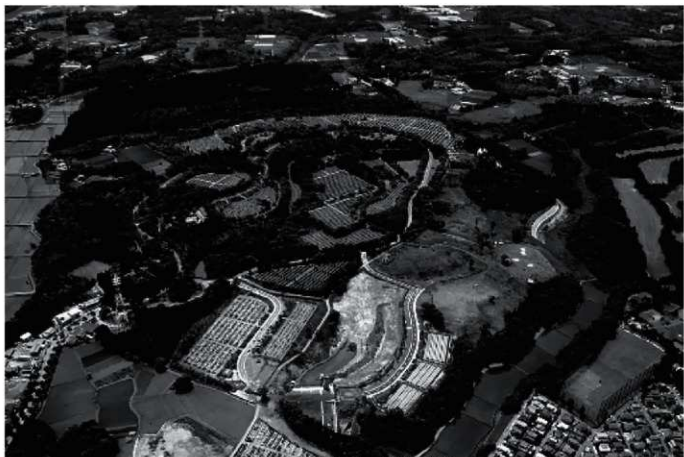
写 真 图 版



空中写真 令和元年撮影



空中写真（東から）平成6年撮影



空中写真（北西から）平成6年撮影



S113 全景(南東から)



SK001 全景(北西から)



SK002 全景(北から)



SK003 全景(北西から)



SK004 全景(南西から)



SK005 全景(東から)



SK006 全景(南西から)



SK007 全景(南から)



SK008 全景(南から)



SK009 全景(南から)



SK010 全景(南東から)



SK011 全景(北東から)



SK013 全景(北東から)



SK015 全景(北から)



SK016 全景(北から)



SK018 全景(北から)



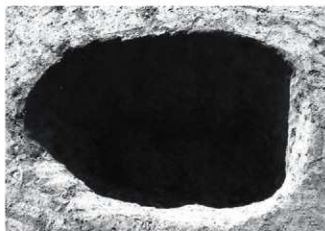
SK019 全景(東から)



SK035 全景(北東から)



SK049 全景(東から)



SK051 全景(東から)



SK052 全景(西から)



SK053 全景(北から)



SK054 全景(北から)



SK056 全景(南から)



S103 全景(南東から)



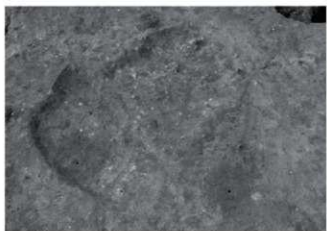
S103 遺物出土状況



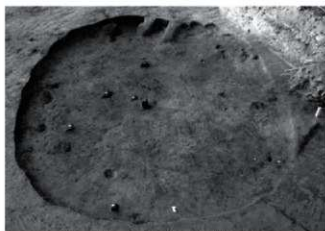
S103 遺物出土状況



S104 全景(北西から)



S104 炉



S104 遺物・炭化物出土状況(南東から)



S104 遺物(Na6)出土状況



S104 遺物出土状況(南東から)



S107 全景(南東から)



S107 炉



S107 遺物出土状況(北西から)



S108 全景(南から)



S109 全景(南東から)



S114 全景(南から)



S101 全景(南東から)



S101 カマド



S101 遺物出土状況



S102 全景(南東から)



S102 遺物出土状況



S102 カマド遺物出土状況



S105 全景(南東から)



S105 遺物出土状況



S106 全景(南東から)



S106 床下状況(南東から)



S106 遺物出土状況(南東から)



S106 遺物(No.49)出土状況



S106 遺物(No.49・50)検出状況



S106 カマド遺物出土状況



S106 遺物(No.40・46)出土状況



S110 全景(南から)



S110 遺物出土状況



S111 全景(南東から)



S111 カマド全景



S111 遺物 (No.113) 出土状況



S112 全景 (南東から)



S112 遺物出土状況



S115 全景 (北東から)



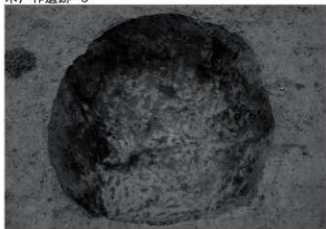
方形周溝墓 (西から)



土坑墓群 全景 (西から)



SK020 全景 (南西から)



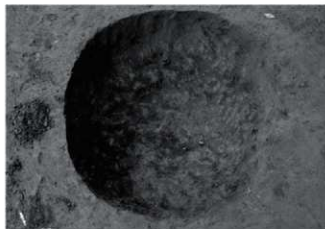
SK021 全景 (南から)



SK022 全景 (東から)



SK023-024 全景 (南西から)



SK028 全景 (東から)



SK031 全景 (西から)



SK031 古銭出土状況 (西から)



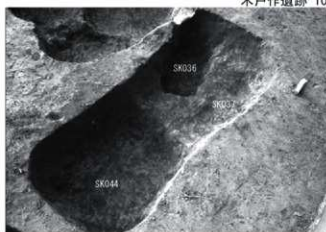
SK033 全景 (南から)



SK033 遺物 (No.1) 出土状況 (南から)



SK033 人骨出土状況(北西から)



SK036-037-044 全景(北から)



SK038 全景(南から)



SK047 完壺(南西から)



SK047 銭出土状況(南西から)



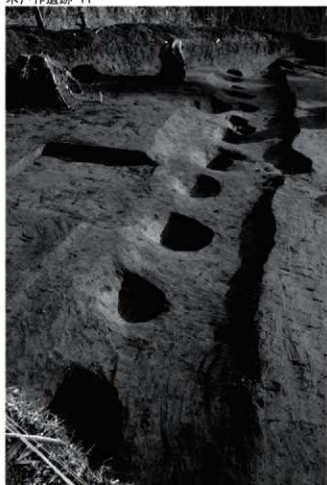
SD01 南側(北から)



SD01 北側と10号墳(南から)



SD02(南西から)



SD03 全景(北から)



SD04(南東から)



SD05 全景(東から)



01号塚 全景



01号塚 断面



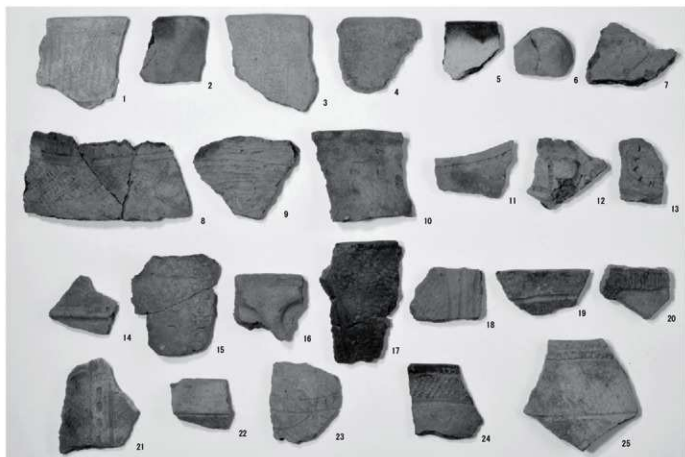
02号塚 全景



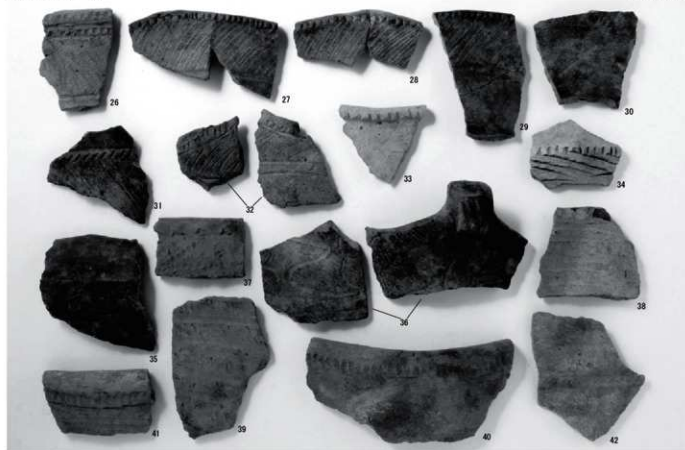
02号塚 断面



S113 出土土器



縄文土器 一括①



縄文土器 一括②



5H-97 剥片類



旧石器・縄文 石器・石製品



一括 剥片類



石斧



弥生時代 石製品



S104-5



S104-7



S104-10



S104-6



S104-8



S104-13



S104-14



S104-16



S107-32



S107-38



S107-35



S108-46



S108-51



S109-53



S101-1



S109-52



S102-6



S102-13



S102-15



S105-18



S105-31



S105-29



S106-40



S106-46



S106-46内面縦き目



S106-48



S106-49



S106-50



S110-56



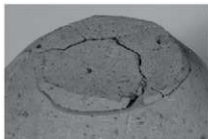
S110-58



S110-71



S110-69



S110-69底部切り離し痕



S110-72



S110-73



S111-78



S111-81



S111-91



S111-113



S112-119



S112-125



S112-130



S112-132



S112-131



S112-120底面



S112-120正面



S112-133



S112-135



S112-136



S115-137



S115-138



S115-144



S115-153



S115-166



S115-168



S115-169



S115-172



遺横外-179



遺横外-185



遺構外-183



遺構外-195



SK028-銭19 一部拡大



SK038-銭34裏面



SK033 人骨検出状況

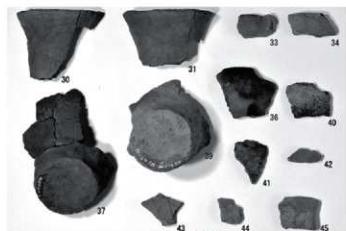


SK033-1



S103-04① 集合

S104②-07① 集合

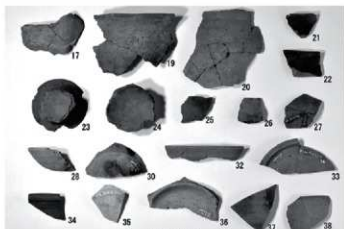


S107② 集合

S108-遺構外 集合



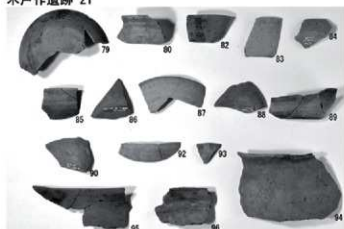
S109-10① 集合



S105 集合



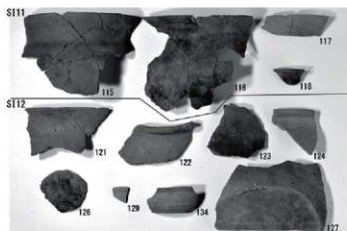
S110② 集合



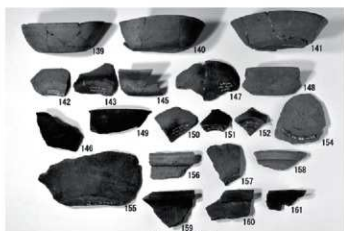
SI11① 集合



SI11② 集合



SI11③-12 集合



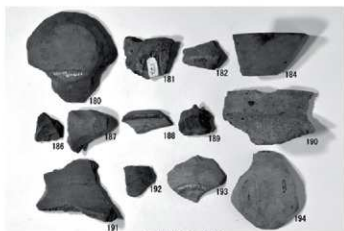
SI15① 集合



遺構外



SI15②・遺構外① 集合



遺構外② 集合



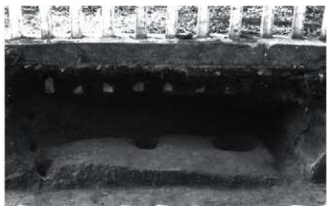
古墳時代石製品



S102 全景(南西から)



S103 全景(南から)



S104 全景(東から)



S106 全景(南から)



S106 遺物(No.7)出土状況



S107 全景(南西から)



S107 粘土堆積状況(南から)



S107 遺物出土状況



S107 遺物(№49)出土状況



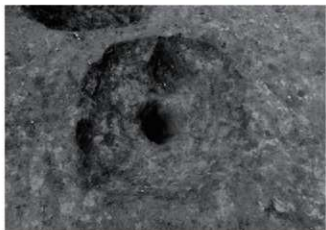
S108 全景(南東から)



S108 カマド



S109 全景(南東から)



S109 P3



S109 カマド



S109 北東隅遺物出土状況



S110 全景(南東から)



SI11 全景(南から)



SI11 カマド遺物(№226)出土状況



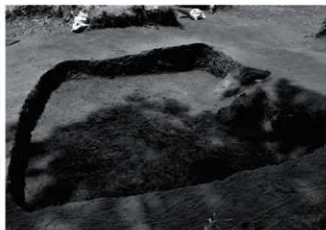
SI12 全景(南から)



SI13 全景(南から)



SI13 カマド遺物出土状況



SI14 全景(東から)



SI14 カマド



SI14 遺物出土状況



SD02 全景(東から)



SD03 全景(東から)



SD04 全景(南東から)



SD05 一部(南から)



作業風景 S105 H30



作業風景 S105カマド H30



作業風景 H30 (1)



作業風景 H30 (2)



縄文土器 遺構外 集合



縄文 石製品



弥生 遺構外-1



S106-5



S106-7



S106-18



S106-19



S106-37



S107-49



S107-65



S107-62



S107-68



S107-70



S107-69



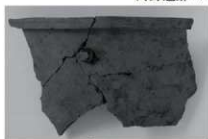
S107-77



S107-101



S108-116



S108-134



S108-136



S108-142



S109-145



S109-146



S109-148



S109-155



S109-168



S109-158底部墨書



S109-162



S109-175



S109-198



S109-200



S109-201



S109-204



S111-223



S111-226



S111-227



S109-206



S110-218



S111-242



S111-243



S111-244



S112-259



S113-276



S113-277



S113-284



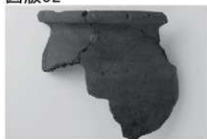
S113-299



S113-303



S114-312



遺構外-347



遺構外-349



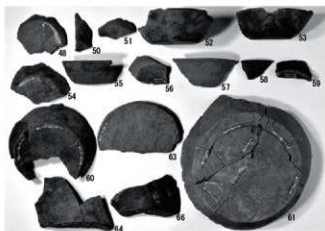
遺構外-355



S106① 集合



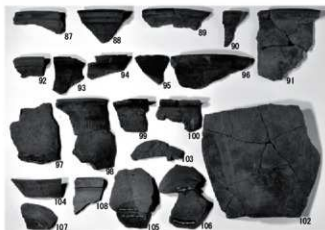
S106② 集合



S107① 集合



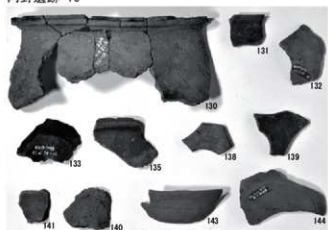
S107② 集合



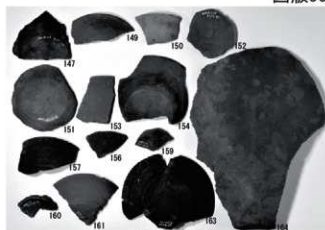
S107③ 集合



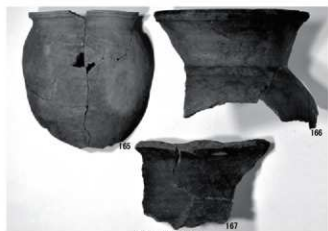
S108① 集合



S108② 集合



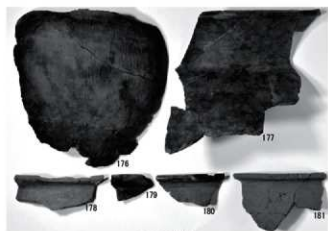
S109① 集合



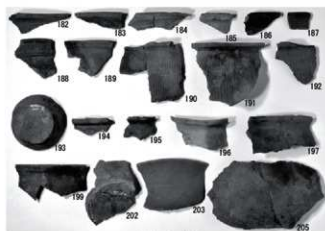
S109② 集合



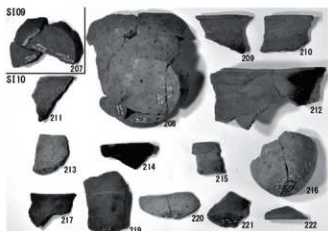
S109③ 集合



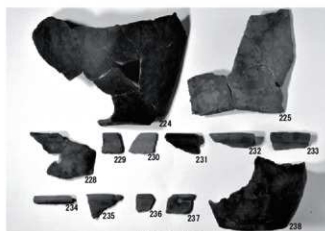
S109④ 集合



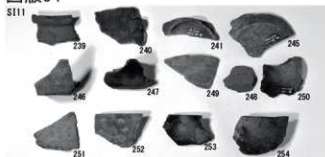
S109⑤ 集合



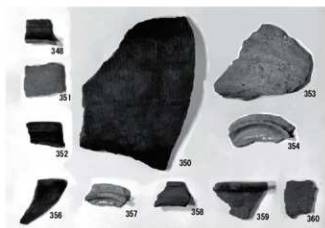
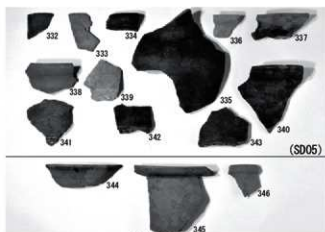
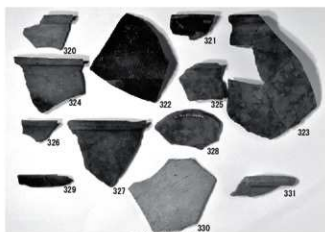
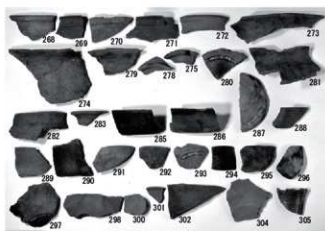
S109⑥-10 集合



S111① 集合



S111②・S112 集合







縄文土器 1~4・83



縄文土器 1



縄文土器 2



縄文土器 3



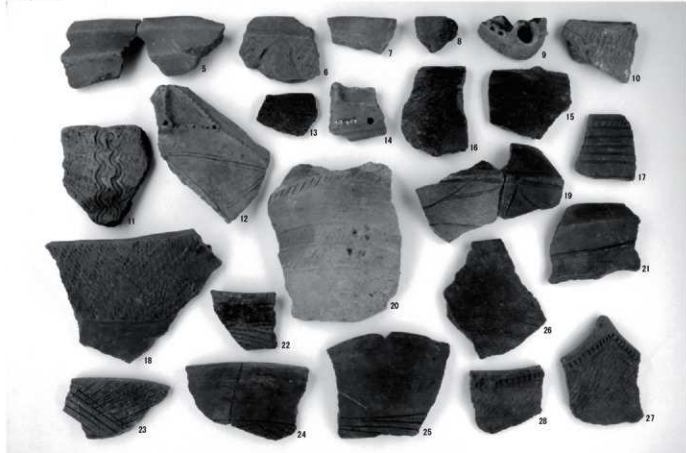
縄文土器 4



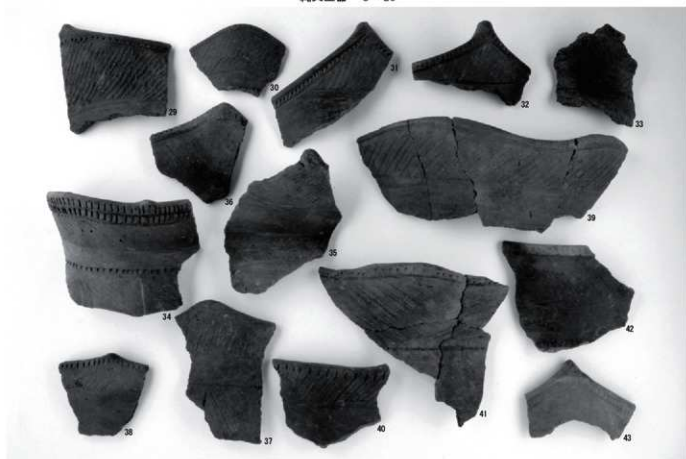
縄文土器 128 表



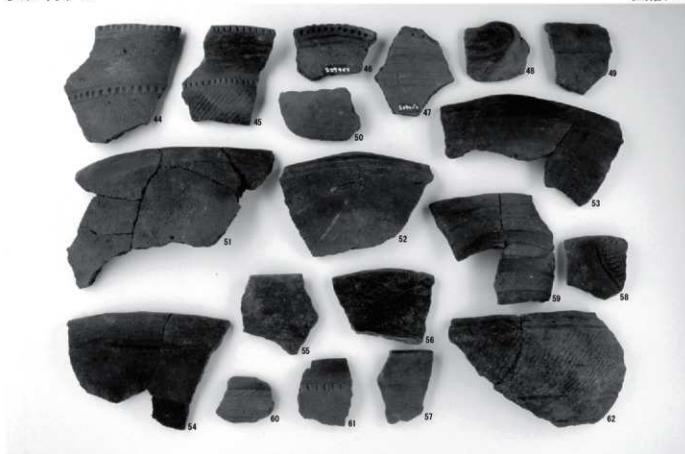
縄文土器 128 裏



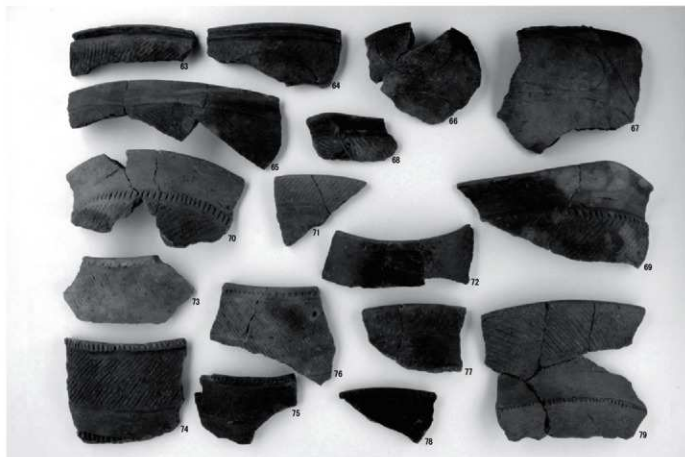
縄文土器 5~28



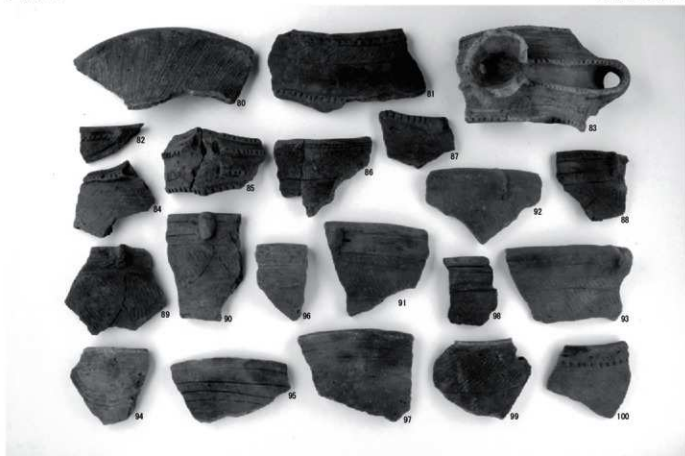
縄文土器 29~43



縄文土器 44~62



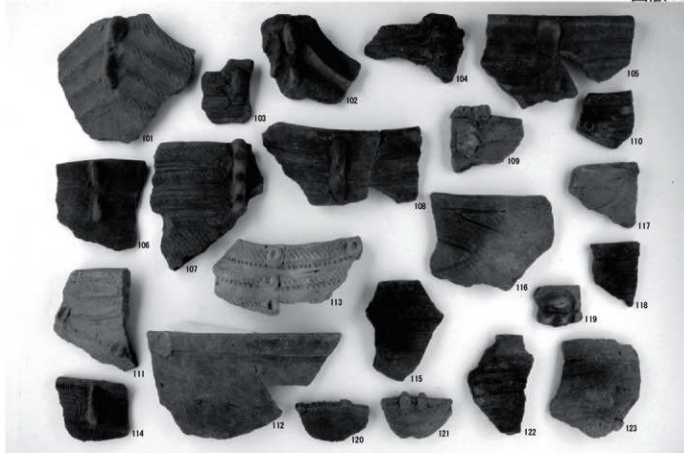
縄文土器 63~79



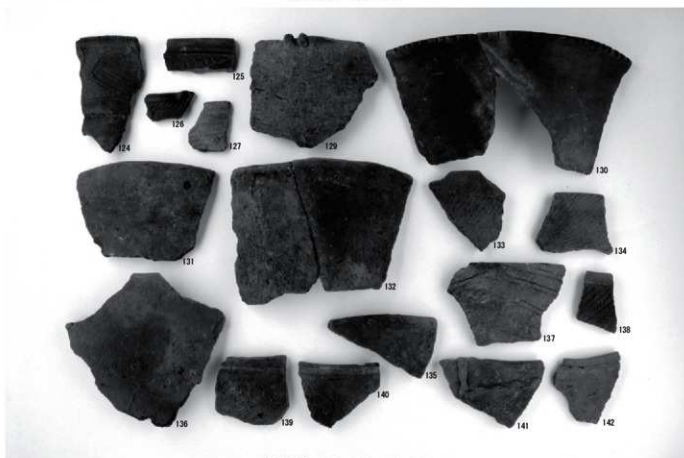
縄文土器 80~100



縄文土器 83



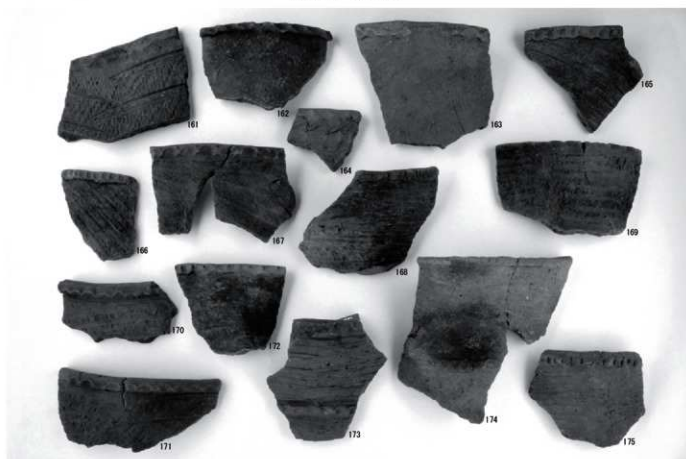
縄文土器 101~123



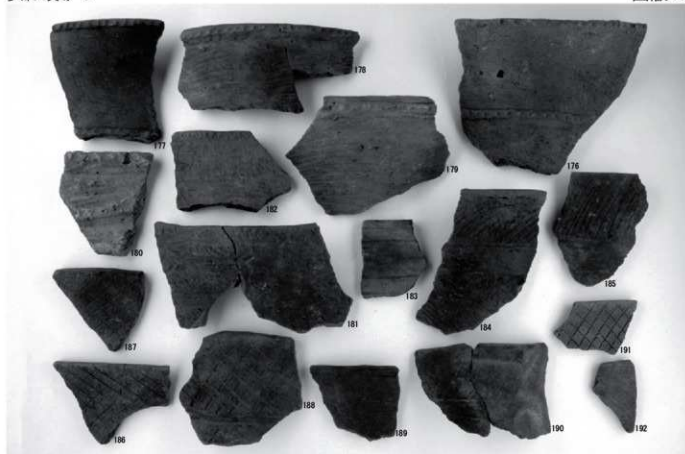
縄文土器 124~127・129~142



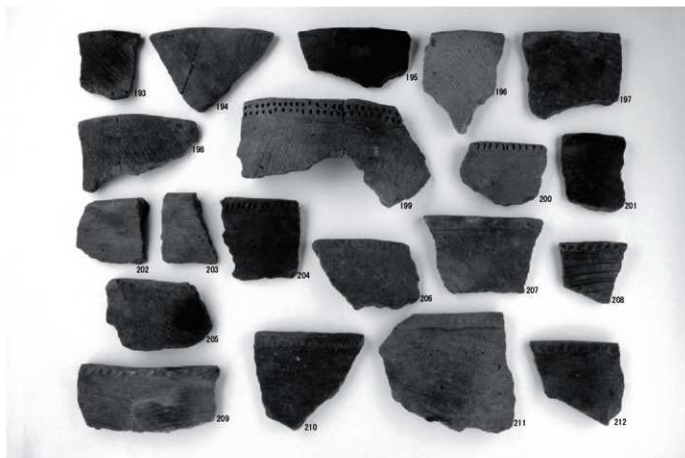
縄文土器 143~160



縄文土器 161~175



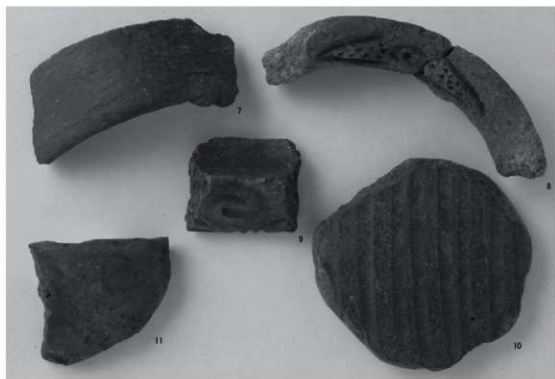
縄文土器 176~192



縄文土器 193~212



縄文土器 213~218



土製品①



土製品②



土製品③





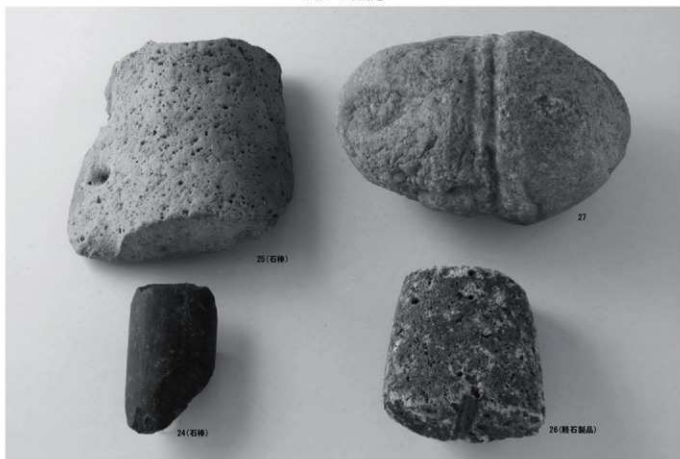
石器・石製品①



石器・石製品②



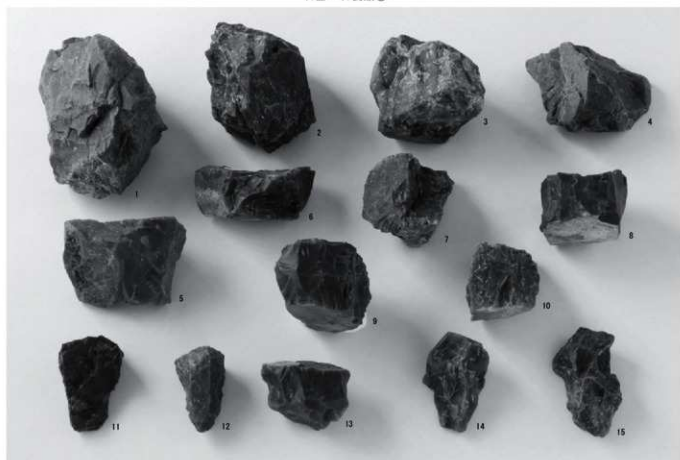
石器・石製品③



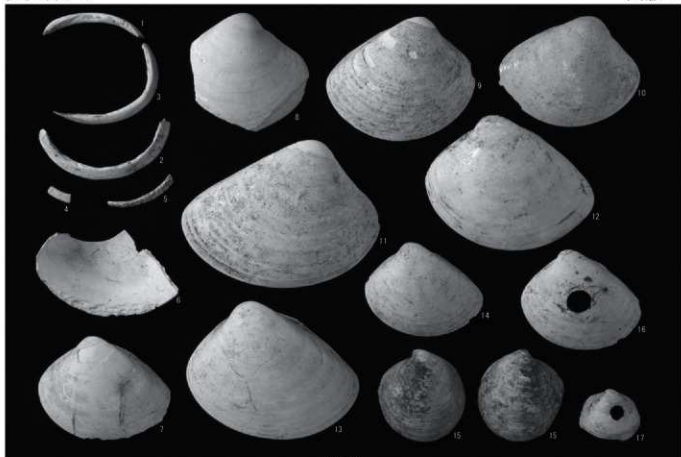
石器・石製品④



石器・石製品⑤



石器・石製品⑥



貝製品



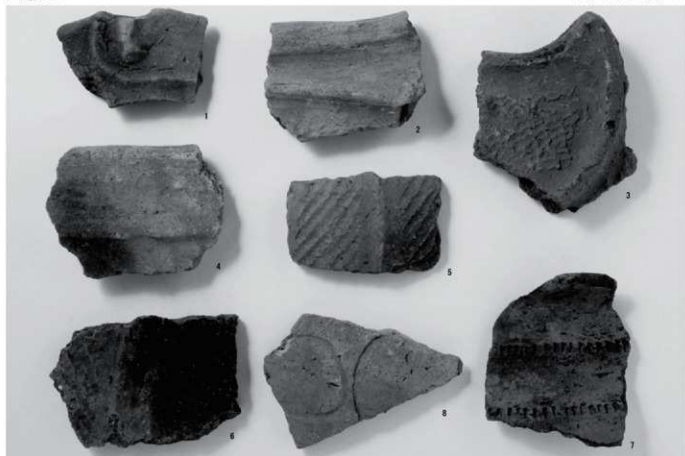
骨角製品①



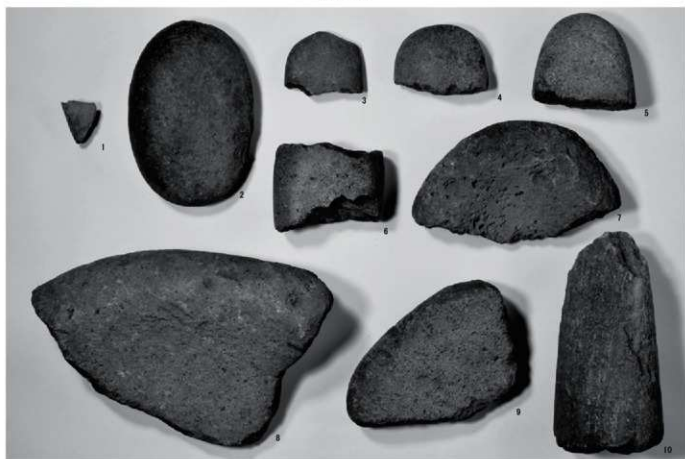
骨角製品②



クジラ類椎骨



縄文土器



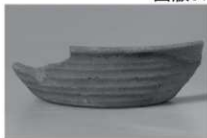
縄文 石器・石製品



一括-1



一括-6



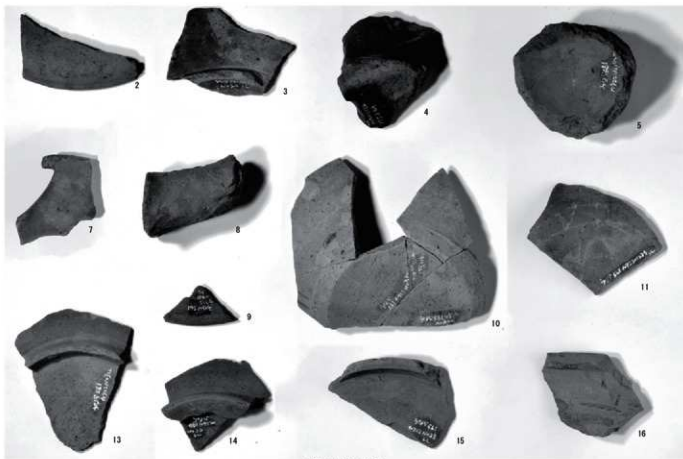
一括-12



一括-17



一括-18



古代土器 集合



1号墳 周溝(南から)



1号墳 周溝セクション(南から)



5号墳 墳丘(南西から)



5号墳主体部①(南から)



5号墳 主体部②(南から)



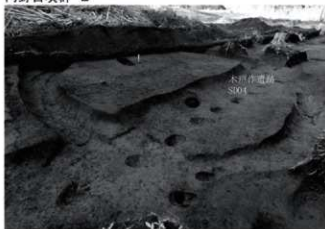
5号墳 主体部人骨出土状況



9号墳 第1主体部(北東から)



9号墳 第2主体部(北東から)



10号墳 全景(東から)



11・12・13号墳・SD05 H30全景(北から)



11号墳 H28全景(北から)



11号墳 H30全景(東から)



11号墳 H28主体部(南から)



12号墳 全景(南から)



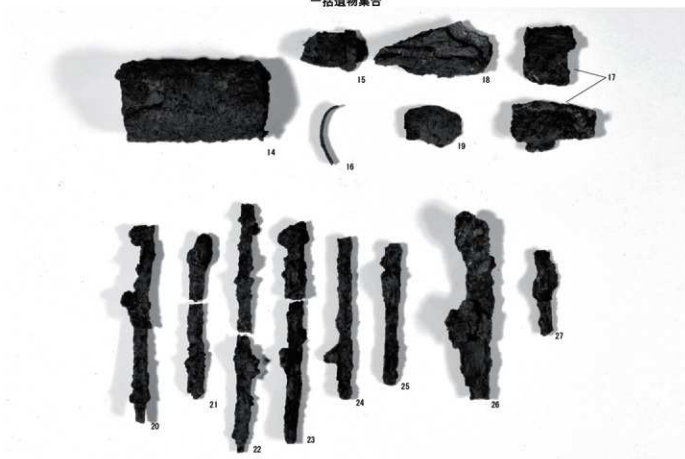
13号墳 全景(南から)



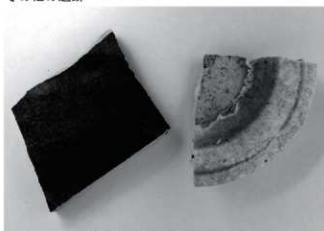
14号墳 全景(東から)



一括遺物集合



5号墳出土金属器集合



多部田低地第2遺跡 出土遺物



ムグリ遺跡 1号窯出土木炭



ムグリ遺跡 灰原出土一括遺物



ムグリ遺跡 風字硯 使用痕



ムグリ遺跡 風字硯 出土状況



内野古墳群 4号墳



内野古墳群 6号墳



内野古墳群 7号墳



内野古墳群 8号墳



多部田貝塚 石碑



内野古墳群 案内板



多部田貝塚 案内板

報告書抄録

ふりがな	ちばしへいわこうえんいせきぐんさん-きどきいせき・うちのいせき・たべたかいづかた-							
書名	千葉市平和公園遺跡群Ⅰ-木戸作遺跡・内野遺跡・多部田貝塚Ⅰ-							
編著者名	西野雅人・岸本高亮							
編集機関	千葉市教育委員会							
所在地	〒260-8722 千葉市中央区千葉港1番1号 千葉市役所庁舎7・10階 TEL.043-245-5962 (文化財課)							
発行年月日	2024/03/29							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査 年次	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	(世界測地系)					
うならすげ遺跡	千葉市若葉区 多部田町1, 173他	12104 若葉区 206	35° 35' 49"	140° 11' 58"	昭和61	1986年6月16日～1986 年7月8日	330㎡ (確認)	民間事業
多部田貝塚	千葉市若葉区 多部田町1, 334他	12104 若葉区 217	35° 35' 29"	140° 11' 56"	昭和28	1954年3月16日～1954 年3月25日	65㎡	学術調査
内野古墳群	千葉市若葉区 多部田町1, 491他	12104 若葉区 222	35° 35' 37"	140° 12' 12"	昭和45		測量調査	千葉市平和公園 整備に伴う
					昭和46	1972年2月5日～1972年 3月5日	不明	
					昭和47		測量調査	
					昭和50		測量調査	
					平成24	2012年11月29日～2012 年12月3日	約51.2㎡ (試掘)	
平成25	2014年3月17日～2014 年3月20日	20㎡ (確認)						
木戸作遺跡	千葉市若葉区 多部田町1, 491他	12104 若葉区 218	35° 35' 45"	140° 12' 14"	平成25	2013年10月1日～2013 年12月18日	4100㎡ (本調査)	
					平成26	2014年10月1日～2014 年12月22日	6400㎡ (本調査)	
					平成27	2015年10月5日～2015 年12月24日	5900㎡ (本調査)	
					平成28	2016年10月24日～2017 年1月31日	約900㎡ (本調査)	
					平成30	2018年6月25日～2018 年8月31日	1100㎡ (本調査)	
					令和元	2019年5月27日～2019 年6月28日	440㎡ (本調査)	
					平成28	2016年10月24日～2017 年1月31日	約1300㎡ (本調査)	
					平成28	2016年11月24日～2017 年1月25日	234㎡ (確認)	
内野遺跡	千葉市若葉区 多部田町1492他	12104 若葉区 220	35° 35' 34"	140° 12' 8"	平成29	2018年2月5日～2018年 3月27日	1700㎡ (本調査)	
					平成30	2018年6月25日～2018 年8月31日	約450㎡ (本調査)	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
うならすげ遺跡	包蔵地	縄文		縄文土器	縄文中期～晩期までの土器。 古代は8～9世紀の土器片。			
	包蔵地	奈良・平安		土師器、瓦				
多部田貝塚	包蔵地	縄文		縄文土器、土製品、石製品、貝 製品、骨製品	加曽利B式期の土器片を多数検 出。集落盛行の時期か。			
内野古墳群	古墳	古墳	古墳10～14号墳	土師器	前方後円墳(1号墳)と円墳で 形成された古墳群。			
	包蔵地	弥生		弥生土器				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木戸作遺跡	集落	縄文	住居跡1、陥し穴26	縄文土器、石製品	縄文時代前期の住居を調査。遺構外を含め早期～晩期までの土器が出土。弥生時代中期の集落を調査。古墳時代中期の小集落を調査。8～9世紀の集落を調査。土器製作を示す土器が出土。中・近世以降の土坑墓群を調査。鍋ばりに使用したと思われる内耳土鍋が出土。
	弥生		住居跡4	弥生土器、石製品	
	古墳		住居跡2	土師器、須恵器	
	奈良・平安		住居跡8、方形区画墓1	土師器、須恵器、金属類(刀子・鉄滓)	
	墳墓群	中・近世	土坑墓29	骨片、内耳土鍋、銭貨	
	塚	中・近世以降	塚2	土師器	
	道路	中・近世以降	溝	土師器	
包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良、平安		土器、土製品	縄文土器、弥生土器、土師器	
内野遺跡	陥し穴	縄文	陥し穴3	縄文土器、石製品	縄文時代の陥し穴を調査。遺構外から中期～後期の土器が出土。古墳時代後半から平安時代前半までの集落を調査。
	集落	古墳～平安	住居跡13	土師器、須恵器、土製品、金属遺物(刀子・鉄滓)	
	道路	中・近世以降	溝	土師器	
	包蔵地	中・近世		土師器、陶磁器、銭貨	

要約

千葉市若葉区多部田町の千葉市平和公園整備に伴う発掘調査報告の3冊目である。公園整備は旧地形を活かしており、遺跡の大半は公園の地下に保存されている。部分的な調査が多いが、周辺の調査が進まない中でこの地域での貴重な史料を提供することになった。

うならず遺跡：昭和61年度の確認調査時の未報告遺物を所収。縄文時代は中期から晩期前半までの縄文土器が出土。奈良・平安時代は8世紀末～9世紀前半の土器が出土。

多部田貝塚：昭和46年度調査時の出土遺物を所収。後期前葉～後葉、特に加曾利B2期が中心であり、この時期が集落の盛行していた時期とみる。

内野古墳群：内野古墳群10～14号墳を所収。さらに、既報告も含め、古墳群に常態型古墳が含まれていることを報告。また、5号墳の人骨の鑑定の結果、複数の人物が埋葬されていることが判明した。

木戸作遺跡：昭和46年度、平成25～30年度、令和元年度調査の結果を所収。縄文時代は燃糸紋土器期の住居、陥し穴、石器集中を抽出。遺物は早期から晩期までの縄文土器と、中期と思われる石器を確認。弥生時代は中期後半の住居を4軒検出。遺物は当該時期の土器、石製品。古墳時代は中期の住居2軒を検出。奈良・平安時代は8世紀後半から9世紀前半ごろの住居8軒、方形区画墓1基検出。住居の床面から粘土堆積がみられ土器工房の可能性。遺物は底部を不自然に接合した。あるいは底部の切り離し痕を2～3塊ずつなどが出土。土器製作工人の活動を示すものか、中・近世以降の遺構としては土坑墓、溝を確認。土坑墓からは六道銭と内耳土鍋が出土。

内野遺跡：平成28～30年度調査の結果を所収。陥し穴3基を確認。中期～後期を中心とした縄文土器が出土。弥生時代は中期の土器が出土。奈良・平安時代は8世紀末から9世紀後半までの9軒の住居を確認した。床面の粘土堆積やロクロピットも確認されている。特徴的な遺物は横面視片、転用硯、焼成粘土の薄片などである。中・近世以降では溝が出土している。

他の遺跡：ムグリ遺跡の1号室については再検討の結果、炭灰窯の可能性が高いことがわかった。また1号住居出土の風字硯についても、再度事実記載を行った。

縄文時代：中期後葉以降、活動が本格化し、晩期前半まで見られる。遺物は中期大型貝塚群堆積後から後期大型貝塚群が形成される過程を検討する資料である。とくにうならず遺跡で多く出土した石棒は、当時の流通と祭祀の在り方を示すものである可能性がある。

弥生時代：木戸作遺跡で検出した集落は小規模なものであった。一方、近隣の城之腰遺跡や星久喜遺跡は大規模な集落を形成している。市内で接するこれら二つのグループの関係を探る上で重要な遺跡であると思われる。

古墳時代：内野古墳群の一部が常態型古墳であることが確認された。当該時期の社会構造の一端を明らかにできる資料となる。また、5号墳は墳丘断面の記録より構築方法が推測された。この時期の古墳は墳丘が消失しているものが多く貴重な資料である。一方で、うならず遺跡で検出された前期の集落以外に生活の場はほとんど見られず、造墓主体は明らかにできなかった。

奈良・平安時代：うならず遺跡、内野遺跡において、ロクロピットや住居床面の粘土堆積がみられた。これらより、工人のムラであることが示唆された。周辺の生産遺構と合わせ、大規模生産施設である南河原坂窯跡群操業休止直後の下層における土器生産の様相が明らかになった。また、土器だけでなく、鉄器や炭なども生産されていた多岐にわたる生産遺構であるとわかった。

中・近世：木戸作遺跡から土坑墓群が検出された。六道銭と内耳土鍋が出土している。内耳土鍋は使用痕はあるがほぼ完形であり非常に貴重な資料であると思われる。また、直下から人骨が出土しており、「鍋ばり」であるとみられ、その時期より、当該習俗の起源を示す一端であると思われる。

千葉市平和公園遺跡群Ⅲ

—木戸作遺跡・内野遺跡・多郎田貝塚他—

令和6年3月29日発行

発行 千葉市教育委員会

千葉市中央区千葉港1-1

千葉市役所庁舎7・10階

TEL: 043-245-5962 (文化財課)

編集 千葉市埋蔵文化財調査センター

千葉市中央区南生実町1210

TEL: 043-266-5433

印刷 株式会社白樺工芸

千葉市稲毛区山王町102-5

TEL: 043-423-1101

